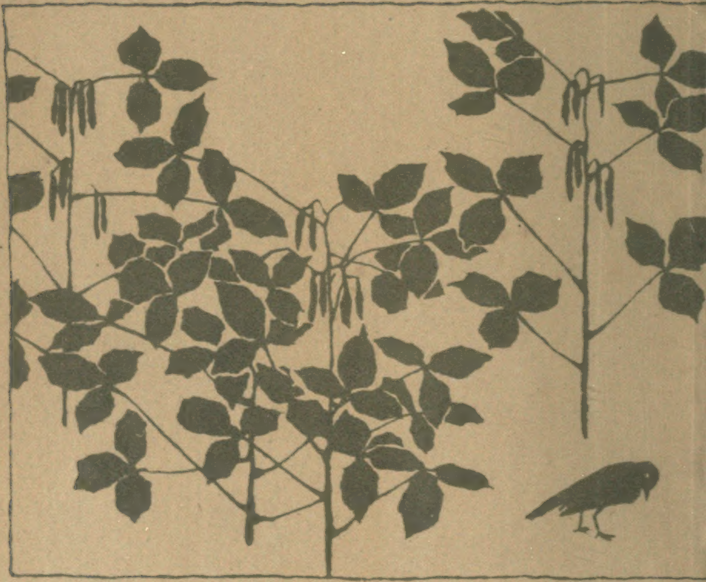
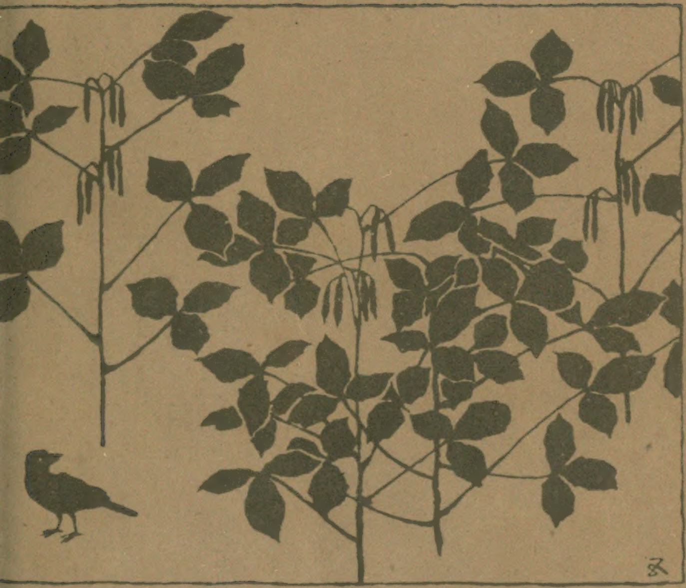




大正二年十一月一日印刷
大正二年十一月四日發行

有朋堂文庫
稲妻、醉菩提（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

○伐那婆斯
住ニ在可住山中一
○阿氏多
住ニ在鷲峰山中一
○注荼半託迦
住ニ在持軸山中一

生死流轉藥草喩品第十四
山に入て藥を採に起て一品總 生死流轉の理を說示す

赤繩 囑累品第十五
囑は附也累は纏也此品月老の紅絲つきまとひて讎敵夫婦となる事を說り

髑髏化城喩品第十六
法華經化城喩品もつぱら宿世の因緣を說此品も一休活佛もつぱら宿世の因緣を說髑髏をもつて世の無常を示す故に此品目を假用せり

通計一十有六品　終

○半諸迦
住在忉利天

○羅怙羅
住在畢利颶瞿洲

○那伽犀那
住在半度波山

○因揭陀
住在廣脅山中

子の行よりいづるゆゑにこれを目してしかいへり

畜生勸發品第十

科註勸發者戀法之辭也云々一休禪師狗子佛性箇無字を說て煩惱の犬を化度す故に此品をなづけて畜生勸發といへり

處女授記品第十一

科註授是與義記是記事也云々此品一休禪師慈悲を與へて婦女を敎化する事を記す故にしか號

災禍從地涌出品第十二

佐々木判官唯一夜に滅亡す災禍恰地より涌出たるが如き事を說故に此品目を假用せり

百蟹陀羅尼品第十三

百蟹の名畫其精をあらはして妖獸の危難をすくふ陀羅尼の大功德に異ならず故にしかいへり

○諾矩羅
住ニ在南贍部洲一
○跋陀羅
住ニ在躭没羅洲一
○迦哩
住ニ在僧伽茶洲一
○弗多羅
住ニ在鉢刺拏洲一
○戍博迦
住ニ在香醉山中一

姉妹本事品第五
科註擧ニ昔事一以顯ニ今故目一之爲ニ本事品一いへり此品兄弟の女兒はからず相會事を説ゆゑに此品目を假用せり

俠客提婆達多品第六
此品に出る俠者の諢名を提婆と稱ずゆゑに此品目をしかいへり

地獄信解品第七
泉州沙界高須の娼婦地獄一休禪師に參禪して信を發し解を生じ疑を去て理明なりゆゑにしかいへり

古狢如來神力品第八（原本茲に此目を出すのみにして本文になし）
古狢佛菩薩に化來て仇をむくはんとす一休禪師これを知て鴨川兵衞に射さしむ禪師の神通如來の神力に異ならずゆゑに此品に目たり

父母安樂行品第九
孝子土器を賣て父母を養父母家は貧しといへども心ははなだ安しこれ孝

○毎回假二用法華之品目一以爲二標名一
○通計十六品以二阿羅漢之寶號一爲レ號
○跋羅駄闍
住二在西瞿耶尼洲一
○迦諾迦伐蹉
住二在北方迦濕彌羅國一
○諾迦跋釐駄
住二在東勝身洲一
○蘇頻陀
住二在北倶盧洲一

新刻本朝醉菩提全傳

品目釋義

善惡因果序品第一

此小說一部もつぱら善惡因果の理を說其發端なるゆゑに序品といへり

得失譬喩品第二

金を失て兒をひろひ兒をすてて金を得る善惡つひに報ある事を說譬喩をもつぱらとす故以て目に品たり

醉菩薩方便品第三

一休禪師假に顚狂を發して世を度す是所謂方便なりゆゑに此品に目す

剃度功德品第四（原本玆に此目を出すのみにして本文になし）

梅津嘉門景春の兒剃髮の事を說一子出家すれば九族天に生ずといへり故に功德品と稱す

ならば、實記に載する所を探見るべし。實に是あふぎ尊むべき活師なり。
○此後小山三亦六を具して旅立ち、折琴姫ならびに不破番作が行方をたづぬる事、僕同助折琴姫を守護して古郷にかへる。姫男子を産む。北岩倉の宗玄芝船の名香をしるしとして折琴姫に再會し、姫をなやます事、附たり朱雀の宗玄火のいはれ、前司太郎筑紫に赴き、呼子浦の獵師荷太夫が婿となりて、光作と名をあらため、荷太夫が娘澪標を妻にする事、雉川國貫折琴姫を捕へんとす、同助姫を守りて筑紫に落行き、姫を前司太郎にあづけおく事、澪標嫉妬の事、附たり筑紫の不知火のいはれ、小山三出雲の於國を妻にする事、亦六が一子杉太郎成長して新竹齋と名告り、奇妙の醫療をなし、狂歌に堪能の事、附白眼之助とい ぶ奴僕の事、小山三番作を打ちて母の仇を報ゆる事、小山三、前司太郎、同助、亦六等、於國とはかり歌舞妓踊に託して國貫の館に入りこみ、國貫を打とり、幼君を代にたて、佐々木の家を再興する事、附於國歌舞妓の由來、蜘手の方以下の悪靈等、一休和尙の濟度によりて成佛する事のたぐひ、六巻につゞりて續編とし、他日發兌すべきなり。


御影堂


一休元旦よ
髑髏とりて
泡沫无常

御用心々々々

と宣ひつゝ、飄々として亦六が家を立出給ふに、明けゆく空の景色は、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへて珍しき心地し、大路のさま松立てわたして、花やかに嬉しげなる人の交加、扇々と呼び、福神雙六寶船をめさずやといひて賣歩き、千町萬町の鳥追が參りしとうたへば、千秋萬歳德若と打囃し、傀儡師、猿曳のたぐひ、禮者にまじりてにぎやかなる往來の中を、一休は彼髑髏をたづさへて、なほ御用心々々々と宣ひつゝ、庵をさして歸り給ひぬ。皆人これをいまはしとて門さしこめて居けるより、今に正月三日の間門戸をとざすといひ傳ふ、かくて後彼雉一休の庵の前に落ちて死しければ、一休これを取給ひ、提婆が髑髏とともに埋めて一つの塚となし、杉立つる門といへる歌の意を以て、三株の杉を植ゑて塚印となし給ふ。當國交野郡のうち、甲斐田と片鉾村の間にある、三本杉雉子塚といふは是にや。偖亦六は老女の死骸を山城河内の堺洞嶺に葬る。後に此所を姥か懷といふ。又彼亦助が笈を野外に埋めて卒都婆を建つ。これ一つには亦助が菩提のため、二つには彼雌雄の雁の爲なるべし。中野村の雁卒都婆といふは是にや。

○原此稗史はつくり物語なればそら言のみ多し。一休和尚の道德神妙の眞面目を知らんと

しばしして彼の拂子を打振り給ひ、

　極樂をいづくのほどと思ひしに杉葉立てたる亦六が門

と高らかに宣ひ、喝と一聲叫び給ひ、拂子をもつて彼首を打ち給へば、不思議なるかな首の皮肉、朝霜の消ゆる如くに解流れて、忽ち一つの髑髏となり、彼雉は身より光明をはなち、虚空をさして飛去りぬ。かゝる折しも雞は東天光と數鳴きて、烏は空を鳴渡る、聲に明くれば元旦の、東にのぼる初日の出、十方世界にかゞやきて、彌陀三尊の來迎を、目前に見る心地すれば、提婆が惡も觀音の、慈悲に解脫やなしぬらん。一休かさねて宣はく、我は此髑髏をもつて世の人に無常迅速の理を示し、彼等母子が罪障消滅の便とすべし。老女が亡骸はよきに葬り得させよと宣ひつゝ、かの髑髏を杖の頭にかけ給ひ、これ見よや人々、一夜あくれば元旦とて、又晦日の來べき心もなく、玉椿の八千代を祝ひて目出たしとことぶけども、朝顏の日陰待つ間も定めなき身とは思はず、萬の事を忌恐れ、蝸牛の角に名をあらそひ、蠅子の頭の利をむさぼり、身を秋風の心は露ばかりもなき愚さよ。此如く目出でて穴のみ殘りしをこそ目出たしとは言ふなれ。

　門松は冥途の旅の一里塚めでたくいはふ人のおろかさ


瞽盲の娘子
死して一国の
心火燃出


犀の貪老女先非を
懺悔して自害を
一休師因果
輪廻の理と
説て引導の
語を授
酒売六が妻
於三輪悲歎

けり。時に彼雉竹林の裏より飛出で來りて、一休の御衣の袖にまつはり、谷口呱といひて片目に涙を流ければ、一休手をもつて雉の脊をかきなで給ひ、汝も一體の佛をうらやみ成佛をねがふかと宣ひて、またお三輪にむかひて宣はく、此雉は乃ち是汝が父竹齋が再生なり。睛盲ひたるは其證ぞかし。亦六が爲に雉と見違へられて、非業に死せし因果によりて雉に生れ、孫杉太郎が小蛇の難をすくひ、此家のめぐりを離れず、汝等母子に馴親む事、子や孫を可愛いと思ふ深き迷のゆゑなるはと宣へば、お三輪は悲しさ限なく、此世におはして初孫の生立つ顔を見給はゞ、さぞな喜び給ふべきに、思へば〳〵痛はしやと、いひつゝ雉を抱しめて、前後不覺に泣倒れければ、亦六は膽を裂かるゝ思ひにて、共に落涙したりけり。一休また宣はく、沙石集といふ書にもさる例あり。皆是前世の宿因なれば、如何ともすべからずと宣ふうちに酒の燗いできければ、大盃に受けて數盃をかたぶけ給ひ、舌打しつゝあな快々と宣ひて、十分の酒氣をおび給ひ、亦六が髭を剃りたる剃刀のありけるを取上げて、老女の死骸にむかひ給ひ、我汝を弟子となす證に剃度の剃刀を與ふべしとて、白髪の髻を根よりふつと斬り給ひ、扇のはしに結附けて、假の拂子となし給ひ、これを持ちて浪々蹌々として、提婆が首に立向ひて默し給へば、三人の者等は、引導の語は如何なる事をか授け給ふと、耳をそばだて聞居たるに、

が火と、其名は高く聞えけり。亦六夫婦小山三も、老女が自害を憐みて、一休にむかひ口を等うして曰く、乞ねがはくは、此老女彼提婆母子兩人に、引導の語を御授遣され下されかしと願ひければ、一休うなづき給ひ、そは安き事なれども、我寒夜に道を歩み身上冷えて堪へがたければ、布施物にかへて一盃の酒を與へよ。我一分の酒氣有れば、十分の禪機あるはと宣へば、亦六曰く、小人貧しく侍れども、商物に候へば酒の貯は乏しからず候。疾く〳〵すゝめ申せといひてお三輪に命ずれば、お三輪は立ちて一陶器の酒を持來り、此酒あたゝめてまゐらせ度く思ひ侍れど、年木の用意さへなければと、いと恥ぢらひつゝいふに、一休四邊を見まはし給ひ、かしこによき薪ありと宣ひつゝ、釣佛壇に安じたる木佛をとり給ひ、老女が携へ來りし斧を以て、木佛を二つにさつと打破りて、圍爐裏に投入れたまひければ、亦六夫婦小山三等は唯あきれてぞ居たりける。時に一休微笑して宣はく、汝等我ふるまひを訝るは宜なり。昔丹霞といふ和尚大悟し、寒天に惠林寺の木佛を燒きたる事あり。我今百魔山姥、提婆仁三郎といふ二體の眞の佛をつくらんと思へば、いかでか假の木佛を惜まんや。佛も下駄もおなじ木の端にあらずや。疾く〳〵燗せよといそがし給へば、やむことを得ずお三輪自在竹に陶器をくくりつけ、彼木佛を薪となしたりけるに、一休は木佛の燃るを見給ひ、掌を打ちて大に笑給ひ

一休又助聲し給ふ。

邪正一如と見る時は、色即是空其儘に、佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥もあり。柳はみどり花は紅のいろ〳〵。

老女又うたふ。

よしあし曳の山姥が、山廻するぞ苦しき。足曳の山廻、一樹の陰一河の流、皆是他生の縁ぞかし。ましてや我名を夕月の、浮世をめぐる一節も、狂言綺語の道すぐに。

一休又助聲、

讃佛乘の因ぞかし。

老女又うたふ。

あら御名殘惜しや。いとま申して歸る山の。

とうたひさして合破と倒れ、やがて息絶えけるが、胸もとより一塊の心火飛出で、神棚のほとりを飛びめぐると見えしが、神にそなへし十二の灯盞に一度にぱつと火うつりて、家内輝きわたりけり。思ふに是平岡明神の油を盗みし罪科を、死してあがなふ心ならん。魂魄は成佛するといへども、後人を戒むるためにや、業火は此世にとゞまりて、後の世までも河内國の姥

我ワキ僧の意にて助聲してつかはすべし。なにはの事か法ならぬ、疾く〳〵と宣へば、此上は兎角辭しなばおそろしや。來世の爲や惡しかりなんと、手許にありあふ扇を取りて立上り、倭僂く足を踏しめて、立舞ふ振もよわ〳〵と、髪にはおどろの雪を戴き、眼は涙の雨雲に、星をかくせる風情にて、顔は血しほに赭丹塗の、流れて襟につた葛、襤褸の腰の破れたるは、木の葉衣に異ならず。折しも里の夜神樂に、禰宜の鼓や吹く笛の、時の調子も更けわたる、聲を安計呂の山姥が、息の下なるうたひ聲、

　遠近のたつきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲すごき折々に、伐木丁々として、山さらに幽なり。法性峯そびえては、上求菩提を顯し、無明谷深きよそほひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。

とうたひつゝ舞ひければ、一休助聲し給ひて、

　抑山姥は、生所も知らず宿もなし。唯雲水を便にて、いたらぬ山の奥もなし、

老女又うたふ。

　然れば人間にあらずとて、隔つる雲の身をかへ、かりに自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、

善に歸し、みづから後悔の物語に、はじめて我子といふ事を知り、六十年來しこみたる惡念を、唯一時にひるがへして、善になりたる此自害、懺悔に罪を滅すといへど、天罰神罰佛罰を、深くうけたる我身なれば、無間地獄に落ちて無量億劫、呵責の苦をまぬかるゝ事能ふべからず。いざく亦六殿此斧にて、我子に代る老が身を、段々に斬りくだきて、父の仇を報いたまへ。早くくといひをはり、斧を取りて投出し、合掌して口に念佛をとなへけり。亦六夫婦これを聞き、さてはくと呆れつゝ、手負をいたはり居たりけるに、小山三病床を立出でて夫婦にむかひ、始終を委しくあれにて聞きぬ。不思議なるは我頭痛、今俄に平癒して常の如しといひければ、亦六いはく、さては左様に候か。提婆が詞果してたがはず候とて、夫婦ともに愁の中の喜なり。前程より門首に佇み給ひし一休和尙、此時突然裏に入りて上坐に通給ひ、我は是近頃當國に飛錫の沙門一休なりと宣へば、亦六夫婦小山三も頭をさげ、こは思ひよらざる御入來と敬へば、手負の老女はこれを聞き、さては承りおよびたる一休禪師にて候か。よき折におはしつる有難さよ。妾は罪深き者にて候。ねがはくば來世の苦患を御救くだされかしと言ひければ、一休宣はく、我汝等が輪廻の一轉を先知して濟度の爲に來つるなり。汝若かりし時は百魔とて隱なき白拍子にてありけるよし、汝がおぼえし曲舞を此世の名殘に舞うて見せよ。

にかくれ住み、異名を百魔山姥と呼れ、人商人を業となし、非道の金を貯へしが、有漏路太郎同じき五郎といふ兄弟の者に、其金を殘らず奪取られ、やう〱身一つを逃れ去りて、其後當國に來り此村末に住侘びぬ。後々聞けば、かの三歳の時竹齋方に殘し置きたる男子、勘當うけて行方知れずなりけるよし、其男子の幼名は鷲丸、成長して提婆仁三郎といひしことは、今夜はじめて聞きしなり。三歳の時別れし故、我子とは露知らず、親の手づから子の首を、五索子の錢にかへ、賣與へたるあさましさ。これ年來の惡報と、はじめて悟る物語、又これなる於三輪殿は後妻の腹に出生の女子なれば、ゆきあひの兄弟といふのみにて、提婆とは胤も腹もかはりて、敵につながる縁ならねば、自害をとゞまり行末ながら連添はれよ、懺悔の爲に我つくりし罪科を、殘らず語りて聞すべし。我人に雇れ賃仕事はしつれども、日々の費に乏しき故、夜な〱平岡明神の神灯の油をぬすみ、寢酒にかへて榮耀飲、今思へばかしこしとも恐しともいふべき詞はなきぞかし。又今夜かく深夜に來りて、此竹林に隱居しも、此家にかくまひ置く了角の若人は、不破道犬が爲に恨ある、名古屋山三郎が一子小山三なりと聞きし故、忍入りて寢首をとり、雉川大領の館へ持參し、褒美の金をたまはるべしと思ひ、これ此通り斧をたづさへ來つるなり。然るに內の樣子をうかゞひ始終の事を聞き、提婆仁三郎自殺して

ゐに染めなしぬ。夫婦は驚き、そちは村末の老女ならずや。こは狂氣ばししつるかと、いひつつ介抱なしければ、老女いはく、いや狂氣にあらず、本心の此自害。前程より彼處にて始終の事を殘らず聞き、今といふ今因果應報の理を悟りて、年來の惡心をひるがへし、善にいたりし物語、くはしく語り申すべしとて、苦しげにしばらく息をつき居たり。かゝる折しも一休和尚高らかに經を讀給ひつゝ、東村の方より靜に步來たまひしが、其後に諸の亡者どもつきそひて、うかべて給べ〳〵と言ひつゝ、御衣の袖や袂に取附きければ、しばらく途中にたゝずみ給ひ、何にかあらん偈の言を授け給へば、亡者どもはあな有難やといひて、殘らず搔消して失せにけり。かくて亦六が門首に立給ひ、內の樣子をうかゞひ給ふ。さて老女は猶苦しげにいひけるは、我は原都五條坂に住みし百魔といへる白拍子にてありけるが、大和國佐々木の家臣、不破道犬といふ人にあがなひ出されて妾となり、懷胎のうちにゆゑありて暇をうけ、ほどなく木枯竹齋の方へ緣づきて、產落せしは男の子、これ道犬が胤なれども、竹齋が子となして育てけるが、我元來志惡しく夫にうとまれし故、とても長く連添ふ事あたふまじと思ひ、かの男子三歲の時其子を殘しおき、我身獨出奔し、其後胸毛の黑平といふ者に再緣して名を岩芝といひ、大和國二上が嶽の邊に住みしが、ゆゑありて彼地を逃去り、越後越中の堺安計呂山

入りつるは其身も又過なきにあらず。殊更妾が危き命をすくひ給はりてこれまでの御厚恩、いかでか敵と思ふべき。あれなるは妾が兄鷲丸の首にて舅殿の敵なるよし、さあれば妾は御身の爲に現在敵の妹なれば、いかでか連添ひ居らるべき。又夫をたすけ父の仇を報はざる不孝者と世の譏も測られねば、孝も貞も失はず、仇と恩とを潔白に、量分けたる此自害、舅殿にも我父にも冥途にて御目にかゝり、くはしき事を語るべし。御身は跡に存へて、何卒此杉太郎を養育し、成長の後は醫師となし新竹齋と名告せて、父の跡を立ててたべ。いひおく事はこれのみなり。あゝ志の惡しき故とはいひながら、兄上のあの頭、あさましき身の果や、といひさしてむせかへり、片手に刀片手には杉太郎が手をとりて、夫の膝に押遣れば、太郎はわつと泣出し、母樣乳汁が呑みたいと、すがる我子に氣おくれし、猶豫のひまに亦六は刀をもぎ取り又切腹と見えければ、お三輪は其手にとりつきて、御身は殺さぬ妾が死ぬ。はて偖ひつこいこゝ放せと、夫婦互に死をあらそひ、刀の柄を捻合ふに、太郎は間に挾りて、父樣かゝさま芝居事おもしろいと、頑是なきこそ哀なれ。然るに彼雇れの貧老女、斧をたづさへ最前より、竹林の裏にかくれ居て、始終の事を聞取りしが、此時いそがはしく内に入り、夫婦があらそふ刀をもぎ取り、手早くおのれが吭に突立てければ、鮮血さつとほどばしりて、身をくれな


名古屋に小山三
酒賣赤六が家に
かゝり居て病に



むかふ面目なさよ。我若生きて此家に來るならば、仇敵とて打るべき、御身の爲に祭られて、回向をうくる苦さは、地獄の呵責にまされるなり。小山三殿の頭痛の惱は、我誓ひて平癒あらしむべし。自殺の事はあながちに止むるなり。御身の義氣を見るにつけ、我生前の非義非道を、後悔すれどもかへらぬ事、死してやう〳〵善にいたれど、永劫惡趣の苦を、のがるゝ事は能ふまじ。我此物語を世の人にも傳へ給ひて、勸懲の一助ともなし給はれかしと言ひて、兩眼より涙をはら〳〵と落しけるが、再び又いひけるは、今日は閻王の許をうけて、亡者の娑婆に來る日なれば、我も魂魄頭に歸して委細を語り、御身の自殺をとゞむるなり。諄々も止り給へと言ひをはりて目をふさぎぬ。亦六はこれを聞きて驚嘆し、さては父を害せしは彼者にて、彼又竹齋が子なりしか。さあれば則ち合敵、誠に是惡因緣の集會なり。たとへ彼はとゞむるとも、我一旦天地に誓ひし言を爭か背くべきと思ひつゝ、又刄を取上げしに、やれ待ち給へしばし〳〵と聲かけて、於三輪杉太郎を抱きていそがはしく走出で、亦六が持ちたる刀をもぎ取りて、我吭に突立てんとしたりければ、亦六はあわて惑ひて手をとらへ、こは何故の生害ぞやといひければ、お三輪曰く、始終の事を奥にて殘らず聞き侍りぬ。御身妾が父を討給ひしは原あやまちにてなされし事、殊に禁野は殺生禁斷の地にて人の入る事あたはざる所と聞く、父彼所に

開け、消残りたる灯明の光に見れば、あな怪しや、香花を手向けて祭りおきたる彼生首、眼を見開き口をうごかし活けるが如き有様なれば、さしもの强氣の亦六も、思はずぞつと身の毛立ち後の方へ飛すさり、唯あきれたるばかりなり。時に彼首又聲を發していひけるは、訝り給ふは理なり。御身の自殺をとゞむるいはれ、我身の懺悔を一通り聞いてたべ。某はこれ醫師竹齋が一子にて、幼名を鷲丸といひし者、幼きより志惡しく、十五歳の時父の勘當をうけて所所方々をさまよひ歩き、或は劍術者にしたがひ、或は修驗の弟子となり、世渡る種をもとめんとしけれども、元來の不所存故、つひに一つも事を遂げず。一年浪花に寓居して俠客の首長となり、提婆仁三郎と名告りしが、ゆゑありて彼地を出奔し、つひに山賊となりけるが、今年三月いつはりの狒々となりて旅人を威し、金剛山にて御身の父亦助殿を害せしは我なり。今御身の獨言を聞きつるに、禁野にて雉と見違へ我父竹齋を打れし由、あひ敵とはいひながら、御身はもと過にてせられしこと、某は賊をなさん爲にもとめてしつる惡事なれば、其罪は懸隔の違あり。ねがはくば自殺をとゞまり、妹於三輪と連添ひて、亡き人々の跡を弔ひくだされよ。我一旦金剛山を逃去るといへども、天羅地網をまぬかれがたく、當國藻屑川のほとりにて自身首をかき切りて亡せしが、人もおほきに御身の手にわたたり、此家に來りて亦助殿の位牌に

太郎が寝かねて泣けば、添乳の母は背をたゝき、かしこい者ぢや默つて寝や。一夜明ればお正月、惠方參に爺樣が、平岡の明神樣へ必ず連れて行かしやらう。歸には破魔弓、毬打、鼗鼓、よい物買ふてもらへかし。ねゝが子守はどこへ行た。あの山越えて里へかと、すかして寝さす子守唄、太郎はなほも泣きやまず、もてあましたる樣子なり。亦六はこれを聞き、あゝおれが妻子の聲の聞きをさめ、あとで敵と知るゝとも、三年が間連添ひて、最愛せし者なれば、さぞや歎かん可愛さよ。今を限の我命、惠方參にひきかへて、冥途へ年をとりに行く、今生の名殘とも、知らざる事の不便やと、妻を思ひ子を憐み、あつき涙を落しつゝ、悲歎に時をうつしけるが、あゝ我ながらおくれたり、未練至極と思ひきり、又刄をとりなほして、突立てんとしたる所に、いと嗄れたる聲音にて、亦六〳〵と呼掛けたり。亦六は又手をとゞめ、今呼びかけしは聞馴れざる聲樣なり。何者にやと四邊を見廻し考ふれど、夜はしん〳〵と更けわたり、空吹く風の音のみして、人音もなかりければ、こは我心のおくれにて、僻耳ならめと思ひつゝ、再び刄をとりあげて、南無阿彌陀佛の聲もろとも、腹かき切らんとしたりけるに、又聲ありて亦六待て亦六しばしと止めたり。亦六はいそがはしく、聲せし方をかへり見けるに、彼首を祭りたる所の小屏風のうちより、青き色の陰火閃々と燃上りければ、大に驚き立上りて屏風を引

今更敵と名告るとも、子までなしたる中なれば、恩愛にひかされて、打得ざるは必定なり。委細の事を書記し、小山三君の御身のうへを頼みおく事までも、書添へて殘し置き、自殺して死ぬるにしかじと覺悟をきはめ、消えかゝりたる行燈の、火を搔立てゝ傍の、硯箱を取出し、墨摺りならす音さへも、彼方此方をしのぶにぞ、夫婦の緣も薄墨に、筆を持つ手もわなゝきて、帳の白紙に書殘す、文字も心も亂れ書、淚ににじむばかりにて、夜風に颯と吹鳴す、門に立てたる松竹も、つひの薪と身にしみて、齒朶楪の注連も、愛別離苦の悲さに、絆をつなぐ思ひなり。かくて書置を書きをはり、小山三が臥したる一間をうかゞへば熟睡の樣子なり。奥の方にも音なければ、折よしと思ひつゝ、釣佛壇の父亦助が位牌にむかひ、親人御聞くだされかし。金剛山にて害したる敵をたづねて仇を報い、修羅をやすめまゐらせんと、日來思ひし宿志も遂げず、今かゝる義にせまりて、相果つる不孝のいたり、ひとへに許し給はれかしと言ひをはり、又小山三が臥したる方に打向ひ、御主人の御先途をも見とゞけ申さず、身まかる事の不忠さを、許させたまへと、彼方にむかひ此方にむかひ、奥の方をもかへりみて、忠孝と恩愛に心殘すは理なり。かくて親の片身の山刀を取出し、南無阿彌陀佛と唱ふる聲も、四邊はゞかる口の裏、刀をすらりと拔放して、手拭の布をおし卷き、腹かきいだして已に突立てんとしたる折しも、杉

すこしの疵なり騒ぐ様ねぶたい寢さしてと、いひつゝ袺にとりすがる。亦六は血を押拭ひ、さぞねむからん。疾べからず。そちは杉太郎を寢さすべし。いつもの寢る頃やゝ過ぎたれば、く疾くゆけといひければ、是非なく太郎を抱上しが、さしうつむきし夫の顏灯火に盥の水鏡、うつるを見れば思ひありげな顏なれば、心がかりと思ひつゝ、心殘して奥へ行く。亦六は手をこまぬき、しばし思案の體なりしに良ありてあたりを見まはし。獨言にいひけるは、あな恐しき天罰や。我前年禁野にて、木枯竹齋を雉と見違へあやまりて、鐵炮にて打ちし時、直に名告出でんと思ひしが、親人の歸國までと事をのばし、竹齋の死骸にむかひ、後日妻子をたづねて打たれんと、天地に誓ひし言にそむき、於三輪が切なる志にほだされて、敵同士と知りながら夫婦となり、二人が中に子までをまうけ、いよ〳〵恩愛にひかされて、かの誓言を忘却し、三年が間つれそへども、口にだも出さゞる事、我義を失ふのみならず、於三輪にまで孝道を失はせつる、後悔さよ。人を殺して生きながらふるのみならず、天地をいつはる我あやまり、冥罰あるは理なり。時もあらんに髭を剃る時にのぞみて、於三輪がさらふ地震ひ、かれが手をもつて我吭に切りつけたること、我あやまりて竹齋を打ち、お三輪あやまりて我に疵つく。これ皆天罰我あやまりを責めたまひ、早く名告りて打れよと示し給ふにうたがひなし。さりながら

は、むかふ鏡に知られたり。時に亦六いひけるは、平岡明神は當所の鎭守の神といひ、來年の惠方はかの神の方にあたれば、惠方棚を設けて、十二の燈臺は据置けど、家内に彼首を祭るうちは、さすがに燈明もさゝげがたし。今日は已に彼を祭るも七日目の滿願にて、明くれば則ち元旦なれば、今夜九つを限に葬りてつかはすべく思ふなり。且一回向せばやとて、彼首の祭所をかこひたる、小屛風を引あけて、灯をかゝげ香を拈り、水を手向けて念佛をとなへ、あらあらしき若者の、鉦を打ち念珠をつまぐる爲體、結句殊勝に見えにけり。かくて暫く時をうつして此方に出れば、於三輪曰く、御身も此手序に髭を剃せ給はずやといへば、亦六髭をおし撫でつゝ、いかさま明日は元旦なるに、せめて髭なとあたらしう、剃りて年を迎へなん。然らばたのむといひければ、於三輪は手繦かひぐ〳〵しく、盥に湯を汲み持來りて、毛うけに持す古扇、ひらく櫛匣の合砥に、剃刀研ぎて亦六が背後に立ち、髭を剃りて居たる折しも、竹林のあたりにて雉二三聲鳴くとひとしく、少の地震ゆら〳〵とふるひけるが、於三輪はかねて地動を嫌ひければ、あなやと驚きあやまちて、亦六が吭のあたりへ、剃刀を切りつけたれば、たちまち鮮血淋々と、むかふ盥に流れけり。於三輪はなほ驚きて、こは大なる過をしつるかな。許し給へとあわて惑ひ、血どめの藥は何よからめと、立騷ぐ心も知らで、宵寢まどひの杉太郎、母

稻妻表紙後編　本朝醉菩提　卷之八下

注茶半託迦尊者　髑髏化城喩品第十六

夫はさておき亦六は、貧しきうへに久しく活計をやめて、小山三が頭痛のわづらひに心を盡し、わづかに貯し衣服雜器を賣代なして、醫師の謝物加持祈禱彼是の雜費にあて、いとゞ貧苦にせまりけり。亦六於三輪に向ひて曰く、今日はすでに大晦日なれど春をむかふる用意もならず。あさましきことにあらずやと嘆息すれば、お三輪これを聞きていひけるは、さばかり愁ひ候な。いかほど貧しく暮しても、幼者の健に生立つは、此上もなき喜也。小山三樣も日あらず御快氣あるべし。あまり氣をやみ給ふなと、力をつくる膝元に、乳を呑みさして杉太郎が、雉來よ〱と呼びければ、家のかたへの竹林より、やがて彼雉飛出でて餌を啄み、杉太郎に抱れて、鳩車のそれならで、翫物となり居たり。かくて此日も暮れければ、雉もねぐらに歸りつつ、於三輪は行燈取出して火をともし、小山三樣にも藥をあげ、今とろ〱と御休なれば、此間にいそがはしさの亂髮、つひとりあげてと梳に、けづる命の瘦世帶、辛苦に老ける面影

袈裟衣を著て立出給ひ、讀經をあそばしながら村々を歩行給ひけるが、果して途中に迷ふあまたの亡者ども、一休の御袖や裾にとりつきて、浮べてたべ〳〵と願ひけるとぞ。世の人こぞりて活佛と尊敬せしも宜なりけり。

を追遣りて候といへば、一休宣はく、汝が談義戯に似て佛智にかなへり。愚痴無智の輩が心の地獄を滅却させ、無常迅速の理を示して貪欲非望を戒むるには、あつぱれの談義なり。我檀越の布施を得てこゝにありといへども、彼等が貪欲を戒むるにはよき時節と思ひ、わざとこれを與へざりき。彼等無常を悟り角を折りて歸りしは、實に汝が大功なり。明日は元旦なれば、彼等に借りたる價は勿論、心ざしとて與へ行きたる金錢も此布施物を以て殘らず償返すべしと宣ひて、悟助に一袋の金を渡し給ひ、又宣はく、往古は大晦日にも靈祭をせし事にて、報恩經には、亡者娑婆に往來する事六度あり。七月は素り、十二月晦日午時來り正月朔日卯時歸るとあり。和泉式部の歌に、

なき人の來る夜と聞けど君もなし我住む宿や玉なしの里

などもいへり。ゆづり葉を師走の卅日、なき人の食物に敷くといふ事を、枕の草紙にも書きぬ。兼好の時代には、早せぬ事になりしにや、大晦日のさまをかきたる條に、なき人の來る夜とて魂祭る業は、此頃の都にはなきを、東方にはなほする事とてありけんこそ哀なりしと、徒然草に記したり。後の世ほど事繁くなりて、人は亡者を祭らねども、亡者は娑婆に往來て、路頭に迷ふが不便なれば、我は此曉まで經を讀みて弔ひ遣すべし。汝等はしばらく休めと宣ひて、

て、手早く帳をとり出だし、おなじく棒をぞ引いたりける。其外の人々には、米屋の臼八、薪屋の柴六、鹽燒の分正次、豆腐屋の豆右衞門、青物屋の菜左衞門、傘張の骨兵衞、紺搔の茶褐助、布屋、油屋、味噌屋の面々、十二三人居並びて、我おくれじと帳を出し、思ひ〳〵に筆をとり、棒十文字に引消して、かつぱと伏して願ひしは、實目ざましき消樣なり。一休莞爾と笑ませ給ひ、善哉々々善男子、惡にも强くはたらるれば、善にも强く消されたり。愚僧疑はれしぞや。いで〳〵道術を行ふべしとて、目をとぢて印をむすび、小聲に何やら唱へ給ひ、サア〳〵是でいづれもの壽命百年づつは請合ぢや。其上は幾年でも、勝手次第に活きさつしやれと宣へば、歡喜踴躍の掛乞ども、蘇生りたる心地して、やれ〳〵嬉しや有難や。コレ悟助殿、一休樣が御酒をあがろと仰らば、代にはおよばぬ遠慮なしに、何時でもとりに御座りませと、酒屋がいへば古手屋も、一休樣が御寒くば、夜著なりと蒲團なりと、損料なしに貸しましよと、掛は取らいで掛取ども、機嫌とりてぞ歸りける。あと見送りて一休は、長持より飛下り、悟助と耳語笑ひける。かゝる折しも眠藏より、實の一休立出給ひ、いかに箔藏主、汝が談義を奥にて聞き、いと殊勝に覺えしと宣へは、箔藏主頭をさげ、御呵をもかへりみず、彼等師の房をも愚僧をも見知らざるを幸に、一休といふ御名を僞り、此箔藏主が狂言にて、多疑强欲の野狐ども

もつたものぢや。言はぬ〳〵と宣へば、掛乞どもはぐにやりとなり、互に顔を見合せて、これ酒屋の糟内、和主は大分色がわるい。おほかた和主であらうぞやと、いへば糟内腹を立ち、此古手屋のたはけめが、いまはしい事ぬかし居る。さいふ汝が影のうすいに氣がつかぬか。短命さうなは汝ぢやと、諍を仕出しければ、一休しばしと止め給ひ、さばかり死ぬが嫌ならば、命をのぶる修法もあれど、日來の貪欲を取捨てゝ、正路に赴く心なければ、たとへ我道術を行ふとも、験なしと宣へば、皆口々に、これ一休様誰にもせよ、どうぞ御慈悲に命をのべて下されませ。畢竟欲をかわきますも、女房子供が可愛さ故、其可愛い妻子に別れ、かせぎ溜めた錢金も、其儘此世に殘しおき、急死をいたすと知るならば、なん〳〵の誓文で、無益な欲をかわきましよ。お慈悲〳〵といひければ、一休なほも頭をふり、イヤ〳〵今は死にとむなさに、誓文などと言はるゝが、此座を立てば又かわく。命の安賣ならぬ〳〵と宣へば、酒屋の糟内目をすり赤めて進出で、これ一休様、外の者はいざ知らず、拙者は欲を捨てたる證據、御目にかけんと懐中より、小き帳を取出し、矢立の筆に墨をつけ、これよく御覧なさるべし。御前に上げた酒の代、九貫八百六十四文、思ひきつて先この如く、爰で帳を消しますと、いひつゝ棒を引きければ、破九郎糟内を押退けて、やをれ此古手屋も酒屋如きに負くべきか。これ見よやつと呼はつ

らそひ、閻魔の帳をくりひろげ、算盤の玉は彈けども、念珠を持つたる事もなく、かよわき骨の提灯に、晦日の下水は飛越しても冥途の闇はいかにせん。物の報は早いもの、箇々が此一休を催促るやうに、冥途から無常どのが提灯をともして來て、どうじや〳〵と居催促、おのおの方の命をはたつて行くであろ。ヲ、嫌やの〳〵と宣へば、掛乞どもは泣聲にて、それはマア氣掛りな。無常めが來居らぬやうにどうぞ仕方は御座りませぬかと、いへば一休うなづき給ひあるとも〳〵經文にも、懺悔に罪を滅すとあれば、心に欲の懺悔をなし、お布施に包む豆板で、無常の鬼を追出さば、福は内へと舞込みて、壽命長久うたがひなしと宣へば、野曝悟助は心得て、大柄杓を持つて出で、滅罪懺悔の冥加錢と、いひつゝ柄杓を差出せば、掛乞どもは我先とあらそひて、財布の口をおし開き、取溜めたる錢金を惜しげもなく搔摑み、ばらりばらりと投込んだり。一休又宣はく、アヽまだ氣の毒な事があるて、いづれもの中にたゞ一人、三日を待たず無常の風につれて行かるゝ人がある。是は常業是非もなしと頭を撫でつゝ宣へば、掛乞どもは青くなり、申し一休樣、それはマア此中で、誰が無常に連れられます。言うて聞せて下されませと、ふるへ聲にていひければ、一休頭を振給ひ、イヤ〳〵それを言うては片時も堪へられるものではない。松飾るやら餅つくやら、めでたい春を迎ようと、知らずに居るで




大晦日の夜
かけ取どもに
説議と説て
泡沫無常の
落涙を
野晒悟助

知つたなら、意見いうても爪に火は點させまいに、犢鼻褌にさへ繼をあてゝ、一生をあがき死、かなしい事や痛しやと、冷い額をおし撫でゝ、歎けどかひは新佛、枕念佛を隣にて、只やかましと言ふばかり、一度此世を去つたもの、再び歸つた例なし、といと哀げに宣へば、掛乞どもは一同に、ほろり〳〵と涙をこぼし、あゝ氣のよわる御說法、聞くさへ身の毛がよだちますが、こはい物見たしぢや。もちつと其さき賴みますと、いへば一休うなづき給ひ、なほも哀な御聲にて、偖歎きても悲みてもかへらねば、葬所におくる支度をなし、棺桶をとゝのへて、金が欲しいの欲垢に、けがれた著物をぬがせつゝ、經帷子を著更へて桶にをさめ、綿薄なかけ無垢を打覆ひ、高盛の枕飯、線香や抹香の、匂もいとゞ哀にて、あらいたはしや惣領の、七つばかりの男の子、五つの祝袴著に、著たる野馬の染小袖、肩の狹い上下の、小な形に大編笠、餘所の見る目も涙なり。罪障消滅なんまみ、往生極樂なんまみと、すゝめ給へば臼八が、堪へずわつと泣出し、わしも丁ど七つになる男の子を持つて居ます。身につまされて悲しいと、涙の露の玉銀に、財布の端をしぼりけり。時に一休柝木にて高座をはつしと打鳴し、御聲高くはりあげ給ひ、蜉蝣の一期槿花の榮、夢幻の身を持ちて、利欲に迷ひうか〳〵と、空しくおくる光陰の、矢立の筆の命毛の、ちゞまる所に氣もつかず、畜生道の革財布、罪の秤の目をあ

茶椀の利牟をちん〳〵とならし給ひ、夫大乘論に曰く、無常に三種あり。一には念々壞滅の無常、二には和合離散の無常、三には畢竟如是の無常などと、事むづかしく說きたれど、つまる所は月に村雲花に嵐、いつ死なうやら知れぬ事なり。そこで此無常といふやつが嫌なやつぢやて。老朽ちた身はいふにおよばず、鬼とも組まうといふやうな、力自慢の若衆でも、この無常といふわろが案内なしに迎に御座ると、今まで借錢はたるためにに睨廻したるおそろしい眼もふさがり、財布にむすんだ一すぢの息を忽ちひきとりて、どうぢや〳〵の催促に、赤めた顏も青くなり、四大というて虛空から借受けた、地水火風の損料を急にはたられ、骸骨の上にかぶつた欲の皮を、かの無常殿に引剝がれ、角髮をはつて儲けためた錢金も、いとほしと思ふ妻や子も、のこらず此世に殘しおき、かねて己が造つて置いた地獄をさして只獨り、迷行くこそ悲しけれ。なんと人の命といふものははかないものでは御座らぬか。罪障消滅なんまみ、往生極樂なんまみ、と宣へば、掛乞どもは我を忘れて一同に、なんまみ〳〵と唱へけり。一休又宣はく、あはれなるかな女房は、看病疲に瘦細り、乳呑子を肌につけ、惣領の子を側におき、むなしき骸に取附きて、末期の水に淚をそへ、惣領の子にむかひ、これ太郎よ。これが此世の暇乞ぢや。爺樣の顏よく見覺えておほきうなつても忘れるな。今頃箇樣に成らしやらうと

となりぬ。佛鬼一如の道理以此悟るべし。衆生の心々にて、地獄とも極樂ともなるぞかし。されば正法念經に、閻魔獄卒は實有の情にあらず、衆生妄業の力をもつてこれを見ると說給へり。又法相に、於繩起蛇覺といふことあり。繩を蛇と思へばおそろしく思へども、繩と見定むればおそろしき事なし。地獄をおそろしと思ふは、迷の前の事なり。菩提なりけりと悟りぬれば苦しからず。いとし可愛の愛欲をうすんじ、をしい欲しいの貪欲をすてゝ正路を步み、おのれ〳〵が心に佛菩薩の名將勇士をたくはへて、おそろしき地獄城を攻破り、心の鬼を退治して、唯心の淨土となす時は、たちまち活きた佛となり、此世から安樂なり、と宣ひて掛乞どもを尻目にかけて又宣はく、いかつがましく片肌ぬいだる有樣は、修羅の諠嘩に異ならず。額にむすぶ鉢卷は、邪見の角と見ゆるぞかし。あゝ唯心の淨土覺束なしと宣へば、掛乞どもは互に目と目を見合せて、脫いだる肌を入れるもあり、むすんだ儘に鉢卷をそつと取つて隱すもあり。始にかはりて行儀よく一同にいひけるは、コレ申し一休樣、我々がやうな無智な者には耳近いよいお談義、どうぞ其あとを今すこし、お聞せなされて下されませと、ねがへば一休宣はく、いづれも信心をして聽く心さへあるならば、どうで說きかけた此談義、これから後座には必滅の理のしつぽりとした事を說申さう。且息つぎにと宣ひつゝ、陶器の酒を飲給ひて、又

するどき刄に敵しがたく、始の廣言には似もやらで、身をちゞめてぞ逃げたりける。これを戰の始として。佛鬼兩軍入亂れ、地獄方には鐵火をふらせ、極樂方には蓮華を雨せ、勢猛く戰ひぬ。火花を散すといふ事は、此時はじまりけるとかや。かゝる所に思ひもよらぬ生死の海より、弘誓の船を乘出して、三途の川に漕入れたり。地獄方の者等これを見て、すは伏勢よと騷ぐ所に、副將軍觀音左衞門、あまたの聖衆化佛をしたがへ、大光明を發して船櫓にあらはれ給ひ、妙なる聲にて宣はく、遠からん者は音にも聞き、近くは目にも見知りつらん。衆生をすくひ盡さずば、正覺をとらじと思ひきりたる彌陀佛の副將軍、念彼觀音の手並のほどを見よ見よやつと呼り給ひ、千の御手毎に大悲の弓には智惠の矢をはめて、一度はなせば千の箭先、雨霰と降りかゝつて、鬼神の上に亂れおつれば、大將閻魔をはじめとして、大に狼狽敗北し、鐵門のうちへぞ逃込みける。これより七日七夜が間合戰ありといへども、つひに地獄勝利を得ず、閻魔大王冠を脱いで降參しければ、阿防羅刹の惡鬼をはじめ、地獄中の罪人どもをこしらへすかし、心をあらためさせて新生の佛になされ、閻魔王を始として、冥官冥衆の姿を其儘に、曼陀羅の聖衆に引上せて、等流法身と地獄に佛國をうつして、唯心の淨土となし給ひければ、劍の峯と見えしはたちまち妙覺の山となり、鐵の湯と思ひしはやがて功德の水

けたり。寂滅爲樂の紙幡を、無常の風にひるがへし、銅鑼鐃鈸を修羅の鼓に打まぜて、罵詈號泣の鯢波を一度に咄と合せしは、百千の葬禮を、一度にするが如くにて、すさまじかりける光景なり、と又柝木にて高座をはつしと打給ひ、時に地獄の陣中より、髭黒に血眼なる武者一騎、血盆にて染めなしたる、赤地の錦の鎧直垂に、阿鼻叫喚の火威の鎧を草摺長にゆりくだし、鐵の箙に時鳥の羽を以てはぎたる矢を二十四差したるを、頭高に負ひなし、不產女地獄に生ひたる竹を七もぢりにもぢりたる、塗籠の弓をとり、劍山よりえらみ取りたる鉾を持ち、畜生道の牧を出でたる斑駒の太逞きに、餓鬼の持ちたる飯椀に、燃立つばかりなる紅の厚總の鞦を懸けて乘つたりけるが、二河白道の河原面にすゝみ出で、鞍坪につッ立上りて大音あげ、抑これは一百三十六地獄の總大將閻魔大王の臣下、九王の裏に股肱耳目とよばれたる、五道官の轉輪王とは我事なり。吾と思はん佛菩薩は、名乘つてこれへ出候へ。花やかなる打物して、諸見物の睡をさまし候はんと廣言を吐出し、勢撥つてひかへたり。かゝる所に淨土方の陣中より小箭の日照太郎と名乘て、日光智德の鎧に瓔珞華鬘の指物をさし、青蓮華に打乘つてすゝみ出で、無盡功德の利劍を拔いて斬つてかゝれば、轉輪王シャ小癪なる小冠者哉とあざわらひ、善惡應報因果の鉾を車輪の如くにふりまはし、炎を踢立てて戰ひしが、日照太郎が迷暗照破の

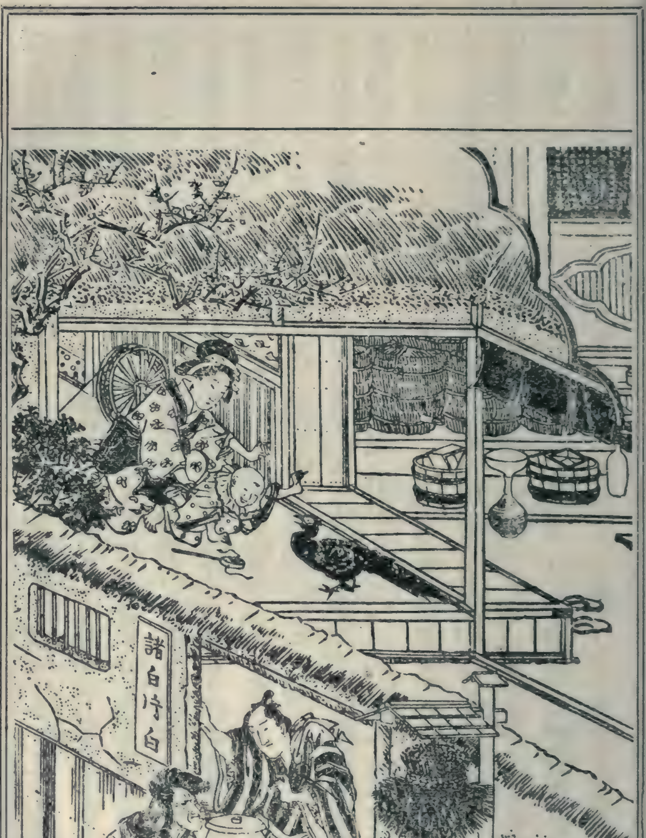
醒し、寢そべりたるも起上りて、こはおもしろき事かなと耳をそばだて聞居たり。一休又宣はく、此時極樂の總大將、阿彌陀佛の出立には、赤色赤光、白色白光の錦の鎧直垂に、相好莊嚴の擘手をさし、忍辱の御鎧に、大慈大悲の末金物打つたるを肩にざつくとかけ給ひ、三身即一の鍬形打つたる八萬四千の白星の、御甲を猪首に著なしたまひつゝ、四十八願差したる胡簶に、僧祇劫經たる、功德の頻藤の弓に妙觀察智の幡をさし、靑蓮の御外背を、一度めぐらしたまふ時は、光明遍照十方世界とぞかゞやきける。誠にたふとき御事なり、去程に諸佛菩薩の大軍、日をえらみて極樂國を出陣あり。功德莊嚴の旗指物を摩訶菩提の山下風に翩翻と吹なびかせ、十萬億土を一飛に葬頭河の此方なる、六道の辻まで押寄給ひ、笙篳篥を吹鳴して、讀經の聲を一度に咄とあげたまへば、千部供養の如くにて、ありがたかりける次第なり。寢耳に水の地獄城には、三角眼㘅々鼻のはや打、御註進々々々と呼はつて斯樣々々とうつたふれば、閻魔大王あわてまどひ、十大王衆、獄司候官、司命令神、司錄記神、五道冥官、俱生神、奪衣婆、懸衣翁、阿防羅刹、五色の鬼、無量の異類、無數の鬼神をしたがへて、跋提河の邊修羅道に押出し、鐵の楯をつき、淨頗梨鏡をするゑ、焦熱地獄より大釜をとりよせて鐵を湯に涌し、敵近よらば熱湯をあびせかけんと構へつゝ、大地を堀つて猛火を籠め、坎穽をまう

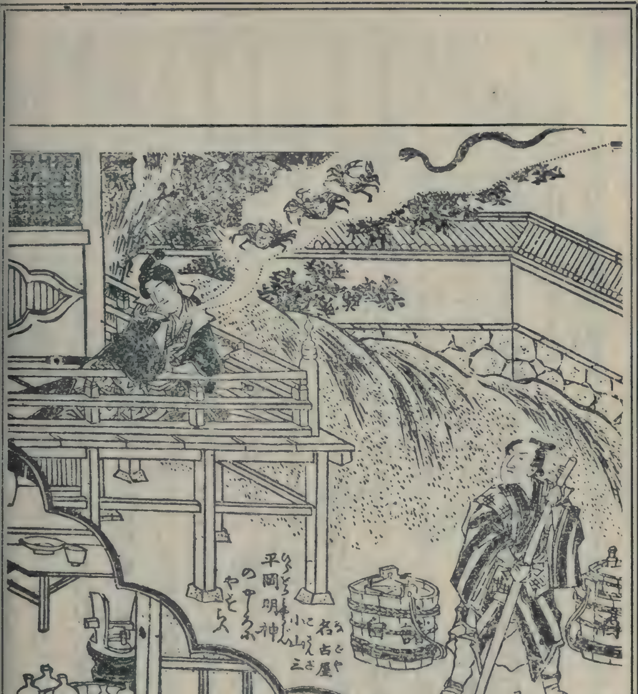
集給ひて宣ひけるは、我つら〳〵おもんみるに、一切衆生自ら地獄をつくりて其地獄におち、永劫惡趣に苦むこと、いかにも不便の事なれば、我此度慈悲本願の軍を起して、衆生の自ら造りなす地獄城を攻亡し、閻魔に抹香をねぶらせて、呵責にくるしむ亡者等を救取り、盡く佛にして遣さんと思ふが、かた〴〵も我にしたがひ、一軍して見る氣はなきかと仰出されたと思はつしやれ。そこで諸佛菩薩の宣ふには、それは至極よい思召でござります。誰かは違背つかまつらんと御受申されたれば、已に此評議一決して、且肅隊をぞなされける。九品蓮臺の精兵菩薩軍には誰々ぞ。等覺山の觀音左衛門、蓮花野の勢至太郎、横笛の藥王兵衛、笙笛の藥上武者、懺悔の里の普賢殿、琴上手の自在五郎、三賢山の獅子吼十郎同じき陀羅尼三郎、能滿福智の虚空藏冠者、歡喜地の德藏庄司同じき弟に法藏別當、又金剛藏左衛門光明太郎、衆寶判官、指箭の山海惠、大刀の華嚴王、大箭の月光王、小箭の日照王、慓悍の定自在、一番かくる三昧王、ひたやぶりの大自在王、一人當千の白象王、打物の大威德、はや走の無邊身、都て二十五菩薩の二十五騎、九品淨土にむねとの面々、九億萬恒河沙の、郞等を引率し、紫雲に乘じ蓮臺に鞭打ち、或は獅子大象に乘るもあり、雲霞のごとくに集りしは、すさまじかりける光景なりと宣ひて、柝木のかたしにて、高座をはつしと打給へば、掛乞どもは居睡したるも目を

かりけり。一休はかけ乞どもが欲にみちたる物語を、おかしくや思しけん、打笑ひつゝ宣ひけるは、いづれもの居催促、さぞ退屈にあるべければ、ねぶけ醒におもしろい、談義を說いて聞すべし。如何に〳〵と宣へば、掛乞どもいひけるは、こちらが口をきく事なら、腹の減る氣遣もあれど、どうで開いてある耳を持つたがふしようぢや。お布施のいらぬ談義なら、聞いてしんぜ申さんと恩がましくいひければ、一休は悟助に仰せて其支度をぞさせ給ふ。悟助は心得大長持を引出し、舊卓圍を打かけて、かりの高座となしければ、一休は小夜著を著ながら高座に上り給ひけり。掛乞どもは頰杖つくやら趺跨かくやら寢そべるやら、行儀のわるき聞人なり。一休は且咳を前にたてて宣はく、いづれも今夜は一年のきはめ時、大晦日と御座つて居催促の御參詣、さりとは奇特なことで御座る。我教外別傳の法は耳遠き故、耳ちかい譬喩の談義を說申さん。且前座には活潑禪機のいさましい悟り事を說き、後座には生者必滅の道理、しつぽりとした爲になることを說きましやう。是乃ち各方、かけ乞講中逆修現當安樂の爲め、二つにはねぶけ醒しにつとむる所の說法講談でござれば、信心を決定して聽聞あるべき事が肝要でござるぞやと宣ひつゝ、酒飲茶椀を利牟のかはりとなし、火箸の先でちん〳〵と打鳴し給ひ、偖宣はく、夫佛鬼一如の道理といつぱ、西方極樂世界に於て、阿彌陀如來一時諸佛菩薩を

うぞ今夜は了簡して、戻つてくりやれと宣へば、かけ乞どもは口々に、活佛でも達磨でも、借りた物をかへさぬといふ法はあるまい。取らぬうちは何時迄も居催促ぢや。お邪魔ながらと落附いて、提灯の火を吹消し、十四五人が居並びて、歸るけしきはなかりけり。一休二言と宣はず、作麼生如何の法問より、借錢乞の問答は、あなむづかしやと宣ひて陶器の酒を飲給ひ、そらうそぶきてぞ御在しける。掛乞どもは相手なき、舌戰もならざれば、仲間同士の物語に、米商人の臼八が、コレ古手屋の破九郎、和主の門に立てたるは、鎌刈の松と見ゆるが、定めて二本で十文も出したであろ。奢ぢやぞや。わしは荒神松を二本で三文に買ひおとし、古釘で門口へ打つけて置きました。それでも祝儀は濟む事ぢや。和主の鎌刈から見ればこちには大まいの錢八文ののびがある、と言へば酒屋の糟内が、今年は餝海老がきれもので高い故、わしは一つ三文する年に二つ買うて、今年の分の算用を合すつもりぢや。ないものくはうといふ歳徳の神は、御座らいでも苦しうないと、圍爐裏で鼻紙あぶりつゝいへば、薪屋の柴六が、これを感じていひけるは、いかさま隣から打つ釘のさきへ、こちの摺小木をかける程に氣をつけねば錢金はもたれぬと、語る背後に青物屋の菜左衛門、何をこんがらするかと見れば圍爐裏に燒さしの藁を拔き、錢索子に綯ひては懐へへし込みける。口をたゝく者どもより、結句油斷はな

乞どもは簀子の上にのし上り、これの一休樣は近頃當地へわせた故、まだお顏さへ見知らねど、名僧と聞いたゆゑ、よもや不沙汰はあるまいと、心をゆるして貸しましたに、噂とちがうた枉惑者、前の月から幾度も、催促すれども今にすまさぬ、どうするのぢや〳〵とぞ嚾きける。悟助はこれを押宥め、不沙汰をする氣は御座らねど、此ごろは檀越の布施物もなき故に、心の外に遲滯しました。折惡しく今夜は庵主も他行なれば、來春の松過まで、待つて〳〵といはせも果てずいや〳〵左樣はならぬ〳〵。大晦日に留守つかふは、どうして見ても枉惑者、此庵室には朱太刀とやらいふ大太刀があるげな。百貫のかたに笠一蓋ぢやが、當分の腹いせに、それでも取つて歸るべし。いざ〳〵皆の衆奥へ踏込み、彼太刀をと片肌をぬぎ、鉢卷して皆一同に立上り、奥を目がけて行かんとすれば、强氣の悟助こらへかね、不禮至極のふるまひやと、いひつゝ箒をふりあげて、打たんとせしに一休は、此騷動を聞きかねて、一間の裏を立出でたまひ、悟助を呵り掛乞どもをなだめ給へば、やうやく且靜りぬ。時に一休かけ乞どもにむかひ給ひ、他行というたは悟助めが妄語戒を破つたいつはり、まことは奥に冬籠の此一休、おの〳〵方に逢ふははじめて、現世は更なり過去未來を、一目に見渡す六神通、地獄の惡鬼羅刹でも、何とも思はぬ我なれど、一物もなき達磨宗、借錢といふ魔王には、拂子を投げてあやまります。ど


諸白片白


名古屋
小山三
平岡明神
酒賣
赤六

けり。夫は偖おき爰に又一休和尚は檀越のすゝめにより、箔藏主といふ弟子と野曝悟助を具し給ひ、攝州住吉の庵を出でて河内國にいたり給ひ、生駒山の麓に庵室を造りて權くここに住給ふ。かの箔藏主といふは前の年一休堺の扇屋塵右衛門が許へおはせし時、たのまれ參らせて輿添になりし繪佛師の箔七が事なり。其後一休の御弟子となり、剃髮して法名を箔藏主とたまはりぬ。さても光陰はやく流れて、年浪のよどまぬ水にはせきとむる柵もなく、已に此年も暦の軸に巻きよせて、往來の人の沓音も胸敲き、節季候の拍子と共にいそがはしくなりて、星佛も賣りやみ、煤掃竹の節もつまりて大晦日となりにけり。此日は世間の掛乞ども朝まだきに起きて、もの言ふたびに口より煙のいづる頃より、霜をおろし氷を踏破りて飛出し、韋駄天走に馳せまはり、血眼になりて譴歩けば、借錢負ひたる者は速疾鬼とかやが佛舍利奪ひたるやうに逃げまどふも理なり。年中につもり〳〵し物入が、冬と春との峠となり、借錢の山高うして皆人の越えかぬるは、此一日の難所ぞかし。一休は金を山に捨て、玉を淵に投ぐべくもあらん御氣質なれば、檀越の布施物おほき時は、貧者に施し給ひ、常は一鉢のまうけより外、物をたくはへ給ふことなし。偖大晦日の夕方に、掛乞ども十四五人連立ちて、一休の庵室に來りければ、野曝悟助立出でて、これは〳〵何れも揃うてようこそ御出といひけるに、掛

に對ひ、かやう〳〵の事あれども、これを得んこと急にならざる事なれば詮方なしと、本意なげに語合ひてぞ居たりける。爰に亦此村ずゑに草の庵を結びて獨住む、貧しきくらしの老女あり。頭には白髪の雪をいたゞき、額には皺の波をたゝへ、寒夜にさへ一重の襤褸を著てわづかに肌をかくすのみ、人に雇はれ賃仕事してやう〳〵露命をつなぎけるが、此時亦六が門を過ぎ、夫婦の物語を老に似合はず耳はやく聞きつけて裏に入り、今うけたまはれば頭痛の病の事を宣ひしが、幸頃日藻屑川のほとりにて、何者とも知れず自ら頭をかき切りて亡せたる者の候へば、若此婆々に五索子ばかりの錢を給はらば、其首をひろひ取りて參らすべしといふにぞ、亦六は大に喜び、いかにも五索子の錢を遣すべければ、それを拾來りてくれよ。疾く疾くせよといそがせば。婆々は心得候とていそがはしく出行きぬ。かくて此日の夕暮に、彼雇婆々、瓦の壺に首を入れもち來りて與へければ、亦六は貧しきなかに調へし錢五索子をつかはしけるに、婆々はいと嬉しみつゝ、思ひがけなく此錢でよい年をとりますとて、受納めてぞ歸りける。偖亦六はかの首を取出して机に据ゑ、香花を手向けて打むかひ、いづく如何なる人かは知らざれども、主君の頭痛平癒させ給はらば、今日を乃ち命日とさだめ、後々までも年忌佛事を營みて、跡懇に弔ふべし。南無阿彌陀佛なむあみだぶつと回向して、七日が間祭り

稻妻表紙後編　本朝醉菩提　巻之八上

阿氏多尊者　赤縄囑累品第十五

去程に小山三は、權亦六が家に逗留し、あくる春にもいたらば、折琴姫の御行方、番作がゆくへを尋ねに再び又旅立つべしと思ひ居たるに、前の年金剛山にて狒々に飛礫を打ちつけられたる額の痛み、つよき寒氣に再發し、頭痛の病となりて頭もあげず打臥しければ、亦六夫婦は活計をやめて側をはなれず看病し、百藥を盡すといへども、露ばかりも驗なく、漸々におもき病とぞなりにける。亦六於三輪にいひけるは、母公の仇打佐々木の家の御再興、一身を二つにも分けてほしく思召す大切の御身なれば、我々が命にかへても本復をさせ申さねばなりがたしと、病人よりも看病に痩る夫婦ぞたのもしき。然るに或人いひけるは、頭痛を治するに奇妙の事あり。戰場にて打死したるたぐひ、又は自ら死せしたぐひ、跡を弔ふ者もなき無縁の人の首をもとめ、七日が間香花を手向けて其靈を祭りよく葬りて得さすれば。其慈悲善根の功德によりて、いかほど強き頭痛にても、忽ち平癒疑なしと物語るを、亦六聞きて於三輪

をあたへけるが、呼べばいつにても出來り、杉太郎によく馴親みて、平日の翫弄となりにけり。不思議なるは此雉偏目なり。これにも必ずいはれあるべし。次の卷を讀得て知るべし。




酒賣亦六於王輔と
いふ女を妻とし一子を
うむ一日その児の
足に小蛇まとひつ
雉子飛来りて
小蛇をくらふ

雉川國貫がために佐々木の家滅亡し、多門之助自殺ありし事、父山三郎打死の事、同助折琴姫を守護して行方知れざる事、母八重垣金剛山にて不破番作に打れたる事、百蟹の繪の奇特によりて思はず狒々を殺せし事、夫より番作をたづねんため近國をめぐりて月日を過し、今又當地に到るまでの事をつぶさに語りければ、亦六は是を聞き、さある凶事のありしことを露ばかりも存ぜずとて大に驚き、父亦助も金剛山にて殺されたることを語りければ、さては彼村を騷せしはいつはりの狒々にて、實の狒々は我に殺されしか。汝が父も同夜に非業に死せしかと、語りあふも皆互の涙の種なりけり。お三輪は食事をとゝのへなどして小山三をもてなし、亦六にむかひて彼小蛇と雉の事を語りけるにぞ、亦六小蛇の斷れはなれたるを見るに、黑斑の鱗ありて前程見たると違はざれば、益怪みて取捨てたり。これ此小蛇は前の年鳥部野に會合せし惡靈のうちに、不破伴左衛門小蛇となりて、小山三に災すべしといひし詞に符合すれば、これ伴左衛門が怨魂の化したるものにて、小山三が所緣の家にまで災せんとしつるならん。是より小山三はしばらく此家に逗留しけるが、亦六夫婦は御主人の落目なればと、萬事に心をつけていとたのもしく欵待しければ、小山三は大に力を得て喜ぶこと限なし。さて又かの雉は家のめぐりの竹林をはなれず、放飼のやうになりければ、お三輪はなほ憐みて朝夕餌

幸哉々々乳母兒の亦六といふ者當地に住むよし聞きつる故、力にせばやと尋ねにこれまで來つるなり。これ此明神の御引合なるべしといひて喜べば、亦六はさきほど見たる小蛇と蟹のあやしみを物語れば、小山三いはく、そは我懷中に所持したる百蟹の繪の奇特なり。毒蛇を避けしは今にはじめぬ名畫の德と感嘆し、卷物を取出して押戴けば、亦六は益奇異の思をなし、いざ且我住家へとて案内してぞ歸りける。此日お三輪は家にありて布を織りけるが、今年は既に二歳になる杉太郎を守する者もあらざれば、腰に紐をつけ礎に結ひつけて、おのが匍匐して這廻るまゝに遊せおき、布を織る事に心を寄せて居たりけるに、杉太郎頻に泣叫びければ、ふりかへりて見るに、一つの小蛇かれが足にまとひつき居けるにぞ、いそがはしく筬を投捨てゝ立上る折しも、いづくともなく一羽の雉子飛來りてかの小蛇を咬へけるに、小蛇は雉の身にまとふを、雉やがて軒翥しければ、小蛇は寸々に斷れて死したりけり。於三輪はこれを見て安堵なし、杉太郎を抱上げて乳房をふくませ居けるに、彼雉は逃も去かず、お三輪が膝にのぼりて杉太郎にちかづき、馴親みたるさまなれば、さては人に飼れたる鳥にやとかはゆく思ひ、餌など與へけるにうれしげに啄み、良ありて家の傍なる竹林の裏にかくれ入りぬ。此時亦六は小山三を導きて我家にかへり、お三輪にも引合せ、さて物語におよびけるが、小山三は

物あり。疾く〳〵渡せと呼はりて、二人の悪漢双方よりむずと組みつき懐に、手を差入るゝを旅人は、腰を捻りてふりほどき、二人が腕をねぢあげて莞爾と笑ひ、我を若年と侮りて盗せんとは愚なり。手なみを見よと罵しりて、左右を一度に投げつくれば、残る者ども割木をとりて微塵にせんと振上ぐる。しや小癪なる奴原と、猿臂をのばして掻摑み、あたるを幸人飛礫、拍毬の如くにあしらへば、皆辟易して居たる所に、又四五人の悪漢ども、箇々棒をひつ提げて走來りければ、さきほどより物蔭に様子をうかゞふ亦六が、これを見かねて走出で、揔擔をおつとりて立塞り、素力量すぐれたれば、脊骨、腰骨、向脛、起もたてず打なやませば、双方の悪漢等、二人の力者に敵しがたく、折しも吹來る凩の、木の葉と共にぱら〳〵と、四方に亂れて逃失せぬ。亦六は旅人をつら〳〵見るに、衣服に三本傘の紋をつけたれば、若やそれかと近附きて、只今のおんはたらき、驚入りたる御手練と、恭しくいひければ、旅人は會釋して、思ひかけざる足下の助に難儀をのがれ、過分のいたりと相述ぶれば、亦六曰く、卒爾ながら三本傘の紋をつけ給ふは、若名古屋小山三君には候はずやと尋ぬれば、旅人は驚きて、いかにも我は小山三なるが、さいふ足下は何人ぞといふに、亦六地にひざまづき、御見知はなき筈なり。拙者は君に乳を上げし乳母伏屋が兒子亦六と申す者に候といへば、小山三はうれしげにて、

ぬることあたはず。死骸は其所に埋め日を經てやう〱此處にたづねあたり候。悔みてもかへらぬこと、跡ねんごろに弔ひ給へと、いひ置きてぞ歸りける。亦六は笈を抱きて悲嘆の涙にむせかへる。於三輪もともに悲みて、御歸あらばお側に居て、お足を擦り介抱し、孫の笑顏もお目に懸け、老後の樂をさせ申さんと、待ちしかひなき死別、お顏も見ざる嫁舅、よく〱薄き御緣ぞと、嘆に時をうつしけるが、とても涙はとゞまらねば、笈をかたみと据置きて、香花を手向けつゝ、あと懇に弔ひぬ。かくて此年も又冬の半となりけるが、一日亦六酒桶を荷ひて商に出で、生駒山の麓なる平岡明神の社の前を過ぎけるに、丁角の若侍、旅人と見えたるが、行疲れたる體にて拜殿の欄に身をよせ睡り居たるに、あやしい哉空中より黑き斑の鱗生ひて尋常ならざる小蛇ひらめき出で、赤き舌をいだしてかの旅人にむかひ毒氣を吐かん樣子なるに、忽ち旅人の懷中より光明を發し、あまたの蟹あらはれ出でて、かの小蛇を追ふと見えしが、小蛇はつひに退きて空中にきえうせ、蟹はもとの懷にかくれけり。亦六は此ありさまを見て奇異の思ひをなしけるに、かの旅人は睡を醒し魘れたる樣子にてため息つきて居たる時しも、惡漢等四五人走來りて旅人を取圍み、今朝から跡をつけ來しに、生駒山にて見失ひ、本意なくおもひてなほ行方をたづねしぞ。汝が懷中に何やらん金目の見ゆる一

於三輪が切なる志に鐵石の心を鑠し、其詞をうけひきて俄に村ずゑの老夫婦をたのみて假の媒とし、此夜あらためて婚姻の盃をとりかはし、父亦助が形代も、時にとりては蓬莱の、國の寶の簑笠と、祝ひをさめて夫婦となり、なほ睦しく打過ぎけるが、於三輪ほどなく懷胎して恙なく男子を產み、其子を杉太郎と名づけて夫婦の寵愛深かりけり。さるほどに金烏玉兎の足はやく、光陰の過ぐる事流水の如くにて、夢と明け現と暮れて又二年の春秋をぞ過しける。此所にいたりて、前の狒々の所の物語と同年なり。亦六は父旅立ちてよりはや三年過ぎぬれども、いまだ歸らざれば、老年の上の旅なれば、もし旅中にて果てられしかと限りなく愁ひけるが、一日一人の男門首に案内を乞ひ、酒賣亦六殿と申すはこゝにやといふ。亦六答へていかにもこれなりといへば、彼男内に入り、拙者は金剛山の麓森屋村の者なるが、これに見覺候かといひつゝ皮籠の笈を出しければ、亦六これを取りて見るに、これ父亦助が笈にて、札に書きつけたる文字はおのれが自筆なれば見違ふべうもあらず。これは如何にと驚くに、彼男曰く、見覺あらばくはしき事を語るべし。かやう〳〵に候と、かの強盜いつはりの狒々となりて、森屋村を騷がせ、金剛山の山中にて亦助をしめ殺し、傍邊に此笈のすてありしことをつぶさに語り、此札に河内國の住人獵師亦助とのみしるしありて、郡の名も村の名もしるしなければ、急にたづ

く、無事で御歸あるやうに御身もともに祝酒きこしめせとて、商物の酒をあたゝめ、尾頭つきし肴をそへて勸めければ、亦六は愁を拂ふ玉帚と數盃をかたぶけ、お三輪にもさしつさゝれつ酌交しぬ。時に於三輪、軒のつまに燕子のゆきかへりして巢の裏に子を育つるを指ざしていひけるは、あれ見たまへ。鳥類すら夫婦ありて子を養ふ。御身未だ年若しとはいひながら、親一人子一人の御身なれば、妻を娶りて親人に安堵さするが孝ならめ。妾不思議の御縁にて情によりて生きながらへ、此身にうけし大恩は、山より高く海よりもなほ深かるべし。あまたの日數過ぎぬれども、父竹齋の行方今において知れざるは、死別にうたがひあるまじとあきらめ居り候へば、なほ便なき我身なり。御身も妾も若身にて、所狹き此家に唯二人住み居れば、世間の人の思はんずる所もいかゞなり。愚なる身をきらひ給ふ心もなくば、此上の御情に妻となし給はれかし。さもあらば一生連添ひ長く御恩を報ずべし。親人の形代の此簑笠の前にて夫婦の緣をさだめなば、たとへ翌日歸り給ふともよも憎しとは思すまじと、はづかしさをも餘所にして、思ひこみてぞ聞えける。亦六はこれを聞き、やゝ暫く答もせず、手をこまぬきて默し居けるが、日來義をはげむ者なれども、いかなる過去の宿緣にや、竹齋が死骸に對し、天地に誓ひし詞に背き、敵同士の惡緣と、知りつゝ結ぶ煩惱の、絆の端ぞあさましき。されば亦六は、

ちかき寺に布施をおくりて、竹齋が菩提をとむらひ、やがて打るゝ身と思へば、夜臥すにも於三輪とは一間へだてし所に臥して、禮儀を亂さずあしらひぬ。於三輪はさある心も知らず、命の親と思ふにぞ、せめてすこしの恩報と、まめやかに働きて、洒洗濯針仕事、煮焼の業の片手には商の手傳し、物書くこともよくしければ、日々の帳合算用まで、男まさりに用をたし、女にまれなる器用者、其ひまには布を織り糸を繰りて、生業のたすけとし、かしこさも又すぐれければ、亦六心に思ひけるは、彼に夫なく我に妻なし。彼と我と若敵同士にあらずんば、よき頃あひの夫婦なるにと、思ひて暗に歎息し、親人歸國し給へば、やがて打るゝ我身なるに、あまり思をきせなば打かぬる事もやあらんと、よき程にあしらひおきぬ。かくて程なく此年も暮れて明年の春の半に至りけるが、一日亦六お三輪にむかひ、我父亦助殿去年の今月今日回國に旅立給ひし時、百日ばかり過ぎなば歸來べしと宣ひて出でられしが、已に丸一年過ぎぬれども、今において歸り給はず、音信だになきは氣遣はしき事なり。今日は則ち發足の日なれば、旅先を祝うて陰膳すゑたく思ふなりといへば、於三輪はこゝろえ候とて、かひ〴〵しく厨をはたらき、陰膳を調じたてゝさゝげ出でければ、亦六は父の著なれし簑笠を壁にかけて形代とし、これに膳をそなへて禮をなし、恙なく歸國し給へかしといひければ、於三輪いは

申すは、生れつきたる偏目にて候といひも果てぬに亦六は大におどろき、さては彼人なり。我あやまりより娘まで、かゝる身にはなしけるよと、臟腑もちぎるゝ思ひにて、身上に熱汗を流し、其敵は我なりと明に云聞せて、打れんと思ひしが、父亦助の歸國を待たで打るゝは不孝のうへの不孝なりと、苦しき胸をすゐなほし、此女を養ひおきて後日に名告り打るべしと心をさだめ、さあらぬ體にていひけるは、小人は讃良郡中野村に住む酒賣の亦六といふ者にて、小商して貧しけれど、御身獨を養ふほどはいかにともすべければ、我家にありて心長く親人のゆくへをたづね候へかし。御身の名は何といふやらんといひければ、女は世にもうれしげにて、妾は名を三輪と申し。年は二十になり候。誠に不思議の御緣にて、さばかりふかく情をかけて給はること命の親とも申すべし。いつの世にかは報はめとて、掌を合せて拜みつゝ泣きければ亦六も落淚し、我を敵と知らずして命の親とは何事ぞと、いとゞ不便さまさりつゝ、何いはんも爰は途中、いざ〳〵我家へおはせかしと、荷桶をかたげ件ひて、家路をさして歸りけり。これより亦六於三輪を我家に養ひおき、なほ委しき事を問ひけるに、於三輪曰く、前にも申せし如く、父は木枯竹齋とて原は都に住み、名醫のきこえ高かりしが、ゆゐありて零落し、近頃當國にうつり住み候。妾が母は前に都にて亡せ候とかたりぬ。扨亦六はお三輪にかくし、程


酒賣
木六


医師竹斎の娘於三輪

にて候が、老年の父二十日ばかり前に偶家を出で、いく日過ぎても歸り候はねば、人を雇ひて近郷をあまねく探し候へども、ふつに行方知れ侍らず。貧しきうへに老いぬれば、かねて父の詞に、かく長生して貧窮に苦まんよりは縊れてなりと死ぬにしかじと、度々申し候ひしが、もしは貧苦にせまり身をかくして縊死などはせざるかと、悲しさやる方なき折なるに、家をかしおく主、情なき者にて、少の家財を是まで滯りし家代に取上げ、妾をば、ゆく所なくば野ぶせりの乞食にもなれかしと申して追出し候へば、親類もなく立寄る陰さへなき身なれば詮術なく、なかく〵に生恥をさらさんよりは、水の泡と消果てんにはしかじと覺悟をきはめ候と、むせかへりつゝ語りければ、亦六心の裏に大にいぶかり、此女の父二十日許前に家を出でしといふは、若彼人にはあらざるかと、とゞろく胸を押しづめ、左ある身にては死なんと思すも理なり。さりながら親人の生死いまだたしかならざるに、はやまり給ふは不可ならん。生きながらへて心長く生死をたゞし給ふにはしかじ。小人は見給ふ如くになひ賣する者なれば、此近郷を歩く事はつねなり。目じるしあらば共にたづねてしんずべし。家を出でられし時の衣服はいかにと尋ぬれば、女曰く、其時の衣服は黄色に青赤をまじへたる、小裂をあつめて綴りたる小袖にて候。姓名は木枯竹齋と申す醫師にて、年は六十九歳なり。外にたしかなるしると

日もむなしく歸りける途中にて、霙まじりの雨降りいだしければ、子婦訛堤の木蔭に立寄りて晴間を待ちけるに、木々の梢は冬枯れて、雨にまじりて木の葉散る、翅しをれて飛ぶ鳥の、塒にかへる夕間ぐれ、遠寺の鐘の音もさえて、いとゞ淋しき長堤の霜の劍を踏分けて、年若き女いと物思あるさまにて、顏ふところにおし埋みつゝ、こなたへ歩み來りしが、堤のもとの流にのぞみて立止り、唯淫々と泣き居たり。亦六いぶかしみつゝ此女をつら〳〵見るに、髮も亂れ衣服も針目がちにていと貧しきさまなれど、生れつきたる美目容は美しく、人品もまた賤からざる女なり。なほうかゞひ居るに、女はひたすら泣きけるが、やゝありてあたりの小石を拾ひて袂にいれ、念珠を取出してすりならしつゝ、西にむかひて念佛を唱へ、ほと〳〵身を沈むべき樣子なれば、亦六はいそがはしく走出でて抱留め、何故かゝるふるまひはし給ふぞといふに、女は最恥ぢらひつゝいふやう、とゞめ給はる御志はうれしけれど、とても死なねばならぬ身にて候へば、見のがして御通くだされかしといふ。亦六曰く、まだ若き身を失はんと覺悟をきはめ給ふほどなれば、よく〳〵の事なるべけれど、若我力にかなふ事ならば、救ひまゐらせたく思ひ候といへば、女曰く、いづくの御方かは知らざれども情深き仰なり。さばかりの御志をむなしうせんも如何なれば、一通語り侍らん。妾は此堤の東村に住む者の娘

べて打るべし。我命も今日までの約束ならめと覺悟を極め、已に死骸をかきあげしが、待てしばしと思案して又思ひけるは、さりながら親人回國に出でられたる跡にて、我今人に打るゝときは、歸り給ふ家を失ひ、路頭に迷はせ申すべし。しばしの命をながらへて歸國を待ち、今一度御目に懸り、餘所ながら親子一世の別をなし、其後名告出でて爽に打るべしと心を決し、此人の姓名住所の知るゝ書物にてもあるやと、懷を探り見れども一物もなければ、詮方なく死骸にむかひていひけるは、靈魂いまだ去らずば聞きたまへ。御身不運にして我に殺され給ふ、さぞな無念に思すらめ。我御身の妻子をたづね名告りて仇を報はるべし。さりながら我父の歸國するまで待ちてたべ。此事天地に誓ひていつはるべからずと、活人にむかふが如くにいひ終り、成等正覺頓證菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々と回向して傍の土を穿ち、死骸を深く埋めて心覺の標を立て、荷桶をかたげて歸りけるが、此鐵炮なくば斯るあやまちも仕出すまじ。これぞ我身の仇なりと思ひて、彼狩人に返しつかはし、これより毎日家を出でて近鄉をありき、餘所ながら其住家をたづねけれども、ふつに知れざれば、いづく如何なる所の人なるぞ。遠き鄉の人ともおぼえずと思ひつゝ、なほ心をつくしてたづね侘びぬ。かくて二十日ばかりも過ぎけるに、一日例のごとく酒を賣りながら、志貴郡の村々を歩きて尋ねけれども知れずして、此

との事なる由、もとより春日へすゝむるには此野の殺生をゆるし給ふ。これ天の與へなり。これをつゞけ打にして、いく錢の恩賞にあづかるべしと點頭きつゝ、素獵師の子にて鐵炮の心得もありければ、かのあづかりし鐵炮に二つ玉をこめ、火打道具を取出し、火を打出して火繩に點じ、彼雉をねらひすまして、火蓋を切れば忽ちに、流丸飛びて撲的ひゞき、ぱつとたつ烟のうちに、あなやと叫ぶ聲高く聞えければ、こはいぶかしと思ひつゝ、走り行きて見てげるに、雉にはあらで人なれば、こは〳〵いかにと仰天し、抱き上ぐれどかひもなく、脊骨を打れて息たえたり。亦六は益驚き、此人の體をつら〳〵見るに、黄色に青赤をまじへたる小帮を集めてつゞりたる衣服を著て、うつぶしになりて居たれば、遠目には四五羽の雉と見えしなり。これ醫師の體にて、片目盲ひたる老人、いと貧しげなる姿なり。採藥に來つるとおぼえて、袂に種々の藥草を摘入れたり。亦六思ふやう、これはからざる事とはいひながら、親人殺生をやめて回國に出でられし意にたがひ、わづかの欲に雉を獲んとて、大なるあやまちを仕出したる條、我もとめてせしも同然なりと、千度百度後悔し、若此人の妻子ありてこれを聞かば、さぞ嘆悲みて仇を報はんと思ふらめ。我父もし人に殺され給はゞ、たとへ過なりとも許すべからず。我も人も其心はおなじかるべし。所詮此死骸を里に持行き、其妻子をたづね首をの

け置くべし。四五日のうちには借錢を償ひうけもどすべければ、これにて了簡たのむなりといへば、亦六は夫は覺束なき約束ぞといひてなほ承引かざれば、狩人曰く、四五日のうちによき錢を得る心當といふは別のことにもあらず。當月二十七日は春日の御神事にて、贄の雉千二百五十六羽を、年々此近國よりすゝむる事なるが、今年は當國其役にあたり、國のかみより仰あるは、何者にもあれ雉一羽をさし上げなば、鳥目五百文づゝ賜るべしとの事なり。彼禁野には雉たほく住むといへども御身も知るごとく、殺生禁斷の所にて常はこれをとること能はず。春日の調進にばかりはとることを許したまふ。故に我々が仲間の者いひあはせて、近日彼野の雉を追出し、一網に打かけてあまたの錢をたまはるべしと思へば、五貫は更なり十貫にても償ひかねず。如何にこれをもおぼつかなく思ひ候かといへば、亦六うなづき、さやうに聞けばたしかなり。然らばそれまでの質物に此鐵炮をあづかり置くべしとて立別れ、家路をさして歸る道、かの禁野を過行きぬ。そも〳〵此禁野といふは、往古惟喬皇子此野に狩し給ひて、金色三足の雉を獲給ふ。然りしより後尋常の殺生を停給ふゆゑに禁野といふとかや。亦六は此野の半を過ぎけるに、遙むかうの枯草の裏に、雉四五羽あつまり居たれば、偶思ひけるは、いま鹿笛が語るを聞けば、春日に調進の雉子をさし上ぐる者には、一羽に五百文づゝ給はるべし

に鳥の頭を抱きて地上に落ちぬ。おそらくは是去年失ひし雁の頭を、其妻鳥の放しかねて斯くありつらん。それさへ射殺せしは無慙なることなりと、しきりに悲愛の情を感じて、忽ち一念發起し、年來殺生せし罪を滅せんため、諸國の靈場を拜みめぐらばやとて旅立ちけり。兒子亦六はいまだ定る妻もなく獨留主して暮しけるが、かねて小酒を商ひ、折々はみづから酒桶を荷ひて、近き村々を賣歩きければ、里人等酒賣亦六とぞ呼びなしける。頃しも冬の半なりしが、一日例の如く荷をかたげて、交野の邊まで酒賣に行きしに、途中にて鹿笛の七といふ狩人に行きあひ、亦六いひけるは、よき所にて逢ひぬ。和主にかしたる酒の價五貫の錢を度々催促すれど今にすまさず。とても償ふ心なくば縣司に申し告げてとるべきなり。いざ我と共に司の許へ行くべしと嚴しくいへば、狩人曰く、そは極めて理なれど、此程は雪しば〳〵降りて野山のはたらきも自由ならず。よき獲物もなき故に、心の外におそなはりぬ。今四五日過ぐれば、此方に錢を得る心當もあれば、今すこし待ちくれられよといへば、亦六は頭をふり、否々其いつはりも聞厭きぬ。もはや片時も待ちがたし。司の許へいざ〳〵と言ひつゝ、手を執へて引立行かんとしたりければ、狩人は迷惑し、しからば箇樣にすべきなり。これは我生業の道具にて、しばしもなくて叶はざる物なれども、當分の質として此鐵炮に小道具をそへてあづ

盆の時になり、亡せし夕露が亡靈をむかふる新盆なればと老母のねがひにて、一休を請待しけるに、一休來りたまひ、靈棚に供へたる、牛馬の形に造りたる瓜茄子をとりて、手向の水鉢に打入給ひ、机にすゑて默し給へば、いかなる經をか讀給ふと、皆々音をやめ耳をそばだてゝ聞居たるに、一休拂子を打振りて宣はく、

山城の瓜や茄子をそのまゝに手向にするや加茂川の水

とあそばし、これにて囘向すみぬとて、他の詞はなく飄々として歸給ひぬ。忠知の本領は山城の鴨河なれば斯くはあそばしけるとなん。此歌の意を知る者は忠知一人なれば、亡せし娘佛果を得んこと疑なしと思ひつゝひたすら喜びけるとかや。

伐那婆斯尊者 生死流轉藥草喩品第十四

これは前の狒々の所の物語よりは三年前の事なるが、河内の國讃良郡中野村といふ所に、酒賣亦六といふ者あり。世にすぐれて美男にて年はいまだ若かりけり。父は獵師にて亦助といひ、老年にいたるまで殺生を業としけるが、一年雌雄ならび居たる雁を射て、其雄鳥の頭を射きりたるに、取りて見れば頭なし。次の年おなじ所にて又雁の雌鳥を射てこれを見るに、翅の下

しと仰せければ、侘助立ちてかの折を取り泉水に打あけしに、件の草餅みな青蛙となりて水中に飛入りぬ。これはと皆々膽をつぶせば、一休宣はく、いや其のみにあらず、此品々いづれも皆さの如くなるべし。此煎餅の折をひらきて見よと仰せけるに、開けば秋の風に散る柿の葉の黄色なるに、桐の朽葉をまじへたり。灘浦の海苔一包をひらけば、これも同じく落葉の塵を吹きとぢし土蜘の巣なりけり。魚と見えしは朽木の根にて、一陶の酒は種とる瓠瓜に、いつぞの雨の降りたまりのくさり殘りし物なりけり。一壺の白砂糖と見えしは、芥川の流の細石眞白なる砂なり。人々益驚けば、一休のたまはく、是みな妖狐の所爲なり。此狐は泉州槇尾山の奧七層峠の岩窟に年ひさしく住み、おのれが年數を經るにしたがひ妖魔の通力を得て、これまであまたの人を害せり。忠知殿の弓勢にあらずば、いかでか射落すことあたふべき。諸人の災をのぞきしこと大なる功德なり。老母の病もやがて快氣あるべしと宣へば、忠知曰く、今更申すも愚なることながら、人情の變化を察し給ふのみならず、妖魔の氣までを、斯く先だちて知せ給ふありがたさよ。禪師の御蔭によらずんば、妖狐に母の一命を取らるべし。危かりしことなりといへば、垣右衞門侘助親子はます〳〵一休の神通を感じけり。かくて老母の病は日々におこたりつひに全快にいたりければ、忠知を始め家内一同に喜ぶことかぎりなし。偖程なく盂蘭

となし、遂には一命をとりて忠知に仇を報はんとはかりしに、事半にして見あらはされたる無念さよと呼はり、面色變りて齒がみをなし、忽ち明障子を踢破りて虚空をさして飛上る。一休忠知にむかひ、はやく彼を射候へと宣へば、忠知はかねて射術の達人なれば、心得候といひもあへず、書院に置きつる弓をとり、箭をつがへて椽先にをどり出で、虚空にむかひて漂と放つ。其矢あやまたず變化のものの胸さかを、篦深にぐさと射通しければ、やがて地上に撲地と落ちたり。一休野曝に下知し給へば、悟助庭に飛下りてこれを押へけるに、これ大なる古狐にて、矢につらぬかれて死したりけり。垣右衛門侘助親子を始家内の男女これを見て、唯あきれたるばかりなり、時に忠知いひけるは、某過ぎし比泉州堺皇子がうへの化地藏を斬りたることあり。察する所此古狐はかの地藏につきて、往來の人を惱せたるに疑なし。某に斬られたる仇を報はんとて娘に似たる女と化し、母を誑惑して病人となしたるならん。身上に必ず疵あるべしといふにぞ、悟助狐の身上をあらため見るに、果して首のきはに疵の癒えたる痕ありけり。一休打うなづき、さこそあるべけれと宣ひつゝ、彼方に据並べたる進物の品々を見やり給ひ、其物をこれへとて取寄せていち〳〵に見給ひ、これ一つとして正眞の物にあらず。且此折の裏をひらき見よ。打見には時ならぬ蓬餅と見ゆれども、これをば庭の泉水に捨てて見るべ

に、いかさまおもく見えければ、愁ふる事限なく、衣服を著かへて別間に出で、垣右衛門を召して醫療の事を談じ居たるに、取次の者まかり出で、母君御病氣の御見舞として、蘆屋里の何某方より差上げたる、折櫃の蓬餅、煎餅、灘浦の鹽燒の翁の許より差上げたる、魚一折、海苔一臺、水無瀬の下司より差上げたる、養老酒一陶、白砂糖一壺、御覽あるべしと披露して、目通りにならぶれば、忠知いち〳〵にこれを見てかたはらに運びおかしめ、垣右衛門にむかひ、母の傍にありて看病する女は何者ぞとたづぬれば、垣右衛門、かやう〳〵に候と其子細を物語る。忠知これを聞き、我彼女に逢ふべし。爰に連來れといふにぞ、垣右衛門、かしこまり候とて彼所に行き、文字摺をつれて出來りけるに、文字摺はうや〳〵しく手をつかへてぞ居たりける。忠知かれをつら〳〵見て、いかさま亡せぬる娘によく似たりといひて、いぶかしみつゝ見居たりける折しも、侘助まかり出で、母公御病氣の御見舞とて、一休和尚御出に候といへば、文字摺はこれを聞くとひとしく色をうしなひ、ものをも言はず次の間へ逃行かんとするを、忠知手ばやく文字摺が襟首つかみて引戻す。かゝる所へ一休和尚野曝悟助を具して入來り給ひ、文字摺を屹と御覽じて、汝畜生の身にて何とて人に交るぞと喝し給へば、文字摺は髮ふり亂してすくと立ち、あな口惜しや殘念や。此家の老母を誑惑し、夜な〳〵毒氣を吐きかけて病人

いへば、女は世にも嬉しげにて、唯掌を合せて拜みつゝ、ありがた涙にむせびけり。かくて老母はかの女を連歸り、侍女等に仰せて浴をさせ、髮とりあげさせ新衣を著せかへなどして見るに、美目容は更なり、ものごし立ふるまひ聲樣に至るまで、亡人に露ばかりも違はざれば、再び孫娘を見る心地して側ちかく召仕ふに、萬に賢くまめやかにてよく老母の心を察し、欲搔に手のとゞくが如くなれば、ます〳〵いつくしみ、忠知都より歸らば相議してかれが古郷に人をつかはし、あらためて侍女に召抱ゆべしとおもひ、忠知のかへるを待侘びぬ。かくて又一月ばかり過ぎけるに、老母心地惡しきとてかりそめに臥し、漸々に病まさりて惱みければ、老臣穗波垣右衞門を始として家内の者大に驚き、良醫をえらみむかへて療治をくはへけれども、露ほども其驗見えざれば、老年の大病こゝろもとなく思ひ、穗波侘助を飛脚として都に上せ、此事を忠知に告げたりけり。かの文字摺は晝夜病床をはなれず懇に看病し、外の侍女等は深夜にいたれば疲れて睡りがちなれども、文字摺は少も睡らず介抱に心を盡しぬ。偖忠知は東山殿の思召にかなひ、都にしばらく逗留して居たりけるに、侘助早馬にてかけつけ、老母大病の由を告げたりければ、忠知はかねて孝心深き人なれば大に驚き、義政公に其ことを聞えあげて暇をたまはり、早駕籠にて宿所に歸り旅裝束の儘、母の病床に近づき容體をつら〳〵見る

月夜の光に此女を見るに、失せぬる孫娘の夕露によく似たれば、世には斯く似たる者もありけるよとあからめもせず打まもり、見れば見る程其儘の生うつしにて孫娘の二度生れ出でたるにかと疑ふばかりなれば、ひたすら憐の心おこりていふやう、見れば賤しからざる容儀なるが、年若き女の身一つにて巡禮するは何故ぞと問ひければ、女曰く、情深き御尋に何をかつゝみ申すべき。妾はみちのく信夫の里の浪人の娘なるが、父身まかりて後、盲目たる母もろとも、西國巡禮に出侍るに、母も當地にて身まかり我身一つ取殘されて、旅路に迷ひ候へども、古郷に歸る路錢もなく、詮方なさに夜は此邊に野宿して晝は往來の人の袖にすがり、一錢二錢のなさけを受けて、露命をつなぐ悲しき身にて候といひさして淫々と泣きければ、老母は益不便に思ひ、名は何といふぞ。年はいくつと問ひけるに、名は文字摺と申し年は十七になり候と答ふれば、年も又失せぬる孫と同年なり。よく似たる事かなと思ひつゝ、若我心の迷の僻目かと、侍女等に向ひ、此女夕露によく似たりと思ふが、汝等が目にはいかに見ゆるぞといへば、侍女等口を等しうして、さきほどより我々もさこそ存じ候なれ。誠に生うつしにて候といへば、扨は我僻目にもあらずと思ひて、女にむかひ我は當地の縣を司る者の母なり。今の物語にてはさぞ難儀なるべければ、我宿所に連行きてしばしの程養ひおき、古郷へおくり遣すべしと

内領、扨は彼方と刀を鞘にをさめつゝ、裾はせ折りて行かんとしたる折しもあれ、松林の裏より飛礫をぱら〳〵と打出しけるが、其飛礫小山三が額にあたりて目くるめき、忽ち氣絶して尻居に撲地倒れたり。時に狒々あらはれ出で、小山三を一摑にせん勢にて飛びかゝりけるが、不思議なるかな小山三が懐中より光明發し、狒々は後にたぢ〳〵となりて進みかねてぞ居たりける。小山三は正氣になりて起上るに、狒々又むかひ來りければ、刀をすらりと拔放し力をきはめて斬りつけたり。狒々はしたゝかに斬られて鼻をならし牙を齩みて大に怒りなほ飛びかゝりけるが、小山三が懐中よります〳〵光を發し、狒々はつひに身體すくみてのけざまに盤石を倒すがごとく、地響して倒れければ、小山三は狒々に乘りかゝりて、胸さかを幾刀となく刺通しけるに、狒々はすさまじき聲をなし大に叫びて死し終んぬ。小山三が懐より光を發したるは百蟹の卷物を懐中せし故なるべし。小山三は不思議に此惡獸を殺し諸人の災を除きし事、今にはじめぬ名畫の奇特と感嘆し、母を埋みし所を拜して念佛をとなへ、河內領の方にむかひて走り行きぬ。

○そも此百蟹の卷物といふは、巨勢金岡、唐代の名畫韓滉といふ者玄宗皇帝の勅によりて畫きたる、百蟹の圖にならひて畫きたる一軸なり。此繪に奇特ありし事前編稻妻表紙に

は如何にと仰天し、耳のほとりに口をよせ、小山三に候ぞ母人樣と呼びければ、八重垣は息吹かへして目をひらき、何小山三なるか。死目に一目合ひたいと思ひし念がとゞきしぞや。我汝を見失ひ、心ならずも此道に逃來りしに、國貫が追手の者我を捕へてくゝりあげ、引立て行かんとしたる折しも、かの惡獸いで來りて、追手の者を追行きしゆゑ、其間に逃去らんとしたる所に、かしこの古社の裏より、不破伴左衞門が弟番作といふ者あらはれ出で、我にかく深手を負せて逃去きしなり。追手といひ狒々といひ、汝此所に長居しては災あり。我はとても助からぬ命なれば、疾く〱こゝを立去りて、父の遺言をよく守るべし、といふを此世の名殘にて、折しも聞ゆる山寺の、鐘に無常を告渡り、黃泉にさそふ夜嵐に、末期の水もとりあへず、溢れてもろき苔の露、巢の時鳥血を吐きて、なく力さへ若鳥の、母にとりつく麥鶉、根にかへる花雲に入る鳥も哀を鳴添へて、親子一世の別霜、消えてはかなくなりにけり。小山三はむなしき骸にとりつきて、父といひ母といひ、わづかの間に打續きて、かく非命に死し給ふは、いかなる宿世の惡報ぞと、悲嘆の涙にむせかへり、共に消えなん心地しけるが、屹と思ひけるは、番作奴遠くは行かじ、追附きて母の仇を報はめと思ひつゝ、急がはしく傍邊の地を穿ち、かりに死骸を葬りて天地を拜し、敵の行方しめし給へと念じ終りて刀を拔き地上に立てて、倒れし方は河

奴なれば、冥途の土産に語聞さん。我は是不破伴左衛門が弟番作といふ者なり。社の裏にて今聞けば、汝は名古屋山三郎が妻なる由、兄伴左衛門山三郎が爲に草履にて打擲され、其遺恨もはらさずして、結句彼が爲に打れたれば、遺恨に遺恨をかさねたる山三郎、一太刀恨みて兄が修羅の妄執をはらさせんと思ひし所、前の日雉川大領が爲に打死せしと聞きて本意なく思ひ、せめて汝等母子を手にかけていさゝか恨をはらさんと、汝等が行方をたづね、此山中にて行き暮れたれば、かしこの社に宿せし所、思ひかけず汝にあひしはこれ天の與なり。さだめて小山三奴もこの邊に居るならん。彼奴めもたづね出して我手にかけ、あとから地獄に追遣らん。汝は前に此世を去り、三途の川に待合せて、刀山火途の死出の旅、親子たがひに手を引きて、行きたき方へ行けかしと、惡口雜言罵りつゝ、とゞめを刺さんとしたる折しも、再び又暴風颯と地をすりて、かの惡獸捕人の武士を左に提げて腕を引拔き食ひつゝ、鮮血流るゝ口をひらき、齡谺にひゞく大聲に、呵々と笑ひてこなたに歸來るにぞ、番作は膽を消し、とゞめも刺さず周章まどひて逃去きぬ。かの獸は舊の松林の裏に入りけり。偖小山三は母の行方いかゞと案じわづらひつゝ、彼方此方と尋迷ひて、つひに此所に來り、地上に流るゝ血を見つけていぶかりつゝ四邊を見れば、母の八重垣倒居たれば、大に驚き抱起すに、深手を負ひし體なれば、こはこ

重垣はしば〳〵驚き生きたる心地もせざりしが、やう〳〵人心地つきて起上り、自己くゝり繩を松の木に摩りつけ、からうじて摩斷りつゝ、とゞろく胸をなで下して、此ひまに後の方へ逃歸らばやと思ひける所に、背後の古社の扉をさと開きて浪人とおぼしき了角の若者、兩刀を帶びてしづ〳〵と歩出で、月にきらめく氷の刀を、すらりと拔きて背後より、八重垣が肩尖を四五寸ばかり斬りこめば、あなやと叫びてのけざまに倒れたり。彼曲者は古社の椽先に腰をかけて、八重垣が苦む體を尻目に掛け、笑をふくみし面たましひ、たゞ者とは見えざりけり。八重垣はやう〳〵と起上りけるが、身上は鮮血の朱に染り、元結きれて亂れ髮、風の柳に異ならず。逃げんとすれど足立ねば、おなじ所を這廻り、苦しき息を吻とつきて、そちはさだめて山賊ならめ。物ほしく思はゞ我身におほふ著物は殘らず共方にとらすべし。命ばかりは助けてよ。兒子はいづくへ行きけるぞ。我を尋ねて迷居るか、せめて一目合ひたやと、麓の方にのび上りては倒伏し、迚も助けぬ命なら、兒子に一目あふ間しばしの時をのばしてよ。慈悲ぞなさけぞ、これのうと、掌を合せてはこなたに向ひ、七轉八倒苦痛の體、聲をかぎりに泣叫ぶ。谷の水音松の風いとゞ哀をそへにけり。曲者は血刀提げて立向ひ、八重垣を足下にふまへて踏みにじり、目をむきいだし、聲あらく、あな耳かしましきよまひごと、山賊などとは奇怪なり。とても殺す

見つけて立留り、松明をさしつけて其爲體を見ていひけるは、いかに女、汝三本傘の紋つけたる衣服を著たるは、名古屋山三郎が妻にうたがひなし。我輩は雉川大領の郎等なり。汝等母子森屋村に宿居る由、注進の者ありて汝等を捕へんために行く道なり。此所にて出會ひしは汝が運の盡なりとて、繩を取出して高手小手にくゝり上げ、さるにても汝夜中此所に來りしは我々がむかふ事を知りて逃れゆかん爲か。小山三奴はいづくに居るぞ。共に搦めて牽て行かん。在所をいへとぞ責めたりける。八重垣はしばし答もせざりしが、斯く縛められたる上は、いつはるとも許すまじ。たとへ我身はいかになり果つるとも、せめて小山三が身をのがして、夫の遺言を遂げしむべしと心を決し、推量の如く妾は山三郎が妻なり。今夜森屋村に狒々出でて騷動し、此所迄逃來しが、兒子小山三は妾より先に出でたれば、ゆくへを知らずといふにぞ、捕人の者どもこれを聞き、小山三汝を捨置きて前に走るべきいはれなし。實事を言へ、いで言へといひて連打に打ちければ、憐むべし八重垣は氣を失ひて倒れたり。かゝる所に松林の裏に大に笑聲きこゆると等しく、飛礫をばらばらと打出し、樹木簌々と鳴りどよみ、暴風颯と吹きて實の狒々あらはれ出で、捕人等を目がけ、猛き勢をなして飛びかゝりけるにぞ、捕人の者等は膽をけし、八重垣を捨置きて、もと來し方へ逃行きぬ。狒々はなほ其跡を追行きけり。八

感ずる事ありて一念發起し、殺生の業をやめて囘國に出で諸國の靈場を巡拜し、三年ばかり旅にありたるが、一旦古郷に歸らめと此夜此村に宿し、これも狒々をおそれ笈の皮籠を小脇に抱きて逃出で、老人の足弱なれば、人におくれながら狒々は後より追來るとのみ心得て、此西の道に馳上りけるが、思ひもかけず行先に、提婆仁三郎狒々の打扮にてすくと立居たりければ、亦助一目これを見るより膽をけし、あな悲しや助けてよと叫びつゝ、地上に合破と倒れたり。提婆は立寄りて亦助をしめ殺し、衣服を剝がんと上弦の月影によく〳〵見れば、垢づきたる古衣服なれば、やくなき骨折りしとつぶやきつゝ、笈の皮籠を取りて見れば、背の方の木札に、河内國の住人獵師亦助と書きつけたり。これも輕ければ此裏にも物はあるまじと思ひて投捨てける折しも、狩人大勢松明をふり照して馳來り、提婆を實の狒々と思ひ、箭尻をそろへて取圍きけるにぞ、さしもの提婆も箭ぶすまに敵しがたく、後の茂林の裏へ逃籠みければ、狩人等は跡をしたうて追行きけり。かゝりければ西の道に逃げたる者は、おほく害せられてまぬかれたる者はわづかなり。東の道に逃げたる者は一人も恙なし。八重垣も小山三を見失ひて、獨東の道に逃上りけるが、足たゆみ身疲れて古社の前に倒伏し、息もたゆげにて唯小山三が事を氣づかひて居たる折しも、向の山間に松明の光ひらめきて、捕人とおぼしき武士大勢出來り、八重垣を

の如くに立ち、大手をひろげて西の道に追上りぬ。此狒々は是實の狒々にあらず、是乃ち提婆仁三郎なり。前に泉州堺を立退きて後此邊にかくれ住み、山賊となりあまたの手下を養ひて、專往來の旅人をおそひけるが、近頃此邊の山に狒々住みて、折々人里にも出づるといふ事を聞き、熊の皮をつゞり合せて身にまとひ、おそろしき面をかけて赤熊をかぶり、狒々の形に打扮ちて、あまたの人を刧し、山中におびき出して賊をなさん惡計なり。前に浪花を逃去りし男達の惡漢、石佛の苔九郎、窣塔婆の露助、枕飯の犬平太、手向の水右衞門、骨桶の白平等か輩も、今は提婆が手下の賊となり、此夜提婆が下知をうけ、此山中の足場よき所に待受け、逃來る旅人を害して衣服路銀を奪取り、其屍はすべて谷川に蹴落しぬ。されば此道に逃上りし者は皆害せられけり。偖提婆は狒々の打扮の儘にて此所に來り、手下の者等にむかひて曰く、もはや此に來る者もあらじ。汝等は先此奪ひたる物をかくれ家に運び、再びかの村に行き、逃出でたる者の空家に入りて財物をうばふべし。我は今しばらく此にありて、若おくれて來る者あらば剝取るべしといふにぞ、手下の者等は奪ひたる物をたづさへて、山越にかくれ家に歸りぬ。提婆は岩に尻かけて休ひてぞ居たりける。爰に又此河内國讃良郡中野村といふ所に、酒賣亦六といふ貧者の父に、獵師の亦介といふ者あり。年は六十歳にあまれる老人なりけり。彼一つの

追人をおそれて、人目を忍ぶ身なれば、なほ片隅の小闇き所に、破れ屏風を立廻して身をひそめ、音をも爲さずして居たりけり。かくて五日目に雨やみ、川々の水もやうやく落ちしと聞えければ、退屈に倦疲れたる旅人等大に嬉しみ、翌日は疾く出立すべしと、此夜は皆々初夜より打臥して物しづかなれば、小山三母子も睡につきけるに、良ありてあまたの人の叫ぶ聲聞えければ、八重垣も小山三も睡を醒し、何事にやと思ふ所に、狒々出でたりかれ見よ追來るはといひて、嘯叫びて逃來る。かの惡獸家毎に飛入りて、人を蹴散し踏倒しなどしければ、あな恐しやといひて、旅荷物一つに二三人とりつきて、我がよ人のよと引遇ひつゝ逃ぐるもあり、狼狽へて兒をさかしまに舁負ひて走るもあり、旅刀を鞘走せて、おのれと手足に疵つくるもあり、湧せる茶の湯を踏轉して、自ら身上を燒くもあり。此一村に宿したる旅人、茲に住む男女等も、皆一同に我先とあらそひて、蜘の子を散すが如くに逃出でければ、足弱の老人女童などは、踏倒されて氣絶し或は泣叫ぶを、かへりみる人だになく金剛山の方へ逃行く。此時小山三も母八重垣が手をとりて逃出でけるが、いやが上に人かさなりて、あち押しこち押して揉立てければ、小山三と母と引合ひたる手を放たれ、八重垣はつひに小山三を見失ひ、心ならずも獨走りぬ。原此金剛山の山口に東西二條の道あり。逃去く者等三分の二は西の道に馳上りけるが、狒々は人

ければ、小山三母子はこれを聞きて大に驚き、さる惡獸に出合はざるこそ幸なれとて、火をかりて松明にうづし、麓に下る道をくはしく聞きて別去き、辛うじて山を下り、河内領森屋村といふ所につきける時、夜はほのぐ\と明けにけり。小山三は勇氣烈しき若者なれば、少もなやまざれど、八重垣は弱々しき女の身といひ、殊更十分の愁あるうへに嶮岨の山を越えぬれば、身體大に疲れて今は一歩もすゝまざれば、此村の旅舍に就き、飢にも堪へざりければ先食をもとめ、人目をしのぶ身なれば、おくまりたる小座敷を貸りて、少し間眠給へとて母を臥しめけるが、八重垣はよろづの愁に目もあはず、主君の爲夫のためと、口に念佛を唱ふるのみなり。小山三も唯打しをれてぞ居たりける。扨此日より春雨降出して、時ならぬ連日の大雨となりければ、小山三母子は立出でがたく、此旅舍に逗留して居たるうちに、大和川千早川を始、此邊の川々の水まさりて往來なりがたければ、前後に道を失ひたる旅人等、皆此村の旅舍にとゞまりて、いづれの家も所狹きまで籠みあひぬ。小山三等が逗留せし家にも旅人あまた宿り、皆長き日の徒然を侘びて、棊象戲雙陸にかゝるもあり、曲舞小歌をうたふもあり、今井鯖の鮓を肴に、俄に價の高くなりし酒飲みて、居角力臑押に興ずるもあり。越中立山の地獄話、熊野まゐりの幽靈の、さかしまに歩く物語などして、耳かしましさいふべうもあらず。小山三母子は敵方の

れば、すべて狩人の體なれば、やう〳〵心を安じ立出でて、火を貸給はれといふに、狩人どもは兩人を見ていぶかしみ、御身等深夜に此山越し給ふは大膽なる人たちかな。近頃此山に狒々といふ惡獸出でて、人をとり食ふことを知り給はぬかといふ。小山三是を聞き、我々は山のあなたの者なるが、急用ありて夜通に河内へ越え行くなり。此山にさる惡獸の出づる事は少しも知らざるなりといふ。狩人等曰く、さこそあるべけれ。かの獸にあはず恙なくこれまで來り給ふは仕合なる事なり。かの惡獸は狀人の如く總身に黑毛あり。人面長臂にして髮をかぶり、走る事甚だ迅し。人を獲れば先笑ひて後にこれを食ふ。ゆゑに笑獸といひ、又梟羊、野人、人熊などもいふ由、何處よりかうつり來けん、近頃此山奥に住み、夜にいたればおちこちの山々をありきて人を引裂食ふ。ゆゑに山かせぎする者もこれを恐れて夜は山にのぼらず、旅人も夜は往來せず。時としては人里にも出でて人をそこなふゆゑ、當地の縣司より我輩に是を仕とめよと嚴しく命あるにより、斯く每夜此邊の山々を歩きて仕とめんとすれども、たま〳〵出合ひても人の如くに立歩きて、勢猛く千鈞を負ふべき力ある上に、身輕くして飛鳥の如くにかけめぐり、岩を碎きて飛礫を打ちなどして、なか〳〵近づくことあたはざれば、今夜はかく人を增し、若出合はゞ遠矢に射殺さんと思ひ候なりと、みな〳〵岩に尻かけて休ひつゝ物語り

本朝酔菩提　巻之七

因掲陀尊者　百蟹陀羅尼品第十二

當時小山三母子は河内國へ落行かんと、金剛山の山越にさしかゝり、小山三山住の人家をたづねて松明をもとめ、母の手をとり腰をおして、さしも険阻の山坂を、心細くも辿行く。世が世の時の旅ならば、あまたの従者を召具して馬駕籠にも乗るべきに、あわてゝ出でし落人なれば、手近くにありし一袋の金を懐にせしのみにて、脛巾草鞋の用意だになく、唯著のまゝの親子連、昨日に今日を比ぶれば、夢かと思ふばかりにて、かはる榮枯は掌を、めぐらすよりも早ければ、母は子の顔子は母の、顔を見あひて歎きつゝ、蜘手にわかる山路の、草葉の露を分迷ひ、泣く〳〵行きて、金剛山と篠峰との間なる、水越峠といふ所まで來つるに、山越の夜嵐に松明を吹消され、闇夜に進退を失ひて、いかにともせん方なかりける折しも、遙向の山間に松明の光閃きて、漸々にこなたへ近づくを見れば、十四五人の荒男、或は弓箭或は槍を持ちたりければ、敵方の追人ども、さきにまはりて道をさへぎるにやと疑ひ、母子ともに木蔭に身をよせてよく〳〵見

誰ことを思ひ、互に隣境をあらそひ、國貫が如く法令を亂し、非道を行ふ者おほかりけるが、誰一人これを糺明して、罪するものなかりしとぞ。

○さて其時小山三母子は、亂軍の裏にて同助を見失ひ、姫の御身を氣づかひ、其跡をたづねばやと思ひけれども、背後をかへりみれば敵兵あまた松明をふり照して充ち〳〵たれば、あとに戻る事もなりがたく、心ならずも母子兩人、一旦河内へ立退かんと、金剛山の山越にさしかゝりぬ。同助は姫を背負ひて、伊賀の方へおちゆきけり。

なし、我はかく深手を負ひ、とても生きながらふる事あたはざれば、生害におよびしなり。汝は跡に殘り、八重垣同助もろともに、姫をいづくにも隱しまゐらせ、安產をさせまして、御誕生の御兒をもり立て、時節を待ちて國貫を打亡し、再び御家を興すべし。いひ殘す事これのみなり。又も敵兵の寄せざるうちに、疾く〳〵落ちよといひて、腹十文字に搔切りて、うつ伏に伏しければ、皆一同に泣きさけぶ折しも、又敵兵あまた松明を振照し、をめき叫びて馳來り、姫をうばひ小山三母子をからめとらんと閧きければ、おち行く先を語合ふべき暇だになく、同助は姫を背負ひて、大勢を相手に戰ひ〳〵おちて行く。小山三も長刀にて斬散し、母をたすけて落ちて行く。かくて双方東西にわかれ、互に其行先を知らざりけり。爰に又前司太郎は、敵と戰ひてあまた打取り、其身も數ケ所手を負ひけるが、主君は已に生害あり、折琴姫は生死知れず、山三郎は打死と聞き、今は何かせんと思ひて、腹を切らんとせしが、何思ひ轉しけん自殺をとゞまりて、ゆくへも知れず落行きぬ。去程に國貫は、多門之助に腹きらせ、佐々木の家を亡して、喜ぶといへども、折琴姫、前司太郎、小山三母子の行方知れざれば、四方に手分して其跡を追はしめ、これより後佐々木の領地を奪取りて我物とし、勢和兩國に威をふるひけるが、此時は是應仁大亂の後にて、とかく世間無爲に屬せず、小を責め大を拒み、渠を亡し己たゝん

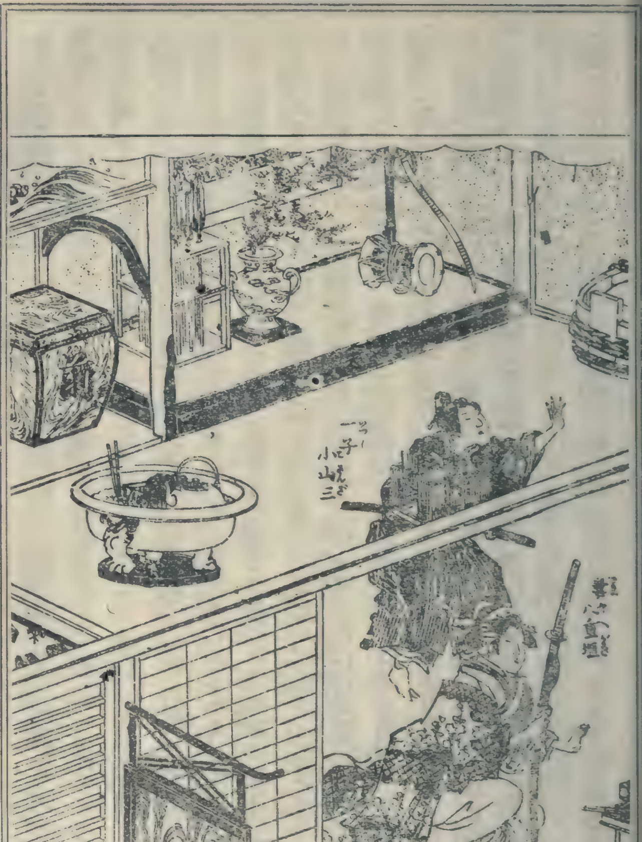
蜘手方をはじめとして、不破道犬、不破伴左衛門、頼豪院、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等が亡靈、髣髴とあらはれ出で、あな心地よやといひて同音に呵々と打笑ひ、掻消すやうに失せて、雷雨もやがて止みにけり。思ふにかく佐々木の家をほろぼし、忠臣山三郎を自滅さするは、都是蜘手方以下の惡靈、前に鳥部野に會合して、相議したる詞のたがはざる所なり。彼鶩を食ひし大鼠も、頼豪院が所爲なる事うたがひなし。かゝる所へ小山三は、母八重垣もろともに此所に來り、山三郎が切腹の體を見るより、兩人左右にとりつきて、介抱しつゝ歎き悲むことといふべうもあらず。山三郎は苦しき息をつき、兒子百蟹の卷物は如何にせしぞと尋ぬれば、小山三曰く、仰のごとく寶藏より取出し、こゝに侍りとて、懷中より出して見せければ、山三郎これを見て、まづ其事は安堵なり。唯我最期の心ざはりといふは、姫の御行方なりといふ折しも、僕同助折琴姫を脊負ひて此處にかけつけ、山三郎が體を見て驚歎けば、姫も悲み給ふ事かぎりなし。山三郎は姫の恙なきを見て大に喜び、汝いかにして救ひまゐらせしやと尋ぬれば、同助曰く、拙者御主人の御身きづかはしく、此處彼處をたづねめぐりしに、敵兵等姫を奪ひて走去くを見つけ候ゆゑ、命を限にはたらきて、取返し候といへば、山三郎曰く、汝が忠義拔群なり。やよ小山三、姫は御懷胎にて左孕と承れば、御男子にうたがひ

し、いづれの方へ奪去きしや知れがたく、殆ど身體つかれける折しも、敵兵前後より馳集り、をめき叫びて斬つてかゝりければ、山三郎初は槍にて戰ひけるが、つひに穗先を打折りければ、地上にからりと投捨てゝ、刀をすらりと拔放し、蜘手輪違十文字、縱横無盡にかけめぐりて、彼處にあらはれ此處にかくれ、火花を散して戰ひければ、右袈裟左袈裟に斬らるゝもあり、空竹破に斬られて兩段となるもあり。腰車を斬放さるゝもあり、頭を立破にわらるゝもあり。暫時におほく打れて、死人の山をなし、鮮血の川をなせり。殘る敵兵も過半手を負ひぬれば、戰ふ事あたはず、秋の木の葉の暴風に吹散らされ、春の花の猛雨に打破らるゝがごとく、四方に颯と逃去りぬ。山三郎も數箇所深手を負ひて身上朱に染り、後に撲的倒れしが、數百の敵兵凱歌を咄とあぐる聲、百連の雷の、一度に落つる如くに聞えければ、刀を杖に立上り、透逦足を踏みしめて、館の方を屹と見るに、黑烟たちのぼり、猛火天を焦し、げにすさまじき光景なり。さてははや館を敵に奪はれ、諸士も皆打死とおぼえたり。我もかく深手を負ひぬれば、とても生きながらへがたし。敵に生捕れて生恥をさらさんより、腹かきやぶりて主君の御跡をしたひ、死出三途の御供すべしと心を決し、差添を拔きて腹にぐさと突立つる折しも、電光曄曄とひらめき、春雷虺々と鳴響きて、大雨しきりに降りくだり、目ぢかき一村の黑雲の裏に、

は矢猛にはやるといへども、はかゞしく防ぎがたく、義にのみはやる者は主君を失ひて何かせんと、思ふさまに戰ひて打死するもあり。思慮のあるものは、しばらく一命をたもちて、他日仇を報い、御家を再興すべしと思ひ、一方を斬拔けて落行くもあり。いひがひなき老人女童はおのがさまぐ〵逃退きぬ。國貫方の兵もあまた打れにけり。小山三は寳藏に走入り、百蟹の巻物を取出して懷中し、宿所にかへりて母八重垣に身支度させ、連退かんとしたる所に、敵兵あまたこみ入りければ、母を前に落しやり、おのれ一人とゞまりて、多勢を相手に戰ひけるが、素劍法に達し力量すぐれたる者なれば、敵を四方に追散し、逃出でんとしたるに、館の餘火出でべき方に盛なれば、こは如何にすべきと、あわて惑ひけるが、偶心づき、長押にかけたる長刀をおつ取りて、彼大盥をきりおとし、築墻の上より外堀の水上に投落し、見越の松をつたひ、盥の上にとびくだり、盥を船とし長刀を棹として、辛じて川を越し、向の岸にのぼりけるに、母八重垣は前に逃出で、此邊を行きつ戻りつして、小山三が身の上を氣遣ひ居たるに折よく出會ひ、ともに走退かんとせしが、姫はいかに、父はいかにと跡に心のひかされて、遠くも走らず、其便宜を聞かめと待合せてぞ居たりける。さて山三郎は折琴姫を取返さんと、あちこちに走りて尋ねけれども、空に雨雲しきみちて、墨を塗りたるやうなれば闇さは闇

らを、やにはに四五人突伏せけるが、なほ大勢亂入し、矢ぶすまを作りて取巻きければ、なか〱に生捕られじとや思はれけん、もとの寢所へ走りかへりて、腹十文字にかき切りて、北枕にぞ伏したりける。次の一間に侍宿せし武士等も手痛く戰ひけるが、主君生害ありと聞き、これまでなりと思ひつゝ、或はさしちがへ、或は腹切りてぞ死したりける。此時名古屋山三郎は宿所にありけるが、此騷動を聞きて大に驚き、火急なれば素肌の儘に槍引提げて館にかけつけ、群敵を四角八面につき伏せ〱馳廻り、樣子を聞けば敵は大領國貫なりといひ、主君ははや生害ありしといへば、しなしたり殘念やと、齒を切ひ牙を咬鳴して、或は怒り或は悲み、國貫を打取りて、主君の仇を報いんと、こゝかしこを尋ねけるが、何處にあるや知れざれば、此上は折琴姫を守護し、一旦おちゆきて良計を爲すべしと、奥の殿に行きて姫をたづねけるに、侍女等泣惑ひ居て、今敵兵姫を生虜りて後門より馳去りしといへば、益驚き跡追行きて取返さんと、後門の方へかけ行きけるに兒子小山三貝取海士ならで、息もつきあへず馳來るに行きあひ、よき所にて汝に會ひぬ。汝は早く寶藏に籠めある百蟹の卷物を取出し、八重垣諸共逃げのくべし。我は敵兵を追ひかけ、姫を取返しておち行くべし。疾く〱といひ捨てて走り行く。其餘の諸士等も各勇をふるつて此處彼處に戰ひけるか、不意を襲れて皆素肌の戰なれば、心

はさておき國貫は、かねて夜打ときはめたれば、國見山にて軍の支度を調へけるに、已に日も暮れけるにぞ、郎等のうちにしのびの術を得たる者あるを選出し、佐々木の館にしのび入り、館放火の號をせよと命じければ、これを承りて走り行き、飛鳥の如く築墻を越えて潜入り、館の動靜をうかゞひけるに、此時は乃ち是三月三日の夜なりければ、祝儀の酒宴最中にて、さゞめき立ちて入興の體なれば、折よしと思ひつゝ、床の下にかくれ入つて、時刻のうつるを待居たり。國貫は身上おごそかによろひ、馬をすゝめて山を下り、半途に打出でて號を待つに、程なく放火をあげたりければ、國貫これを屹と見て、すはや者共すゝめすゝめと呼はりつゝ、あまたの兵を引連れ、貝鐘太鼓を一度に鳴して、佐々木の館に押寄せ、鯨波を咄とつくり、前門を打破りて亂入しければ、館中の男女あわてふためき、こはそも如何なる事ぞやと叫ぶ聲、修羅道に異ならず。しかりといへども此館にはあまたの勇士ありければ、箇々得物を取りてむかひ合ひ、命をきはに戰ひけり。國貫は兵を二手に分ち、一手は多門之助が寢所を取圍ませ、一手は館中の諸士と戰はせ、別に又心きゝたる兵等に下知して、折琴姫を生捕るべし。前司太郎をえらみ打にすべしと命じけり。されば一手の兵等は多門之助の寢所にこみ入りて、鯢波を咄とあげけるにぞ、多門之助寢衣の儘に起上り、手槍を取りてをどり出で、向にすゝむ奴ば


一子小山三


名護屋山三郎

を見て大にあやしみ、當日は巳日の祓とて不祥を祓除く日なるに、禮服の紋を血しほに穢すこと、不祥の甚しきに候はずやといひて、ひたすら氣にかけつるに、小山三もこゝに來りてともに是を怪みけり。山三郎曰く、妖は德にかたずといへり。怪を見て怪まざれば、怪事なしともいへり。何をさばかり氣にかくる事やはあるべき。とく〳〵別の衣服を持來れといふにぞ、八重垣は立行きて別服を持來りければ、山三郎いそがはしくこれを著かへける折しも、僕同助あわたゞしく來りて椽端に手をつかへ、御祕藏の馬何の病氣も見えざるに、唯今俄に斃候といふ。八重垣はこれを聞き、彼といひ是といひ、さても心ならざる不祥かなと益氣にかけて吐息すれば、山三郎も心中には怪異なる事と思ひながら、態と八重垣を叱り、同助にむかひて曰く、彼馬は亡父生前に祕藏したまひし名馬にて、闇打にあひ給ひし時も、我在所を知りて生駒山の辻堂にたづね來り、愁傷の體をなし、主を思ふ事人にもまさりし馬なれば、老馬にて今は不用の物なれども、父の遺留物と思ひて養置きぬ。さるいはれある馬なれば、菩提所に送行き、ねんごろに葬りつかはすべしといへば、同助はかしこみ候といひて退きぬ。さて山三郎何か心に思案の體、八重垣も兎角心のすまぬ顏、互に顏を見合せけるが、山三郎、供揃はよきやといひ、突然玄關に立出づれば、供人は槍挾箱持草履、列を正して館へいそぎぬ。それ

に又名古屋山三郎原春は、前に父の仇なる不破伴左衛門重勝を打取りて後、佐々木の執權職となり、高祿をたまはりて何不足なく暮せしが、妾八重垣男子を產みけるにより、今は本妻となし、其男子を小山三と名づけて今年十七歲に至り、いまだ了角なり。又鹿藏が弟猿二郎は前に身まかり、鹿藏は仕を辭して古鄉に歸り、兒子同助といふ若者を殘し置きければ、山三郎同助を家僕となし、不便をくはへて召仕ひぬ。そのかみ山三郎流浪の時、雨漏を避くるために、住家の梁に大盥をつり置きたる事あり。今も居間の天井に其盥をつり置きぬ。或人これを見て、見苦しき事し給ふかな。こは何の爲ぞと問ひけるに、山三郎曰く、是は我昔の艱難を忘れざる爲、二つには兒子小山三に對し驕を戒むる爲なりと答へければ、或人其志を感じけり。さて今年三月三日の事なりしが、山三郎上巳の祝詞を聞えんため、館へ出仕するとて禮服を著かへ、妻八重垣は刀脇差印籠など持來り、身支度とゝのひて且桃の酒を祝ひける折しも、兒子小山三飼置きける鶯に餌を與ふるとて、あやまちて籠を放ちければ、鶯は座敷の裏を飛巡り、行方に迷うて、かの釣置きたる盥の上に翅を低れて居たりけるに、怪しい哉鼠狼ほどなる大鼠いづくともなく飛來り、盥のうへにて鶯を取食ひけるにぞ、血潮たらく〳〵と流れて、山三郎が小袖の紋の三本傘の上にかゝりぬ。さて鼠は搔消して失せにけり。八重垣は此體

合ひ、姫をなやます事、朱雀の宗玄火のいはれ等は續編にくはしく記せり。他日發行の時を俟ちて見給ふべし。

災禍從地涌出品第十一（後談）

かくて折琴姫は恙なく館に歸り、前司太郎がはたらきを多門之助に委しく聞えければ、多門之助太郎を呼び、其功勞を賞じてあまた褒美を給はりぬ。さて雉川大領國貫は吉野山の事を聞き、兒子金藤太が死を悲み、家の恥辱なれば此事沙汰すべからずと家士等に口どめし、ひそかに其屍をもとめて葬をなしぬ。かの三人の從者どもは主人打れしと聞きて、其場より逐電し、行方知れずなりけるとぞ。去程に國貫は金藤太を打れて無念骨髓にとほり、其原は折琴姫の事より起ると聞き、我かねて佐々木を亡さんと思ふ企ありといへども、時節を待ちて打過ぎたれど、此上は片時も猶豫すべからず。不日に兵馬を起し多門之助を打亡し、折琴姫を生虜りて、生ながら金藤太が塚につき籠め、前司太郎が首を取りてこれを手向け、兒子が修羅の妄執をはらさすべしとて、拳を握り齒がみをなして憤り、家士郎等を召し集めて評議をなし、伊勢大和の堺なる國見山に取籠りて軍の備をなし、夜打にせんと議したりけり。爰

が魂魄の乘りうつりたる宗玄忽睡を醒し、姫と見るより跳寄りて抱留め、いとくもりたる聲音にて、あな恨めしや折琴姫、我は御身を戀しみて、非業の刄にかけられて、今は此世になき人なり。生前の望は叶はずとも、共に冥途へ連行きて、修羅の妄執をはらすべし。來れや來れと呼りつゝ、支止むる侍女等をつき退けて、姫の襟くび搔摑み、すくと立ちたる面色は、身の毛もよだつばかりなり。かゝる折しも前司太郎は姫を氣遣ひて、此所まで走來り、此體を見るより、こは物乞の狂人よな。狼藉なさば唯一打と罵りつゝ、きゝ腕とらへて引退れば、又も取附く横腹を、一あてあてれば宗玄は、うんと叫びて倒れけり。前司太郎はいそがはしく、姫を背中に負ひまゐらせ、侍女等を引連れて、麓の方へ馳行きぬ。宗玄はしばらくありて起上りけるが、足腰痛みて追行くこともなりがたく、殘りおほげに跡を見送り、惘然として現心もなかりしが、やゝありて地上を見れば、一つの香包落ちあるにぞ、取上げてひらき見れば、柴船と書附けたる一木あり。此香包は彼姫がとりおとせしに疑なし。これぞせめての生がた身と、懷にをさむる折しも、日ははや西に入相の鐘蕭然とひゞきつゝ、花は霏々散りかゝる。我身にかゝる罪科を、知らでぞ狂ふ瘦法師、よろめく足に踏迷ふ、戀の山路をたどり行きぬ。

○此時金藤太が魂魄宗玄が胸間に分入り、此後彼柴船の名香をしるしにして折琴姫にめぐり


荊司太郎
折琴姫



を拔きつれて前司太郎に切りつくる。太郎は曾て劍術の達人にてしかも早業なれば、四人を相手に少しもひるまず、勢猛くぞ戰ひける。かゝる折しも疾風颯と吹きて、木々の梢の花を散し、この下風は寒からで、空に知られぬ雪卷風、落花の波を蹴立てつゝ、飛鳥の如くにはたらきて、陰にかこめば陽にひらき、益勢猛かりければ、三人の從者は數ヶ所手を負ひ、敵しがたくや思ひけん、いちあし出して逃行きぬ。金藤太も手を負ひぬれども、原來猪武者なれば、おのれ一人踏留りて、命限に戰ひけるが、前司太郎がいらつて切込む刀の光、電光石火と閃々きつゝ、血煙ぱつと飛散りて、地上に撲的倒れたり。前司太郎は姬のゆくさき氣遣しく、急ぎとゞめの刀を刺して、死骸を蹴込む細谷川、姬の行く跡したひつゝ、飛ぶが如くに馳行きぬ。爰に又此書の前帙第一回に出でたる囘國の修行者、飾磨の曾根松は其後剃髮して、法名を宗玄といひ、山城國北岩倉に寂寞の庵を結びて住み、道心堅固に行ひけるが、鐘建立の志願を起し、洛中洛外をはじめ近國を勸化し、頃日は當國に來り、此日吉野山にのぼり、歩みつかれて中院谷の辻堂の柱によりて眠居たるに、細谷川に蹴落されたる金藤太が死骸、此邊まで流來り、怪しい哉其死骸の胸のあたりより、炎々たる一塊の心火飛出でて、かの宗玄が懷に入ると見えて消失せぬ。時に折琴姬は侍女等に扶けられて、此所まで逃來りけるに、金藤太

の折しも、深編笠の下に懐紙の覆面して、袴のくゝりを高く引あげ、角鍔の長き刀を關木にはきこらし、紙緒の藺金剛を穿きたる武士一人扇をひらきて胸にあて、此幕の裏をうかゞふと見えしが、やがて從者と見えし侍三人、みな高股立なるが幕を引破りて飛入り、樏子、提盒琴三絃のたぐひを踏碎きければ、こは狼藉よ曲者よと立騒ぎ、みな〳〵姫を圍ひて守護しけるに、かの深編笠の武士背後より飛入りて、侍女どもを踏倒し、姫を小脇に搏挾みて、一散に馳せ行きぬ。此時前司太郎は姫の布施物をおくる使して、吉水院に去きけるが、はるかに此體を見て大に驚き、岩の陰道踏鳴して、韋駄天走に馳來り、彼曲者の腕くびをとらへ、且姫をとりかへして背後にかこひ、汝何等の奴なれば、かゝる大膽のふるまひを爲すぞと罵る所へ、侍女どもも跡をしたひて追來りければ、前司太郎姫を渡し、疾く〳〵守護して御歸館を急ぐべしといふにぞ、侍女どもこゝろえ候とて乘物も間にあはねば、姫の手を取りてたすけ參らせ、こけつ轉びつ逃去きぬ。曲者は跡を追はんと馳出すを、前司太郎立塞がりて追戻せば曲者は怒をなし、編笠をかなぐり捨てゝ、刀をすらりと拔放し、頬額二つと斬りつけたり。前司太郎も拔合せて、丁々しとゝ切りむすぶ。此曲者は乃ち是金藤太國景なり。前司太郎はこれを見知らざれば、何者といふ事を知らざりけり。かゝる所へ彼從者と見えし三人の侍馳來り、個々刀

虻を嚙殺して去る、天皇歌を詠じて蜻蛉を稱美し給ふ。ゆゑに此所を秋津野と名づけ、或は蜻蛉の小野と申すなり。されば爲家卿も、

しられしを霞にこめてかげろふの小野の若草下萌ゆるとも

と詠み給へるなり。かなたに見ゆるは三船山、こなたに流るゝは菜摘川、吉野の川のよしや世の中と詠みし妹背山は、かしこなる宮瀧の西に見ゆる山にて候。清見原の天皇は、國栖人の船にかくし參らせ、後醍醐帝は吉水院を皇居に定給ふ。こゝは村上彥四郎が痛腹の所に候。かしこは佐藤忠信が空腹の地にて候。勝手の寳藏には靜が舞の装束を納め、子守の拜殿の歌仙は、定家卿の眞跡に候なんどいひて、西行法師の苔清水のあたりまで其いはれを物語りつゝ導きければ、折琴姬をはじめつき從ふ侍女女童に至るまで、山路の草臥を忘れて轉興に入り、ゆき巡りて七曲の坂を過ぎ、千本櫻の木の間に幕打廻し、毛氈繪席を敷連ねて姬を錦の裀に居らしめ、樏子提げ盒偏提など取並べて酒宴を催し、淺く酌み强ひてすゝめ、侍女等の琴三絃、盲目法師の一節截、女童の小舞、碁盤人形の海道下などに興をそへて、姬を慰めまゐらすれば、幕の外に野風爐をあふぐ僕、樽を枕の奴どもまで現心もなく、酒機嫌の腕押に、力乞の不動を祈り、とく〳〵の清水をむすびて醉を醒し、涎と共につくり髭を流しぬ。かゝる入興

來慮の淺き者なれば、はや手に取りしごとくに思ひ、よき折もがなと待居たり。比しも二月の半なれど、今年は暖氣にして、吉野山の櫻例よりも早く咲きて、今を盛なるよし聞えければ、折琴姫多門之助に向ひ、妾當家に嫁してはや四年あまり當國に住みながら、いまだ吉野山の名花を見ざること殘念に候とて、花見に參でたき由をねがひけるに、多門之助是を許して俄に其支度をなさしめ、前司太郎一存といふ忠臣無二の若者を守役に從はしむ。其外侍女女童、婢女奴僕などあまた召連れ、今日をはれと粧ひざゝめき立ちて詣でけるが、清和の天氣に催されて、春草蒼々として野外の景もたゞならねば、行路の憂を忘れ、氣もうき立ち心もいさみて程なく吉野山に著きぬ。名におへる山の櫻今を盛に咲きみちて、風も通さぬ風情えもいはれず、左右の山々前後の谷々、唯雲の裏をのぼり雲の裏をくだるが如し。麓は早く奥はおそし。開落山の淺深によれども、いづれか花の盛ならざる所もなし。折琴姫は乘物を出で歩行にて上りけるが、歩みなれざる玉ぼこの、道も所々の好景に目醒むる心地して歩もかろげなり。前司太郎は前に立ちて、名所古跡の案内しつゝ慰めまゐらす。太郎指さして曰く、此川なん慈鎭和尚の花に音すると詠みじ吉野川にて、紀の國紀の川に續き候。此あたりを秋津野と申すいはれは、昔雄畧天皇此野に御狩の時、一つの虻飛來りて天皇の臂を吮む。時に蜻蛉飛來りて

く是先の年鳥部野に會合せし、蜘手の方以下の悪靈どもの所爲なること疑なし。又月若丸は佐々木多門之助照滿と名告り、父桂之助歿後に家を續ぎ、妻をむかへ、今は年已に三十餘歳にいたりけり。妻女の名を折琴姫といひ、年はいまだ十九歳、其容貌美艶しく、唐土の楊氏虞氏王氏の類は知らず、一乾坤に又あるべしとも覺えず。臉は三月の花に嬌び、眉は初春の嫩柳を拂ひ、肌は瑤臺の月を妬み、髪は楚岫の雲を籠む、誠に是たぐひ稀なる美人なり。此頃伊勢國に雉川大領國貫といふ人あり。かねて佐々木の家を亡し、其領地をうばはんと思ふ企ありけれども、執權名古屋山三郎、多門之助を輔佐してよく家を治め、武備嚴重なれば、容易に手を出しがたく、唯時節を待ちて居たりけるが、國貫の一子金藤太國景といふ者、春日詣の折から、かの折琴姫を見そめ、戀慕の闇に迷ひて朝夕の飲食をさへ咽を通さず、明けても暮れても目の前に、姫の姿まぼろしの如くに見えて、執念深く思ひこみしが、つら〳〵思ひけるは、かれは多門之助といふ主ある身なれば、たとへ人づてを求め我切なる心をいひおくるとも、承引かざるは必定なり。昔高階師直鹽冶が妻を眷戀せし想の苦さも斯くこそありつらめ、斯くて戀死なんは口惜しきことなり。父大領兼て佐々木の家を亡すべき企あるこそ幸なれ。折をうかゞひかの姫を奪取り、父をすゝめて多門之助を打亡し、姫を我妻にすべしと、元

ち一丈あまりの大地藏となり、忠知を目がけて飛かゝらんず勢なり。供人どもはこれを見て、皆氣を失ひて倒れたり。忠知は之をはたとにらみ、汝は何等の妖怪なるぞ。速に正體をあらはせと罵りければ、地藏からくと打笑ひ、我頃日毎夜此往來に出でて人を取ることを汝知らずや。今宵はいまだ食をもとめず飢にしのびざれば、汝を食に當てんと思ふなりと呼りつゝ、大口あいて眼を怒らし、大手をひろげて近附きよれば、忠知は馬上に長刀をおつとり伸べてはつしと斬るに、地藏は一聲叫びて地に倒れ、何にかあらん黒き物飛去ると見えしが、やがて雨はやみにけり。供人どもはやうく人心地出で來て起上りければ、忠知彼等に命じて松明を取來らせ、倒れたる地藏を見るに、これ木佛にて、首ぎはに長刀の斬疵あり。長刀を見れば鮮血したゝりけり。忠知曰く、察する所これは妖怪の物、此地藏につきて人に災せしならめ。妖怪の本體を打とめざるこそ殘念なれとて、彼地藏をもとの如く堂中に据置かしめ、家路をさして歸りけり。堺皇子が上の首斬地藏といふは則ちこれなり。長刀の斬疵今にありとぞ。夫は扨おき爰に又、大和國佐々木判官貞國は、前編に記す如く、先だちて子息桂之助國知に家をゆづり、其身は薙髮して平郡の別館に隱居しけるが、十年ばかり前に身まかり、夫より續きて桂之助銀杏前夫婦も身まかりぬ。かく打續きて親子夫婦三人まで身まかりしは、全


堺七の庄皇子が
上の化地蔵を斬
首斬地蔵といふは是なり


賽銭

本朝醉菩提　巻之六

那伽犀那尊者　災禍從地涌出品第十一

かくて其年も過ぎてあくる年になりぬ。爰に白炭兵衛忠知は、前に攝州の縣司となり、京鴨河より攝州平野郷に移住みけるが、毎年五月二十八日は、住吉神田の神事ありて、堺乳守の遊女五人、薄衣の衣裳を著て花笠をかづき、神前に出でて祭式をつとむ。これを住吉御田の植女といふ。此日忠知神事供奉の役目によりて堺に立越え、神事をはりて歸る道、北の庄皇子が上といふ所を過ぎける時、急雨降りきにければ、急ずば濡れまじものをといへる歌の意を思ひ出でて、森の小蔭に馬をよせ、從者どもも爰に居らしめけるに、已に日は暮れて雨はしきりに降りまさり、供人どもも長柄の傘を忠知にさしかくれど、横しぶきの強きをふせぐ事あたはねば、忠知曰く、此雨急には止むべからず。人家ある方に行きて松明を取來れと命じけるにぞ、一人の從者かしこみ候とて行かんとせし折しも、恠哉傍の辻堂に安じたる地藏聲を發し、松明の火のぞみならば、我貸しあたふべしと言ひつゝ立出でて兩眼より炎を放ち、忽

夫禪傳直示の妙道は、意味深長にして凡慮のおよぶ所にあらず。碩德廣才の祖師すら、積雪に腰を埋、利刀に臂を斷のたぐひ種々の苦行をなして、方纔其道を得たり。況予が如き凡俗無智の輩焉ぞ有無の兩字を離て、畫松の音を聞ことを得べけんや。唯狂雲活佛の禪機に託し、善惡應報生死流轉の理を示し、兒女勸懲の一端となす而已。

文化五年戊辰冬月　　江戸　醒醒齋京傳識

抽牽者卽主人公　地水合成隨火風
一曲勾欄曲終後　本然大地忽爲空
一棚頭上現全身　或化王侯或庶民
忘却目前眞木橛　癡人喚作本來人
右詩偈二則狂雲集中之作
山東京山書

に數多の子を設け、兩家富昌えけるとなり。一休和尙扇屋へ婿入し給ひしと云傳ふるは非なり。實は此の如しと彼地の人の口碑に殘りぬ。

と斬結ぶ。其間に一休、店先に殘しありける、白張の提灯に火を點して外の方に出で、山伏の面先に提灯を差附給へば、悟助は山伏の顔を見て、汝は提婆仁三郎にあらずやといへば、偖は一休にては無く、野曝にて有りしかと打驚き、大膽不敵の仁三郎も、いつぞやの本事に懲り、敵し難くや思ひけん、逸足出して逃去く。悟助は跡を追はんとせしが、一休これを止め給ひ、彼も又自ら誅戮にあふ時あり。打捨てて率來よと宣ひつゝ、悟助に提灯持せて前に立て住吉を差して歸り給ひぬ。斯くて侘助は一休の教の如く、鹿野屋に行き、七十兩の金を償ひ、彼扇を證として茶入を乞取りて歸りければ、箕内は大に喜び、父子共に主君忠知の許に行き、茶入を奉りて歸參を願ひけるに、忠知は疾く一休の物語にて、彼等が忠孝の全き事を委しく聞居たれば、頓に歸參を免し、本知に加增し與へけるにぞ、箕内は舊の如く穗波垣右衛門と名告り、父子ともに益忠勤を勵みけり。忠知思ひけるは、彼茶入十八年を過ぎて斯く不思議に手に入りしは、全く侘助が孝行の德なりとて、是より彼茶入を侘助肩衝と名附けて、上なき寶とし、深く愛玩せしとかや。後に利久の祕藏となり、捨子の茶入といふ名物となりしはこれなりとぞ。塵右衛門は和州郡山の寺院に所緣あるにより、彼犬張子を其寺の境内に埋みて塚とす。郡山の犬塚とて今にあり。小田井は戎島に假家を立てて、百日の間茶を施しける、今於綱茶屋といふは其舊

田井は無常を觀じて涙を落し、尼にならん事を願ひければ、一休頭を振給ひ、汝年若くして剃髮せんは不可なり。其儘にて子孫をまうくるこそ孝行なれ。宿世の業を果さんとならば、汝自百日の間、往來の人に煎茶を施すに如じとて止め給ひ、彼小田井が薄の笄を香晒が書置に包みて犬張子の裏に納め、如是畜生發菩提心と宣ひつゝ、如意を以て犬張子を礑と打給へば、庭に蹲踞居たる飼犬、一聲鳴きて身を振ふと見えしが、かき消す樣に失せて、五つの心火空天に飛去りけり。皆々これを見て益す奇異の思ひをなすに、一休宣く、此犬張子は此儘埋みて塚となし、彼犬どもの菩提を弔ふべしと敎へ給ふ。塵右衞門夫婦口を等しうしていひけるは、我々夫婦父洞九郎が菩提の爲め、娘に替りて剃髮致度く候と願へば、一休其儀は望に任すべしとて、剃刀を把りて塵右衞門が頭髮を剃落し、香晒が髮を斬りて斬髮となし給ひ、塵右衞門が法名を休阿彌と給はり、香晒が法名を休市と給はりけり。是扇折剃髮して阿彌號をつき、其妻斬髮して市の字をつく始なりとぞ。扨一休は別を告げて出給へば、皆々拜禮して門送するに、一休何やらん悟助に耳打し給へば、悟助打點頭き、簷戸を潛りて眞先に出でけるに、前程の山伏軒下の闇き裏よりつと出でて、悟助が襟に掛けたる袈裟を探りて打點頭き、腰刀をすらりと拔いて只一打と斬附くる。悟助は早く身をかはし、彼朱太刀を拔放してはつしと受止め、丁々しと

汝養親に對して反哺の烏の孝行を賞じ、彼土器の價として遣すなりとて與へ給ふ。一休の烏扇とて、今に其形を傳ふるは是なり。又宣はく、更級肩衝の茶入は今當津目口町鹿野屋何某といふ者の所藏と成り、千金にも替へ難き寶とす。さりながら七十兩の元金を償ひ、此扇を證として我傳言を通じなば、彼速に茶入を與ふべし。汝等が主人忠知は今家を攝州に移して平野の里にあり。幸我親しき友なれば、歸參を取持ち遣すべしと宣へば、侘助親子の喜いふべうもあらず。一休又香晒に向ひ給ひ、汝が書置我手に入りし時、持歸りて何の心もなく、因果經の間に挾み置きしに、十八年過ぎて偶今朝見付け出せしも、我斯く汝等に因果を說くべき因緣ならめ、とて懷より彼書置を取出し給ひ、これも今は用なき物なればとて、太き筆に墨を含せて、彼書を廣げ、横樣に假名のしの字を長く引きて消給ひ、別に汝等に示す事あり。喩を以て示すべしとて、悟助が野曝の衣服の片袖を引ちぎり、小田井が頭に挿したる薄の笄を取りて、袖の衣紋の髑髏の眼中にさし、雛棚に飾れる犬張子を取しめて、其傍に置き、彼烏の扇を差翳し給ひ、汝等これを見よ。是乃ち化野の景狀なり。美人の譽高かりし小町が顏色、今何處にかある。白骨となりて朽ちぬれば、斯る髑髏のあなめ〳〵、小野とはいはじ薄生ふ、野邊の屍を食破る、煩惱の犬張子、唯殘れるは肉を爭ふ烏扇の骨のみなり。いかに〳〵と宣へば、別けて小

り。小田井は侘助は實の兄なりと聞き、なほ迷路の雲晴れて、心神朗になりにけり。此時しも野曝悟助彼朱太刀を打擔げ、案内を乞ひて此に來り、一休の前に手をつきて云く、仰に因りて大和國二上嶽に立越え、山人を雇ひ拙者簀に乘り候て、彼穴の中に繰下され、松明を照して見候に、洞九郎が遺骨と覺しく、こゝかしこに亂散り、朽葉埋れたる裏に革劑符ありて、百二十兩の金一兩も不足せず候故、洞九郎が遺骨は彼山中に埋め、劑符は卽ち携へ歸り候とて懷より取出して參らす。一休之を取り、垣右衛門に見せ給ふに、疑もなき蜀江錦の紋を置きたる唐革の劑符なり。十八年濕地に埋れありしと雖も、依然として朽ちざるは、狡兎革の奇特と知られたり。香晒は悟助が顔を熟視りて、御身は日外浪花にて、我々親子の難義を救ひ給はりし御人にはあらずやといへば、悟助は掌を磕と打ち、扨は此家の御親子にて候ひしか、と互に計らざる再會を嬉しみけり。一休は劑符の金を取出し、此中五十兩は茶入の價汝が手に戻るべき因緣の金なりとて、塵右衛門に渡し給ひ、殘る七十兩は垣右衛門汝が失ひし主人の金なれば、劑符と共に汝が手に歸すなりとて與へ給ひ、白地の扇を取寄せ筆硯を乞取り、扇の面に鳥の形を畫きて侘助に向ひ給ひ、前の日汝小田井とほと〳〵不義に及ばんとしたる時、我汝が土器を奪ひし故、時を失ひて不義に及ばず。是畜生道の擧動をさせまじき我方便なり。此扇は

婦を能くも救ひしよと我自ら喜びぬ。其後香晒安産しつるに、洞九郎が惡計にて、其孩兒を攝州合法が辻に捨てたり。又箕内が原の名は穂波垣右衛門と云ひつらん。汝白炭の忠知に仕へし時、主人の命を請けて七十兩の金を携へ、更級の茶入を買取らん爲、攝州に到り、誤りて其金を合法が辻に落し、捨子を拾ひて歸りつらん。其子は則ち此侘助にて、塵右衛門夫婦の中に出生の子なり。然れば小田井が爲には同腹の兄なり。洞九郎は孫を捨てて歸る時、垣右衛門が落したる七十兩の金を拾ひ、家に歸る途中二上嶽の窟峠にて、胸毛黑平に出逢ひ、黑平を殺して五十兩の金を取り、手負熊に逢ふ。其熊に犬の怨魂乘移りて、洞九郎を岩穴に落入れ、洞九郎百二十兩の金を首に懸けながら、餓ゑて穴の裏に狂死をなしたり。見よ〱洞九郎は金を拾ふと雖も孫を捨てたる不仁貪欲の惡報によりて、生ながら餓鬼道の苦を受けて死し、垣右衛門は金を失ふと雖も、子を拾ひし慈悲、日來忠義老實の善報により、貧しけれども其子孝心深くして、老後の樂しさ富人にも遙に勝れり。天に私なく善惡の報細かなる事此の如し、と詳に示し給へば、各是を聞き、都て身に覺ある事なれば、偖は〱といひて互に打驚き、一休は聖者の再來にて六神通を得給ふと兼て聞及びしに違はず、と感嘆轉止まざりけり。別て塵右衛門夫婦侘助は親子不思議の再會を喜び、一休の大恩を謝し、垣右衛門夫婦の養育の恩を謝しにけ

相伴ひ、婿入舅入を一度に略して入來り、座敷に通りけるが、佗助一休を熟見て、汝は前の日我土器を盗みし賊僧にあらずやといひて、氣色を變へければ、塵右衛門これを聞き、疎忽なる事をいふな、不禮すべからず。是は一休禪師にて在すぞといふに、佗助はなは不審氣にて、一休の顏を只管打視りぬ。時に塵右衛門、小田井が口走りつる始終を委しく語り、一休の教化によりて怨魂立去り、小田井が病頓に平癒したる由を語りければ、佗助親子これを聞きて、且驚き且喜び、一休の道德を感嘆す。一休衆人に對ひて宣はく、我汝等が因緣を詳に說聞すべければ能々聞くべし、とて衣の袖をかき合せて宣はく、塵右衛門十八年以前詫厤彦惣といひ、大和國二上嶽の麓に住みし時、舅洞九郎が急難を救はん爲に、妻香晒に命じて更級肩衝の茶入を賣りに遣し、香晒其價の金を途中にて奪はる。其盗人は胸毛黑平と云ふ者なり。是に因りて香晒、我身を賣りて、父を救はんと思ひ、已に胎内の兒を墮せんとしたる折節、金は僅に五十兩、金ゆゑ我子を殺すかと、獨言しつるを聞きて不便に思ひ、持合せたる五十兩の金を與へて救ひし、門說經の修行者は則ち此一休なり。我其比は山城國岩倉山の麓にあり、檀越の布施物多き時は、貧人を救はん爲に金を懐にし、門說經に姿を扮して、近國他鄕を徘徊せり。其時一陣の風一通の書を吹落して我前にあり。拾取りて見しに、是香晒が書置にて、其孝心深き事を委しく知り、斯る孝

さず兩人共に取殺し、畜生道に落さばやと思ひ候といふ。一休袈裟をゆり上げつゝ近く進みて宣はく、汝等洞九郎を恨むは宜ともいふけれど、科なき此娘に祟るは理にあらず。流石は畜生の愚痴なる心なり。狗子佛性の有無を滅却して本來空に至らば、仇も恨も有るべからずと宣ひ、又一越聲をあげて、

擊狗又擊香卓。狗有情卽去。香卓無情自住。情與無情如何。作麽生如何。

有無ぞしる何おもふべき趙州もなかりしさきの犬の一聲

と宣ひて、一喝し給ひければ、小田井蹶上り、あな尊や拔苦の道を得たり。今は此娘の胸間を出去るべしと、云終りて倒伏しけるが、暫時ありて又起上り、惘然として夢の醒めたる如く、一陣の涼風雲霧を吹拂ひ、一輪の明月暉出でたる心地して、病忽ち平癒し、常の如くになりければ、塵右衛門夫婦小田井も倶に一休を拜して、喜ぶ事限なし。

羅怙羅尊者處女授記品第十

其折しも又むこがねの在しつると告ぐる、程なく侘助麻裃を著し、父箕內夫婦も禮服を著て

り一つの金箱出でたり。これは我貯の金なり。偖は前程小座敷に居らしめし間に、盗出せしならめといひて、内倉に走行きて見るに、金戸を打開きて貯の金なかりければ、立歸りて益一休の神通を感じけり。一休山伏と法力を比べて、犬の吠るを止給ひしと世に云傳ふるは此事とぞ。斯くて一休小田井を引起し給ひ、汝等此娘を惱す謂を速にいへ。さもあらば惡趣の苦患を救ひて成佛せさすべしと宣ひけるに、小田井は足手を縮めて戰き、五體に汗を流しつゝ口走りていひけるは、活佛の御尋に預り、何をか包み候べき。これは此娘の祖父山蛭の洞九郎が爲に殺されたる、五疋の犬の怨念にて候。我々洞九郎が狩犬となり、彼が活業を助け候に、恩を以て仇とし、河原に於て石小詰となし、酷く殺し候により、其恨を報はん爲め、二上嶽の山中にて、手負熊に乘移り、彼を岩穴に落し入れて餓死させ、畜生道に誘ひて、今已に我輩と等しく、苦患を受けしめ候へども、なほ未だ恨晴れず、子孫に祟りて共に畜生道に落さんと思ひ候へ共、彼が娘これなる香晒は、孝心深き者故に取附く事能はず。此孫娘の辨なきに取附き、同腹の兄なる侘助を戀慕せて不義をなさしめ、此世から畜生の擧動をなさしむべしと、分身して手飼の犬となり、不義の媒して侘助が心を惑はさんと致し候へ共、彼も又孝子なる故、容易に承引かざるを、兎角して漸々今宵婚姻の盃を致さす迄に仕課せ、夫婦固の盃濟みなば三日を過

で暫時祈りけれども、唯己が身に汗水の流るゝのみにて、少しの驗もなし。一休これを見給ひ、汝が修法は夫のみなるか。いで我法力の奇特を見すべし、其處除けと宣ひつゝ、袖の裏より一摶の燒飯を取出し給ひ、これを病人の目前に出して、ころ〳〵ころ〳〵と宣ひければ、小田井は勃と起直り、燒飯を見てくん〳〵といひて犬の身振をなし、身より煙出で、あな熱や堪難やと叫びて苦みけり。一休香晒に命じて、小田井が上著の兩肌を脱しめ給ふに、怪しい哉肌著の白無垢熱氣に焦げて、處々黒く色附き、恰も斑文犬の毛色の如し。一休折敷の上に彼燒飯を置きて與へ給ふに、つや〳〵物も食はざる小田井是を見て嬉しげに口を附けて食ふ體、餓ゑたる犬に異なる事なく、食終りて又元の如くに臥して、快よげにすや〳〵と睡りけり。一休山伏に向ひ、いかに我法力を見つるか。汝知らずや我は是一休なりと宣ひければ、山伏は一休といふ名を聞くと等しく大に驚きたる體にて、物をもいはず遽しく走出でて、裏口より逃去りけり。塵右衛門は一休の奇特を感じ、偖云く、彼山伏深く恥ぢけるにや、周章てて爰に笈を忘去き候。呼戻してこれをば返し遣すべし、といひつゝ立上るを、一休暫しと止め給ひ、笈を返すに及ばず。彼は原大盜賊なり。故に彼が今の祈、都て修驗の法に叶はず。此家に病人ある事を知り、作山伏となりて賊せん爲に來つるなり。其笈を開き見よと宣ふにぞ、塵右衛門笈を開きけるに、裏よ

の病を救遣さん爲に來つるなり。我を誰とか思ふ、我は是住吉牀菜庵の一休なりと宣へば、塵右衛門夫婦は大に驚き頭を疊に附けて敬ひ、塵右衛門、某眼ありながら活佛の來迎を知らず、不禮申せし事は偏に免し給はれかし、といひて詫びにけり。時に一休輿添の者等に對ひて宣はく、墓守の霜四郎、衣屋の針兵衛、繪佛師の箔七、抹香賣の香助、石塔屋の石六、何れも大儀至極なり。最早用なし歸られよ。其駕籠は損料の借物なれば、損ねぬ樣に舁げ行き、我庵室に入置き呉れられよと宣へば、此者等は暇申して歸りけり。偖塵右衛門に向ひ、娘の病床へ案内せよと宣へば、香晒云く、先刻熊野參の山伏在して、今祈禱に懸らるゝ處なれば、暫時御待ち下されかしといふ。一休これを聞給ひ、其山伏も不審しき奴なり。何にもあれ疾く案内せよと宣ふにぞ、詮方なく病床に導き申して、夫婦は其傍に居たりけり。此時彼山伏は祈禱を始めんとして、病人に對ひ居たりけるが、一休を顧みて、汝は何の爲に來るやといふ。一休宣はく、我は此病人を祈治さん爲に來れり。山伏嘲笑ひて云く、見れば乞食に等しき僧なるが、汝何許の奇特ありて此妖病を治すべきや。片腹痛き事なりといふ。一休宣はく、然らば汝と我と法力を比ぶべし。山伏云く、そは面白き事なり。いで〳〵且我効驗を見すべしとて、衣の袖を巻上げ、大最多角の赤木の念珠をさらり〳〵と押揉みて、一に矜羯羅二に制吒迦を始めて、揉みに揉う

偖暫時ありて、前走の者、婚がねの來り給ふと知すれば、塵右衛門夫婦あわて惑ひ、これは約束の刻限より二時許も早き事よと思ひつゝ出迎ひ、程なく婚の來るを見るに、片木の覆したる白張の高提灯を、二張ともして前に持せ、無常駕籠と覺しく、此所彼所兀破れ、塵ばみて穢げなる駕籠に乗り、輿添の者四五人下袴をはき、白張の手提灯を點して附添ひ來る。塵右衛門夫婦此體を見て、こは狂じたる出立哉。病人の嫁に對して忌しき擧動なりと氣に懸くるに、已に乗物を店先に舁上げさせ、戸を押開けて出づる者を見れば、婚侘助にはあらず、麻裃に引替へて、麻衣に鈍色の袈裟を掛けたる痩法師なれば、塵右衛門夫婦は、こはそも如何にと唯惘れて、暫詞もなし。やゝありて塵右衛門袖捲して彼法師をはつたと白眼み、汝斯く忌しき葬禮の出立をなし、婚と僞りて來れるは、必定今宵の婚姻を妨げん爲成るべし。婚に遺恨ある者か、但又我に恨ある者に頼まれて來つるか、明に其故をいへ。我今こそ町人なれ、原は兩刀も帶びたる者なるぞ。事によりては汝は勿論從ひ來つる者迄も生けては歸さじ、と臂を押張りて白眼廻しつゝ罵りければ、彼法師呵々と打笑ひ、汝は此葬禮の出立を忌しといへども、今宵の婚姻滯りなく整へば、娘は素より婿までも、三日を待たず一命を失ひ、斯くの如き無常駕籠に乗せて野邊に送るは眼前なり。故に未だ婚入なく、婚姻の盃をせざる中に其因果を説聞せ、娘

られよと荒かにいふ。山伏はこれを耳にも入れず、頭を擡げて只管家の裏を差覗く。塵右衛門不審み、未だ去かずやといへば、山伏色を變へて、我此家を窺ふは、家を相せんが爲なり。此家には必ず病人あるならん。家内に妖氣充ちて物怪の祟あり。今四五日過ぎなば病人の命必ず終るべし。我一祈せば立地に癒ゆべけれど、信心薄きには施し難し、憐むべき事なりと、嘆息して行かんとす。塵右衛門これを聞きて走出で、袖を取りて引止め、恭しく禮をなして云く、さばかり尊き御房と知らず、不禮申せしは偏に許し給へ。今宣ひしに違はず、我家に病人あり。則ち娘にて候。これを救ふべき術の侍らば、哀れ祈りてたばせ給はらんやといふ。山伏云く、人を救ふは我輩の好む處なれば、信心さへ深くば救ひ取らすべし、とて草鞋を脱ぎて打通れば、塵右衛門妻香晒にも此事を語りて、山伏を病床に導きけるに、山伏暫時小田井が面を相して云く、果して是常の病にあらず、物怪の祟なり。今は俗にいふ王莽時にて、陽極りて陰起るの時なれば、修法に惡しき時なり。今一時を過して祈禱に掛るべし。見れば家内取込の樣子なり。夫迄靜なる一間に案内せられよといふにぞ、内倉の傍なる小座敷に伴ひ、茶を進ばせ菓子を進めなどすれば、山伏は端坐し、必ず心を費し候な。もし用あらば呼ぶべしといふにぞ、塵右衛門然らば許し給はれといひて退き出で、又婚姻の設に取懸りけるに、此時日は全く暮れにけり。

び、急ぎ此事を小田井に云聞せ、病中ながら婚姻の盃許もさせなば、自から病本復のよすがともなるべしと思ひ、しるしを取交し、吉日を撰びて、婚入の日を定めぬ。

畜生勸發品第九　半諸迦尊者

此時しも九月の初なり。此頃は後の雛とて、九月九日にも祭る事流例なりければ、小田井が病床の傍邊に、氣を慰の雛祭、雛の道具を其儘に嬪の支度とざゝめきて、已に婚入の日にもなりければ、母香晒は病床に到り、病人ながら小田井が髪を取揚げて、櫛笄を差飾せ肌に祝儀の白無垢も、疾々病怠りて、痩せたる顔の色なほしめでたう床揚せよかしと、親の心に祝酒、肴は箇様吸物は、斯くと獻立書附けて、處に名ある前の魚、味もよし野の櫻鯛、紅葉豆腐を取交ぜて、塵右衛門庖厨の者に命じければ、召仕の男女等割刻して家内自ら勇みけり。さらぬだに忙はしき黄昏時、一人の山伏柿の衣に笈を掛け、頭襟眉半に責めて、太刀を前低に佩きこらし、金剛杖を突鳴して門に立ち、聲を高かに揚げて、是は熊野三重の瀧に七日うたれ、那智に百日籠りて三十三所の巡禮の爲に罷り通る修驗者なり。掌の裏の施あれといひて螺を吹鳴す。塵右衛門は袴著て、足打に長蚫昆布を盛乍これを見て、あな心なき御房や。家内に取込あるに、疾々通

はれかしといふ。塵右衛門これを聞き、月老の紅絲を結び給ふ上は詮術なし、とて心を決し、媒人を頼みければ、媒人侘助が許に行きて其事を談じけるに、侘助云く、僕が如き貧人を富家の婿になし給はらんとは、上なく喜しき事に候へ共、老いたる双親を養ひ候身にし侍れば、他家を續ぎ候事は心に任せ難しと、孝心深き者なれば、我身の幸を好まず、父母の事をのみ思ひて承引かざれば、媒人は理に伏して孝心を感じ、強にいはず立歸りて、塵右衛門夫婦に箇樣々々と語りけるに、塵右衛門これを聞き、そは殊勝なる心ざしなり。孝子と聞きて殊更に好しく思ひ候。然らは彼が兩親は此方より一生安樂に養ひて隱居させ置き、彼等二人が中に出生の子あらば、實家の名跡を繼すべき證文を遣すべし。是にて得心致す樣に、今一度御懸合ひ下されかしといふにぞ、媒人は再び侘助が許に行き、箇樣々々と談じけるが、兎角侘助は承引かず。父箕内傍に出でて侘助に向ひて云く、豫て備に語る如く、我宿望あれども遂げずして斯く老朽ちぬれば、とても原の武士に返るべき時はあるべからず。殊に塵右衛門殿、さばかり厚き志を運び給ふを、無足にせんも如何なれば、此度の緣を定むるに如じといふに、母もこれを勸めぬ。侘助是を聞き兩親の意に適ひ、然るべき事と思し候はゞ、否むべきにあらずとて、得心の由を聞えければ、媒人立歸りて扇屋に行き、仕濟し來れり箇樣々々といふにぞ、塵右衛門夫婦斜ならず喜

塵右衛門は不審み、若き女の獨出歩くは善からぬ事なり。此後斯る事なせそと呵りつゝ、具して歸るに、犬も後につきて歸りぬ。侘助は遂に賊僧に追附かず空しく家に歸り、前程小田井に答へたる詞を夢の裏の樣に覺え、危く不義に及ばんとせし事を深く恥思ひけるに、此時父母も歸りければ、土器を奪はれし事を語り、薄き本錢を打入れたる商物を失ひ、翌日よりはいかにして活計すべきと、親子三人頭を集めて愁ひけり。偖小田井が母香晒は、小田井の忍出でし跡にて、彼書を拾ひて披き見つるに、艶書なれば、こはうたてき事よと思ひ居たる處に、塵右衛門小田井を具して歸り、妻を傍に招き、云々の所に居たるを連れて歸りしといへば、妻は彼書を見せて、箇樣々々と呟くにぞ、塵右衛門扨は彼土器賣を戀ふるに疑なし。彼は挑賣する貧しき者なれば、似合しき緣ならず。兎角これを制すべしと夫婦語合ひて、此後は目も放さざれば、小田井は書を通はする事だにならず、信太の森の楠の、千枝に別るゝ物思ひ、涙に交るちぬの海に、濡る袖だに干し敢ず、遂に病を引出して、始は唯苟且の樣に臥しけるが、漸病みまさりて、樣々醫療を盡しけれど其驗も見えざれば、父母の歎いふべうもあらず。香晒密に塵右衛門に向ひて云く、娘が戀病に惱むも、妾若かりし時戀故に主人の目を掠めたる其報と、恐しう思ひはべるぞかし。最愛と思ふ兒の命には替難ければ、假令貧しき者にもせよ彼を婿にし、娘の命を救ひ給

これを承引かず、かへつて異見を加へけるにぞ、押返していふべき言葉もなく、唯泪を落しつゝ、女子の口より斯る恥しき事を云出ではべるは、始より覺悟の上に候といひつゝ、懐より剃刀を取出して、ほと〳〵危く見えけるにぞ、侘助はこは短氣なる擧動哉といひつゝ、あわて惑ひて押止めけるが、庭に蹲踞り居たる彼犬、二聲三聲なくと等しく、怪しいかな侘助は惘然として現心もなくなり、日來正しき行も亂れ、鐵石の心忽鑠けて、愛憐の情頻に起り、今の擧動にて切なる心は見えつ、我身とても木石にはあらず。さばかり厚き志をなどて空しうなすべきぞ。此方へ在せといひつゝ手を取れば、小田井は甦生りたる心地して嬉しさ限りなく、今更顏に紅葉を散しつゝ心頭突々と跳り、一間の中に誘はれて行かんとしたる折しも、墨染の破れたる衣を著たる、貧しげなる僧、門首に佇み、頭を擡げて只管裏の方を窺ふと見えしが、頓て端近く置きつる土器の擔を奪はんとす。侘助はこれを見て小田井が手を放し、やをれ賊僧それは我命をつなぐ賣物なり。形に似合はぬ膽太き奴哉、と呼はる中に、早彼僧これを奪ひて走去けば、侘助は有合ふ棒を取り、盗人よ賊僧よと呼はりつゝ追行きけり。小田井は獨跡に殘り、門首に出でつ入りつして氣遣ひ居けるに、父塵右衛門他所より歸がけに、此家の前を過りて小田井を見つけ、汝は何故爰に來しぞといへば、小田井は驚き、何と答ふべき詞さへなくて差俯伏きぬ。

初めて、斯く惱みはべるなど、切なる心の丈を細々と書きて、奧の方に、
　あしざまにとり落しつる土器のわれて碎けてものおもふかな
と書きたる筆も拙からず。偖は彼者我に贈れる艶書なり。中々に開封したる口惜さよ。父母のゆるさぬ不義徒ら、書見しばかりも道ならずと、豫て行正しき者なれば、大にこれを恥思ひて、手早く筒に納め、犬の頸に結附けて追遣りけるに、犬は本意なげにて歸りけり。小田井は待侘びて居たる所に、犬歸り來にければ、如何にや如何に返書取りて來つるかと、筒を取りて見るに、我書なれば大に愁ひ、此書開封してあるを見れば、彼人の見給ひしには疑なし。返しだに給はらぬは心強き人哉と、或は恨み或は悲み、是より思益深くなりて、此夜も泣明し次の日に到りて熟思ひけるは、此上は外に詮術もなし。彼人の許に行き打つけに心の丈を告聞えて、若得心なき時はいかにもなり果つべしと、娘心の一筋に思詰めて、又彼犬に向ひ、汝我を不便と思はば、戀人の許に導き行けかしといへば、犬は尾を搖りて前に出でんとす。折節父塵右衛門は家にあらず、母の目を忍びて密に身支度し、庭口より出でて犬に導かれつゝ、侘助が家にぞ行きける。此時侘助が父母は番蕉寺に詣でて家に居らず。侘助獨留守を守りて居たるに、小田井は已に此に來りて侘助に逢ひ、恥しさも他にして種々に搔口說きけるが、侘助は

侘助が事を思ひ續けて居たる折しも、彼犬庭にありて尾を搖るを、小田井見遣りて、汝は我心を知るまじ。我は頃日物思ありて暫しも忘るゝ事能はず。汝若心あらば我切なる志を戀人に通はせ呉れかしと、人にものいふ如くいひけるに、犬近く進みて、尾を搖り聲をなして其詞を聞入れたる樣なれば、小田井又云く、豫て父上の物語に聞きつるに、唐土の書に、陸機とかいふ人の飼ひける黃耳といふ犬、書簡を古郷に屆けたる例もありける由、其犬程にはあらずとも、汝我書を戀人に屆け呉れべきやといひけるに、犬又聲をなして應ふるが如し。是に因りて小田井硯箱を取出し、心のたけを書に記し、これを竹筒に入れて犬の頸に結附け、疾く返書を取來よといふに、犬は身振して頓に走去きければ、扨は聞屆けつるよと嬉しみつゝ、其歸るを待居たり。偖犬は直に侘助が家を臨みて馳行きけるに、折しも侘助は土器の擔をかたげて歸り、門首にて彼犬に會ひぬ。犬は侘助が袵を咥へて引き、聲をなしけるにぞ、何するやらんと不審りつゝ、能々見れば、頸に竹筒を結附けたり。何の心もなく取りて見るに、裏に書簡樣の物ありければ、是容易に見べき物ならずと、舊の如くにして裏に入らんとせしに、犬又袵を咥へて引止む。怪むべきは此犬侘助を止むると等しく、侘助彼書を見んと思ふ心起り、再び筒を取上げて書を披き見るに、其文に、妾は甲斐町の扇折の娘小田井と申す者に候。君いつぞや物賣に在せしを見

此上の樂しき事あるべからずと、平日に自慢しけるとかや。住荒したる茅の軒、垣も疎な篁蔭に、醫師竹齋傳方御藥杉齒木といふ看板を掛け、夫婦齒木をけづりて細き煙を立て、侘助は土器の荷ひ賣して、薄き本錢の活業も、淸き心は照る月の、赤土器に破もなく、まどかに世をぞ經たりける。玆に又堺甲斐町中濱の扇屋塵右衛門が娘小田井は、眉目容貌美麗しく、年も十五の初花なれば、人每に戀慕ひ、嬪にとらめと望むもあり、婿にならめと望むもあり。門に絶えざる媒妁の枚は、立ちながら朽つる錦木に等しけれど、塵右衛門夫婦娘を寵愛の餘り、婿選して承引かざれば、未だ定る緣もなく打過ぎけるが、一日彼侘助土器の擔をかたげて此邊を賣歩き、塵右衛門が家に呼入れられて土器を賣りけるが、此時小田井扇を折りて店に居合せ、偶侘助を顧みけるに、挑賣する者には似氣もなき風流士なれば、世にはかゝる美男も有りけるよと、あからめもせず見とれつゝ、忽ち心迷ひ魂身をあくがれ出でて、暫し前後も覺えざりけり。此日より戀の重擔を負初めて、胸を焦しけれど、彼が住家も知らず、誰媒妁に賴みていひ寄るべき便もなく、唯心一つに惱みけり。兼て此家に斑毛の飼犬あり、小田井に能く馴れて行く先々の跡を慕ひ、萬の事心に從ひければ、小田井も深く憐みけり。一日小田井椽先に出でて空を眺め、

らん。最早用なき此遺骨、原の天上に返すべしとて、野曝に命じ柴を集めて荼毘させ給ふに、煙の中より七つの星顯れ、光明赫燓として空天に飛去りけり。偖其灰を埋めて一つの塚となしぬ。今八木郷久米田寺の境内にある女郎塚といふは是なりとぞ。此地獄が事觀音救世の悲願に、金砂灘頭の鎖子骨となりし遊女の昔語に能く似たり。

成博迦尊者　父母安樂行品第八

孝は百行の始とて、一切の善行の中に孝行より前に立つ物はなし。孝天に至る時は風雨ともに順ひ、孝地に至る時は萬物化盛す。孝人に至る時は衆福臻るとて、孝の徳によりては五日の風枝を鳴さず、十日の雨塊を動さず、草木能く花咲き實り、五穀豐饒にして家富み國昌ふる事明けし。凡孝の一字は百日千夜にも中々説盡す事能はざるべし。爰に泉州堺に程近き湊村といふ處に、箕内といふ武士の浪人ありけり。頭に消えぬ霜を頂き、額に皺の波を堪へ、弓箭は疾くに捨てたれど腰は弓程屈りて、七十に近く老いぬれども、二君に仕へぬ貧家の住居、妻は六十歳のとも白髮、夫婦揃ひし正直に、神の惠や深かりけん、世間に稀なる孝子を持ち、其名を侘助といひ、勝れたる美男にて、年は未だ十八歳、若年なれども萬に賢く、朝夕父母に事へて孝

そろしき姿となる。平日に調べし爪音も、唯松風と虫の音に殘れるのみなり。處々の肉も切れ、腹も破れて五臓六腑邊に亂る。又後は肋の骨を現し、肉も腐流れて白蛆となり、青蠅集ひて邊に滿ち、臭氣盛に人を穢す。日を經て臭氣も薄くなり、骨に殘る肉も乾き、蛆も此處彼處に這散りて、蠅も飛失せ、亂れたる髪は風に散りて處々の草の根にまつはりぬ。程なく四十九日も近くなるに、男女の界もなく、雨に注ぎ日に曝して、今は臭香もなく、たゞ殘れる物は一重の帷子のみ、遂に一具の白骨となりて、葎に横りぬ。淺ましなどもいふべからず。かねて彼を戀慕ひつる少年等、せめて香華を手向けて、其靈を祭らばやと爰に來り、此光景を見て驚き悟り、執著の心を轉し、色欲の念を斷つ者多かりけり。四十九日に當れる日、一休和尚、野曝悟助幷に珠名の長夫婦を具して、此所に來り給ひ、地獄が白骨を引起して見せ給ふに、骨々のつがひ鎖の如くに續きて全き一具の骸骨なり。皆これを見て奇異の思をなすに、一休宣はく、これを鎖子骨となづく、是凡人にあらざるの證なり。彼は乃ち北方女宿婺女星の化する所なり、權に人間に降りて美女に生れ色を賣りてあまたの人に親み、死して爛穢の姿を見せ、九相の變ずる理を示す。是色欲に耽る者をして驚悟させんが爲なり。已に彼が爛穢の姿を見て婬樂のはかなき事を悟り、行跡を改めし者數多ありと聞く。なほ此事を後世に傳へなば能き誡な

我死なば燒くな埋むな野にすてて瘦せたる犬の腹をこやせよ

一休これを聞給ひ、我思ひし所果して然り。彼は檀林皇后遺命して其屍を西郊に棄てしめたるを意とす。必ずしも葬儀を用ひて彼が意に背く事勿れと宣へば、夫婦は一休の宣ふ所少しも違はざるを感嘆して、其詞に從ふ。偖一休は白布の帷子を取寄せ、經文を書きて與へ、野曝をば此に殘置きて獨歸庵し給ふ。斯くて其夜に到り、地獄が空しき骸を裸となし、經帷子一重を著せて桶に納め、野曝を交へて僅に四五人にてこれを擡行きけるに、一休途中に出迎ひて前に立ち、經を讀給ふかと思へば然はなくて、

繰出あゆみとりおきて、生れた儘のさらば垣、短き夜半に見し夢は、長い刀に、長脇差をぼつこんで、おせさ、よいさ。

と、都のぬめり節を唄給ひて踊狂ひつゝ、附添ひ行給ひ、遂に八木鄕久米田寺の三昧に至り、桶より屍を出し、葎の裏に捨置きてぞ歸りける。然るにさしも美麗なりし地獄が姿、七日々々に變じつゝ、蘭麝を燒籠めたる綠の黑髪は蓬の如くに亂れ、錦襴を覆ひたる素肌は青く腫上り、白粉を施したる花の顏は、腐りて臭氣を出し、燕脂をいろどりし朱の脣は、爛れて血を流す。瘦せたる犬は麗玉を垂れたる乳を喰破り、餓ゑたる烏は秋波をよせたる眼をついばみて、お


一休乃仏眼をもって


遊君地獄病よ
かゝり命かぎる事と
知り三曲を
合奏して衆人よ
わかれを告る
家内乃男女
なげき

くれば同じ谷川の、水に迷の月の影、有無の二つをはなれては、心に懸る雲もなく、來らず去らぬきぬ〴〵は、あかぬ別の鳥鐘を、うらむることもなか空に、何か殘りて罪となる。
文字にかゝれぬむつごとは、教の外の傳にて、墨繪にかきし松風の音。
と唄終りて、瑤琴の上に打伏し、瞑然として絕えけるにぞ、とり圍みたるあまたの男女、あつと叫びて泣悲む聲暫くも止まず。妹女郎禿どもは空しき骸に取附きて、聲をあげて泣叫ふ。一休宣はく、彼が終れる樣凡人の所爲にあらず。功を積める高僧と雖も豈此境界に及ばんや。常人の終れる如く、歎くべきにあらずと制し給ひぬ。主夫婦は別けて悲む事深く、我家幾千金の大利を得たるは皆彼が功なり。殊に其名四方に聞えたる者なれば、切て葬送を美々しく營み遣すべしとぞ評議す。一休是を聞給ひ、葬儀を重くせん事彼が意に叶ふべからず。唯經帷子一重を著せ、棺桶に納めてかゝげ行き、埋むる事もせず、野に棄てさすべしと宣ふ。主夫婦、そは餘り情なき仕業なりと心の中には思ひけるが、流石一休の宣ふ事なれば、且其詞に從ふ體をなし居たるに、一休野曝に對し斯々せよと命じ給へば、野曝立上りて、地獄が亡骸を抱揚げ、屛風の裏にとり方附けつるに、枕の下より一張の短册出でたり。彼が自筆にて一首の歌を書く。野曝其歌を讀上ぐるに、

び、名香をたき、紅の重裀に坐して錦の夜著に身を靠せたるさま、日來に十倍してうつくしく、梨花の雨にいためる風情芙蓉の水を出でたる容貌、今をはるべき人とは更に見えざりけり。これぞ此世の名殘なりと、あるじ夫婦を初として、朋輩の女郎、引船、禿、火車、中居、下男、常に出入する男女、按摩とる坐頭、おろせの老婆に至る迄、あまたの人集來て、日來めぐみを受けし事共を心のうちに思ひて嘆き悲まざるはなく、鼻打かむ音此彼に聞え手飼の矮狗迄も別を悲むにや、うづくまりて涙を落す。誠に是世尊涅槃の時にあひ、天人大會五十二類、沙羅雙樹の下に集ひて悲みしも斯くぞあらめと思はれける。扨地獄これを見て、扨々いづれも妾が名殘を惜み給はる事かたじけなきまでに覺ゆるなり。病疲れて覺束なけれども、此世のかたみに一曲を聞せ申さんといひて、二人の雛妓に三絃をひかせ、皷弓をすらせ、みづからは琴をしらべて三曲を合奏し、かねて我作りたる歌をうたふ。彈手もたゆげなれど、さすがに妙手のしらべなれば、却りて趣あり。聲はいと細く、秋深き夜寒の霜に、鈴蟲の鳴弱りたる風情にて、いとゞ哀ぞまさりける。其歌にいはく、

有漏路より、むろにやしなふ早咲の、かりなる色のはかなさは、まどろまで見る夢なれや。ならべてねやの木枕を、碎きて見れば花もなし。花をば春の空にもつ、雪や氷の下紐も、と

會するは兄弟の緣の盡きざる所なりといへば、地獄は如意山の雪中にて、炭賣陸作にひろはれたる事を始とし、有漏路兄弟に捕はれて安計呂山に到り、姉玉蟲に會ひしこと、玉蟲がいへる詞、有漏路兄弟は母の敵といふ事、山姥が爲に難儀の折から此家の主に買ひとられて此家に爲人、阿曾比となりし迄の事を委しく語りければ、野曝もこれ迄我身の上にありし事を具に語り、有漏路兄弟を思はず殺して母の仇を報いし事をば、且前に語りければ、地獄は是を聞き姉の志を遂げたる事を喜び、手匣の裏より大幢國師の法語を取出し、妾禪法を歸依し初めしは此一卷を得し故なりといひて、野曝に渡しければ、野曝これを受取りて曰く、此一卷は先年親人、佐々木の若君花形丸殿に附與せられし物なるが、花形丸殿我師の弟子となり剃髮して胸月と法名し、諸國遍參に出でられし刻、親人に預け置れたる物なれば、後日胸月殿に出會せば、再び返し申すべしとて懷に納めけり。此兄弟尋常の者ならば、愚痴なる事をいひならべて悲歎すべきなれど、共に發悟せる者どもなれば、一滴の涙もおとさず、唯輪囘の一轉を感ずるのみなり。時に地獄いひけるは、はや妾が歸去の時到り侍れば、其支度をいたし候べしとて、雛妓小鬟に扶けられ浴室に至りて浴し、髮をすかせて平日の如くはでやかに結はしめ、面に紅粉をいろどり、櫛搔枝を挿飾り、白綾の小袖袿衣を著重ねて、水色のしごき帶をむす

の者忙しく腰を屈め、禪師を迎へ奉らん爲に參る所に候といへば、一休宣はく、そは地獄が臨終の故なるべし。我今其事に因りて汝が家に行かめと思ひまうで來つるなりとて、乃ち同道して珠名が家に到り給ひ、野曝は次の間に居らしめ自らは地獄が閨房に入り給ひて病床に近附き、汝已に終焉の時至るにより見おくらん爲に來れりと宣へば、地獄はいと喜べるさまなり。一休又宣はく、我疾くより汝が素姓を知る。汝はまさしく梅津嘉門景春が娘幼名を乙星といひしものなるべしと宣へば、地獄驚き、如何にして其事を知り給ふや。妾かゝる身になりて素姓をあらはさんは、父母の名を汚すに似たれば、人にも語らざる事なるにといひて訝るに、一休宣はく、前の日汝我を抱きし時、右の腕に七つの黑痣あるを見つけてこれを知るなり。汝にあはす者ありとて、次の間より野曝を呼出し、是こそ汝が兄彦丸なれ。一旦我徒弟となり出家しつれども、故ありて還俗し今は異名を野曝といひ俗稱を悟助といふ。形は俗に還るといへども、我禪法の妙道を究めしなりと宣へば、地獄又驚き扨は兄上にて候ひけるか。浪花に野曝といふ俠者ありとはかねて聞きつるが、兄上にてあらんとは露思はざりきといふ。野曝いはく、我も兼て汝が名を聞及びぬれども、妹にてあらんとは夢にも知らざる所なり。親人打死の時は我は十一歲汝は三歲なりしゆゑ、たとへ面を合すとも、名告らざれば知難し。今汝が末期に再

日地獄あるじ夫婦に對していひけるは、妾が病とても癒ゆまじく思ひはべれば、もはや藥は用ひ候まじ。死ぬる命はをしからねど、幼少の時より御夫婦の情深き養育にあづかり、いまだ十九歳にてさだめの年季もみてず身まかりて、損をかけまゐらす事、妾が愁ふる所に候といへば、主夫婦は涙を落しつゝ、口をひとしうしていはく、汝其事に於ては少しも心をつひやす事なかれ。我汝が功に因りてこれ迄幾千金の大利を得たれば、たとへ今より勤を止めさすとも、いさゝか愁とせざれども、唯かなしきは我々夫婦汝を子の如く思ひ、七歳の時より手しほに掛けて育てあげ、のちのちは養女にもなしてんと樂み居りしに、蕾の花を散すこと、不便ともかはゆしともいふべき詞はなきぞかし。さやうに心弱きことをいはず藥をもちひて本復をせよかしといひて益落涙すれば、地獄頭を搖り、いなとても本復叶ひ難し。およそ生あるもの、一度滅するは世の習にて候へば、必ずず御歎あるまじく候といひて、此後は藥を用ひず唯美酒を乞ひ、冷酒にて飲むのみなり。斯くて四五日過ぎけるが、又あるじ夫婦を近づけ、今日の未の下刻は已に妾が臨終の時なり。ねがはくは住吉に使して一休禪師を請待し給はれかしといふにぞ、あるじ夫婦は今更のやうに打驚き使を住吉に遣しけるに、使の者途中にて一休に行逢ふ。此時一休は野曝悟助を具し給ひ、珠名が家僕と見給ひて、汝何處に去くぞと宣へば、使

遊戯を旨とし、意を恣にして心中更に一物を止めず。四大皆空なる事を看破し、地水火風の色小袖、空卽是色の紅粉も、わづか一重の臭皮袋、惜むかひなき身と悟り、唯活氣を以て本來の面目とし、前よりも尙まさりて姿を美麗に粧ひ、名香をたきしめたる綾羅錦繡を身にまとひ、髮の飾手道具の結構に、金玉を鏤め、糸竹のしらべ酒宴のそなへに、淸雅を盡して、あまたの嫖客に身を任せければ、富翁嘉客戀ひしたひて千金を塊とし、通來る者數知れず。廓中三千に餘れる遊女等、彼一人の爲に色を失ひ、其名一時に高かりけり。人に物ををしまざれば、あたらしき衣服をとゝのふれば、舊き衣服は妹女郎火車などに與へ、金ある時は中居下男等、出入る貧者等にとらせければ、家内の男女出入る者等尊敬する事大方ならず、人愛日々にまされり。金なき時は衣服手道具の類を盡く質して用にあて、常には金銀をたくはふる事なし。情を和歌によせて日夜大酒を飮み、都て爽に快事を好み、情の色も淺からずよく嫖客の心をとり、一度あふ者日々忘るゝ事なからしむ。其行ふ所一つとして活潑禪機にあらざる事なし。時の人女達磨といひしも宜なり。斯くて月日をおくりけるに、地獄偶病に臥し、つや〱ものもすゝまず、瘦衰へければ、主珠名長大に驚き、夫婦ともに枕邊をはなれず看病し、良醫を迎へ百藥を盡しぬれども露計も驗なく、さして苦痛の體はあらざれ共、日に異に重くなりまさりぬ。一

地獄信解品第七（後談）

一日地獄例の如く一室に籠り、坐禪して居たりけるに、一休和尚突然と入來り給ひ、一言をも宣はず、花器に挿したる花をとりこれを拈りて見せたまへば、地獄は靜に目を開きこれを見て微笑ひ、やがて椅子を下りて居睡り居たる女童等を搖醒し、耳につきて囁きけるに、女童等うち點頭きて身を起去き、暫ありて美酒嘉肴を捧來りて一休の前におく。一休喜び給ふけはひにて大盃を取上げ、女童に酌をとらせて數盃を傾け、舌をならして宣はく、あな美酒なる哉。世尊五十餘年の連留も、此花を拈りて此美酒を得んのみ。汝は是我爲めの迦葉なり。吾正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の機關を、汝が爲に悟られたり。最早坐禪に及ばず、是非の門を絶却して、情を恣にせよと宣ひて立上り、鐵如意を以て、さしも美麗に彩色りたる椅子を、微塵の如くに打碎き、別をも告給はず飄々として歸り給ひぬ。斯くて地獄は拈華微笑の問答に、禪法の奧密を大悟し、胸中豁然として夜の初めて明けたるが如く、これより後は任情

活潑々時池水清　怪哉端的死中生
飛₂潜天地₁衲僧眼　雲暗龍門點額情

これ一休の作なり。一休幼き時、活きたる鯉に引導の語を授けて、食し給ひしといひ傳ふるは、是等よりいひ出せる說にや。(本文一休鯉を吐給ふ事、此詩にもとづきて作りなせり。)

○因にしるす。稻津祇空更めて敬雨と稱じ、洛北紫野に住みし比の句、

女達磨讃

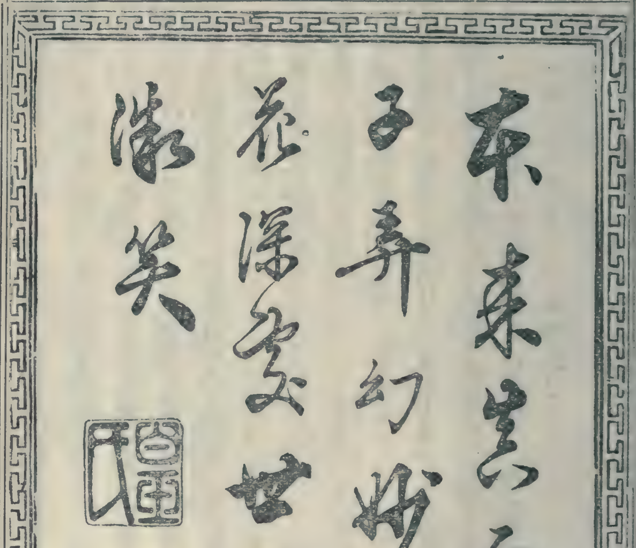
九年何苦界十年花ごろも

(敬雨句集、朽葉集に見ゆ。)

○越前三國の遊女長谷川女達磨の讃、

玉琴のひくてあまたのうかれ女に、まことありと思ふ人こそ、をかしくも哀なれ。世に男ほど淺々しきものはあらじと、我のみ思ふかも知らず。さればいにしへの佛たちも、靜なんどいへるも野暮らしく、唯あそばば遊べ。西へ東へ〱。

あちこちと尻おちつかぬ柳かな



此女達磨の圖ハ南海
祇園先生の自画讃也
紙中長二尺八寸餘
幅一尺二寸あり
烏石山人の
所藏なり
好事の人
摹して石本
とし世に傳ふ予
其一本を藏せり縮して
此にあらハを実是珍畫と
いふべし

醒醒齋

縮圖



此歌の意をよく〳〵工夫せば、必ず心眼空濶の時あらん。これは昨夜の歌銭に替へて汝に遣すとて、携へ給ひし拂子を投與へて、突然として歸り給ひぬ。斯くて地獄は一休の示をうけ、綵畫椅とて美しく色どりたる椅子をつくらしめ、客を迎ふるいとま一室にこもりて椅子に坐し一休の給はりし拂子をとり、眼を閉ぢて坐禪しけるに、初のほどは歌妓の歌ふなげ節の聲、醉客の器を打鳴して喚音、火車の詈る大聲、女童の返事の長々しきなど、耳に入りて惛怓しく、少も心靜かならざりけるが、日を經て心を練りけるにぞ、漸々物の聲聞えずなりて、一塵不染萬念盡忘、心淸情安ことを覺えけり。今の世迄も畫き傳へて、女達磨といふは、此地獄が坐禪の姿なりとぞ。

○一休地獄と連歌問答の事、衣笠一閑宗葛が、堺鏡に見ゆ。

○元亨釋書、菅原寺行基傳云、

基。嘗行化返故里。里人捕魚而宴池邊。基過其地。年少戲以膾薦基。基喫之。須臾臨池吐出。皆爲小魚游泳去。見者驚伏。云々。（本文に記す一休の所爲行基菩薩に似たり。）

○狂雲集に、脱鱗鯉魚庖中得活といふ詩あり。其詩に曰く、

ば其別もなし。美しき醜きをもへだてず、唯、今かしづきもて遊ぶ皮の下に、箇々骸骨をつゝみて持つなり。」臭皮一重に迷ふは愚ならずやと示し給ふ。世に一休骸骨の法語といふはこれなりとぞ。地獄是等の示を聞きて涙を潸然と落し、我人息の通ふ中は人の屍を餘所に見て、我身にはなき事の樣に思ひて、翌日をも知らぬ果敢なき命とは思はず候。妾が如き愚昧なる者も、悟を開き候ふ事能ふべき事に候やらん。姿をも替へて佛につかへ候はゞ、自ら得道もあるべけれど、何いふも心に任せざる身にし侍ればといひて益落涙す。一休頭を打振りて宣はく、何ぞ其營業と其體形とにかゝはるべきや。心にもあらぬ虛言をいひて人に親むも、紅白粉を調へて容を粧ふも、皆儞が本來の營業なり、いかでか姿を替へて營業に背くべきや。江口の遊女さまを替へし歌に、

髪おろし衣のいろは染めぬるになほつれなきは心なりけり

と讀みしは自然の情なり。儞が輩は五尺の體を賣つて一切衆生の煩惱を安んず。法を賣つて衆生をまどはす邪禪賊僧にははるかにまされり。營と形とに拘るべからず。唯自然の情をまもりて、別に道を求むべからず。

極樂も地獄も知らぬ思ひでにうまれぬさきの者となるべし

悟りたる僧と思ひ、二十年以來斯る俗人ごとき者を養ひ置きたる事の口惜しさよとて、卽時に僧を追出し、其草庵を燒捨てたり。此僧禪の活機を知らず、老婆は能く活機を知れり。我此意を偈につくりて曰く、

老婆心爲賊過梯　清淨沙門與女妻
今夜美人若約我　枯楊春老更生梯

此偈の意は、昔の婆が心は盜人の爲に梯を架け、通路を拵へてやるに同じ。故に清淨なる沙門に艶なる女を與へ、今にも美人來りて若我に約束せば、枯れたる楊なりとも、春の末に梯を出す如く、心を若やげ、確に靡き想ひ亂るべし。彼老僧が枯木の暖みなき氣にはあらじとの意味なり。されば彼老僧も不可なり、婆も不可なり。我は可もなく不可もなく、向境界をうけて著せざる所、遍照僧正のかさねばうとしいざふたり寢んとの意も是に推して知るべきなり。然りといへども、今我汝に心動かざるは、女子出定の話の如く、文殊女子と緣なきが如し。目あれば可も不可もあり。無目而見ときは汝が如き美人も唯臭き皮袋につゝみたる一具の骸骨なり。男女の婬樂は臭骸を抱くとは是なり。いづれの時か夢の裏にあらざる、いづれの人か骸骨にあらざる。臭き皮につゝみて持てあつかふほどこそ男女の別もあれ、息絶え身の皮破れぬれ

ざりけり。一休傍の水注子を取りて、角盥に水をつぎ入れ給ひ、儞此の水に面を映し見よ。是心の鬼の角盥、我といふ器あれば心といふ水あり。心といふ水あれば、諸の煩惱森羅萬象の影を寫す。是れ影の來りて映るにあらず。心といふ水のもとめて寫すなり。又如此水を棄て器を去る時は、則ち物の影うつる事なし。水を捨てよ、器を去れよ、無我になれ、無心になれと示し給ふ。世に一休水鏡の法語といふは是なりとぞ。地獄重ねて問ひけるは、昨夜の踊歌の中にも目なしと宣ひ、今又妾が抱き參せし時も目なし佛と宣ふ。其意如何ぞや。一休宣はく、目なしとは人々具足の自性なり。楞嚴經に、阿那律陀は無目而見と說り。昔或所に一人の老婆あり。禪法を深く歸依し、草庵を造りて一個の禪僧を供養し、平日に法を聞きて二十年ばかり此僧を尊敬し、二八許の美女を附置きて、飯を送り給侍せしめ、萬の事をせさせけり。一日徒然の雨の黄昏、物淋しきを幸に、老僧の心を引見ばやと、主の老婆彼女にいひ含め、斯々せよとて遣しけり。女庵に行きて老僧に向ひ、獨居の御徒然、斯せし時は何なる御意にやとて、老僧に抱附きけるに、僧答へて、枯木依㆓寒岩㆒三冬無㆓暖氣㆒といへり。斯くいひたる意は、假令美人に抱れても、我心は枯木の寒き岩に依りたる如く、冬の時に暖なる氣の少もなきが如く、心を動す事なしとなり。此女此語を能く覺えて歸り、老婆に語りければ、老婆大に怒り、今迄道を

別都頓宜壽、血を吐く紅の唇は萬客の嘗物となり、劍の山の指きりに、消ゆるも知らぬ雪の腕は、千人の枕となる。夕の夢の移香を嗅ぐ鼻あれば、人目の關に見る目あり。戀の重荷をかけて知る、罪の秤量幢の罪重く、容を作る姿見は是淨頗梨の鏡なり。嫉妬の胸の猛火には、提子の水も沸返り、呪咀の釘の劍樹には、生爪も放すと聞く。月水の血盆あれば、小刀針の刀山あり。衣桁は乃ち衣領樹なり。債をはたるは奪衣婆なり。牛王の烏鐵の嘴を鳴して、色を含める眼を啄み、髢の蛇は炎の舌を吐きて、執念深き膽を食ふ。僞をつむ死天山、絕えぬ流の葬頭河、更に浮む期あるべからずと示し給へば、地獄また、極樂と申すは西方十萬億土に在りと承る、實に然るや否やと問ふ。一休彼地獄の圖の袿衣を衣桁より取りおろさせ給ひ、硯匣を乞ひ筆を染めて、其袿衣の裏に、水の上に圓形を畫きて宣はく、頃日或人我庵に來り、土佐何某とかやが畫けるとて、此の如き繪に讚を求む。我これに書して曰く、

　水中に物あり。其一物を問へば、かきし畫工も知らず、持主も知らず、讚する我はなほ知らず。

斯くしるして遣しぬ。極樂も又是に等しく、釋迦も知らず、達磨も知らず、問はるゝ我はなほ知らず。唯斯樣に、地獄の裏にあるものと思へかしと宣ひけるが、地獄は未だ其意を十分に解さ

褰げて、一休にひしと抱き附き、笑を含みつゝ、正慥麼時如何と問ふ。一休委々として、文殊與女子無緣無目佛無目佛と答給ふ。地獄其意を解せず、再びいひけるは、平相國に仕へたる白拍子に佛といふあり。道長公と歌を讀みかはしたる江口の阿曾比に小觀音といふあり。さる名を附きしも、菩提を求め佛果を願ふの意ならん。妾が如く浮川竹の流れを汲み、心にもあらで眉を畫き脣を染め、只管妖狐の態を學ぶ淺間敷身となるは、前世の戒行拙き故と思ひ侍れば、未來も地獄にや落ち候べき。せめて懺悔の爲にもと名を地獄とつき、裡衣にも地獄の圖を繡しめて身に纏ひ候は、呵責の罪を今世にて滅し、後の世は極樂世界に生れ、美麗き佛とならん事を願ひ候故なり。地獄といふは何なる所に候やらん、御示し下されかしといへば、一休折節衣桁に懸けありし、彼地獄の繪の裡衣を指して宣はく、かの汝が衣裳に繡ひし如く、地獄に種々の變相あり。八大地獄といふは、一に等活、二に黑繩、三に衆合、四に叫喚、五に大叫喚、六に焦熱、七に大焦熱、八に阿鼻なり。此八つの大地獄に各十六所の小地獄あり。根本八に百二十八を加へて、一百三十六地獄となる。其地獄遠きにあらず、近くは汝が此一室の裏、悉く地獄なり。夫焦熱地獄にあらずして火車あり。畜生道に非ずして牛あり。晝睡りて夜睡る事能はざるは黑闇地獄の呵責なり。飽きて飲み飢ゑて食ふ事能はざるは餓鬼道の苦患なり。冥途の鳥の


遊君
地獄


一休高須の
妓樓に宿し
醉後嘔吐の
裏に活鯉と
吐出し
たまふ

る儘にて口より嘔吐をなし給ひ、腌臢的胸の上に流れければ、臭氣鼻を襲ひて堪難しと雖も、地獄は少しもこれを厭はず、手帕を以て拭清め、靜に搖醒して湯を進らせけるに、これを飲みて再び睡り給ふ事暫くなり。斯くて夜半の鐘も響きけるに、一休又睡を醒して身を起し、大酒に倦疲れたる體にて、屛風の外に這出給ひ、欄干に取附き池に臨みて、醉龍の水を吐くが如く、ぐわら〳〵と嘔吐をなし給ひけるに、不思議なるかな其腌臢的、池の上に落つるとひとしく、小鯉と化し、幾つとなく水中に躍入り、活潑とはね廻りて水底に隱れけり。地獄此有樣を見て大に驚き、世の人擧りて此師を活佛なりと尊敬するも、實に宜なりと信心彌增り、背を撫でて介抱し、角盥水注子を取り、口を漱せ手を洗はせなどして、湯を進せければ一休心地よげにこれを飲み、只夢幻をも別ち給はぬ體にて、又閨中に入り、前後も知らず睡られけるが、已に天明に及びて全く睡を醒し給ひ、四邊を顧みて地獄に對し、汝は那個なるぞと問給へば、妾は地獄と申す遊女にて候と答ふ。一休宣はく、爰は儞が閨なるか、我は唯庵中に睡りしと思ひぬ。昨夜の醉中の事を想ひ出せば、何樣妓樓に來つるものをと宣ひつゝ、遽しく袈裟衣を整へて出去らんとし給ひけるに、地獄其袖を控へ、妾問ひ申し度事の侍れば、暫時止り給はれかしといへば、一休、何等の問事ありや、疾々いへと宣ひて坐し給ふ。時に地獄蘭麝の薰馥郁たる裡衣を

と聲高やかに唄ひつゝ、足拍子を踏鳴し、彼方に倭僊き此方に歪みすぢりもぢりて舞ひ給ふ。地獄は最前より外の方に出でて樣子を窺ひ居けるが、明障子に數多の骸骨の影映りければこは怪やと打驚き、障子を細めに開けて裏を見けるに、舞妓も歌妓も、殘らず骸骨の姿に見え、唯一休のみ依然として其の中に交りて舞給ひければ、地獄は忽ち疑を晴し、誠に是れ凡人の所爲ならずと奇異の思をなし、障子を開きて裏に入れば、妓婦等も皆原の姿と見えにけり。已に一休は醉潰れて其儘倒臥し給ひければ、地獄は妓婦等を退かせ、女童を呼びて酒肴の卓子を收拾けしめ、自ら一休を抱起し雛妓と共に舁上て深閨に入れ、幾重を重ねたる紅の衵の上に臥しめけるに、前後も知らず熟睡し給ひて、鼻息は車の轟くが如く、雷の響くに異ならず。地獄思ひけるは、此師の禪機甚だ深密と覺ゆれば、輕々しく本相を顯し給ふまじ。さりながら斯く來臨を惠給ふこそ幸なれ。いかにもして敎化に預るべしと思ひ、斯く大醉し給ひては、必ず夜中に吐給ふらめ。宜しく其用意をすべしと思ひ、女童に命じ一土瓶の湯を取寄せて、火爐の上に放き、水注子角盥等を身近くに置き、灯火を明に挑げ、一休の枕上に坐して目も放さず視り居たり。良ありて一休纔に目を醒し、酒氣の熱するに堪へざるにや、自己袈裟衣を脱捨て、犢鼻褌のみになり、大の字の形に横はりて、又暫時睡られけるが、惡心思す體にて、仰向に寢た


一休高徳の
妓楼に酔狂
して
舞妓歌妓
髑髏の
遊君地獄
一休の道徳を
皮にこそ
男女の
へだて
あれ
骨は
人がらも
なし



肌脱、扇を開きて立上り、
釋迦殿が、目なしどのになり得て、天地萬法を勸めらる。悉く目なしなりと説給ふ。草木さへも佛になれば、まして況や人間の、などか佛にならざらん。釋迦殿も彌陀殿も皆佛ぢやと、いうたも道理嘘つきよ。目なしの事を人々に、知さん爲とあれ是に、物に擬へてしやべられた。凡夫は心を知らざれば、義理許にて一言も目無殿にいひあてず。大なうそよ赤うそよの。嘘をつかずば佛にやせまい。そりや又なぜに、方便嘘は皆實、謠へや飲めや一寸先は闇の夜、謠ふも舞ふも法の聲、水の面みな目無を顯せば、謠ふも舞ふも法の聲、來世も過去もあらばこそ、三世不可得人心、おこらぬ所が極樂にて、おこりし心が現世なり。さらりとないが過去といふ。梯がなうても天へのぼろ、瞿曇の經は賴みやせぬ。善きも惡きも咎むれば、皆惡にこそなるべけれ。徒者が世に出でて、多くの人を迷はする。心とは如何なる物をいふやらん、さら〳〵さつと一筆に、書いたはなんぞ松風の音、二つなき物一もなし。墨繪の風のさつても〳〵涼しやな。體が熱かろ不動殿、惡魔降伏おいてもらを。必ず善いと思ふなよ、氣ざす所が惡魔なり。かたみの五輪茶臼にせい、だまされなりんのみせよ。悟るは何の悟ぞや、悟らぬ先が悟なり。

ひ、纖々たる素手を、一休の衣の袖に差入れ、手を携へて誘ひければ、大勢の男等は地獄が心の裏を知らず、唯呆れてぞ退きける。地獄が住む閨房は、池に臨みて造出したる亭にて、床違棚二階の厨子の飾附、繪障子屏風の好、風流淸雅にして且美麗なる事、いひ盡すべうも非ず。一休は此座敷の上座に趺跨居給ひて、早く酒を持來れと急ぎ給へば、地獄中居等に命じて、美酒と淨饌を出さしめけるに、一休是を見て、斯る素物は味なし。我十二三歳にて師の坊養叟和尙に事へし頃、活鯉に引導を授けて食せし事あり、然りしより後鯉の美味なる事を覺えて忘れ難し。疾々鯉の羹を持來れと宣ひければ、地獄又中居共に命じ、鯉を調じて出さしめけるに、一休是でこそとて大に喜び給ひ、鯉をひたもの食給ひて、數盃を傾け、味美なりと讃給ひぬ。時に地獄心の裏に想ひけるは、一休は活佛なりとて、人尊敬する由を聞きつるが、出家の身として魚肉を食ふはあるまじき事なり。もしは禪機に託して人を欺く、賣僧にはあらずやと疑心を起し、猶彼が本性を試むべしと思ひ、中居女の耳に就きて云々せよと呫聶きけるが、程なく數多の舞妓歌妓、匂薰蘭を凝し粧紅粉を盡して出來り、笛を吹き鼓を打ち、迦陵頻伽の囀るが如くに唄ひ、舞妓は長き袂を飜して、鸞鳳の如くに舞ひければ、一休益興じ給ひ、大盃に改めて又數盃を傾け、十分に醉を發し、我も羅漢舞を舞うて見すべしと宣ひつゝ、偏袒右肩の片

八大地獄と云ハ一ニ等活二ニ黒縄三ニ衆合四ニ叫喚五ニ大叫喚六ニ焦熱七ニ大焦熱八ニ阿鼻之八大地獄ニ各十六の小地獄あり根本八ニ百廿八を加へ百卅六地獄となる





地獄没後に此袿衣と卑園にたくりて丹後国成相の観音堂にとさびと浅井了意が見ぬ世の友といふ草紙にみえり



傳云画工六郎兵衛入道
蓮行が繪を添して繍箔に
せしこそ其乱性のたゞえと
おもふべし蓮行ハ永仁乃
ころの人なり本朝画史よ
出せり



高須阿曽比
地獄之袿衣
地獄変相図

様賓に異風の打扮なり。是乃ち地獄の君にぞありける。偖地獄此方の騷動する體を見て、何事ありやと問ひければ、老女答へて、あれは乞食の僧君に見えんといひて狂罵り候ゆゑ、追遣らんとて閙き候なりといふ。地獄これを聞き、假令狂人にもせよ、妾に見えんといふは必ず因緣ある事ならん。妾自ら對面して、其故を問はめといひて、歩を早めければ、大勢の男共、地獄の君の來り給ふぞといひて、左右に別れて通らしめければ、地獄一休の側に近々と立寄り、鶯の囀るが如き聲して、地獄と申すは妾が事に候。何故見えんとは宣ふぞといふ。此時一休は醉に堪へず、睡目にて地上に趺跨居られしが、醉眼を開きて地獄が姿を倩と見給ふに、花を欺き月を嗤ふの貌なれば、扨も類稀なる美人哉と思しつゝ、他の言はなくて、

聞きしより見ておそろしき地獄かな

とあそばしけるに、地獄とりあへず、

活來る人もおちざらめやは

としたりければ、一休果して是常人にあらずと、彌心憎く思し給ひ、我實は住吉牀菜庵の一休なり。我如き出家をも汝落すべきやと宣ひければ、地獄打笑ひ、假令活佛にもせよ活達磨にもせよ、妾が巧計の奈落に落し申さでやあるべき。いざ此方へ在し候へといひつゝ、ひたと寄添

ば、益怒に堪給はず、汝等不禮の事をいはば、我拳の一棒を以て、汝等が頭を微塵になすべきぞと、一越聲を揚げ一喝して罵り給へば、彼狂人にはあらじ、物ねだりの曲者なるべし。後日の懲に打扣けと叫はりければ、此騒しさを聞き、隣家の下男共さへ集加はりて、一休の襟首を摑みて大道に引出し、大勢棒を取りて取圍みけるが、流石に出家の形なれば打つ事はせず、唯口々に罵りてぞ居たりける。斯る折しも彼方より、一個の花魁蓮歩をかろくうつし、柳腰たよたよとして練來る。其扮如何となれば、綠の黑髮を今やうに束ねて、瑇瑁の櫛搭枝をさし飾り、身には白綾の小袖を幾つとなく著重ねて、紅のひた鹿子の上著を著し、地獄變相の圖を、五色の糸に手をこめて繡したる、袿衣を纏ひ、丹地の錦の帶を結べり。踢出褄の間より仄に見ゆる脛の素さは、八寒地獄の雪を束ねたるかといぶかり、紅の裩の閃くは、焦熱地獄の炎を蹈むかと疑はれ、とめ木の薫馥郁として、交加人の魂を奪ふ。年は漸く十九歳にて、國色の美艶、容は柳の糸の嬋妍に、肌は玉の匂ある風情にて、此世の人とは思はれず、天津少女の天降りて人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫の海底より出て慰むにやと、疑はるゝ許なり。美しく淸げなる對の女童に、人頭幢三角眼叵々鼻の形を繡はしたる衣服を著せて、左右に從へ、赤手巾を頂に置きたる老女に、五輪の塔を畫き地水火風といふ四字を書きたる、長柄の日傘を差掛けさせたる


地
高須里


一休堺高須の里ハ
来りて娼家と罵る
娼家の奴僕一休を
とらへてみて打んとを
此里ハ名高き
地獄といふ遊君
これをとゞめて
休を
問答を

めて、我身をはまり身命を擲つ輩多きも宜なりと、凡欲無垢の御身ながらも、世の中の景狀を思惟しまし〱、彼方此方と歩行給ひ、彼地獄は珠名の長といふが許の遊びなりと聞きて、其家を尋ねて門首に立給ひ、我は地獄をやとひ、一盃を酌まんと思ひて來つる者なり。疾々導きて彼に逢しめよと宣ひけるが、中居下男等遽しげに走り廻りて答だにせざれば、一休氣を苛ちて同じ事を屢呼り給ふに、一箇の奴僕立ながら一休を顧みつるに、墨染の麻の破れたる衣に、鈍色の垢附きたる袈裟を掛け、頭は銅の瓫に似て、面は瓦鍋かと疑ひ、容貌顦顇して乞食僧の如くなれば、一休とは露知らず心中に見下し陋めて、何といふぞ、地獄の君に逢はんとや。そは非分なる云事なり。假令千金を擲つ富翁なりとも、前方に約束なくては容易に見え給ふ花魁にあらず。見れば汝乞食に等しき出家なり。汝が如き貧僧には、側にだも寄給ふべからず。殊更幾許の光明を放さざれば、結縁を求むる事なり難し。汝が一生の念珠の實を携へ來るとも、一夜の歇錢にも未だ足るべからず、といひてあざみ笑ひければ、一休大に怒給ひ、阿僧比といふ者は原賣物なれば、其價さへ償はば、いかなる者にも逢ふべき理にあらずや。我姿は貧しけれ共、定の價を償ふべく思へばこそ尋ね來つれ。疾々逢しめよと宣へば、中居下男共寄集り、これは乞食の狂僧ならめと評議して、種々嘲弄しけるにぞ、一休酒氣をおび給ひぬれ

侍る。

　來て見ればこゝも火宅の宿なるをなに住吉と人のいふらん

老僧是を聞給ひ、歌の意尤殊勝には思ひ候へど、此僧はさも存ぜずとて、

　來て見ればこゝも火宅の宿なれど心をとめてすめば住よし

一休これを聞き、愕然として其奇異を歎じ給ふに、程なく夜も朧々と明渡りけるに、彼老僧何地共なく行方知れずなりけるにぞ、一休然ばこそ是は明神の化現なるらんと、世に有難く覺されとかや。是より岩倉山の麓を去りて、住吉に移り草庵を營みて、これを牀菜庵と號けて住給ひけるとかや。其比泉州堺北荘高須の花街に、地獄といふ名高き遊君ありけり。一休此事を聞き給ひ、偖も心憎き名をつきたる阿曾比哉。我試に行きて見るべしとて、一日醉に乘じて獨庵を出給ひ、踉々蹌々として彼花街に到り給ふ。抑此曲中は實に是欲界の別境にて、絃歌の聲舞曲の音常に絕えず、花の曙には遠山の眉艷しく、月の夕には蘭麝の薫濃にして、一笑千金の媚、鐵心を鎔すの機深し。然ば賢愚を別たず貴賤を隔てず、歸る編笠來る頭巾、往來紛々として喧く、淫聲邪色に迷ひ來る人は圈套に身を墮すが如く、花言巧語にほだされて費す金は、湯鍋に雪を潑ぐに似たり。籬々に歌ふ聲琴の爪音なまめきければ、哀情未練の狂夫等浮れ初

うへは、僧形俗體の差別なし。其儘にて我太刀持となりて仕ふべし。かねて汝に語りし如く、我朱太刀は汝が父嘉門が最期の遺物なれば、我太刀持となるは父に事ふるも同然なりとのたまへば、野曝は大に喜び立歸りて、家財を取り收め、是より一休の庵に住みて眞實に仕へけり。一休に太刀持ありしといひ傳ふるは此悟助が事なりとぞ。偖白炭の忠知は、一休の物語といひ、兼て彼惡漢どもを捕へて、追拂ふべく思はれ居たる時なれば、急ぎ公差を召して其の旨を命じけるに、提婆仁三郎を始めとして其の餘の者共、速く此事を聞き附けて、一夜の中に出奔し、行方も知れずなりにけり。

跋陀羅尊者　地獄信解品第七

一休和尚始め山城國岩倉山の麓に在しけるが、其後攝州住吉に移りて住給ふに一つの謂あり。山城國に住給ひし時、一年津の國に到り、住吉の社に通夜し給ひしに、八旬許の老僧香染の袈裟を掛けて在しけるが、一休に問うて宣はく、和僧は何國の人なるぞ。一休答へて曰く、都方の者なり。僧又宣はく、都の人ならば定めて歌を讀給ふらん。一休曰く、吾も桑門なれど我國の俗なれば、今夜しも神明の手向にもやなり侍らんと思ひて、愚ながらも一首を幣にかへ奉り

て、舍利弗鬼平次は兄にて有漏路太郎といひ、幻蝶藏は弟にて無漏路五郎といひし者なり。如意山の雪中にて、汝が母此花を殺せしは、此兄弟の者共なり。我道術を以て兼て是を知れるなり。汝を勘當せしは行跡を憎みしのみにあらず、一つには俗體に返して如此母の仇を報はしめんが爲め、二つには宿因を呼醒さんが爲なり。我背より此に在りて汝が獨言を聞きつるに、無常迅速の理を究めしは、眞の悟道に到れるなり。今は勘當免すぞと宣へば、野曝は愼みてこれを聞き、扨は此兩人は母の仇にて候ひしか。思はず仇を報いしも、師の恩惠深き故なりとて喜べば、一休再び宣はく、我友白炭の忠知、幸近頃此地の縣主となり、今は當國に移りて平野鄕に住居せり。我明日忠知に對面して、此者共の惡事を委敷物語り、汝が殺せしは仇打なる事を告置くべしと宣ふ折しも、夜半鐘蕭然と響きければ、一休宣はく、あれあの鐘は早九つ、翌日は則ち四月朔日、汝出家の行をなすべき時至れり。形は俗にて仇を報い、心は僧にて情を施し、此兩人の死骸を葬りて得さすべしと宣ひつゝ、袈裟を取りて野曝が襟に打掛給ひ、我は庵に歸るぞとて、立出給へば野曝は、重ねて重き師の御恩、何時の世にかは報ずべきとて禮拜し、門送して立戻り、商賣物の桶を出し、二人の死骸を取納め、棺の棒にて一荷に荷ひ、千日寺に葬りぬ。斯くて翌日住吉の庵に行き再び剃髮を願ひけるに、一休のたまはく、汝悟道を究めし

て、以來心を更めよと叫はりつゝ、棺の棒を追取りて、兩人を連打に打ちけるが、力者に打れて兩人は、うんとのつけに反返り、其儘息は絶果てぬ。野曝は大に驚き、殺す心にあらざるに、思はずはづみて誤りし、後悔さよと雙手を組み、我出家の行を始めしより殺生戒を保ち、人は更なり鳥獸魚蟲の類迄、物の命をとるまじと誓ひしに、思はず彼等を殺せしは、佛緣薄く、志を遂難き因緣にこそあるらめ。人を殺して生存ふべき道理なし。繩目の恥を受けんより、爽に腹切るべしと覺悟を極め、鮫函の一腰を取出して拔きかけしが、否これは刃引にて、自殺の用には立たざるものを、我ながら狼狽へしと思ひつゝ、舍利弗が刀を取つて見たりけるが、斯る惡黨の刀を爪ひんは穢なりと投捨てて、何がな刃物と四邊を見廻し、葬具を造る道具どもを顧みれども、鋸、鉋、鑿、釿の類にて、一つとして腹を切るべき刃物ならねば詮方なく、兩人の刀の中を撰取り、ほと〳〵腹に突立てんとしたる折しも、やれまて悟助はやまるなと聲かけて、屛風の蔭より突然と出給ふは、是乃ち一休なり。野曝は打驚き、師の坊には候はずや。いつの間に御越ありて我家には在しけるぞと不審れば、一休宣はく、不審は宜なり。我今は當國住吉に住むなり。我前に越後の山中にて、天狗に學得たる隱形の術を以て、宵より爰に隱居たり。過年如意山にて汝が切腹を止め、今又切腹を止むる事、是一つの因緣なり。此兩人の者は元來兄弟の山賊に

二人の者は受取つて、價を償ひ歸り去く、あとには野曝唯一人手を拱き、嘷噭として居たりしが、獨言にいひけるは、此商賣をするからに、愁を聞くは常なれど、熟浮世を觀ずるに、元の雫末の露、後れ先立つ世の習、殊更光陰の早き事、江漢の流るゝ如く、春去り秋來り、花開け葉落ちて、燕子鴻鴈時を同じうせず。然りと雖も人情の習にて、是を常とする故に、これに對して驚かず、朝夕唯奔走し、其營業とする所と、樂み耽る所とは異なれども、都是名利の二つを出づる事なし。然ば人無常迅速の理を知らば、其果報は各高下ありとも、强ちに他を貪り瞞す心なく、唯一生を安らかに、あらまほしき事なりといひて、歎息しける折しも、砥盥の水に怪しき人影映りければ、扨はと推量しつれども、さあらぬ體にもてなして、今日は彌生の晦日なれば、子の刻過ればまた出家、いで一睡と奧に入り、夜著引被きて臥しにけり。偖舍利弗幻は、書の仇を報はんと思ひけるが、立合の勝負はとても叶はじと思ひつゝ、寢首を打たんと示し合せ、兩人ともに手巾にて面を包み、門口の柳を傳ひて引窓より忍入り、拔足して奧に入り、野曝が寢息を窺ひ、刀を拔いて唯一打と振上げしが、野曝はそら鼾を立てて熟睡の體をなし、足音を考へて居たりければ、忽ちむくと起上り、左右に兩人をかい摑みて、聲烈しくいひけるは、尋常に名告りかけて勝負はせず、寢たる所を打たんとは、卑怯至極の奴原かな。我一棒を骨にうけ

と玉を爭へり。實に理と思ひつゝ、野曝は立上り、五つになる小兒なら、此位にて善らめと、小さき桶を差出せば、懐より錢を出し、忸怩しき事なれど、此錢も附紐のある孫めが著物を今質にして、これに替へて來ましたと、泣々價を償ひて、緊長生はすまじきものと、いひつゝ桶を打攪げ、心は闇にあら佛、迷ふ夜道をとぼ〳〵と、孫葬りに歸りけり。其跡へ中年の男等二人連にて腰を掛け、これ御亭主、十六になる娘の棺、角棒の四方花、價には構はぬ程に、念の入つたをたもれといへば野曝は、棚に並べし棺を下し、これかあれかと直を定め、棒をしらげる淸鉋、おほひの釘を打つ間、暫し待給へといひつゝ、仕事に取掛れば、隨分丈夫に頼みますと、待間に二人が物語、これなんと思やるぞ。美麗いあの娘子、野邊に送つて烟にするとは、惜しい事ではあるまいか。然ればよ、あの娘子の帶解の祝の時、わしが肩に乘せて神參したるが、今棺に入れて又肩に乘せ無常所におくらうとは、更に思ひも寄らぬ事、よい所へ縁が極り、結納も受納め、双親のことない喜びで、大方支度も整ひしとの噂、鶴龜繍うた色小袖を幡にして、香の煙で薫るとは、然とはいとしい事ぢやぞい。兎角美麗い娘には、氣のかたの出るものぢや。もちつと早う縁づけたら、此樣な事もあるまいにといひさして、話に紛れて忘れて居た。これ編笠が七蓋、榧土器も入りますぞやといひければ、心得ましたと野曝は、棺を仕立て渡しけり。

よしと思ひつゝ呵々と打笑ひ、衣服の塵を打拂ひ、緩々として歸りけり。偖家に歸りて暫時休息する中に、黄昏の比となりければ灯火を點し、戸を下しなどして居たりけるに、六十歳ばかりの貧しげなる老人、針目勝なる布子を著て杖に縋り、打萎れつゝ來りて裏に入り、これ御亭主五つになる子を入れる早桶を貰ひましよといひければ、野曝はこれを聞き、幼き人の不幸でござるか。死別は何れ悲しきものながら、取分け小兒をなくしては、さぞ愁傷でござりましよ、といへば老人涙を流し、未お若いによう言うて下さりました。有様はわしが孫娘でござるが、生質も相應ゆゑ、鳶が鷹を産みをつたと、喜んで育てましたに、惡疱瘡に取りつかれ、ひい〳〵いうて苦む故、貧しい中で物惜まず、醫療を盡して見たれども、縷かひもなき紅紙燭、赤き頭巾を著た儘で、遂にころりとなりました。起上るべき達磨さへ、倒れた儘の死姿、愁事聞く木兎を、誘ひに來たる死神の、まはす無常の風車、今は遺物となりし故、餘の事の口惜しさに、疱瘡神の祭棚を打碎き、赤い紙の幣帛迄引破つて捨てました。兒子めは男だけ氣強う堪へて居りますが、媳婦は愚痴なる女氣に、斷念め兼ねて亡骸を抱き上げ、乳房を含め子守歌を謠うて、何やら氣違の體なるを、漸々と慰めて、切て來世は美麗い、佛に生れて吳れかしと冷い顔に、今紅白粉を粧うて居ます。かはゆい事をしましたと、泣聲にて物語り、礑と落せし耳の念珠、涙

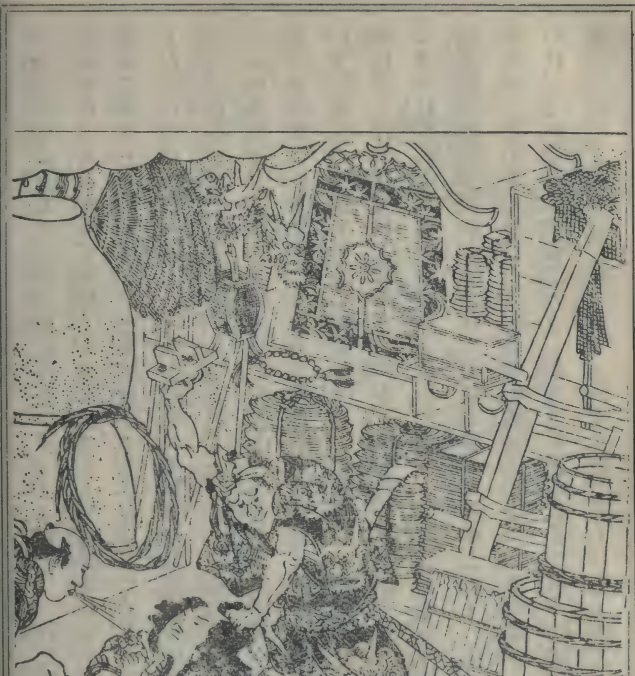
も掛けず、上を拂へば身を沈め、下を拂へば飛上り、右に開き左に避け、斬込む處をかいくゞり、或は踢倒し踏飛し、手當次第の人飛礫、陸離々々と投散し、閃々電光波上の燕子、類稀なる早業なれば、大勢の斬込む刀は徒に、只空を斬るばかりにて、或は襟首を摑まれて蓮池に投込れ、鼈の如くになりて浮つ沈みつするもあり、又は片手に差上げられて、敷石にうちつけられ、平蜘の如くになりて拳くもあり、遂に敵する事能はず、十四五人の中過半逃失せければ、今は提婆も見兼つゝ身を起し、舍利弗幻と共に斬つて掛れば、野曝も一刀を拔放し、三人を始め逃殘りたる者共を相手に、追ひつ返しつ戰ひぬ。元來野曝が刀は人をあやめまじといふ誓にて刃引なれ共、氷の如くにきらめきければ、敵は皆眞劍と思ひけり。折しも颯と夕風に、樹々の梢を吹散す、花の吹雪を身に浴びて、雙方暫く戰ひしが、野曝は益勢猛りければ、迚も敵する事能はじとや思ひけん、提婆を始め逃出し、途に迷ひて山門の上に跳上りければ、野曝も續きて追上り、山門の樓上にて又暫時戰ひしが、足場惡しければ、提婆方の者は殊更敵し難く、投落されて氣絶する者數多あり。殘れる敵は隙間を見て逃下りければ、野曝も跡を追ひて下りけるに、提婆は遂に逃去りぬ。是に因つて舍利弗幻兩人を捕へ、前日の返報承けをれと叫りつつ、兩人の額を打破つて突飛せば、兩人は鮮血流るゝ額を押へ、命辛々逃去りぬ。野曝は心地

襟に結び、日和下駄を穿きて天王寺に來り、石の舞臺の邊につつ立ちて待ちけるに、提婆組の俠客共は醉に乘じ、聲高々と小歌を謠ひ連れてぞ來りける。野曝夫と見てげれば、こは能き所にて出會せり。いかに舍利弗幻よ。前日汝等が勝負を望みし時は、我愼の中なれば、下旬迄延し呉れよといひつるに、提婆を恐れて立合はず、卑怯なりと罵りしが、見れば今日は提婆を首として十四五人の方人あり。今爰にて勝負をせば、我卑怯にあらざる事明白ならん。いざ總掛にして勝負せよと、多勢を少しも恐れざる、大膽不敵の一言に、さしもの提婆も氣を呑れて臆しけるが、弱身を見せじと胡盧ひ、汝自ら來つて勝負を願ふは、石を抱いて淵に臨み、薪を負ひて火に入るに異らず。危き事を望まずとも、命を大事に疾々歸れと罵りければ、野曝曰く、舌戰無益なり。いざ〳〵勝負と身支度す。提婆は衆人に下知をなし、若汝等敵し難き時は、我出て助太刀せん。彼奴假令鬼神にもせよ、雙拳四手に敵し難く、多勢に不勢物數ならずといひて、傍邊の石の水盤に尻掛けて見物す。其餘の者は下駄脱捨てて尻引からげ、目釘を濕して立向へば、野曝は袖捲して大手を廣げ、石の舞臺の眞中に仁王立に立つたる有樣、勢猛くぞ見えたりける。花見の諸人はこれを見て、すは喧嘩よと立騷ぎ、遠く退きて見物するもあり、老人女の足弱共は四方に亂れて逃去りぬ。斯くて惡黨等拔連れて隙間も無く斬掛るに、野曝は一腰には手

堪忍成難しと思ひしが、待暫し今誓を破りては、百日に刈つたる茅を、一日に亡す同然、出家の行のかひもなしと、怒の猛火を忍辱の、法水に打消して、唯俯きて不言。千金の弩は鼷鼠の爲に放さゞるは、これぞ眞の大丈夫、却て強く見えにけり。底意を知らぬ三人は、飽迄詈る惡口雜言、あな張合のなき腰拔奴と、大口明いて打笑ひ、したり顔にて歸りけり。斯くて野曝は下十五日の到るを待侘びけるが、程なく下旬になりければ、前日の返報して彼等を懲め、諸人の災を除くべしと、日毎に出でて三人を跟狙ひけるが、折惡しくして出合はず、素より家には居らざりけり。比しも彌生の終なれば、天王寺の櫻今を盛に爛熳たれば、花見の諸人群集をなし、木の間木の間に幕打廻し、酒酌交して遊ぶもあり、絲竹の調に興を添ゆるもあり。惛憹迄賑ひけるに、提婆仁三郎、舍利弗、幻を前とし、石佛の苔九郎、卒塔婆の露助、枕飯の犬平太、手向の水右衞門、骨桶の白平などいへる俠者共を、十四五人從へて、天王寺の境内を狂破歩行き、此の幕に踏込みては酒肴を所望し、彼處の席に到りては惡言を云散し、遊興の妨して弱きを侮る無法者、聊も意に適はざる事あれば、喧嘩口論をしいだし、杯盤を踏碎き、狼藉をする故に、人皆避けて管はざれば、最興ある事に思ひ、益狂破歩きけり。時に野曝悟助此事を聞き、能き折なりと思ひつゝ、彼野曝の衣服を著し、鮫鞘の大脇差を差こらし、尺八を腰に差し、手巾を

これ兩人の者、勝負をせずば存分にして遺恨を晴せ、疾々といひければ、心得たりと兩人は、有合ふ卒塔婆を押取つて、連打に打ちければ、野曝は鬢髮亂れ衣服破れて、見苦しき體となる。斯迄打擲せられても手向せぬかと罵りつゝ、此方へ寄れば彼方へ蹋倒し、彼方へ寄れば此方へ蹋飛し、提婆が方へ倒れければ、仁三郎泥下駄にて面上を踏附け〳〵踏飛す。餘りの事に野曝は、誓を破り彼奴原を、微塵になさんと思ひしが、襟に掛けたる袈裟を見て、じつと堪ふる辛抱に、拳を握り牙を齩み、怒を忍びて居たりしが、仁三郎立寄つて、いかに汝男を立つると日來云誇ると聞きつるが、口程にも無き此有樣、何とて今日は男を立てぬぞ。少しも無念と思ふなら、手向せよ。男魂持たざるや、如何々々と耻ぢしむれど、一言の答もせず、唯低首きてぞ居たりける。舍利弗幻兩人は勝に乘り、胸ぐら取つてねぢ倒し、惡口存分脛存分、虎の威をかる意趣晴し、野曝は只自由になり、踏れても扣れても、口を閉ぢたる無言の行、難行とこそ見えにけれ。舍利弗、幻兩人は、店に並べし葬具の賣物、編笠、天蓋、龍頭灯、棺、早桶、瓶の類を、微塵の如くに打碎けば、仁三郎これを見て呵々と打笑ひ、快々。さりながら、汝等が存分に仕返したる證なくては、受けたる耻辱雪げまじ。夫々と下知すれば、舍利弗これを心得て、又野曝に立向ひ、下駄を取てはつしと打てば、忽ち額に疵附きて、鮮血滴り流れければ、辛抱強き野曝も、最早


摂州浪華の侠客野曝悟助心願あるによりて死念をしのびて打擲にあふ
此與の侠客とも悟助が弱みにつけこみて遺恨をむくゆ



刀劍の勝負は更なり、纏の詞爭もすまじき心願にて、已に今宵も子の刻過ぎ、明日の部になりぬれば、今は相手に成難し。何卒來月の下旬迄待異れられよ。其節に到らば、何時なり共勝負致し候べしといへば、仁三郎胡盧ひ、そばえたる云ひ事かな。これなる兩人を人中にて打擲したるには時をきらはず、今汝が勝手につき時を延すは何の道理ぞ。殊に心願などとは卑怯の一言、臆病至極の振舞なり。疾々勝負を決すべしといふに、舍利弗幻其詞の尾につきて曰く、汝今に至りて尻ごみするは、察する所師匠提婆殿が來られし故に、怖をなしての事ならん。然にあらずばいざ立合へとせり立てぬ。野曝曰く、假令臆病卑怯といはるゝ共、心の誓は破られず。見らるゝ通り俗體に袈裟を掛け、出家に等しき我姿、此所を聞分け得心して歸ておくりやれ。これ手を下げて賴申すと恥を厭はず詫びけるが、兩人は其弱味に附込みて、益勢強くなり、此場に臨みて何の得心、いざ立合へ。これでも汝立合はぬかといひつゝ、毛脛を引捲つて泥下駄を肩尖に踏みかくれば、幻は立寄つて野曝が面上に強か唾を吐掛けたり。野曝は雙手を組み、心の怒を忍びつゝ、假令何樣にしたまふ共手向は仕らぬ。もう堪忍して戻つておくりやれ、これ掌を合すお二人と、頭を下げ身を伏して樣々に詫びければ、仁三郎肩をゆすつて胡盧ひ、近頃此難波にて腕立すると聞きし故、少しは覺もあるらめと思ひしに、案外なる懦弱者、

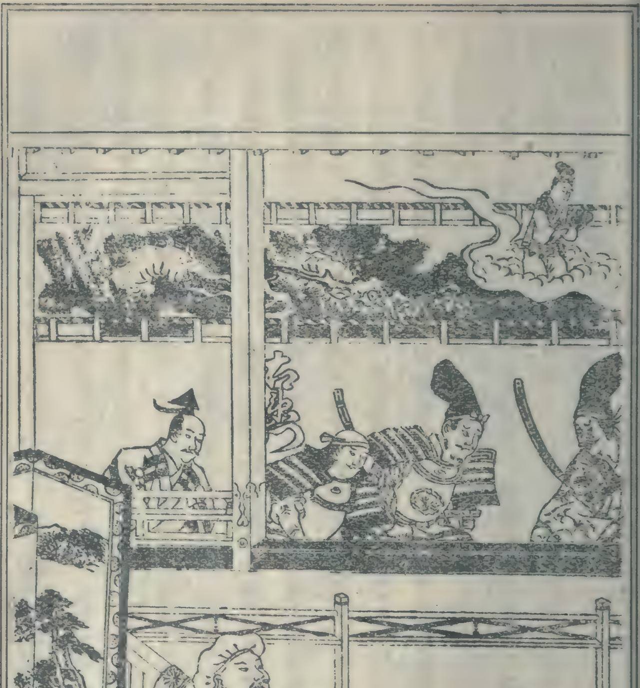
しと聞流して、只傍痛く思ひ居たるが、門弟の汝等を打擲されては、其儘に捨置き難し。よしよし我一白眼に白眼縮めて、思ふまゝに仕返さすべし。氣遣すなと廣言を吐散し、いで〳〵汝等と倶に行くべしとて、素肌に黑羽二重の小袖唯一重を著し、朱鞘の大小を横たへ、三人ともに日和下駄を踏鳴し、野曝が方へと急ぎ行きぬ。此時はこれ二月晦日の夜の事にて、野曝は家にあり、尺八を吹きすさみて居たりけるが、夜半の鐘響きけるにぞ、九つの時過ぐれば明日の部なり。上十五日の初出家の所作を行ふ時到れりと思ひつゝ、袈裟をかけて持佛に向ひ、香を燒き經を讀みて居たりけるに、表の戸を急遽しく打敲きけるにぞ、何人ぞ用あらば明日來り候へと聲懸くれば、いな是は物買者なり。こゝ開けて棺を賣下されよといへば、商の事ならば止事を得難しと呟きつゝ身起り、扉を開き戸を引開くれば、提婆仁三郎、舍利弗鬼平次、幻蝶藏等三人、裾を捲上げ、泥下駄を穿きながら打通り、提婆は在合ふ早桶の上に尻掛けて片足を組み、腮を以て下知すれば、舍利弗幻兩人野曝を中に挾み、我々は晝の仕返に來つるなり。同道せしは我々が劍術の師匠、提婆仁三郎といふ人なり。勝負を見居に參られたり。いざ〳〵勝負を決せよといひて刀に反を打ちて詰寄せたり。野曝は急はしく兩人を止めて曰く、仕返に來られしは極めて理なる事なれば、速に勝負を致し度存ずれ共、某兼て心に誓ひ、上十五日の間は

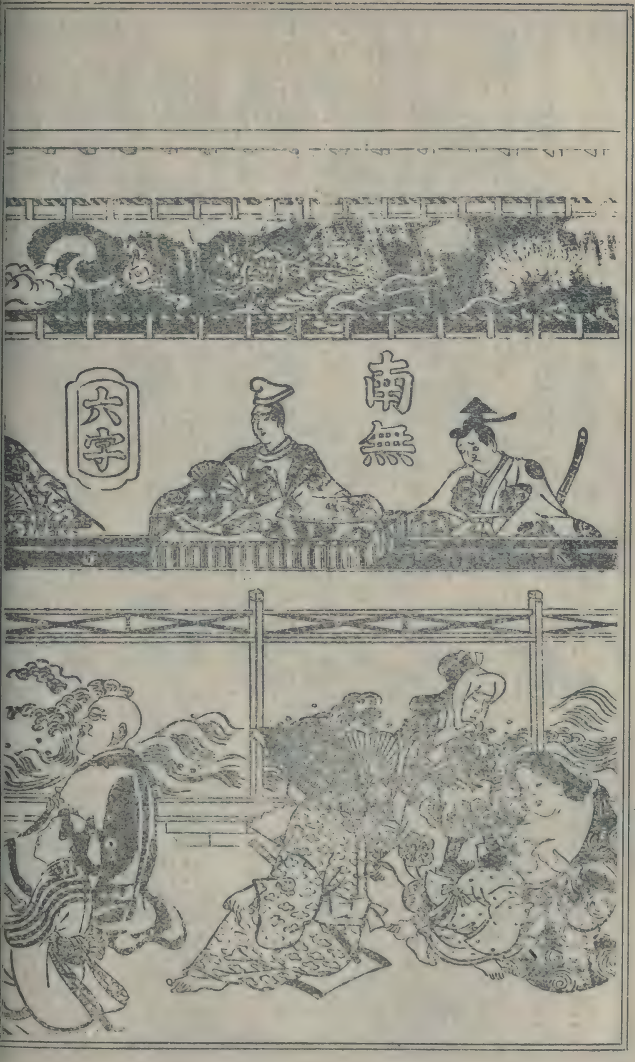
本朝醉菩提　巻之四

俠客提婆達多品（後談）

其比攝州の裏奈良街道深江といふ所に、提婆仁三郎といふ武士の浪人ありけり。曾て武藝に達し、劍術柔術の指南して、浪々の營業とし、獨身にて暮せしが、無賴兇惡の輩なれば、類は友を集むる習にて、俠客の惡棍等數多弟子となりて武藝を學びければ、自ら俠客の首長となり、平日數多の俠者等を誘ひて、人立多き所を徘徊し、拔拆羅狼藉を事とし、人に災する事多かりければ、皆人これを憎むと雖も、後日の仇とならん事を怖れて敵對せず、街に行逢ふ者も除けて通しけるにぞ、益勢を得て我に敵する者なしとぞ誇りける。偖彼舍利弗鬼平次、幻蝶藏等も、此提婆が弟子にてありけるが、野曝が爲に恥辱を受け大に憤り、其日直に提婆が家に行き箇樣々々と委しく語り、我々其仕返をせま欲く思ひ候へ共、我等許にては迚も敵し難く候へば、何卒後見して恥辱を雪がせ給はれかしと賴みければ、提婆これを聞きてほくそづき、我疾より其野曝とやらんが腕立する由聞きつるが、畢竟童の辻諍に等しきこと、相手になるもおとなげな

一禮を述べ、鰐の口を遁れたる心地し、娘の手を携へて急去きぬ。舍利弗幻の兩人は兼て野曝が人に尊敬せらるゝを憎み居たる折ふしなれば、能幸と詰寄せて、いかに野曝汝は出過ぎたる奴めかな。誰も頼まざるに女原の贔負して逃しやり、我々が興を妨ぐる奇怪さよ。此上は汝を相手に腹いせすべしと言つて、右に掛るを野曝は、しやこしやくなりと呼はりつゝ、身を閃りて撞的蹴飛し、後に組むを雌手を伸して腰車、弓手をはかせて幻が、首筋掴んで人車、起上つて又向ひ來る舍利弗が、前がは掴んで首筋つかせど、ひるまぬ我武者、幻も又起上り、飛掛つて兩方より、腕がらみに取附くを、どつこいさせぬと身を沈め、くる〳〵まはす腕車、或は臂當小手返し、後矢筈にしめあぐるを、心得腕首刎返し、エイと一聲眞逆さま、なほ舍利弗が取附くを、そつ首捕へて頭轉倒、起る所を踢返して、泥下駄にて兩人を、踏附々々踏飛し、手ばたきをして立つたるは、實に冷眼掙扎なり。兩人の者は漸々起上りけるが、迚も敵する事能はじとや思ひけん、面を顰め頭を押へて逃去りぬ。此兩人日來此邊に來りて屢狂破れける故、是を見物して居たる者共、心中に快しと思ひ、野曝が本事を讃ざるはなかりけり。偖野曝は尺八の歌口を濕して、瀧落れんぼを吹鳴し、しづ〳〵我家に歸りけり。此喧嘩の仕返、いかにありけるやらん、次の巻を讀みて知るべし。




六字
南無

度これを見る者、心を動さゞるはなかりけり。斯くて一日香晒小田井を伴ひて、浪花に赴き、女太夫六字南無右衛門が浄瑠璃芝居を見物しけるが、すでに芝居果てて傍邊の茶店に休居たる折しも、前面の方より、

えい〳〵入江のナア〳〵、　難波入江の名も高き、腕に覺えの婆羅門組と、喧嘩かはう〳〵黑臑組よ。無理が通らば、のうけのけ。茶筅立髪みご草履、大道せまき張臂や、髭を自慢のきり〳〵す、さいたりさいたり長刀、六波羅樣の出立ばえ。

とうたひ連れて來りしは、舍利弗鬼平次、幻蝶藏といふ男達の惡者なり。大に醉狂して嚾きつゝ來り、事がな笛と思ふ時しも、小田井が美麗姿を見て此茶店に立寄り、種々戯れたる事をいひ罵り、彼所の酒屋に連行きて酒の相人さすべし。いざ〳〵來れといひつゝ、兩人小田井が手を取りて引立出でけるにぞ、香晒は周章迷ひて引止め、詞を盡して詫びけれ共、兩人は女ばかりと侮りて合點せず、大に難儀におよびけり。時に野曝悟助折よく此所に來かゝり、香晒親子が難儀の體を見るに忍びず、舍利弗幻の兩人に向ひ、見れば女ばかりの連と見えたり。無益なる戯して迷惑さすな。放ちて歸らしめよといひつゝ押隔て、香晒等に向ひ、こゝ構はずと疾々行き候へといへば、香晒は腰を屈め、能き所へ在して、我々が難儀を救ひ給はる忝さよと

て時光流水の如く、金烏玉兎の足疾く走り一瞬の間に幾年を經て、悟助已に二十餘歳になりけるが、熟思ひけるは、我身不肖にして出家を遂げずと雖も、尋常の人にてあらんも口惜しき事なれば、假令形は俗體なりとも、毎月上十五日は出家の行をなすべし。又出家の人を救ふも俗の人を救ふも、其救ふ處に於ては差別あるべからざれば、下十五日は俗體に袈裟をかけ、精進潔齋にて朝夕香を焼き經を讀み、萬を愼みて何程忍び難き事ありても、怒をなさず爭ふ事をせず、柔和忍辱を專とし、下十五日は俠者の打扮して、所々方々の人立多き所を徘徊し、剛を挫き柔を助け、人の難儀を見ては救はずといふ事なかりし故に、人皆大に喜びぬ。人の災を省く事髑髏目中の草を拔くが如くすべしといふ意にて、野曝の白骨を地紋に附けたる衣服を著たる故に、野曝悟助と異名して、尊敬せざるはなかりけり。爰に又かの詫痲彥惣は、前の年泉州堺に居を移し、甲斐町中濱といふ所に扇店を開き、名を塵右衞門と更へ、自己扇の繪をかき、妻香晒は扇を折習ひて、夫婦共稼にしけるにぞ、漸々に仕合能くなりて、今は何不足なき身代となり、塵右衞門は已に三十八歳に到り、香晒は三十六歳に到り、娘小田井も健に生立ちて、今年十五歳に到りけるが、美目貌美麗く、梨花に雨を注ぎ、白玉に香を止めたるに等しき容なれば、一

○此一段はすべて是、謠曲山姥に據つてつくれり。山姥の謠は一休つくりたまふと云傳ふ。

迦哩尊者　俠客提婆達多品第六

夫は偖措爰に又、梅津嘉門の一子彦丸は、前の年一休の弟子となりて剃髪し、法名を是雲といひて一休の庵室に在り。初の程は坐禪念經の外他事を顧みず、能く務めけるが、爲人に從ひ志荒々しくなりて、出家の行をきらひ、山野に獵して鳥獸をとり、腕立を好みて人に疵を負せなどして、放逸無慙の行跡をなしけるにぞ、一休もて扱ひ給ひて、止事を得ず勘當し、庵室を追出し給ひぬれば、是雲は身を寄すべき所だになかりけるが、浪花の千日寺の邊に、葬具を賣りて世を經營む。棺内といふ者、かねて一休の檀越にてありし故、是雲是を力に浪花に到り、棺内に見え、委細を語りて打歎きければ、棺内不便に思ひ、しからば我家に同居して、いかにも身の上を計り候へとて養ひおきけるが、是雲は還俗して名を悟助と更め、葬具を造ることを覺えて、大に棺内が活業の助けとなりけるにぞ、益不便を加へ、我子の如くに思ひて養ひ置きける内に、棺内は病によりて亡人の數に入りぬ。素より妻子なき者にて、跡を繼ぐべき親類さへなかりければ、是非なく悟助此家の主となり、自己葬具を造り、これを賣りて月日を送りぬ。斯く

迄爰にあるよと見えしが、閃りと飛んだる岨路の、間道さして走り行き、山また山に山めぐり、山また山に山めぐりして、行方も知れずなりにけり。

○斯くて捕方の輩は、老女を取逃して口惜しく思ひけるが、詮方なく彼隱家に到り、幼女どもを連れて山をくだり、主君に此由をきこえあげ、幼女どもの古鄕を尋ね問ひて、それ〲に送りかへしぬ。又緣兒を賣りたる百兩の金、老女戰ひし時、懷よりとり落したるを、捕手の輩拾ひとりて橋六にあたへ、先年老女にうばはれし金の代となさしめければ、橋六は喜びて攝州にかへりぬ。おもふに老女が不義の財悉く有漏路兄弟に奪はれ、あまつさへ百兩の金までとりおとして、橋六が手にもどり、おのれは只身一つを脫れゆきしこと、すべて是惡の報のこまやかに至れるなり。有漏路兄弟がゆくすゑも、いかでか無事を保つべけんや。緣兒を買行きたる旅人はいづれの所の人といふ事を知らず、末にいたりて知るべきなり。

○和漢三才圖會に曰く、安計呂山は越中越後堺川の奥山なり。古木の榎あり。是乃ち所ㇾ携杖なりといへり。京傳案ふに、山姥の能に、杖に生木の枝をつくる事、かの榎の古事に據るにや。

と謡ひつゝ、近附く捕手の襟首攫み、右の小脇に引寄せて、かいこみざしの扇の手、開扇のひら
き身に、はつしと投るも呼吸の拍子、又組附くをさし上げて、かざし扇のかざし投、

秋はさやけき、影を尋ねて、月見るかたにと山めぐり。

とうたひつゝ、刀をすらりと抜放し、左右にふるも手練の手ぎは、扇の太刀風颼々と、峯の嵐
に異ならず。此に追ひつめ彼に追ひつめ、縦横無盡に斬散す、瀧は鼓の調あり。松風ともに
吹く笛の、聲澄みわたる谷川に、臨む嶮岨の岩群を、飛鳥の如くに駈廻り、どつこい遣らぬと
支へたる、捕手の目先へひらく／＼、つき出す刀のさし扇、働く目遣さそくの歩み、白髪混り
の亂髪を、風に吹せて追行けば、捕手は後へたぢ／＼／＼と、象戯だふしに倒れたり。なほ追
返し追廻り。

冬はさえゆく、時雨の雲の、雪をさそひて山めぐり。

と謡ひつゝ、めぐり／＼て立舞ふ間に、足を飛せて小石をはつしと蹴おとせば、谷の山氣を誘
ひて、晴天忽ちかき曇り、大雨車軸を流すが如く、大風樹木を吹倒し、閃く電光霹靂、ぐわら
ぐわらぴつしやり頭轉倒、蹴けつ轉びつ捕手の人數、恐れ戰慄き辟易して、いひがひなくぞ見
えたりける。老女は益々勢あり。山姥が手段の程を、見よや／＼と峯に駈けり、谷に響きて、今

は人違にこそあらめ。笑止なる人々や。速に道を開きて通らしめ候へといへば、捕手の人數の背後より、一人の男出來り、いかに老女よ我を見忘はすべからず。我は先年大和國にて懷中の金百兩を汝が爲めに奪れたる、神崎の娼家橋六なり。汝此山に隱住み、數多の幼女を養立てて人商人を業となす事、我因ありて知りつる故、望月の館に申し告げたるは、一つには先達つて疑の懸りし我身の明を立て、二つには金を奪れたる遺恨を晴さん爲なりと、恐る〳〵いひて、頓て捕手の後へ逃込みしは、臆病者と知られたり。捕手の人數は同音に、斯く明白なる上は逃るゝ道はあるべからず。疾々縛を受けよといへば、さしもの老女も今は爭ふべき詞なく、外眥を逆立て牙を鼓み、拳を握りて怒をなし、谽谺に響く大音にて、あな口惜しや殘念や。我此山中に隱住み、人は知らじと思ひしに、事露顯の上は運命も是迄なり。今は何をか包むべき、我若かりし時は都五條坂に住みて百魔といひ、後に胸毛の黑平が妻となりて岩芝といひしが、今は此安計呂山に住む故に、百魔山姥と異名せり。我豫て習ひ覺えし、昔磯の前司が傳へたる男舞、扇の手も劍の手も、其妙に至りては差別なし。いで〳〵我劍の舞の手練の程を見すべしと呼りつゝ、帶ゆり上げて立向ひ、

　春は梢に、咲くかと待ちし、花をたづねてやまめぐり。

じて、今は大樹となり、これを山姥の杖榎といへり。兄弟の者は此榎のもとに埋むべしと思ひ、土中を穿ちけるに何にかあらん鍬の先にあたる物あるにぞ、不審みて掘出し見るに一つの壺にて、裏に數多の金あり。兄弟顔を見合せて莞爾と笑ひ、これは疑もなき老女が貯の金なり。計らず此所を掘當てしは天の與なり。老女折々此木のもとに徘徊せし故、豫て不審に思ひしに、果せるかなと悦びつゝ、兄弟金を分ち取りて懐にし、紅兒が死骸は其穴に打込み、東の路を望みて逃去りけり。斯る折しも老女は彼百兩の金を懐中して立歸り、榎のもとに目をつけて近附見れば、壺を掘出し金は殘らずなかりければ、さては兄弟の者こゝに死骸を埋むとて、此壺を掘出し金を奪ひて逃げたるならん。悪き奴原が擧動かなと大に怒り、定めて東の道を行きつらん。追掛けて捕ふべしと、いそがはしく嗜の一腰を取出し、飛ぶが如くに馳行きぬ。斯くて廿町ばかり追行きし所に、茂林の中より腹巻に擘手臑楯顱巻手繦おごそかに打扮ちて、捕手の人數と覺しき者大勢現れ出で、後前に立塞りて老女を中に取圍めば、老女は前後を顧みて、こは何するぞと呼りぬ。捕手の者等聲烈しくいひけるは、何すとは愚なり。我輩は當國の守護職望月左衛門殿の命を受け汝をとらへに向うたり。計ず途中にて出會ひしは汝が運の盡きたる所なり。疾々腕をまはせといふ。老女呵々と打笑ひ、妾は縄目にあふべき覺なし。そ

老女これを聞き、いかにも是は賣物なれど、見給ふ如く勝れて美麗なる生れなれば、安金にては賣難しといふ。旅人曰く、して又何程の價にて賣給ふべきや。老女曰く、小判百兩ならば賣り候べしといふにぞ、そは餘なる價なり。何いふも未だ幼者ならずや、七十兩に賣候へといへば、老女呵々と打笑ひ、瞼押あけて能見給へ。鐵の履を穿きて尋ね歩くとも、是程の美人世にまた二人とあるべきかは。今少し生立つれば千金にも替ゆべき者なれども、斯く氣のそれたる奴なれば、枉げて百兩に賣るべく思ふなり。眼の明かぬ人かなと嘲りて、又行かんとするを引止め、氣短なる老女かな。左あらば百兩に買ふべしとて、懐中より金取出して渡しければ、老女は是を受取り、數を改め莞爾と笑ひ、御身は果報よき人かな。能所へ來て搖錢樹の茄を得たりといひて、緑兒を突きやれば、旅人は緑兒が身上の塵を打拂ひ、泣くなく是からはこちの貨物なれば、隨分情を加ふべし。必ず氣遣ふ事なかれといへば、緑兒は只虎の穴を遁れて、龍の淵に入りたる心地して、泣くより外の事ぞなき。斯くて旅人は緑兒を脊に負ひて山を下り、老女は家路に歸りけり。偖有漏路兄弟は老女が下知を受け、紅兒が死骸を藁薦に包みて荷ひ出で、埋むべき所を見立てけるが、此家の背後に年經りたる榎あり。是は往古眞の山姥が生木の杖をさかしまに挿したるに根を生

跡の未だ消えざるは、逃出でて程もあらじ。殊に案内も知らぬ山中を、幼足にていかでか遠く走るべき。途中に迷居るならめと思ひつゝ、太郎よ五郎よとて有漏路兄弟を叫起し、汝等は紅兒が死骸を持出でて、いづくにも埋めよ。緣兒めが逃出でたれば我は跡を追行くなりとて急はしく猪追棒を追把りて馳行きぬ。偖緣兒は夢路を辿る心地して、凡三十町許落行きけるに、後より老女韋駄天走に追來るにぞ、こは如何にすべきと瞭迷ひけるが、老女は已に追附きて緣兒を踏倒し、やをれ汝は形に似ぬ膽の太き奴めかなとて、棒を振上げて打たんとしたるに、四五疋の猿馳來り、或は棒の先に飛びつき又は手足に取附きて働せざれば、老女は大に氣を焦ちて、猿を打退けんとするに、彼鳥どもも、嘴を鳴し羽だたきして老女の眼を突破らん勢なり。老女は益怒をなし、鳥を追へば猿近附き、猿を追へば鳥來りて妨ぐるにぞ、さしもの老女も惘れけるが、漸々追退けて緣兒をにらみ、汝は大事の賣物なり。逃ぐるとて逃すべきか。其根生を擲なほして大金にせねばならぬ。連歸りて後日の懲、いかにするか、見よ〳〵といひつゝ、小脇にかき抱きて行かんとせし折しも、傍邊の炭燒小屋の裏より、旅裝束したる男出來り、これ〳〵老女しばし〳〵と呼止め、某は旅人なるが、昨夜道に踏迷ひて詮方なく、此小屋に夜を明しぬ。今あれにて承はれば、其幼き者は賣物なる由、實に左あらば某に賣與へ給ふ

足行きては振返り、心は後に後髮引るゝ樣に覺えしが、思ひきり〳〵、烏の飛ぶ方を心當に走去く。紅兒は戶口まで這出でて後を見送り、是が此世の暇乞、今一度振返りて顏見せて吳れよかし。死なぬといひしを實と思ひ、夫を力に行きたるは、流石に年の行かぬ故、頑是ないのが不便なり。何のこれが生きられう。死別とは知らずして、行きつる事の可愛やと、影見ゆる迄伸上り、あな心なの朝霧や、跡を隔ててもう見えぬと前を慕うて魂は、もぬけの體秋の蟬、うんと一聲叫びつゝ、尻居に撞的倒れしが、がつくり弱る今般の際、南無阿彌陀佛なむあみだ佛と唱ふる聲も明殘る、蚊の鳴く聲に異ならず。諸行無常と吹く風に、寂滅爲樂と一葉散る、ああ一葉散る息遣、幽に通ふ玉の緒の、切れてはかなく成りにけり。時に怪しや、一陣の冷風颯と吹來り、樹木岩石鳴動して、一道の陰火閃々と燃上り、空中に大勢にて、呵々と笑聲聞えけるが、形は見えず忽ち音もなかりけり。これは是先年烏部野に會合して、嘉門が妻子を亡すべしと相議したる、惡靈等の所爲なるべし。此時主の老女は、別家の方に物音あるを聞附けて睡を醒し、目を摩撫でつゝ出來りて見たりけるに、縛の繩解捨ありて、緣兒は此に居らず、紅兒は息絕えて死し居たりければ、緣兒めは何處へ去きつるやといぶかりつゝ地上を見れば、朝霜の裏に小き足跡の附きてありけるにぞ、偖は紅兒め緣兒が繩を解き、入智慧して逃せしに疑なし。足

方を尋ぬる便ともなり、母上の仇をも報い、我身も又迎ひ取れて療治を加へなば、本復する事もありぬべし。最早夜明に間もあらじ。彼近道は箇樣々々と云敎へければ、緑兒は頭を打振りて、假令夫がよきにもせよ、姉上の此體を見捨てて何と行かるべき。何卒快氣し給ひて、兄弟連立ち逃れてたべといひければ、然思ふは宜なれど、其方が爰に居たりとて、我病の治るべき道理もなし。時刻遷りて老女睡を醒しなば、其方も我身も此上に、何なる憂目に逢んも知れず。兎角いふ間にあれ〱〱、夜明烏が鳴くぞかし。其方に再び逢ふ迄は、死ぬ事ぢやない氣遣すな。死なずに急度待つて居る。疾々行けとすかされて、賢い樣でも流石は年の足らぬ故、此詞を實とし、然らばわしは逃下りて頓て迎によこしましよ。必ず死なずに在せかし。とはいふものの暫の中も、名殘惜やと取附きて、今生の別とは蟲が知するしやくり泣、姉が心の悲しさは、五臟六腑もちぎるゝ思ひ、犇々と抱合ひ、別れ兼ねてぞ居たりける。時に四五羽の烏飛來りて、軒に近く舞居たり。紅兒是を屹と見て、これ妹あの烏の爲體、道を敎へんと思ふ意ならめ。夜も已に明けたれば早く〱と急せつゝ、彼卷物を取りて守袋の臍帶の包と共に懷に入れさせ、裔を高く褰げて遣り、いざ〱とて心強くも押しやれば、名殘惜しげに立出でしが、果して彼烏どもは前に飛び、道敎ゆるに疑なし。緑兒は出は出でけるが、二足行きては振返り三

ぞ、堪難さに身を動かせば、自ら縛繩咽をしめ、息詰りて苦しければ、蚊を追ふ事も成難く、唯うめきてぞ居たりける。時に紅兒は、漸々正氣づきて起上り、緑兒が繩を解きやらめと思ひつつ、這寄れども、柱に高く縛れたれば蹇の身の詮方なく、壁に取附立上りては合破と伏し、のび上りては撞的倒れて、氣をあせりけるにぞ、身體弱り目轉きて病苦をまし、あな苦しや堪難やと叫呼び、七轉八倒して今も死ぬべき苦痛の體、緑兒は是を見るに忍びず、介抱し度思へども、身動ならぬ縛繩、のう如何に姉上よ、苦しう御座るかせつないか。必ず死んで下さるな。あゝ此繩が解いて欲い。解いて欲いと身を悶え、我身の痛さは厭はずして、引けどしやくれど叶はぬ繩目、玉の腕を荒繩に、劘破りたる疵口より、流るゝ血しほ血の涙、身上を朱に染めなせり。斯る折しも先程の猿再び又馳來り、緑兒が繩を解きて去りけるにぞ、緑兒は嬉しさ限なく、外の方に走出で、清水を含來りて、急はしく紅兒を抱上げ、口に移して勞りければ、漸々人心地つきて、苦しき息の下よりいひけるは、我身豫て此山を逃出でんと思ひしゆゑ、草刈童共に尋ね問ひて、一條の近道ある事を知りぬれども、かく蹇となりし故、逃出づべき樣もなく打過ぎぬ。其方は此曉を待ちて此山を逃下り、當國の守護職望月左衛門殿の館を尋ね行き、此法語一卷を證據として梅津が娘と名乘り、老女並に有漏路兄弟が悪事を告聞申すべし。さすれば兄上の行

る面惡さよ。後々の懲に、いで辛目を見すべしとて、拳を上げてしたゝかに打ちければ、免給へと泣叫び、打戰きて居たりけり。紅兒は是を見て、我身を打るゝよりも尚、胸に響きて苦しければ、急はしくいひけるは、これ婆々樣、其子は我が賴置きて、しばしの内背中捺つて貰ひしなり。其子の科には候はず。我身をいかにし給ひても、其子は免給はれかし。慈悲ぞ情ぞこれ申しといひつゝ、掌を合せて拜みけるが、老女はこれを見遣もせず綠兒に對ひ、汝さばかり彼が傍に居たく思はば、いつ迄も爰に居て、彼奴がのたれ死するを見よといひつゝ、荒繩を把りて高手小手に縛上げ、柱にたかく縛りつけて、紅兒を白眼つけ、汝は未だ死ざるか、よく／＼業の惡しき奴、どれ面見せよと、腮に片足かけて顏を擡げ、瘦せをつたな。もう是では死ぬるに間もあるまい。綠兒よ今夜は其儘夜を明し、此業人奴がうなり聲を、聞いて樂めよいざまと、鼻の先にて胡盧ひ、いで此兎を料理して寢酒飮まんと謐きつゝ、母屋の方へ出行きぬ。紅兒は絕入りて暫時音もなかりけり。斯くて時刻も移り行き、小夜も漸く更けぬれば、月の影さへ仄暗く、峯の嵐も音絕えて、唯谷水のむせぶのみ、佗しげに鳴く梟の、聲も寂寞崩家の、飯篠群竹疎垣、色々に鳴く蟲の音も、弱りて細き糸薄、いとゞ哀ぞ增りける。綠兒は嚴しく縛られて、髮は亂れ目は泣腫し身は痺れ、腕は高く腫上り、死後れたる秋の蚊の、飢ゑたる儘に集來て、頻に身上を螫しけるに

ながら命存へたればこそ、其方にも逢ひぬるぞや。天をさへ倶に戴かずといふ母の敵眼前に在りながら、女とて手出もならず、男子ならば幼くとも、一太刀恨みて孝養に手向けんものを徒に、敵の顔を眺めて月日を送る事、口惜いとも無念とも、いふべき詞はなきぞとて、病苦も忘れて牙を嚙み、拳を握り身を悶え、怒の涙ぱら／＼／＼、實武士の芳しき、薫を殘す强健さは、流石梅津が娘なり。綠兒は道理と差寄りて、背中を撫でて勞りぬ。良在つて紅兒は、目に溜る涙を拂ひ、其方に逢ひしは嬉しけれど、其かひもなき我業病彼を思ひ此を思ふに、我々親子兄弟は、いかなる宿世の惡報にて、斯く薄命にはありけるぞ。神も佛も是程に、見捨給ふか恨めしや。左にはあらずや妹よといひければ、實も左樣に候ぞ姉上樣と答へつゝ、互にひしと抱きしめて、あたり憚るしのび泣、霜夜にもろき竈馬の、聲弱りたる風情なり。程なく此日も暮果てて、夕月夜の影晃々と、窓を洩りてぞさし入れぬ。斯る折しも主の老女、左の手に弶を提げ、右の手に兎を提げて、背後の坂道より歸りけるが、紅兒はいかになりしぞ。食を斷ちて置きたれば、定めて最早死つらんと思ひつゝ、別家に立寄り窓に顏をさし入れて見たりけるに、紅兒と綠兒と抱合ひて泣居たりければ、大に怒りて踊入り、綠兒が襟首摑みて引退けつゝ、目をむき出し、やをれ惡き奴が擧動哉。紅兒に情を懸くるなと嚴しく云附置きつるに、我留守を窺ひて爰に來り、介抱す

しゆゑに、母上は其方を懐に抱き、我身の手を携へて雪中を辿り、如意山まで落給ひしに、御痛はしや、彼有漏路兄弟が爲に弄り殺になり給ひ、其方は谷底に蹴落され、我身は彼兄弟に奪取れたり。其時兒彦丸殿は十一歳にてありしが、父の勇氣を受けつぎ給ひて志烈しく、武藝といひ力量といひ、人に勝給ひぬれば、獨跡に止りて敵と戰ひ給ひしが、其後はいかになり給ふやらん知らざるなり。我身は有漏路兄弟が手より此所に賣れ來りて、早五歳を過し、今は已に十三歳になるぞかし。又其方の名を乙星と附けられしは、其腕の黑痣七搖破軍星の形に似たる故なり。是迄の我苦患といふは、譬へて云ん方もなし。遠寺の鐘の聲、暮六を告ぐるを聞きても、亡父戀し母戀しと、思ふ心のやるせなく、空飛ぶ雁をながめては、都へ行くが羨し、兄上や妹の行方はいかに懐しや戀しやと、思はぬ日とてはなかりしぞや。運命つたなき憂身の上、中々に存へて、生恥をさらさんより、死して此世の火宅を遁れ、草葉の陰にて父母に、孝行盡すがましならめと思ひきり、或は鎌を把上て咽に當てたる時もあり、又は小石を袂に入れて水に臨みし時もあり。度々死なんと思ひしが、我身失せては母の敵有漏路太郎兄弟といふ事を、誰知る者もあるべからず、いかにもして此山を逃出で都に上り兄上の行方を尋ねて、委しき事を語りたく、二つには其方の生死も糺したく、かひなき命存へて、辛い苦しい憂艱難、中々語り盡されず。さり

ても同じこと、して又夫程情ある人に養はれて生立ちながら、爰に賣られて來りしは何故ぞ。されば其事、陸作殿は去年の秋病によりて空しくなり、養母の袖萩殿とわしと二人暮して居たりしが、陸作殿の菩提の爲に、信濃の國善光寺へ參るとて、養母とわしと二人連にて旅立ちしが、養母は美濃と信濃の堺、熊が洞といふ所にて急病起り、これもはかなくなりし故、露現もなく呆れ迷ひて、同じ道にと思ひしが、假令餓死する迄も、一旦善光寺に參り申して、養母の志を遂げ我身の罪障を滅する便ともなし、其上にていかにも成果てなんと思ひ定め、往左來左の旅人の袖に縋り、掌を合せ腰を屈め、一錢二錢の情をうけて露命をつなぎ、心細さ覺束なさの獨旅、野山に臥せば恐しき獸の愁あり。夜嵐を凌がめと人の軒下橋の上に臥居れば、盜人よ畜生よと罵られて打擲れ、身に生疵は絕えはべらず。悲しき事の數々は、云盡されぬ旅ぞかし。斯くて漸々此山の麓、堺川とやらいふ所迄辿り來て、野宿して居たりしが、此家の有漏路太郞兄弟に捕れて、此所に來つるなり。我身の不幸不仕合を、思ひやりてよ姉上とて、紅兒が膝に顏を押當てて泣きければ、紅兒はこぼるゝ淚堰あへず、聞けば聞く程有漏路兄弟は、我々が深き仇なり。父上は誰あらう、足利公の管領職由理太夫勝基君の軍師にて、高位高官にも敬はれ、並ぶ者なき御身なりしが、世の有樣を見限り給ひ、恩義の爲めに岩倉山にて打死あり。直に敵兵宿所を圍み

て、あるやあらずや覺束なく思ひしに、不思議にも又巡逢ひぬる嬉しさは、夢現とも別難し。何人の情にて、何れの所に生立ちけるぞと問ひければ、緑兒云く、わしは何事も辨へねど、後々聞けば如意山とやらいふ山の谷底に捨てられし時、幸雪深き所に落ちて、身に恙なかりしを、近江の志賀の山里に住む、陸作といふ人、都へ炭を賣りに通ふとて、其所を通りかゝり、わしを拾ひて育てける由、陸作殿は貧人なれども、夫婦ともに情深く、わしに不便を加へてこれ迄には生立てぬ。物心を知るやうになりて、陸作殿語聞せけるは、其方の實の親といふは、梅津嘉門景春殿とて、歴々の武士なり。其方を拾ひし時、肌に守袋ありて、臍帶の書きつけにて慥に夫と知りつるなり。又都人の語るを聞きしに、景春殿打死せられたる砌、其方の母此花殿といふも人手に掛り、兄と姉は行方知れざる由、兄は彥丸姉は玉蟲と其名迄を聞置きぬ。何卒兄姉の行方を索めてあはさめと、年來心にかくれども、今に於て知れざれば詮方なし。後々迄土民の子といはするが不便さに、此事を語りおくなり。氏も素姓もあるぞかし。成長の後もし兄姉に巡り逢ふ事もあらば、之を證に兄弟の名告をせよとて、此守袋と臍帶の包をわしに渡されぬ。なか〳〵に兄上や姉上の、ありと聞くより懷しく、何處にどうして御座るやら、心許なさ逢ひたさに、泣かぬ日とてはなかりしぞやといひければ、紅兒はこれを聞き、懷しく思ひしは我身と

は塵ばかりもあらざれば、不審むも宜ぞかし。これを見て疑を晴してよといひつゝ、肌に附けたる一つの袋を取出し、斯る事もあるらめと憂中にも隱し持ちて、今迄肌身を放たざる、此一卷は則是、先祖より傳來の物にて、父上の遺物なりとて差出せば、緑兒は手に取り袋を開き中を見れば、小さき卷物ありて上包に、大幢國師の法語梅津景春所藏と書きたり。遽はしく己が肌の守袋の裏より紙の包を取り出し、上書に梅津嘉門景春娘乙星臍帶と書きたる手跡と合せ見るに露違はず。幼くて父の手跡も見知らざれども、自筆なる事疑なしと思ひつゝ、わしが證據は此黑痣、定めて見覺え給ふらめと、袖捲りして腕を見すれば、三つの黑痣七搖破軍の形なれば、紅兒はこれを見て、疑もなき我妹、さては姉上にて在せしか、懷しうござりしぞや、戀しくありしと寄添ひて、兄弟手に手を取組し、形は則ち筒井筒、井づつにむかふ垂髪子の、互に見かはす顏と顏、姉は變りて醜なり、妹は益美麗く、瓦に玉を比れど、よしあし曳の山の井の、深き歎に汲流す、涙は同じ涙なり。紅兒は良久しく言をもいはざりしが、緑兒がおくれの髮を搔きあげつゝ、顏熟と打視り、かはいの者や糸惜や。其方の三つの時別れたれば、顏も容も見忘たれど、今心を附けてよく〳〵見れば、目の裏の清さは父上に其儘にて、襟つきの樣子は母上に能く似たり。其方を見るは亡父母を、再び見參らする心地せらるゝなり。此世の中に生存命へ





鄕は定めて違ふべきが、同じ所に賣られ來て、一河の流に漂ふは淺からぬ緣ぞかし。其方の古鄕は何處ぞや、父母はいかに、兄弟はありけるかと、懇に尋ぬれば、綠兒泣々いひけるは、わしが古鄕は都にて、父母には死別れ、兄と姉には生別れ、心細い悲しい身でござるはいのといひければ、紅兒はこれを聞き、世の中にはよう似た事もあるものぞ。都と聞くさへなつかしい。我身の古鄕も都なり。其方の住家は都の何方でありしぞやと問ひけるに、都は萬里小路でござるといふ。して又父の姓名はいかにと問へば、夫はしかと云はれずといふ。紅兒云く、尤〳〵。父の名を明されぬ程ならば、定めて由ある人ならめ。斯強ちに尋ぬるも、此方に少し謂のあることぞ。若や其方の父の名は、梅津嘉門景春殿とはいはざるやと、いへば綠兒は驚きて、それを其方はいかにして知りけるぞ。斯くなり果てては父の名を、明していふも恥辱なれど、いうて問ひたき事もあり。いかにもわしの父といふは、梅津嘉門にて候といひければ、紅兒は飛立つ心を靜めつゝ、然らば其方の實の名は、乙星とはいはざるやと、いはれて猶も驚けば、それに違はあるべからず。夫なれば我身は其方の姉玉蟲がなれる果ぞといひけるに、綠兒はしばし不審顏、待給へ私が三つの時別れたれば、顏もしかとは覺えねど、姉上とは露思はれず。これは如何にといぶかれば、しか思ふは理ぞ。我身疱瘡の勞重く、顏も變り其上に、斯く衰へて昔の姿

ろざし、禮は詞に盡されずといへば、綠兒云く、多き子供の中には、情ある者もなきにあらざれども、老女嚴しく誡めて此所に訪ひ來る事を許さゞるゆゑ、誰も恐れて近附かず。夫ゆゑわしは、今老女の峯に登りて留守なるを幸に、忍びて爰に來つるといふ。紅兒は是を聞きて、身上の痛さをこらへつゝ、漸々に起上り、扨も〳〵老女はさばかり我を憎むかや。人買ふ人も人なるにといひさして、泣倒れければ、綠兒は彼が身の汚穢げにて、惡しき香のするをも厭はず、抱き起して、背を撫で腹を捺りなどして勞りける、心の裏こそ優しけれ。斯る折しも一疋の猿、枝栗を持來り、紅兒が傍に置きつゝ、二聲三聲悲しげに鳴きて去りにけり。程なく又一羽の山烏、小魚をくはへて窓より飛入り、これも紅兒が傍に魚を置き、哇々と鳴きて飛去りぬ。綠兒はこれを見て不審りけるに、紅兒語る樣は、我身爰に初めて來りし時より、なにがな善根を施さめと思ひつき、日に三度食物を一度減じて、其食物を飢ゑたる猿、又は烏どもに與ふる事日毎なりしが、鳥類畜類と雖も、其恩を忘れざるゆゑにや、我身此別家に在りて飢に堪へざるを憐み、折折今の如く食物を持來りて與ふるなり。鳥獸すらかゝる情はあるものを、苛强而老女の心、推量してたべ綠兒殿といひければ、綠兒は幼き心にも、道理と思ふ悲に、差俯きて泣居たるは、嵐にいたむ姫百合の、露をこぼすが如くなり。紅兒重ねていひけるは、其方とわしと生れたる、古

に新に賣られ來る幼女、年は七つばかりにて、名を綠兒といひける者、幼き心にも紅兒を深く憐み、假令老女に打擲きせらるゝとも、暫のうちも病苦を助かる樣に、介抱して遣はすべしと思ひつゝ、能隙を見合せ、彼別家に到りて闚見たりけるに、無慙やな紅兒は、塵芥充滿ちて、鼠の糞堆く積り、壁崩れ床腐りたる空家の裏に、藁の束を敷物とし、古蓑を身におほひ、木の切を枕とし、缺椀を傍に置きて臥したる樣、野分の風に古案山子を、吹倒したる如くなり。目さへ泪に肉爛れて血を流し、髮は莖藻を亂したるに等しく、手足は蟋蟀の樣に瘦細り、身上に垢深く積りて、膪の骨高く顯れ出で、身を搖かせうめく聲のすればこそ、生ける人とも思はるれ、唯なましき骸骨の樣にぞ見えたりける。綠兒は此有樣を見ていとゞ哀に思ひ、そばちかく寄りて額を撫でつゝ、心持はいかにあるぞと問ひければ、紅兒は重き頭を上げて、いと苦しげに息を吐き、優しくも問うてたもる嬉しさよ。兎角苦痛に堪へざるなり。とても息の通ふ中は、此苦を逃るべしとも覺えざれば、一日もはやく死にたしと思ひぬれど、未だ惡業の滅せざる故にや、死ぬる時節も來らずといふ。綠兒云く、左樣に心弱く果なき事をいひ候な。これを食べて力をつけ候へとて、袂の八つ口の間より握りたる飯を取出して與へければ、紅兒はさめぐ〵と泣き、子供多き中にも、誰一人我を憐み問來る者もあらざるに、年だも行かぬ身を持ちて、深き情のこゝ

さは、ぞつと身の毛も立つばかり、唯消々となりにけり。老女は益怒をなし、袖まくりして立上り、丈と等しき黒髮を、手にくる〳〵と卷きつけて、簀子の上に引倒し、やをれ獄道め、一思に息の根止めて吳れんずといひつゝ、彼鳥の血の滴る、出刄庖丁を逆手に取りて赫しけるが、頓てこれを投捨て、砧の槌を押取りて、背骨を掛けて打ちければ、あな痛や堪難や。もうこんどから早う歸るでござりましよ、何卒免して下されよ。御慈悲々々と泣叫ぶを耳にも入れず、今日一日は食止なるぞ、思知れよと嘯きつゝ、足を飛せて竈の前にはつしと蹴やり、是外の子供等よ、若我に隱して彼めに物など食すると、傍杖打が合點か。嗜人使ふは苦を使ふぢや。おとましの浮世やと、譟き〳〵入りにけり。可憐紅兒は、身上痛みて起上るべき事だにならず、唯うめきてぞ居たりける。是等を悲しき事の限ならめと思ひけるに、紅兒は日每々々の折檻が、積々て病となり、腰拔けて立つ事だにもならざれば、老女は益憎みを增し、とても用に立たぬ奴、十七貫の身の代を、無益にせし口惜さよと腹立てて、この家の傍に狹き別家のありけるに打こみ置き、朝夕の物だに與へず、死次第にして置きけるが、外の子供等に向ひ、誰にもあれ彼めに情を懸けて、物など運び介抱などする者あらば、急度折檻を加ふべし。これを能々心得よと、嚴しくいひ渡しけるにぞ、怖合ひて近附くものもなかりけり。然るに頃日爰

思ふ程、祭る事だにならさかや、此手を合すがせめての手向と伏拜み、南無阿彌陀佛あみだ佛、亡父母を憐みて、苦患を救はせたび給へと、いと悲しげにいふ山の、鳥獸も鳴きそへて、聲を安計呂の山烏、花をくはへて飛來り、紅兒が膝の上に置きければ、一疋の猿菓物の枝を折りて持來り、紅兒が袖を引きつゝ差出すは、供物にせよとの心かと嬉しみて、岩の上に菓物を供へ、花を其下に挿して、なほも念佛を唱へけるに、鳥は傍近く下居て悲げに鳴き、猿も掌を合せて共に泣きければ、紅兒は鳥獸の殊勝なる心を感じて、いとゞ涙に哽返り、鳥類畜類すら斯く許、我身の上を憐みて、情心はあるものを、主の老女が擧動は、鳥獸にも劣れるなり。鬼とも蛇共いふべからず、情なや恨めしやと、覺えず聲を振立てて、わつと叫びて倒伏し、身を悶えてぞ歎きける、心の中こそ哀なれ。さらぬだに暮るゝを急ぐ深山べの、木立茂れる谷陰なれば、早ほの暗くなりぬるにぞ、紅兒は起上り、こはいかにせん、歎に覺えず隙取りて、時を移しぬ。恐しいあの老女、さぞ怒りて又憂目をや見せつらん。疾々歸らばやと思ひつゝ、急はしく小桶に水を汲取りて頭に捧げ、さしも嶮岨の山坂を、泣々家路に歸りけり。此時老女は古き文車を切机のかはりとなし、鸐雉を料理して居たりけるが、紅兒が歸るを見るより、果して怒をなし、汝は何故遲かりしぞ。僅一桶の水を汲むに、二時三時懸るべき道理やあると罵りて、焦だつ眼の尖

母の、恩惠も深き窓の裏、御乳姆に侍かれ、透間の風も厭ひしに、今は寒夜の荒筵、賤の手業に身をつかひ、賤しき者に踏れたり擲れたり、口惜いとも無念とも、家名の穢父母の恥、寧死なめと思へ共、若や兄上妹の、此世の中に存命へて、又逢ふ事も有らんかと、思へば死ぬも死難しと、獨言して谷川に、我身の影をうつし見るに、顏も容も變果てて、我目にさへ我身とも覺えざる光景なれば、あな淺猿や、梅津の嘉門景春が、娘とこれがいはれうか。恥しき姿やと、いひつゝ撞的打伏して、悲むかひもあらし吹く、峯に音する伐木の、丁々とのみ聞えけり。再び又いひけるは、今日は則ち亡父の命日にて、母の爲には逮夜なれど、跡とふ人もあるべからず。父上は武士の道を立て、覺悟の上とはいひながら、修羅の巷の戰場にて、討死をなされたれば、冥途の程も覺束なし。まして況や母上は、人手に掛りて非業に終り給ひぬれば、我々兄弟三人の、兒等に心が引されて、定めて浮みはなされまじ。痛しや中有とやらに迷居て、さぞ我々を戀し懷しとおぼすらめ。世が世の時にあるならば、亡き御跡のとひ弔ひ、いかにも營み申すべきに、今は僅に香花を、手向くる事だに成難き、勿體なさよ悲しさよといひて、又さめ〴〵と泣きけるが、善光寺の御佛は、是より西に當ると聞けば、娑婆と冥途の堺川、西方淨土も遠からずと思ひつゝ、西の方に打向ひ、戒名だになき靈魂は、唯父母といふばかり、人目をはれて

りしものをと後悔し、其よな面になるならば、寧死ぬるが益なるに、中々に生きて居て、婆婆寒なる業人めと、やら腹立に悪口し、迚も辻君にもならぬ奴、切て本錢うめる程責使うて遣るべしとて、萬事を苛く當りけるが、紅兒は我身の因果とあきらめて、朝には霜を冐して遠き峯の柴を刈れば、松吹嵐に身を破り、夕には夜を籠めて深き谷の水を汲めば、岩漏る露に袖絞る、夫のみならず洒洗濯煮燒の業に到る迄、我身獨に管りて是を務め、又は苧を績み絲を繰り、露ばかりの暇あれば、老女の足腰を撫擦り抔して、少しも身を休むる事成難く、身には一重の襤褸を著て、寒夜を凌兼ねぬれば、漸々に瘦細り垢積りて、彌醜き姿となる。聊も怠る時は打擲れ、食止をせられて、憎さげに呵まれ、活つ殺しつの辛目を見て、種々の折檻をうくるにぞ、浮世を恨み身を悔み、涙の乾く時もなく、袖乾す隙も無かりけり。斯くて一日例の如く水を汲みに出でけるが、覺束なくも呼子鳥の、聲も淋しき山中を、木の間笹原分行けば、足は棘に切裂れ、流るゝ血しほ血の涙、櫛さへ取らぬ黑髪の、肩に亂れて蜘蛛の、糸に纏はれ繫るゝ。足手は軟ぎ身は痺れ、歩み煩ふ苦しさは、何に譬へん樣も無し。一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、音凄き深谷に、心細くも只ひとり、岩に腰を打懸けて、過來し方を思ひつゝ、口說ごとこそ哀なれ。吁世の中に我身程、因果な者は又あらじ。世に時めきし武士の、家に生れて父

思ひ、隱おく所を見出して奪取り、御身と我と配分して逃去らんと、心を附けて覘へども、今に於て知難し。さりながら長き中には嗅出さでは置くべからずといへば、太郎ほくそづき、唯何事も密にと、互にしめし合せけり。常言に、螳螂蟬を捕ふ、黃鵲の後に在る事を知らずといふは、此家の老女が類なるべし。

姉妹本事品第五（後談）

玆に哀を止めしは、梅津が娘玉蟲に、諸事の哀をとゞめたり。前年有漏路兄弟に奪取れ、僅に十七貫の身の代にて、此老女に賣渡され、名を紅兒と號けられて、此家に在りけるが、生質世に勝れて美麗なれば、老女は、千金になるべき貨物と、末賴母しく思ひ、日夜劘磨して化粧させ、種々の遊藝を敎へて生立てけるが、時光過易く日月梭の如くにて、早くも五年を經て、今年は已に十三歲にぞ到りける。然るによく〳〵惡しき宿世にや、疱瘡の勞重くして、命も危く見えけるが、素邪見の老女なれば、彼を憐む心は聊もなけれ共、金にすべき貨物と思ふゆゑ、自ら看病して種々に心を用ひけるにぞ、命許は助りけるが、花の如く玉に等しき顏、忽ち變じて醜顏なり、前に比ぶれば別の人かと疑ふ許になりければ、老女は唯惘れ果、今少し早く賣遣さば、能か

笋の番が相應ぢや。裏の藪に氣を附けて、猿に笋取るゝな。小雪よ、手習精出せ、居睡すな。のらかわくと、あれ見よ、有礒がやうに机に載せて、茶碗の水を持すぞよ。弦藻よ、灸は幾程据ゑたぞ。そちは病身者ぢや、澤山に据ゑをれ。そちが死ぬは構はねど、こちに損のかゝるが迷惑ぢや。野篶よ、そちが眉のひきやうは何のざまぢや。京の地藏祭に、石の地藏の面を化粧した樣ぢやは。落穗よ、疊に白粉をこぼすな。紅を唾で解くなたはけめ。岨路よ、額剃りつけたか、氣疎くすな。冬野よ、能く髮を梳いてやれ、梳櫛の齒をかくなと、口速に囁きつゝ、彼方此方を睨廻し、心を配る忙さは、慈悲も情も夏川に、鵜縄さばくが如くなり。あゝ世話やかす奴等かなとて、欠しながら腰をのし、どりやちつとの間休まうかと、呟き〲奥に入り、年かさなる子供等を叫び、蒲團の上に寢そべりて、一人には腰を打せ、一人には白髮を拔せ、鮀の串燒を肴にして、酒器の酒を飲みながら、有漏路太郎無漏路五郎兄弟が、木太刀を打合せて、劍術の稽古するを見つゝ、太刀筋ゝ非難を打ちて居たりけるが、氣草臥やしたりけん、ほく〱と睡出し、頓て熟睡したりけり。兄弟の者も太刀打を止め、次の間に出でて休息しけるが、太郎弟に對ひていひけるは、主の老女幼者を賣買して貪る金、定めて多くあるべければ、奪取らんと思へども、何處へ隱し置くやらん、其在所を知難しといへば、五郎云く、己も疾くよりしか

れぬか。これな旅の殿さ、情ない。なんだ、蚤が多くてつかんでほうばるべいに、痒くば

ひつ搔くべいよ。

と此様にいうて、ぢよなめきます。まだ歌がござるとて、濁みたる聲して、

君が來ぬ夜は、瞼もあはぬ、涙の淵へ枕をつつばめた。

と訛りゆがみて唄ひければ、さしもの老女も忍びかねて、可笑き奴と笑ひけるが、此方の子供が剃磨も大方にしてとらせ、一人殘るを洗ひながら、そちが此襟の黑さは何事ぢや。車牛の襟皮を、飾磨の褐に染めたりとも、これ程黑くはあるまいぞ。ちと心して垢をたけなと叱りつゝ、皮も剝むく斗に洗ひければ、痛に堪へず、ほろ〳〵と涙を零すを、突遣りて背後を顧み、これ竈の前の小女郎共、なぜ此様に煙し居る、目が明れぬは何するのぢや。無益に薪を費すな、食物扱ふ傍で虱拾ふな、汚穢事知り居らぬか。これ伊勢平氏よ、そちは目が眇みたれば、靑菜を撰ば瞼押明けて、山蛭に氣を附けよ。鼻平太よ、そちは鼻に云分あれば、汁鍋に向はば鼽を能拭へ。出尻よ、そちは上り坂に勝手がよい。峯に登つて薪を樵れ。鳩胸よ、そちは下り坂に勝手がよい。谷に下つて水を汲め。猫背よ、鼻垢丸めて何にする、汚穢事しをるな。家鴨よ、鍋の尻洗つたら、干菜刻め。痣よ、手が明いたら洗濯物干してこい。白眼よ、そちは邪睨ぢやから





野へやらねばならぬ。比丘尼といふ者は牛王賣とて文匣を脇挾み、熊野の地獄の繪說して、血の池の穢をいませ、不產女の哀を泣すが活業ぢや。いで比丘尼歌うたへといへば、アイと答へて小さき指に、比丘尼簓を打鳴し、

梅はにほひよ、櫻は色よ、人は美目より唯心。お勸進、おやんな。

と舌もまはらず唄ひけるは、わけて哀に見えたりけり。此次には辟田出でよと、いはれて出づるは十二三、容醜き幼女なり。老女倩打視り、そちは大なかづき物、面といへば丹波飯籠の底の樣に荒々しく、頤といへば槍頷、色は麥餅見る樣で、肌は鮫肌足は鰐、聲さへ堂の鳩のやうで、一つとして取得がない。せめて傀儡にも賣らめと思へど覺束なし。そちが生在所の傀儡等が、旅人をもてなす詞を覺えて居るげな。露野を相人にして夫いうて聞せよといひければ、辟田は露野に寄添ひつゝ、可笑げなる身振して、

いかになよ。旅の殿さ、お草臥であるべいに、おくはびら出しめせ。はだけ申さう。扨な猛に毛臑、お笑止や〳〵。咽のひつつき申すに、水をつん飲み其序に、尿をつきて參り申さう。あゝお笑止や。蟒蛇のねまり申したる樣な、大飯かきとりて腹ほてるまゝに、夢にて夜をぶちあかしめさるべいよな。明日は又道中だんべいに、てつぺいを枕にぶつさげ召さ

都へ上せて白拍子にする積り、昨日教へたは、昔祇王が清盛の前でうたうた今樣ぢや。祝儀の席にはよい文句、忘れはせぬか、うたうて見よといふにぞ、礪波はすゝみ出で、扇を取つて拍子を打ち、

蓬萊山には千歳經る、萬歳千秋重れり。松の枝には鶴巢食ふ、巖の上には龜あそぶ。

と折返してぞうたひける。ヲ、それでよい。此次は露野が番ぢや。疾々出でよといひければ、年は十ばかりにて、額髮を前に垂れ、油つきたる布子著て、身上に濕瘡をかき亂れたるが、扐の痒を搔きつゝ出づれば、老女はこれを外眦で邪睨み、そちはわけて物覺の惡い奴ぢや。忘れはせぬか、身に染みぬと股をふつつりいはするぞ。文彌節の袖時雨彈いて見よといへば、こはさに身中戰慄きつゝ、三絃把つて哀げに、

子を捨てる、藪に生立つ群烏、父よ母よと鳴くからす、月もかたぶく胸の闇、髮のおくれのぱら〳〵と、子に迷ひゆく袖しぐれ。

と泣聲にてうたへば、何が悲してう泣き居るぞ。まそつと泣けと引寄せて、太股をふつつり抓れば、わつと叫ぶを青柳が、誘めて彼方へ連退きぬ。其跡へは五つか六つの傷敷小比丘尼が、黑木綿の頭巾を被り、柄杓を腰にさして出づれば、老女云く、そちは今少し生立てて、伊勢か熊

ず又忘るゝなと、呵りつけて退かせ、此次には初花出でよ。そちは美目貌勝れてみやびたる生れゆゑ、江口の君か神崎の阿曾比女にせねばならぬ。琵琶を彈いて催馬樂うたへといへば、八つばかりなるが出でて斜にすわり、膝の上に置きあまる琵琶を抱き、覺束なげに爪調して、東屋といふ催馬樂をぞうたひける。

四阿の、兩下の軒の、其雨灑ぎ、我立沾れぬ、其戸開かせ。

と最ねぶげにうたひつゝ、琵琶をほとら〳〵と鳴してのきければ、老女云く、此度は浮草出でよ。そちは目下に情らしき處あれば、浪花へ上せて瓢簞町の太夫にする積りぢや。籬節うたへといへば、浮草は三絃把つて彈鳴し、催馬樂の古風なるには事かはり、いとあだめきたる調子にて、

たえて、會はずと、文をば、かよへ。

と唄ふを聞き、否々さうぢやない。それでは節も三絃も違うた。そちも物覺の惡い奴、三絃こちへ遣せとて、爪のさきにて引鳴し、

たえて合はずと、文をばかよへ。ふみは妹背のなかとなる。宵々ぬるゝ、我たもと。

斯うたへとて、三絃を押やれば、浮草は再び彈唄ひして退きぬ。此度は礪波出でよ。そちは

露ばかりも情心を持たざれば、幼者共の目には、女の鬼とも見え、山姥と異名を取りしも宜なりと思ひて恐れ合ひぬ。一日老女例の如く幼者共を並べ置き、盥に湯を取らせて、一人々々に叫出し、磨きしてやりながら、彼方に向ひ、これ青柳よ。そちは長門の下の關へ遣すべき約束あり。下の關は能囃が專ぢや。昨日教へた小舞を舞うて見せよ。これ絹よ、そちも爰へ出て、鼓を打てといふにぞ、七つばかりの女の子、鼓を取つて進出で、ヤアハアと甲張つた掛聲して、拍子をすゝむれば、青柳といふは、十一二ばかりにて、短き振袖著たるが、扇把つて立上り、

　夫山といつぱ、塵土よりおこつて、天雲かゝるせんぢやうの峯、海は苔の露よりしたゝりては、たうをたゝむばんすいたり。

と唄うて舞ひけるに、老女は此方の子供が、顔を洗ひさしてこれを見つゝ、否々さうではない。夫山といつぱといふ時さし扇して、大まはり小まはりをして、塵土よりおこつてといふ時かざし扇して、雨雲かゝるせんぢやうの峯と、左右を一つして、かいこみざしをして、拍子を踏み前へ歩み、海は苔の露よりしたゝりてはと差廻して、後へさがるのぢや。今一度舞うて見せよといふにぞ、又一さし舞ひけるに、老女は氣を焦ち、さても〳〵心得の惡き奴かな。斯う舞へといひつゝ、居ながら舞振をして見すれば、漸々心得て舞ひなほしけるに、夫でよい〳〵。必

器を置並べ、香の薫の染込みて、昔ゆかしき經机に、獸の肉を屠るなど、にげなくも無慚にも覺えたり。素より貪欲深き者なれば、金銀を貪る一つの惡計を思附きて活計とす。故ありて兼て貯の金ありけるが、人に雇れ賃仕事して、貧しき中にも惜みて遣はず祕置きしを、本錢となし、折々山を下り、人商人に就て、幼き女の子供を價安く買取りて數多養ひ置き、妹と醜と賢と愚なるとを選分けて、夫々に種々の藝を仕込み生立てて、或は傾城、白拍子、傀儡、蓮葉女、妾、湯女、或はあんにや、浮身宿、比丘尼、辻君、伽やらうなど、醜美に因りて上下を分ち、本金に十倍して價を高くし、都鄙に賣渡して非道の金を貪り、これを上なき樂として過ぎけるが、人里遠き深山なれば是を知る者なかりけり。類は友を集むるの理にて、彼有漏路太郎無漏路五郎兄弟の强盜、梅津嘉門が娘玉蟲を、此老女に賣與へたるが緣となり、兄弟共に今は此老女に隨身して、此家に住みけるが、老女は折々彼等兄弟を諸國に旅立せて、なほ幼女を買取せ、又は奪取せもして、益欲を貪りぬ。美目貌能く、太夫白拍子抔にも賣らめと思ふ幼女には、常に紅粉を粧はせ色能き衣を著せ飾り立てて大事に育て、みめ惡しきには、僅に肌を隱すばかりの織布を著せて、柴を刈せ水を汲せ、又は竈の許に追下し、切割煮燒の業をさせて、嚴重追使ひ、聊か意に背く事あれば、忽ち呵嘖打擲きなどして、只管邪見の擧動をなし、

の花は散果てて、今は色香も失せたれど、身體は健にて若人にも勝りけり。始めは此山里に住みまじりて　或は山賤の樵路に通ふ花の蔭、休む重荷に肩をかし、月諸共に山を出でて、少の賃錢を貰ひ、或はまた織姫の、五百機立つる窓に入りて、枝の鶯糸繰車、紡績の宿に身を置き、人に雇はれ手間仕事して、僅に命をつなぎ錢、世を空蟬のから衣、拂はぬ袖におく霜は、夜寒の月に打ちすさむ、砧の音も忙しくて、しづ心なき身なれども、昔忘れぬ身だしなみ、老女の化粧冬の月、げに怖しき姿なり。年に似合はず岩疊にて、道を走り岩を跳る事、人に勝れて早ければ、昔此山に山姥とて、飛行自在の鬼女ありける、夫にも似たりとて、里人等百魔山姥とぞ叫びにける。斯くてありけるに、此山奥にさるやんごとなき尼公の、世を避けて住給ひぬるが、此にて終焉を取給ひ、其跡空屋となりたるを幸とし、其從者共を追拂ひ其家を奪取りて住みぬれば、斯る深山にあるべしとも覺えず、鄙に目なれぬ結構の殿造なれど、爰に移りて幾年を、過ぎぬる月と檜皮屋根、今は茅に葺替へて、漸々に住荒しぬれば、繪障子金壁の破れたるを古反故にて補ひ、蔀雨折戸の崩れたるを荒繩にて繕ひ、帽額の翠簾の傍には、薦席を垂れ、緞帳の風泄る處には澁張の紙帳を下し、高麗縁の疊の足らざる所には、蕨のおどろを敷物とし、破几帳に冬籠りの寒さを凌兼ねては、筵屏風を立廻し、高蒔繪の御厨子に、擂槌擂盆缺陶賤しき

諸矩羅尊者　姉妹本事品第五

叢林に骨をうつ靈鬼、なく〱前生の業を恨み、深夜に花を供ずる天人、返す〲も幾生の善を悦ぶと雖も、善惡不二と悟る時は、何をか恨み何をか悦ぶべけんや。抑安計呂山といふは、信濃、越中、越後三國に跨り東西は五十餘里秋田の地、幾重の谷峯、繩を渡して橋となし北は越後越中の堺川、これも谷二つを越えて、凡そ十里に餘るとかや。懸河渺々として巖峨々たり。山復山何れの工か青巖の形を削りなす、水復水誰が家にか碧潭の色を染出すと、いへる詞に異ならず。山高うして海近く、谷深うして水遠く、實凌兢深山なり。斯く恐しき所にて、月もこぶかき山陰に栖を求め、浮雲の財を集め、不義の富を望として、慳貪邪見の老女あり。其出身を尋ぬるに、昔若かりし時は、都五條坂に住み、百魔とて隱れなき遊女にて、曲舞絲竹の調は更なり、萬の藝に暗からず、數多の人に愛でられし身なれ共、萬能より一心とかいへる諺の如く、生得志惡しき故に、漸々に零落れて斯る身には成りけるなり。年は五十歲に近く、昔

磨大士、嵩山の少林寺に寓居して、九年面壁の時、神光といふ僧、夜終雪中に、腰を埋めて教を乞ふ。達磨容易に教へず、神光我苦行を厭はざる志を顯さん爲に、密に利刀を取り、自ら左の臂を斷つて達磨の前に置く。達磨これを見て、法の爲に形を忘るゝの所爲、法を傳ふべき器量あるを知り、心如墻壁の譬を以て、諸佛無上の妙道を傳ふ。二祖大師惠可といふは則ち此神光が事なり。汝今左の臂に手を負ひ、此雪の達磨の前にて、我弟子とならん事、惠可大師安心得道の趣に似て、尤も深き因縁なり。汝が心いかに〳〵と宣へば、彦丸大に喜びて切腹を止り、徒弟とならん事を乞ひければ、一休宣はく、善哉々々。汝が先祖梅津左衞門清景の法名を、是心といひける由、汝が法名を是雲と號け與ふべし。雲の字は是我狂雲の一字なりとて、彼嘉門が遺物の朱太刀を拔いて、彦丸が髻を斬給ふ折しも、又貝鐘の音鯢波、囂しく聞えければ、いざ來れと宣ひつゝ、間道を伴ひて、庵に歸り給ひけり。是より彦丸剃髮して、一休に從ひ、同庵に住みて、坐禪念經の外、他事なかりけるとかや。

兵又追來ると覺えたり。我戰疲れたる上に、臂に手を負ひ、疵口に寒氣通りて痛堪難ければ、今は敵する事叶ひ難し。阿容々々と捕はれなば、花々しき討死して、武門の譽を殘し給ふ、父上の恥辱なり。殊更母人は人手に懸りて失給ひ、二人の妹が生死さへ知れざれば、我身一つ生存ふるとも、何のかひかあるべき。爽に腹切つて父母の跡を慕ひ、死出三途を伴はんには如かじと思ひ定めつゝ、太刀を取り腹搔出して、ほと〳〵突立てんとしたる處に、やれはやまるな暫し暫しと聲懸けて、雪の達磨の背後より、簑笠を著て立出でたる人を見れば、乃是一休和尚にぞ在しける。彦丸は豫て相知りければ、こは能折節御坊に見え參らする有難さよ。箇樣々々の故に因りて、切腹と思ひ極め候へば、希はくは御引導を御授下されかしといへば、一休宣はく、我れ汝に見えて語るべき事あるにより、萬里小路の宿所に赴かばやとまうでしに、早敵兵放火せしと聞き、引返す途中にて噂を聞けば、汝此山中に落來しといふにより、跡を慕うて來つるなり。昨日父嘉門我庵に來り、云々の宿志を語り、汝を我弟子となし、今生の望を遂げしめよと賴みて、再び戰場に引返しぬ。其證は之なりとて、彼布施物に殘したる、太刀を見せ給ひ、又宣ひけるは、父の討死母の非命に死したるも、皆是過去の宿因なれば、如何共すべからず。死して冥路に迷はんより、生きて我直示人心の法を傳へ、永く父母の菩提を弔はんに如かじ。昔達

間業にはよもあらじ。迚も敵對叶ふまじとて、皆一同に逃失せたり。彦丸も今は大に疲れ、息切して堪へざりければ、雪を含みて咽を潤し、太刀を逆に突き、雪の達磨を屹と見て、あな不審や我血しほ、此達磨にかゝると等しく、以前の血しほと一つに合し、全身總て赤き達磨となりたるは、心得ざる事なり。同血にあらずんば、爭か斯る事のあるべきや。もし母人此所にて人手に懸り、此達磨に血をそゝぎ給ふにはあらずやと、疑ひつゝ邊を見れば、母の著たる市女笠のありけるにぞ、扨こそと思ひて胸轟き、猶能見れば雪中に、小さき足跡のあるにぞ、妹玉蟲も此所まで附添ひ來つるに疑なし、と思ひつゝ、雪に流れし血を慕ひ、谷の半まで下りて見たりけるに、岩の間に止まりて、母の死骸のありけるにぞ、こは〱いかにと仰天し、肝心もなくなりて、唯呆れて居たりけるが、良ありて石木の如くに凍縮みたる屍を抱き揚げ、そも何奴の仕業にて、斯く無慙なる事をばしけるぞやとて、且悲み且怒り、拳を握り齒怒して泣悶えけるが、二人の妹はいかになりしぞと、これも又氣遣しく、母の懐中の沙金の失せたるを見れば、盜人の所爲なるか、今一足遲かりし口惜さよとて、悲歎の涙に哽返りて、人心地もなかりけるが、再び父敵追來ると覺えて、麓の方に貝鐘の音鯢波、凄じく聞えければ、忙はしく雪搔拂ひ、土中を穿ちて死骸を埋め、松の枝を折りてしるしを立て、原の所に登來て、獨言にいひけるは、敵

漏路五郎立寄つて、懐を探見れば、果して一袋の沙金あれば、之を奪ひて死骸をば、谷の裏へ蹴落しぬ。有漏路太郎は玉蟲を小脇に抱き、兩人ともに行方も知れずなりにけり。偖彥丸は敵兵に取籠められて、ほとく危かりけるを、漸驅散して、此山路に馬を進めけるが、戰ひ疲れて了角を振亂し、身上は雪に濡通り、氷を握る如き手綱をかい繰りつゝ、母上は何處にぞ。母上のう母上のうと叫りつゝ、跡を慕うて來りけり。時に麓の方を見下せば、敵大勢飛ぶが如くに追來る。雪は益降亂れて、雪頽の音凬々と鳴りどよみ、敵の叫呼ぶ聲に合して、いと凄じく聞えけり。已に敵近々と寄せたりければ、彥丸は駒の頭を引返し、長刀を打揮つて向合ひ、敵は步立、此方は馬上、蹴上る白妙雪煙、玉塵を踏散して、大に戰ひけるが、彥丸は年僅に十一歲なりと雖も、父の武勇を承繼ぎて、膽氣烈しく、力量は殊に勝れ、武藝も又普通ならず、小腕に希有の力業、組まんと近附く兵の、鎧の上卷かい𩊱んで中に提げ、弓杖五杖許投渡せば、其人飛礫に當りける武者共は、四五人連れて谷底へ、眞倒にぞ落ちたりける。此時しも雪卷風どつと吹き、彥丸が馬岩に足を跌きて、小膝を折つて撞的伏しけるにぞ、步立になり、長刀を捨て、太刀にて戰ひけるが、左の臂に手を負ひて、血しほさつと迸り、是も彼雪の達磨にかゝりけり。手を負ひても勢益猛かりければ、敵兵は辟易し、さても奇異なる童哉。小天狗の化身にや、人

血しほさつと迸りて、達磨の身にぞかゝりける。時に此花が懐より、乙星は聲を立てて泣叫ぶを、有漏路太郎足にかけて谷の裏へ踢落しぬ。此花はこれを見て、こは情なや悲しやといひて、肩尖の疵を押へ、痛手の苦しさも忘れて、谷を見下しつゝ歎きけるを、無漏路五郎も刀を拔いて一太刀斬れば、あつと叫びて身を悶え、鬠切れて黑髮を、風に亂せし有樣は、綠も深き青柳を、時にもあらで見る如く、身上は朱に染りつゝ、帷子雪に散交る。寒紅梅に異ならず。苦しき息の下よりも、彥丸はいかにせしぞ、疾來て我を救へかしといひつゝ、右左に倰傽きて、此子を返せといひて、玉蟲に取附けば、無漏路五郎丁と斬る。谷へ落せし幼子を、取つて戾せと立寄れば、有漏路太郎礑と斬る。彼方此方の弄り斬、七轉八倒身を悶え、あな苦しや堪へがたや。假令我をば殺すとも、二人の子供は助けてよ。慈悲ぞ情ぞ是のうと、叫ぶ聲さへ絕々に、虛空を摑む苦痛の體、二人の賊はせゝら笑ひ、何程號いても、聞入れる耳持たぬ。情心で我々が、活業のなるべき歟。無益事をいはずとも、鱠の料理を賞翫せよと、さも憎さげにかはるぐ〵罵りつゝ、慰み半分片手斬、なほ幾太刀となく斬りけるにぞ、斬る度に血しほはしり、雪の達磨の身にかゝりて、其半身を紅に染なしたり。斯くて有漏路太郎此花を踢倒し、足下に踏附け、止めの刀をぐつと刺せば、あつと叫ぶが此世の名殘、敢なく息は絕えにけり。無

て、右の袂に抱へつゝ、冷き顔に我顔を押當てて、哽返りつゝ泣きけるが、涙さへ氷となりて、霰たばしる如くなり。懷に抱きたる乙星も、寒さに堪へざるにや、いと苦しげに聲立てて泣くにぞ、泣くな〳〵とゆすり上げ、乳房を口に含すれど、乳汁さへ飲まず頻に泣きければ、尤ぞ尤ぞ、襁褓の中より大事にかけて、荒き風にも當てぬ身を、斯る雪風に吹きさらさせ、母が肌の溫氣も、冷通りたる懷に、凍えて泣くもうべぞかし。最惜しや可愛やとて、抱きしめ〳〵、悲む聲の哀さは、翅の下に雛鳥を、暖め兼て鳴明す、霜夜の鶴に異ならず、斯くて時をぞ移しける。爰にまた有漏路太郎、無漏路五郎といふ、兄弟の强盜あり。兄太郎は今歲廿歲に到り、弟五郎は十六歲にて未だ前髮あり。頃日岩倉山に軍ありと聞き、落人あらば、馬物具太刀刀を奪ひ取らばやと、此山中を徘徊し、此折しも木蔭に隱れ居て、此花等が樣子を覘ひ、玉蟲が美目容の美麗きを見て、彼を奪取りて人商人に賣らば、良價になるらめと思ひ、此花が懷にも物ありげなれば、何れにも良貨物ぞと點頭合ひて、つと走出で、無漏路五郎餓ゑたる鷹の雀を摑む樣に、玉蟲を捕へて猿轡をはませければ、此花は大に驚き、其子をいかにするぞといひて取附くを、有漏路太郎ものをもいはず、刀を拔いて此花が肩尖を、二三寸許斬込みければ、あなやと叫びて仰樣になり、山守の小童等が作りたるにや、背後の方に五六尺斗なる雪の達磨のあるに倒寄れば、

て、漸々青井が谷を過ぎ、千石岩の邊に、暫時休ひて息を吐き、彦丸はいかにして來る事の遲きぞや。もし敵に圍れて捕はれはせざるかと、跡も氣遣ひ爰も難儀、跡に殘せる子を思へば、進みもならず退くも、跡には敵の充滿て、進退ともに失へば、足なき蟹に似たりけり。雪は頻に降りかゝりて、袖打拂ふ隙もなく、岩に結ぶ氷箸を見れば、劍を逆に植並みたる樣にて、刀山劍樹の如くなり。手の指は小鰕の腰の樣に屈りて、赤色づきたるさま、紅蓮の衆生に異ならず。六趣の六花、氷の衣の薄太禮雪、八寒地獄の苦も、之には過ぎじと思はるゝ。雨衣だになければ、雪水に衣服を濡し、吹雪に面を打れつゝ身上いらゝぎ、寒氣骨に透りて堪難ければ、母は二人の子をいとひ、子は亦母をいとふにぞ、玉蟲泣聲にていひけるは、母上のう我身は少も寒からねど、母上は嘸寒からめ。御持病は起らずや、氣分はいかに侍るぞや。切て之召して、寒さを凌ぎ給はれかしとて、覆も足らぬ小さき小袖を脱ぎ、母の肩に打著せて、其身は戰々と振ひ、齒の根さへ合はぬ有樣を見て、母は涙せきあへず、小袖を押返して玉蟲に打覆ひ、吁親なればこそ子なればこそ、其樣にして呉る。妾が樣な因果な身に、何として其方の樣な孝行な子を儲けしぞ。最惜の我子や、昨日迄も管領の軍師と人に敬れ、其妻子なる我等まで、榮花を極めし身なれ共、夜の間に變る此難儀、あしき時節に生合ひ、憂目を見する不便さよと口說立て

供等を身近く置並べて、口に稱名目に涙、泣くより外の事ぞなき。斯くて翌朝にもなりけるが、濱名方の兵共、嘉門が妻子を搦捕りて、入道殿の恩賞に預るべしと相議して、嘉門が宿所を取卷きければ、召仕の男女共は、此騷を恐れて、皆散々に落行きぬ。此花は急はしく三歳になる乙星を懷に抱き、一袋の沙金を携へ、大幢國師の法語の卷物を、九歳になる娘玉蟲が懷に入れさせ、我身は市女笠著て壺折姿に扮し、逃れ出でんとするに、早敵兵前後の門に、犇々と寄せたりければ、逃出でん樣もなかりけるに、彦丸かひぐ〵しく馬に打乘り、長刀を打揮つて、前門に寄せたる敵兵を追散し、母上此隙に疾々落給へといへば、此花は玉蟲が手を取りて出で、彦丸必ず無益の戰して怪我過すな。速く跡より來れよといひ殘して落行きぬ。斯くて四五町打延びて跡を顧みれば、早宿所に放火して、一片の煙と燒揚げたり。昨日までは世に覺いみじく時めき榮えけるに、今日は忽ち宿所をさへ燒失はれて、立寄る木蔭も雨漏る心地し、水鳥の陸に惑へる如くにて、有爲轉變は世の習といひながら、哀なりける事ざまなり。去程に此花は、玉蟲とともに近江の國に落行かんと、如意山の山路に差懸りけるが、雪は猶強く降りまさりて、滿地玉を敷けるかと疑はれ、道を埋めて行方さへも別難く、山越の寒風肌を斬るが如くにて、手凍え足なへぎて、いかにともすべき樣なく、彼に倒れ此に伏して行惱み、夢路を辿る如くに

再び又戰場に到り、濱名方の大軍の眞中に驅入り、長刀を額に當てて、勇誇つたる大勢を八方に追散し、蜘手輪違十文字、縱横無盡に懸破り、彼に露れ此に隱れ、火花を散して戰ひぬ。聚散離合の有樣は、須臾に變化して、前にある歟とすれば忽焉として後にあり。飛鳥の如くに働き、在所を見定むる事能はざれば、打るゝ者其數を知らず。嘉門思ふ盡に戰ひ、なほ數多深手を負ひぬれば、今は是れ迄なりと思ひつゝ、如意が嶽に驅上り、物具脫ぎ棄て岩の上に結跏趺坐し、懷中硯取出して、岩の苔を打拂ひ、筆を染め、再び又辭世の頌をぞ書きたりける。

提㆓持吹毛㆒　截㆓斷虚空㆒　大火聚裏　一道淸風

といふ句を書終りて、差添の小太刀を拔き、腹十文字に搔破り、俯臥になりてぞ失せたりける。時に一陣の疾風颯と吹來りて、樹木岩石鳴動し、又彼妖鼠顯れ出でて、嘉門が臟腑を喰ひけり。深き怨念の程こそ恐しけれ。比しも冬の半なれば、此日夕暮より大雪降出し、暫時に高く積りて、世界一面の白妙となりけるが、萬里小路の宿所には、嘉門が妻此花、夫の打死を聞き、豫て思ひ儲けたる事とはいひながら、無慙にも悲しくも覺えて、泣沈みけるが、嘉門が詞に、我れ討死すとも共に失せなんと思ふ可らず。何方何なる所にも身を忍びて、三人の子供等が行末を見屆くべし、といひ殘し置きつれば、露の如くなる我身さへ消侘びて、死ぬる事さへ成難く、唯三人の子

首摑みて捻返し、此方を足下に踏みつけて、

今日のゆふべは秋風ぞ吹く

と、下の句を吟じつゝ、右を投げのけ、左を蹴返し、長刀を杖に突きて、礑と白眼みければ、四人の兵等は其勇氣に恐れ、身を縮めてぞ逃去りぬ。一休これを見て呵々と打笑ひ、心地よし〳〵、辭世の歌の殊勝といひ、烈しき今の攬といひ、天晴の英雄哉。疾々極樂城に赴きて、阿彌陀將軍の軍師となり、廿五騎の菩薩軍を指揮して、閻王城を攻落し、惡趣の衆生を救ひめせと宣へば、嘉門莞爾と打笑ひ、其御詞は我爲に、佛鬼一如の御引導、有難し忝けなし。呉々も兒子が事、賴み上候と、悟道の人も子故には、流石に迷ふ闇の梅、色こそ見えね鹿毛の駒、銜取りて引寄せつゝ、馬上の失禮免したまへと一禮して、乘らんとせしが痛手にて、倰僜足を踏固め、打乘りける折しも、再び又貝鐘太鼓を亂調に打立て、鯢波を吶と揚げて、天地も崩るゝばかりなり。嘉門馬上に長刀を小脇に引側めつゝ、山の方を佶と見て、扨は味方敗軍と覺えたり。いで〳〵今一軍して目に物見せん、暇申すといひ捨てて、鐙を鳴して走行くに、怪哉空中より、一團の陰火落下りて、忽ち一つの鼠と化し、嘉門が馬の尾に飛附きて共に行く。これ前年惡靈等鳥部野に會合して、云交したる詞を違へず、修驗者賴豪院が怨念、嘉門を亡すに疑なし。去程に嘉門は、

はりて、微妙の法門を傳へ給はれかし。これのみ今生の望に候。陣中物の貯も候はねば、これを布施物とおぼし給はれかしとて、帶きたる太刀を取りて參らすれば一休これを受けて宣はく、善哉是南泉猫を斬るの利刀なり。此太刀都て血に染りて朱を塗りたるが如くなれば、我これを朱太刀と號けて常に身邊に置き、邪禪賊僧の頭を斬るの法刀となして、長く和主の遺物と見るべし。子息彦丸の事は望の如くすべければ、心安く思はれよと宣ひければ、嘉門は今生の望を遂げ、世にも嬉しげにて、氣色涼しくぞ見えたりける。一休の畫像に椅子の傍邊に、大太刀を畫きて朱太刀の像といひ傳ふる、謂は斯くと知られたり。斯くて時刻移りぬれば、嘉門いひけるは、小子は最期を急ぎ候へば、早御暇申すなりとて、一禮して立上り、門外に出れば、一休も門送して出給ひ、嘉門が最期の正念を試みんとや思しけん、辭世の一句聞かまほしと望み給へば、嘉門頓て詞を出さんとせし折しも、最前の雜兵四人、木蔭より現はれ出でて、且二人の兵嘉門が左右につと寄りて、腰に無手と組附きぬ。嘉門これを事ともせず、

　うまれぬるその曉に死にぬれば

と上の句を靜に吟じつゝ、長刀をからりと捨てて、二人が鎧の東方に左右の手をかけ、阿吽の呼吸を拍子として、大地に撞的投附けたり。殘る二人はこれを見て、なほ隙もなく組附くを、腕

ば痛手の樣子にて、戰ひ疲れたる體なりと宣へば、嘉門其應はせず、突然と問うて曰く、

　如何是勇士恁麼事

一休聲に應じて答へて曰く、

　吹毛急用不レ如レ前

嘉門此一句を聞きて打點頭けば、一休則ち伴ひて庵中に入り給ふ。嘉門坐を定め一息吐きていひけるは、小子今日しも管領由理太夫の命を受け、援兵の首將となりて、岩倉山の戰場に向ひ、豫て思ふ旨あれば、今日を限りと思ひ定め、討死と極め候が、師父に賴み申度一條のあるにより、一方を斬拔けて此所まで落參り候。其事別儀に候はず。小子が先祖、梅津豐前左衞門清景は、元亨の頃當國梅津邑の領主にて、月林大幢國師を尊信し、法名を是心と稱じ、專ら禪法を修して、正法眼藏を極む。其故に國師の法語一卷を家に傳へ、小子もまた禪法を慕ふ志深く、一旦金剛山に跡を隱すと雖も、由理太夫我不肖の身を懇望あるにより、止事を得ず仕をなし候へば、空寂の玄妙を會得するに遑なく、遂に其志を遂侍らず。是に依りて、兒子彦丸を出家となし、小子が志を繼せ度候なり。當時師父の道德天に覆ひ、慈悲普くして人擧つて活佛の思ひをなし候へば、師と賴み申すべき人外にあるべからず。希はくは師父彦丸を御弟子と成給

然ばまた一睡と思して、とろ〳〵と目睡給へば、又陣鐘太鼓を打鳴すにぞ、睡り給ふ事能はず。益腹立給ひ、斯く騒しくては迚も我を睡さじ。せめて今一盃を酌まばやと、獨謐き給ひつゝ、陶を自在に縛り附け、爐中に柴を折りくべて、何髕をあぶりてぞおはしける。斯る折しも山路より、武者一騎、手綱かい繰り、駒の頭を此方に向けて歩ませる。其裝束何なれば、紺村濃の直垂に、白糸威の鎧の、金物重く打つたるを透間もなく著下して、青鈍の大口をはき、長覆輪の太刀を帯び、銀の小蛭巻に目貫は螺を透したる長刀を、小脇にかいこみ、鹿毛なる馬の太く逞しきに、遠鴈の文を打ちたる鞍を置き、燃立つばかりなる厚總の鞦をかけてぞ乘つたりける。身上に數多矢を折りかけて、枯野に殘る冬草の、風に臥したるに異ならず。全體血に染りて、白糸威も緋威と見紛ふるばかりなり。敵と思しき雜兵四人、後をつけて來りけるが、容易に手を出さず、木蔭に隱れて鬩ひけり。偖彼武者は一休の庵の前にて馬を下り、長刀杖に倰僜きつゝ、柴の戸に立寄りてほと〳〵と打敲きぬ。一休は最前より、金鐵みななる鎧金物の音に交りて、轡の音の令々と鳴るに耳傾けて、落武者の過ぐるならめと思しけるが、程なく門を敲くにぞ、何者にやと思しつゝ、庭下駄はきて、飛石傳に立出給ひ、柴の扉を開き見給ふに、是は豫て相知給ひける、梅津嘉門景春なれば、こは思ひ懸けざる事よ。和主も今日の軍に出立たれしか。見れ

已に盡き、遠からず病を發して逝去あらん事必定なり。然る時は活龍忽ち死蛇となり、雷霆雲を放れて地に落つるが如くならん。斯る播亂の時到りては、我何程忠烈を勵み、精神を盡すとも、孤掌鳴らざるの道理にて、迚も世間無爲の計は行はるべからず。楠判官湊河に打死せしも、能く時を知れるなり。唯勝基殿の生前に爽に打死して、日來の恩義に報いなんと思慮を極め、今日を名殘と思ひ切りて、妻此花三人の子供等に今生の別をなし、晴の軍と思ふにぞ、花やかに鎧うて、岩倉山の陣に到り、正乘原明兩將を助け、諸軍に指揮して、奇正虛實九變の術を盡し、種々の奇計を出して戰はしめければ、夏廣を始め濱名方の大軍大に敗走して、死亡の者數を知らず。素より目覺しき軍して打死せばやと思ひ定めたる事にしあれば、自ら長刀を打揮つて大軍の裏に跳入り、四角八面に斬つて廻り、敵數多打取り、猶勢猛くぞ戰ひける。此日一休和尙は庵中におはして、陶酒の微醉に睡を催し、肱枕して少間睡り給ひけるに、忽ち螺鐘太鼓の音大に響き、鯢波箭叫の音凄じく聞えければ、睡を醒して頭を上げ、寢ながら枕屏風を押除けて、岩倉山の方を見給ふに、霧の籬に、いろ〳〵の旗翩翻として、紅葉を流す雲の波、山を洗ふが如くなり。扨は岩倉山に軍始りけるよな。蝸牛の角の爭に、我庵室迄を修羅の巷となして睡を妨ぐる、忌しき奴原哉。穴嘗しさよと、口小言宣ひけるが、少間ありて少し靜りければ、

唯酒を好み給ひて、檀越の布施物なき時は、袈裟衣を賣りて酒に替給ふ。人是を譏れば、宣はく、往古思大といふ和尚、三世の諸佛を我一口に呑盡すといひし事あり。これを思大呑佛といふ。夫に比ぶれば、我袈裟衣を呑むは未だしき事なりと宣ひしとかや。後小松院の二の宮にて、正しく竹園の御身なれども、自はこれに誇給はぬにや、四姓の人吾門に入れば、皆釋氏と稱ず。出家として氏族の尊卑を議するは忍ぶべからずと、狂雲集に見えたるは、實にも尊く覺ゆるなり。四大皆空なるを看破して、情を詩酒に寄給ひ、顚狂遊戲を以て、靈機を吐く事を専らとなし給ふ。素より聖者の再來にて、六神通を得給ひぬれば、現世の事は更なり、過去未來の事總て曉し給はずといふ事なし。夫は扨おき爰に又、濱名金吾入道、由理太夫勝基、兩管領、豫ての鉾楯に依りて、諸國の列侯二裂に亂れ、濱名方に贔負し、勝基方に引分れ、已に應仁元年一月、双方洛中の東西に分れて、合戰ぞ始りける。嘉門は益々勝基をたすけて、種々奇計を施しければ、勝基方大に勝利を得たりけり。然るに勝基方に屬したる、赤松正乘、秋庭原明、攝州鳥井野に於て、尾道助夏廣と戰ひ、利なくして、僅に三千餘騎に打もらされて、都をさして敗北し、岩倉山に陣を取り援兵を乞ひけるにぞ、勝基梅津嘉門を首將として、五千餘騎の援兵をぞ向けられける。時に嘉門倩思ひけるは、我此程天文をかんがみ、蓍筮をくだし見るに、勝基殿の天壽

き、香晒は扇を折りて、共稼にしけるにぞ、漸々に貧しさを忘れけるが、是より二年過ぎて、香晒又懐胎し、此度は女子を産み、其名を小田井と號けて育てけり。

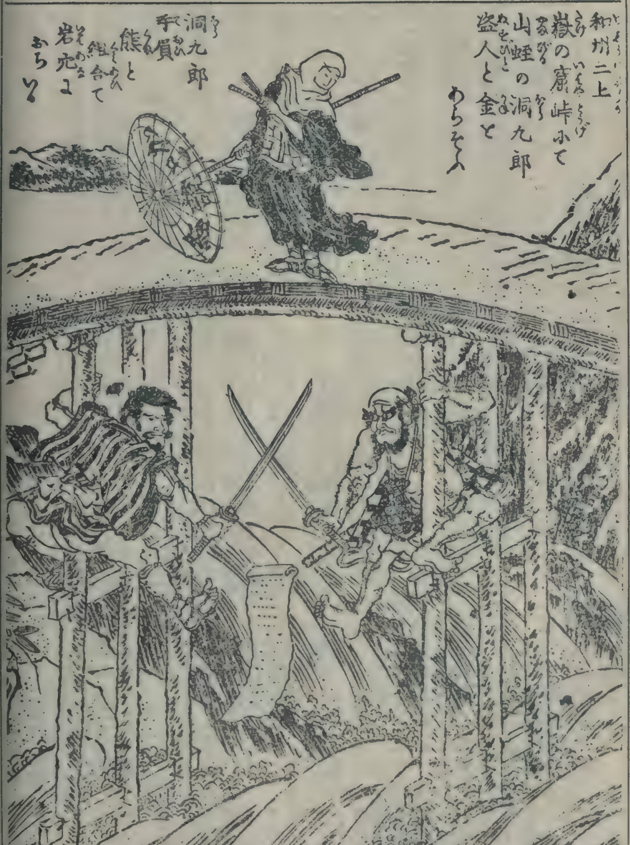
諾迦跋釐駄尊者　醉菩薩方便品第三

爰に又梅津嘉門景春は、去ぬる頃管領由理太夫勝基に従ひて軍師となり、京都萬里小路に宅所を營み、日夜勝基の館に到りて、軍慮を運し、志を運びければ、勝基甚だ尊敬あり。然るに嘉門が母身死りけるにぞ、勝基勸めて嘉門に妻を娶らしめ、其名を此花といひ。男女三人の子を産みぬ。嫡子は彦丸とて今年十一歳、次の娘は玉蟲とて九歳、末の娘は三歳になりけるが、此の女子右の腕に七つの黒痣ありて、七搖光破軍星の形に似たれば、其名を乙星と叫びにけり。其頃一休和尚は、未だ年若く在して、山城國岩倉山の麓に、幽なる草の庵を結びて住給ひ、庭前に柏樹を植ゑて祖師西來の意を示し、窓外の桃花を愛して志勤啓悟の跡を慕ひ、倚遇が煙房に擬へて、一爐の柴に寒夜を凌ぐと雖も、方會が雪屋に等しく、壁崩れ雪眠藏につもりて、居るに所なし。破蒲團に坐しては惠稜が參禪の辛苦を思ひ、古肉案に對ひては、盤山が肉肆の發悟を快とし、安國の折箸、鹿門の破鍋、僅に厨の用をなすのみ。庵中更に一物を貯へ給はず、

の囹圄に落し入れ、身に數多の金を帶びながら、世界に出づる事をなさしめず。又香晒は孝の爲めに胎内の子を脫せんと、菌の汁を飲まんとせしに、却つて其子は恙なく、洞九郎が飢を凌ぎ、命を助からん爲に食ひしは、却つて其毒に當りて死したる事、善惡邪正其報細かにして、天の賞罰正しき事如此、豈怖れざらんや。又世人貪欲非道の金を貯ふるは、假令ば洞九郎が窟中にあるが如く、數多の金も飢渴を助くべき料にならず、僅に一滴の水に劣れり。悟るべし愼むべし。又洞九郎が穴の中に在りつる始末、人の知るべき道理なしと雖も、都是推量を以てしるせるなり。又胸毛の黑平が古社の裏に居たる故いかにとなれば、先達て家財を彼社の裏に運置きて、密に賣代なし、妻の岩芝とともに、暫時隱れ居たるが、彼夜岩芝は麓の村に一宿して居合せざれば、夫の殺されたる事を知らず。歸りて見れば夫の行方知れざる故に詮方なく、何處ともなく落行きけるとぞ。扨彥惣香晒等夫婦の者は、幾日過ぎても洞九郎家に歸らざるを不審り、人を雇ひて攝州住吉の鄕士何某といふ者を尋ねさせけるに、さある人はなしといふにぞ益不審り、香晒は父といひ子といひ、行方しれず生死の程も覺束なきを悲み、其出でたる日を命日として二人の菩提を弔ひ、淚に日を送りしが、彥惣が病は漸く怠りて、其年の暮に全快しければ是れをのみ幸とし、夫婦相談して、泉州堺に住家を移し、彥惣は扇の繪を書

度二百二十兩といふ、金は我身に授かれども、穴に在りては金を持ちたるかひもなし。こゝさへ出づれば餓の長者、唯願はくは此穴を、遁れ出でたや翼をほしやと思ひつゝ、空を仰ぎ足摺して、泣悲むぞ愚なる。斯くて明くるとも知らず暮るゝとも知らず、凡四五十日も爰に在りて、已に嚴冬の時節に到りければ、穴の裏は格別に寒氣強く堪難ければ、熊の皮を剝ぎて身に覆ひ寒さを凌ぎけるが、髮は蓬を亂し髭は長く生延びて、おのれも熊の如くになりぬ。今は熊の肉も都て食ひ盡して只骨のみ殘りければ、飢を凌ぐ事能はず。此後はいかにしてか命を繫ぐべきと、俄に又周章惑ひて、何にもあれ食すべき物はなきかと、穴の裏を細かに探し索めけるに、岩の間に見馴れざる菌のありけるにぞ、大に嬉しみ、是を取りて食ひけるに、暫時ありて五臟六腑惱亂し、裂けちぎるゝが如くに覺え、七轉八倒して苦みけるが、遂に多くの血を吐出し、首に剳符を掛けながら、熊の白骨の傍に、横たはりてぞ死したりける。彼菌は岩芝がいひし如く、獸肉を食合すれば、忽ち血を吐きて死すといひし詞に違はず、誠に奇妙の菌なり。五雜俎に云く、僧德明といふ者山に遊ぶ、忽ち奇しき菌を得て歸り、衆人に啖しむ。毒發して死する者十餘人とあるも、斯る類にやあらん。熟思ふに、胸毛の黑平は、香晒が金を奪ひし報によりて、洞九郞が爲めに殺され、其金洞九郞が手に戻ると雖も、天罰洞九郞が貪欲非道を戒めて、岩穴




和州二上嶽の嶺峠ニて山蛭の洞九郎盗人と金とあらそふ
洞九郎手負の熊と組合て岩穴ニおちる

く、逃去らんとしたるに、熊は早く飛附きて、洞九郎が衣服の襟を啣へ、一跳はねけるにぞ、熊も洞九郎もともに深き岩穴の裏に落入り、組づほぐれつ爭ひしが、遂に洞九郎熊を押伏せて、猶胸さかを幾刀となく刺通しければ、熊は全く死したりけり。彼五つの炎の玉は、洞九郎が爲に石子詰になりし、五疋の犬の怨念に疑ひなし。去程に洞九郎は岩穴に落入りて、四邊を見れば、岩壁屏風を立廻したる如くにて、登るべき便なければ大に仰天し、蔦葛に取附きては、引ちぎりて撲的落ち、岩角を攀登りては、苔に辷りて撞的おち、翅なき身は詮方なく、大に疲れて倒伏す。殊に身上の疵痛みて堪難く、誠に十分の難儀なり。斯くて時刻移り、夜も明けつるにや、岩の間より少しの明のさしけるにぞ、四方を斷廻りて見るに、登るべき所なければ、愈驚き惑ひけり。さて飢にのぞみければ、山刀を以て熊の肉を割取りて是を食ひ、肉の油を取りて身上の疵に塗附けたるに、漸々其痛は去りけれども、兎角登るべき便なければ、大膽强氣の者なれども、流石に心弱りけり。さて熊の肉を食として餓を凌ぎ、渇を助くる清水だになければ、風の吹き込む木の葉の露を甞めて、僅に咽を潤ほし、幾日ともなく此穴の裏に居たりけるが、いかに思ひ廻しても、こゝを出づべき手段なく、首にかけたる二つの劑符をとり、中なる金を取出し、一つとなして唐革の劑符に納め、七十兩に五十兩、娘を賣らば又百兩、合せて丁

と吐きける折しも、向うの方の岨道より、手負熊と思しく、樹根岩稜を飛越えて、眞一文字に走來る。時に洞九郎思ひけるは、彼熊をしとめて、膽を賣り皮を販がば、之も又金になる貨物なり。天の賜物を取らずに歸るも費なりと、飽まで欲の深ければ、古社の關楗を取りて岩の蔭に身をひそめ、飛來る熊を待請けて、近づく所を前脚を、狙ひ澄して打倒さんとしたりけるに、熊は忽ち身を躍せて之を飛越え、大に怒をなし、鼻を鳴し牙を嚙み、眼を瞋し腰をひねり、只一摑と飛懸る。洞九郎は兼て熊を捉るの手練を極めたる者なれば、事ともせず、再び又關木を振上げて熊の頭をのぞみ、微塵になれと打ちけるに、熊も又早く是を避け、關木にしかと喰付き爪を立てて、かなぐり棄てんとす。洞九郎は之をとられじと力を盡し、えい〳〵聲を立つれば、熊も勢猛くなりて、少間引合ひけるが、熊の力や增りけん、遂に關木を奪取り、己が力餘りて仰樣に倒れたり。洞九郎は便機よしと思ひ、手速く山刀を拔いて乘りかゝり、月の輪をしたたかに刺貫しければ、さばかりの荒熊四足を縮め身を振はせ、一聲うなりて息絶えたり。斯る折しも夜嵐烈しく吹來りて、樹木の梢ざは〳〵と鳴りどよみ、月は再び暗くなりけるに、怪哉炎の玉五つ、何所ともなく飛來り、空中にて一團となり、死したる熊の胸元に落ちて、消ゆると等しく、熊は忽ち蘇りて、再びまた洞九郎に飛懸りければ、洞九郎今は身體疲れて敵し難

取附きて、もとの所に登りけるにぞ、洞九郎も續いて其所に登り、猶烈しく打合ひ、双方數ヶ所手を負ひて、身中朱に染りけるが、元來洞九郎は力量勝れ、膽氣勝れた者なる上に、能程に酒氣を帯びて勢盛なれば、戰も面倒とや思ひけん、刀を捨てて無手と組附くに、盗人も刀を捨て力を極め、上になり下になりして揉合ひしが、遂に洞九郎さしもの大男を仰樣に取押へ、刀を取あげて吭を刺通しければ、一聲叫び手足をもがきて死したりけり。此時月の雲散りて再び又輝きぬ。洞九郎月の光に乘じて、盗人の身内を探見たるに、是も剳符を首に掛けたり。取上げて見るに、己が山稼の晝飯の器を入れて持馴れたる布の袋にて、裏を改め見れば、小判五十兩あるにぞ、あな思ひ懸ずや。娘香晒が金を奪ひたる盗人は、此者にてありけるか。計らず此金の我手に戻りし事、重ね〴〵の福なりと大に嬉しみ、盗人の覆面頭巾を取りて面體を見るに、是胸毛の黒平にてありければ、益驚き思はず娘が仇を報いし事、心地よし〴〵と打點頭き、死骸を此儘捨置きては後日の災と思ひつゝ、土中を穿ちて深く埋め、血に染みたる土どもを取隱して莞爾と笑ひ、七十兩の金を拾ひて、又五十兩我手に戻り、娘を賣りて百兩の金を是に加ふれば、丁ど二百二十兩、俄の長者有難し忝けなし。今日はいかなる吉日ぞと限りなく喜びつゝ、二つの剳符を首に掛け、谷川に下りて刀衣服の血を洗ひ、元の所に登り來て、一息吻

にて幾度も金を數へ見て打笑ひ、只管喜びて獨言にいひけるは、足手纏の子を捨てて、手にだに觸れたる事もなき大金を拾ひしは、返すぐも例なき福なり。此上に婿を追出し娘を賣らば、百金は慥なり。都合すれば百七十兩の金は我手に握りしも同然なり。あな嬉しや辱けなやといひて、天を拜し地を拜して益喜びけるが、早榮耀の心出來て、朽ちたる椽の上に臂枕して寢そべり、だみたる聲して山歌を唄ひつゝ、休み居けるが、醉に乘じて睡を催し、覺えず熟睡し、鼾の聲を高く立てけるが、此時既に月は雲に掩れて、仄暗くなりにけり。斯る折しも何者にかあらん、崩れたる蔀の間より、手をつと差出して、洞九郎が懷の劑符を奪ひ取らんとす。洞九郎は劑符の紐を首に懸けたれば、彼方に引けば此方に應へて睡を醒し、其腕首を無手と摑めば、振拂ひ、蔀を押崩して、覆面頭巾に面を包み、大脇差を横たへたる大漢現れ出で、又洞九郎が懷に手を懸くれば、洞九郎身構し、察する所汝は山賊の類ならん。我を尋常の者と思ふ愚さよ。年こそ老いつれ、腕に覺えのある者ぞ。我懷を窺ふは、猫の額に有る物を、鼠の狙ふに異ならずと冷笑へば、盜人は言戰ひ無益とや思ひけん、一言の詞を出さず、一腰をすらりと拔いて斬付くれば、洞九郎も山刀を拔放ちて之を受止め、丁々しとと打合ひて、しばしの間戰ひしが、双方岩角に足を踏流して、淺き谷川の裏に陷り、圯橋の杭に取附きて、又六七合打合ひしが、盜人は岩に

其儘に差置きては、後日の政道立たざれば、永の暇を遣すなり。其子は汝に授りし者なれば、養育致し遣すべし。若後日落せし金を償はば、歸參さすべき事も有らん。是金を惜むにあらず、政道を正うせん爲なりと云渡されけるにぞ、垣右衞門は恐れ入り、假令命を召さるゝ共詮方なきに、何事なく暇給はる事、廣大の御慈悲なり。後日如何にもして金を調へ、歸參を願ひ申すべしといひ、主從の別を惜み落淚して私宅に歸り、妻秋草といふに始終の事を委しく語り、急がはしく家財を取片附け、彼子を妻に抱かせ夫婦連立ちて、住馴れたる家を放れ、暫時且伏見の邊に借家して日を送りぬ。忠知は再度又別人に金を持せて、攝州天王寺村に遣しけるに、彼茶入は早他の方へ賣遣したり迚、手を空しうして歸りければ、最本意なくぞ思はれける。

得失譬喩品第二（後談）

夫は扨おき洞九郎は、其夜拾ひし金を懷にして歸る道すがら思ひけるは、餘り速く歸りては、二人の者の疑はん事もあるべければ、暫時途中に隙取りて、時刻を移して歸らばやと思ひ、酒賣る家に立寄り、小遣錢を盡して酒を飮み、道を變へて二上ケ嶽の山道に差懸り、漸々に醉を發し、踉々蹌々と歩み行きけるが、窟峠の古社の椽先に尻かけて休ひ、又彼剳符を取出し、月影

便さ増れども詮方なく、見捨ててまた十歩ばかり歩みけるに、又頻に泣きけるにぞ、さても不便と又立戻れば、泣止みて、莞爾と笑ひかけ、行けば泣出し、戻れば笑ひ、後髪を引るゝ如く、行きつ戻りつ去兼ねて、曩昔強盗人の家に忍び入り、小兒の笑顔を愛して、覺えず隙とり、捕はれしと聞きつるが、何樣小兒の笑顔程愛らしき者はなし。此夜風に冷えたる肌を、切て少間の中も煖めて遣るべしと抱き上げ、懷に入れて我肌にて暖むれば、さも嬉しげにしがみ附き乳を嘗むる愛らしさ、時刻移れば取出さんとするに、懷の中にて快げに、すや〳〵と眠るにぞ、さても〳〵可愛さよ。假令我金を落せし越度にて、翌日命を召さるゝとも、斯くまで我を慕ふ子を、爭か見捨てて歸るべき。能々我に因縁のある子なるべし。最早夜更けて人の往來も絶えぬれば、犬などに喰れんは必定なり。いかに思ひ返しても不便なり。此儘拾ひ立歸り、我は命に及ぶとも、妻に與へて養育を致さすべしと心を定め、子を懷にして此所を立去り、此夜は旅宿を求めて宿り、貰ひ乳して飲せなどし、翌日未明に發足して京都に歸り、彼子を抱きながら打しをれつゝ、主人忠知の面前に出でて頭を垂れ、金を落せしより子を拾ひし迄の事を、明に聞え上げて、いかなる罪にも仰附けられ下さるべしとて平伏してぞ居たりける。忠知是を聞きていひけるは、汝は平生老實なる者なれば、しかいふ詞僞とは思はざれ共、金を落せし越度を


茶臼山
一心寺
賽銭
摂州天王寺郷
合法が辻
焔魔堂


山蛭の洞九郎狩犬を石子詰にして殺す犬の怨念一團の炎となりとびさる
山蛭の洞九郎
手を捨て金を拾ひ金を失ひて手をひらく
穂波垣右衛門

體疲れて恰法が辻の地上に撲地坐し、我小祿の身分なれば、七十兩といふ大金を償ふべき手段なし。こはいかにすべきと當惑し、手を拱ぬき吐息して居たりけるに、閻魔堂の邊にて頻に赤子の泣く聲聞えけるにぞ立上り、彼所に行きて見るに、藁簑の内に赤子を入れて捨置きぬ。此垣右衞門が妻頃日男子を產み、其子程なく死失せて愁傷遣方なき折なれば、己が身に思ひ比べて、最不便に思ひ、翅の下に子を隱して我身を射らるゝ狩場の雉子、親は空にて血の涙を子故に降す善知鳥、凡生きとし生るもの、子を思はぬはなけれども、能々貧苦に迫りし故、是非なく捨てしものならめと、其親の心を思遣りて、覺えず淚を落しけるが、吁我身に難儀を負ながら、餘所の哀に係はるは益なき事、一旦爰を立去りて、一思案して見ばやと思ひ、十步許步みけるに、彼捨子又頻に泣きけるにぞ、さても不便と立戻り、提灯をさしつけて、能々見れば男子にて、瘦子なれども目鼻立氣高き生質、繍箔の古裂を集めて縫ひたる、つぎ〳〵の產衣を著置きぬれば、賤しき者の子とも覺えず、己難儀の時ならずば、拾ひ歸りて妻の乳にて育つべきに、我身一つさへ如何に成るべきやらん、計り難き折なれば、さも成難しと思ひけるに、生れて餘程日數立ちたる子と見えて、捨子は垣右衞門が顏を見て、莞爾笑ひけるにぞ、いとゞ不

に押入れ、外の方に立出で、柴小屋にありける、藁籠を携へて出行きけり。跡には香晒惘然と、明いた懐寒ぎもせず、彦惣も手を拱き、夫婦言はずして、唯黙るゝは涙なり。洞九郎は娘を金にするには。先足手纏の赤子を捨つるに如じと思ふより、斯く二人の者を欺きて家を出で、程遠き處に捨てばやと思ひ、道を急ぎ夜に入りて、津國に到り、合法が辻にて往來の間斷を見合せ、赤子を藁籠に入れて閻魔堂の前に捨置き、歸らばやと、十歩許歩みけるに、何にか有らん足に纏附きたれば、頓て是を取上げ見るに、革の金剤符にて足に纏ひたるはしめ緒の端なり。急はしく開き見るに小判數多ありければ、ぞつとする程嬉しみつゝ、先懐に押入れて、足速に此處を立去り、歩みながら懐の裏にて金を算ふるに、其數七十兩あるにぞ益喜び、今日はいかなる吉日ぞや。邪魔になる子を捨てて斯る大金を拾ひし事、例少き福なりと思ひつゝ、滿面に笑を含み、早金持氣になりて突袖し、緩々と歩みてぞ歸りける。俳諧師其角の狂歌に、

子を捨てて空しく歸る親の身の金を拾はばくやしからまじ

といひしには事かはりて、洞九郎は誠に是恩愛を知らざる貪夫なりけり。彼穂波垣右衛門は、君命に依りて攝州に來り、茶入を求めばやと、天王寺村へ急ぎ行く途中にて、懐中の金剤符を落しけるにぞ、大に仰天し、今來し道に立戻り、提灯を照し、凡四五町が間を、幾度となく行きつ

孩兒なれば、手放す事は成難しといひて承引はねば、洞九郎態と打しをれたる樣をなし、我は唯婿殿の病と孫めが飢を救はめと思ふ、一途の了簡のみ。人手に渡すを愁ふるは理なり。强ちに勸めはせぬといひて頭を押さへて居けるに、彥惣は病床にて是を聞き、屛風押明け膝行出で、香晒に向ひていひけるは、我倩々思ふに、其子胎内にて危難に遭ひ、出生して又飢る事、能能親の手にて育て難き因緣の子なるべし。舅殿の今の物語、住吉の何某とやら、富む富ざるには係らねど、鄕士とあれば好しき處なり。思ひ切りて其處へ養子に遣るがよかるべしといひければ、香晒は兎やせまじ角やすべきとたゆたひて、少間答もせざりしが、いかに思ひても乳不足にては、とても養育成難しと思ふにぞ、漸々心を定め、得心の由をいひければ、洞九郎は心の裏に笑を含み、然らは一刻も早く孫を携へて津の國に行き、彼人に媒を賴むべしといひて、急はしく湯漬など打喰ひ、身支度して卒々といふに、香晒は思ひ切りは切りながら。大難を免れて產出したるいとし子を、人手に渡す悲しさに、懷に抱きしめて、只管淚に哽かへり、四子に別るゝ桓山の、鳥も斯くやと彥惣も、袖を絞れば洞九郎も、手拭に目を摩撫でて空泣し、別れ兼ぬるはうべなれど、親子不通といふではなし、いつでも逢ひに行るゝ事、いはば此子の出世の門出、行末祝うて遣るこそよけれといひつゝ、香晒が懷に手を差入れ子を抱取りて、己が懷

方と一つの談合あり。昨日孫を懐にして東村に行き、貰乳して居たるに、攝州の人居合せていひけるは、住吉の邊に何某とて富みたる郷士あるが、其妻女頃日男子を産み殊の外喜びけるに、其子七夜も立たざるに死亡せければ、夫婦限りなく悲み、妻女は懐淋しく乳の張るに附けて、なほ更に思ひを増して夜も泣明し、切て人の子を貰ひ失し子と思ひて、此乳を與へ育てたく思へば、若しさある者あらば、疾く告知せよと頼まれつるが、御身の懐なるも男子の由、乳に困りて飢させんよりは、彼所へ養子に遣す心はなきや。さすれば其子の爲には大なる福にて、忽ち錦に包れ數多の人に侍かれ、輦に乘りて育てらるゝなり。其心あらば我媒妁して遣すべしと勸めぬ。是に因りて我思ふに、孫を彼所に遣し、其方身一つになりて婿殿の看病せば、夫の病も本復し、子ゝ飢を助かりて、二つながら全きを得る良計ならめと思ふなり。其方の心はいかにぞやといふに、香晒は子を懐に抱きながら、涙をぱら／＼と落しつゝ、思へば／＼我身程、因果の悪しきは世にあらじ。適々宿りし孩兒を、胎内にて失はんと思ひし難儀は一つ遁れながら、猶乳細くして養ふに足らず。飢勝にて痩細るを見るに附けても、彦惣殿原の身ならば、乳侍の抱守のと、何不足もあるまじきに、悪しき時に生れ合せ、不運の子やと愚痴に思ふもかひなき事、父上の思し給ふ所極めて理には侍れども、彦惣殿親の血筋を絶さじと、大事に思す

いひけるは、其方に申附くる事あり、別儀にあらず。我豫て懇望せる、更級肩衝の茶入、頃日賣物に出で、攝州天王寺村の茶器を商ふ何某といふ者の方にある由を告ぐる者あり。彼茶入は信濃國望月の家の名器なるが、家士に遣したるを其者浪人し、たつきに困りて賣りつる由、出所も慥なれば、我これを求めまく思ふなり。是を目巧して求來らんもの、汝ならではなき故に此事を申付くるなり。價は小判七十兩の由。此金を持ちて急ぎ攝州に赴き、他へ賣遣さぬ先に、疾く求め歸るべしといひて、蜀紅錦の紋置きたる唐革の劑符に、小判七十兩を入れて垣右衛門に渡しければ、垣右衛門は之を受取り、頓て旅支度を調へ、津の國を指して急ぎ行きぬ。夫は扨おき洞九郎が家にては、彼方は病人此方は產婦、彥惣がせきいる聲に赤子の聲の泣きまぜて、熱の匂の古夜著に、臭氣する濕布籠、病苦に貧苦重ねても、肌は薄き單衣、藥土瓶に缺茶碗、破障子の建附も、歪なりなる暮しなり。洞九郎一日香晒が傍近く寄りて、念珠を爪繰りつゝさも理げにいひけるは、婿殿の病漸く快氣に赴く容體なるが、こゝにて看病を疎かにすれば、病原に復りて再び快氣すべからず。思へば大事の處なり。然るに其方產後も餘程日數立てども、漸々に乳細くなりて孩兒を養ふに足らず。貰乳するも村里遠く心に任せざれば、斯くては餓死なん事必定なり。我いとほしと思ふ孫の、目前餓死を見ん事いかにも忍難く思ふに附きて、其

角仕馴れたる獵人の業に如くなしと思ひ、折々弓箭を隱し持出でて山に行き、獸を射て酒に替へ、彦惣香晒等には、山寺に詣でて說法聞くといひなし、念珠を求め來りて家に在時は之を爪繰り、空念佛を稱へけるにぞ、彦惣香晒等は、志改りて後世を願はるゝ事よと思ひて喜びけるが、是は洞九郎が謀計にて、彦惣が病漸々に快氣に赴く樣子なれば、いよ〳〵さあらば無理云懸け、難癖付けて追出し。香晒に金多く持ちたる能き婿取るか、夫得心せずば遊女に賣遣して、多くの金にせばやと思ふより、二人の者に志改りしと見せて、油斷さすべき工なり。斯る愚夫にも奸智は出易き者と知られぬ。爰に又都鴨川の邊に、鴨川兵衞忠知とて、富饒なる鄕士ありけり。未だ若年なれども、聰明怜悧篤實柔和にして、文學武藝ともに通達し、別けて弓射る事に妙を得たり。嘗て一休禪師と親く交りて、教外別傳の禪味を甘んじ、茶の湯の侘を好みて其道も又奧を究め、常に古器を愛玩し、都て風雅なる事人に越えたり。此頃は未だ俳諧の連歌といふもの世に行はれざる時なりけるが、

白炭や燒かぬむかしの雪の枝

といふ句を口吟みけるより、時の人白炭の忠知と異名しけり。此人の家士に穗波垣右衞門といふ者ありけり。年は五十歲許にて、生得老實なる者なりけるが、一日忠知此垣右衞門を召して

は災を我家に及ぼすべし。我此頃活業をせざれば、久しく酒の匂だに嗅がず。此犬を空しく放さんよりも、殺して穢多に賣遣さば、少しの酒代にはなるべし。禍の種を蒔かんよりは酒にかふるに如くべからずと、情氣なき日來の惡意を發し、道を轉へて河原の方へ引行きけるに、犬ども其心を察しけるにや、後歩して前に進まざるを、狩杖にて打擲きつゝ引行きて河原に到り、一疋づゝ口に小石を突籠み、石子詰にして五疋共に殺し終りけるが、あな怪しい哉。五疋の犬の胸許より、炎の玉一つづつ飛出でて虚空に登り、合して一團となり、何方ともなく飛去りぬ。洞九郎は是を見て怪しとは思ひけれど、さばかり心にも懸けず。死したる犬共を穢多の家に持行き、錢二索子に替へて、近き邊の酒屋に行き、酒肴を求めて快げに打飲み、微醉の機嫌にて家に歸り、香晒には富村に放ちて歸る道にて仲間の獵人に出會ひ、酒を振舞れて歸りしと僞り、唯虚空吹きてぞ居たりける。おのれ石子詰の罪科をのがれ、未だ半月も過ぎざるに、久しく飼馴れたる犬どもを石子詰となし、纔の酒に替ふる事、誠に是性惡の愚夫なり。豈其報いなからんや。此犬どもの怨念によりて、後來の戒となるべき話柄を惹出しぬ。斯有しより後は物語るべき事もなく打過ぎけるが、香晒は已に開胎に至り、恙なく男子を安産して限りなく喜びぬ。洞九郎始の程は殺生を止め、活業を代ゆべくも思ひけるが、犬を殺して賣りしより、兎

の尾に附き、彦惣殿の云るゝ事を等閑に聞給ふな。此後は萬の事を能愼み給へ。妾も漸々に賤の手業を仕覺えつれば、假令父活業をしたまはずとも、妾安産して身輕にさへ成侍らば、いかにもして養ひ進らすべし。彦惣殿も病さへ本復あらば、能思案もありぬべし。暫の中の貧さを忍び候へ。直道をさへ行ひ侍らば、自ら神佛の惠もありなん。物食はでも居べからずなどいひて諌めければ、洞九郎何樣二人のいふ如く、此後は殺生をやめ、何にもあれ活業をかゆべし。遣ひなれたる體なれば、安閑と暮しては、却つて身うち痛みて堪難しといふにぞ、香晒は打笑ひ志の歪も少しは直りしかと心裏に喜びつゝ、此上は夫の病本復と我身の安産を願ふのみと、少しは心を安めけり。斯くて後は洞九郎活業をせず、唯家にありて寢つ起つ短日をも暮し兼、叭のみして居たりけるが、一日香晒いひけるは、父上殺生を止給ふからは、狩犬も用なきものなり。殊更食物も乏しければ、何方にもあれ、人家多く食乏しからざる處を見立てて放ち遣給へかし。爰に置きて飢ゑしむるは不便の事に候といふにぞ、洞九郎打點頭き、如何にも然り。我我すら食ふや食はずの貧しき中に、畜生どもに食を減さるゝは、無益の至りなりといひて、四五疋飼置きたる狩犬どもの綱を引き、狩杖つきて出でたるが、道すがら思ひけるは、此犬ども猛き上に、常に獸の肉を食ひ馴れたれば、若人家ある所に放ちなば、人に齩附きなどして遂に

本朝醉菩提　卷之二

迦諾迦伐蹉尊者　得失譬喩品第二

去程に香晒が孝心を、天も感應ありけるにや、父洞九郎重き罪科を免れて家に歸りければ、香晒限なく喜び、簪を代なし酒肴を求め來りて、祝の酒を進めけるに、彥惣も病の床を出でて洞九郎に向ひ、誠に是香晒が孝行の功德に因りて此喜あり。子と雖も疎にな思ひ給ひそ。御身の罪を贖ひたる金に就いては、樣々の難儀色々の愁歎ありて、胸の轟きは今も猶止まず、箇樣箇樣の事のありしとて、其始終を細に語るに、其落ちたる事は香晒語り加へて聞せけり。洞九郎は日來恩も情も辨へざる者なれども、流石に命を救はれしが嬉しさに、二人に厚く禮を述べ酒呑みてぞ居たりける。時に彥惣いひけるは、御身此度の事に懲りて、此後は露ばかりも惡事をし給ふ事なかれ。明なる處には王法あり、暗き所には天罰あり。隱惡と雖も顯れざるといふ事なし。今より獵人の業をも止め、別に活業を變給へ。年久しく仕馴給ひし事とはいひながら、年老いての殺生好むべき業にあらず。少しは後世の事をも願ひ給へといへば、香晒も其詞

○地藏經に、是菩薩。得十種福。一者女人泰産云々。此誓ある故に子安の地藏腹帶の地藏など、世に呼れさせ給へり。佐比の河原にて小兒の苦患を救給ふといふも此故ならん。

○佐比の河原にて小兒小石を塔に積むといふ事、法華經方便品に、乃至童子戲。聚沙爲佛塔。如是諸人等。皆已成佛道。と見えたり。これに據りて然はいふなるべし。是等本文に用なき事なれ共、筆の序にしるせるなり。

ひあひけり。

○門說經の修行者何人といふ事、又風に吹取れたる書置の行方をも知らんとならば、畜生勸發品第十を讀得て知るべし。

○門說經といふ者、長柄の傘をさし、簓を摩りて物を乞ふ。後には三絃に合せて語る事になれり。說經者、門說經、太夫等の考、並に圖、予が骨董集に詳なり。發兌の時を待得て見るべし。

○佐比河原の事、一說に云く、山城國紀伊郡に佐比の里有り。三代實錄に、貞觀十三年閏八月に制有りて、百姓送葬の地を定給ふ條に、下佐比上佐比をも其地と定めらる。佐比寺は、延喜式にも、九原送葬之輩。更留柩於橋頭。と見えたり。、世に佐比河原を、冥途にて小兒の集る所とし、且地藏尊是を化益し給ふといふは、此葬所に小石塔多く、或は石像の地藏尊ありしより、云出でしならんといへり。

○三代實錄卷之二十二に、山城紀伊郡貞觀寺、建立の初其名定らず。嘉祥寺を假りて年分をなす。號して西院と稱したる由を記せり。此寺の葬所を、西院の河原といへる說あれども、前の說に據多しとおぼゆ。

匍の體にて逃去きけり。岩芝は口程もなき奴原哉と謳きて棒を捨て、一息吐きて立去らんとしたりけるに、先程より猪追小屋の蔭に窺ひ居たる神崎の橋六、つと走出でて、背後より岩芝に撑掴附き、我折惡しく大金を持ちて汝が家に居たる故に、不慮の疑を受けたれば、汝を捕へ行きて、此身の明を立つるなりといひつゝ、力を極めて押伏せんとしたるに、岩芝はしやこしやくなりと呼はりつゝ身を轉し、襟首攫みて田の中へ岸波と投込み、鳴子の縄先手繰寄せて高手小手に括上げ、首に懸けたる百兩の金を奪取り、懐にして片頰に笑み、彼を失へば是を得る、是十分の幸なり。最早家には歸られずと獨言ちたる折しも、急雨斑々と降來つれば、手早く案山子の蓑笠を取りて、頭に被き身に覆ひ、何方共なく逃失せけり。縄目にあひし橋六は、身上すべて泥になり、恰も田鼠の如くにて、跡追行かんと身をあせれば、鳴子の音の磊落々々と、遠田の雀驚きて、むら〳〵ぱつと飛去りぬ。斯る所へ最前の若者等、近村の百姓共を呼集め、人數を増して來て見れば、岩芝は逃去りて、橋六獨縄目にあひて居けるにぞ、括るべき者は縛らずして、括られまじき者は縛られぬ。是ぞ鶍の橋六よ。汝も僉議の種なれば、率て行くぞとて引立つれば、縲紲の恥の其上に、金まで奪取らるゝとは、いかなる宿世の報ぞといひて、面をしわめて歎きつゝ、涙にまじる洟は、潮の眞水の堺まで、捕れ行くこそ不運なれと、是を聞く人い

に見馴れぬ若者等四五人、棒を提げ捕縄を持ちて、急はしく來り、岩芝を取圍みていふ樣、汝は胸毛の黑平が妻ならん。我輩は泉州堺の者なるが、黑平事旅商人と僞り、實は旅に出でて賊をする由、昨夜歸り來つる事、注進の者ありて明白なるにより、大島の郡司の命を承けて向ひたるに、早何方へか逃去りて、家には唯神崎の娼家橋六とやらんいふ者、獨寢そべりて居たる故に、彼も怪しければ彼方に留め置きぬ。彼に問へば汝は此邊に來ぬる由、我輩此所に向ひたるは、汝を摘行きて夫の行方を糺明せんが爲なり。疾々腕を廻して縛を受けよといふ。岩芝是を聞き、偖は夫の惡事早露顯せしかと驚けども、元來膽太き女なれば、面にも顯さず、只嘗嘲笑ひ、郡司の命ならば武士をこそ差向けらるべきに、汝等に命ありとは心得ざる事なり。夫の行方決して知らずといへば、若者等いひけるは、武士をさし越れては却つて逃走るべしとありて、我輩に命じ給ふ。無益の言を費さず、疾縛にあへといひつゝ、繩さばきして立懸る。岩芝は事ともせず、傍邊の猪追小屋にありける猪追棒を追取りて打つて懸れば、女に似合ぬ不敵者棒ずくめにせよといひて、此方も一同に棒を振つて暫時挑戰ひけるが、岩芝は風に揉るる胡蝶に等しく身をなして、飛上りてははしと打ち、沈みては薙倒し、雪を持ちたる柳の枝の弱氣に見えて強きが如く、腰も裹に擰扎きて、益勢猛かりければ、若者共は遂に敵し難く、徊

節此食物を食ひけるに、忽ち庭に倒れて身を悶え血を下して、頓て子種を脱しけるにぞ、香晒是な屹と見て、あな奇妙の菌や。我是を飲むならば、斯くの如くなるべきに、危かりし事なりと、我身の上に引當てて、犬を不便に思ひけるが、此金を惠みしは正しく今の門說經の修行者なり。いかなる所緣何故に、斯る危難を救ひしぞ。跡追行きて問はんものと思ひつゝ、急ぎ惑ひて出でんとせしが、片家より彥惣が、屛風を力に透逅出でて、やれ待て香晒、斯落魄し我々に、誰か所緣の者あらん。其金は汝が孝を天帝の憐み給ふ賜ならん。もしさもなくば神佛の冥助なるべし。凡人の所爲とは覺えず、跡追行くとも爭か見ること能はん。汝が金を奪はれたる子細、糸車に結びたる此書置にて、今始めて知りつるぞ。片時も早く其金持ちて村長の方に行き、父の命を救ふべしといひて急がすれば、香晒は實にもさりと點頭きつゝ、金を額に押戴き、喜び勇みて馳行きぬ。跡には獨彥惣が、猶書置を繰返し、溜息吐きて居たりけるに、さと吹來る山下風、書置を卷取りて、行方も知れずなりにけり。さて岩芝は先程より、香晒が菌の汁を飲む飲まざるを見屆けん爲、竹林の裏に隱れ居たりけるが、香晒思ひ懸なく金を得て、身を賣るに及ばねば、心の計策齟齬ひ、迚も此地を逃退くからは、何するとも妨なし。此上は香晒が跡を追行き、彼金を奪ひ取るべしと思ひつゝ、畔傳に近道を馳行きける所に、向うの方より、當地

嗄かへりてぞ泣居たる。時に村長急はしく走來り、唯今奈良の法師達、洞九郎を率て某が方に來られ今一時を過ぐれば此野に於て、生きながら土に埋め、石子詰の刑に行ふとの事なり。愈罪を贖ふ心ならば、疾々金を持來り候へ。今一時が生死の界、危く候ぞと急がし立ててぞ歸りける。彼方の篁を押分けて、岩芝顔をさし出し、神崎より金携へて我家に來り、待侘び居るぞかし。疾々夫を飲給へ。早く〱と云置きて、元の所に隱れけり。片家の方には彦惣が聲として、其方は未だ金取に行かざるか。何狼狽へて隙入るぞ、疾々行けとぞ叱りける。二方三方身一つに、煎じ詰たる菌は、我子の爲の阿鼻地獄、大焦熱の苦を嘸なと思ふ悲さに、軒の玉水日もとから、落ちてこけ込む藥鐺、涙も熱るおもひなりしが、天狗道の熱鐵も、飲まねばならぬ此時と、思ひきり〱、心は早鐘時打つかと、耳振立てて氣も半亂、藥を茶碗に移し入れ、地藏菩薩を念じつゝ、眼を閉ぎ胸を撫で、ほと〱飲まんとしたりけるに、やれ待暫し此金で、難儀を救へと呼はりつゝ、金の包を垣越に、投れば丁と、茶碗に當つて打落し、藥は流れ包は解けて陸離と、陸奥山にあらずして、黄金の花を咲せけり。香晒は夢現とも辨へず、急はしく拾ひ集めて算へ見れば、數も丁ど五十兩ありけるにぞ、餘りの嬉しさに、唯惘然として居たりけり。時に茶碗よりこぼれたる菌の煎汁、獵犬の食物の器の裏に流入りしが、柱に繫し孕犬、折

て、水は炎と燃上り、其身を焦して倒れつゝ、絶入る事は數知れず。中に賢き小兒等は、色よき花を手折來て、地藏菩薩に奉り、權呵責を免れんと、咲亂れたる大木に、登ろとすれど情なや、幼き者の事なれば、踏流しては此彼の、荊棘の刺に身を刺れ、總て鮮血に染りつゝ、漸花を手折來て、佛の前に奉る。中に這出る水子等は、胞衣を頭に被りつゝ、花折る事も叶はねば、河原に捨てたる枯花を、口に啣へて痛しや、佛の前に這行きて、地藏菩薩に奉り、錫杖衣に取附いて、助け給へと願ふなり。生死流轉を放れねば、六趣輪廻の苦は、唯是のみに限らねど、長夜のねぶり深ければ、夢の驚く事もなし。唯願はくは地藏尊、迷ひを導き給へかしとぞ唱へける。

香晒は暫時これを聞居しが、時も時折も折とて、佐比の河原の說經節、あな心なや思ひをませとの事なるか。此世に出ぬかはりには、罪も報もあるまじきとこそ思ひしに、あれ聞いては胎內の子にも罪ありとよ。邪見な母を戀慕ひ、二重積んでは母の爲と、胞衣を被りて這廻り、小石を拾うて嘆くらん。胞衣に添へて埋むれば、手を能書と敎へられ、調へ置きし筆墨も書置の料となれば、身を投げばやと我袂に、拾ひ入れたる細石も、子の積む塔となるならん。金は僅に五十兩、金故我子を殺すかと、口をすべらす獨言、牙を嚙み身を悶え、簀子に撲的倒れつゝ、

積んでは父の爲、二重積んでは母の爲、三重積んでは西を向き、樒程なる掌を合せ、郷里兄弟我爲と、あらいたはしや幼子は、泣々石を運ぶなり。手足は石にてすれたゞれ、指より出る血の滴、身上を朱に染めなして、父上戀し母戀しと、唯父母の事ばかりをいうては其儘打伏して、さも苦氣に嘆くなり。あら怖しや獄卒が、鏡照日の眼にて、幼き者を邪睨附け、汝等が積む塔は、歪がちにて見苦しゝ。斯くては功徳に成難し。疾々是を積直し、成佛願へと呵りつゝ、鐵の拷笞を振揚げて、塔を殘らず打散す。あら痛しや幼子は、又打伏して泣叫び、呵責に隙ぞなかりける。罪は我人あるなれど、殊に子供の罪科は、母の胎内十月の內、苦痛さまぐ生れ出で、三年五年七年を、纔一期に先達ちて、父母に嘆をかくる事、第一重き罪ぞかし。母の乳房に取附きて、湩の出でざる其時は、せはりて胸を打たゝく。母は是をも忍べども、など報のなかるべき。胸をたゝく其音は、奈落の底に鳴響き、修羅の鼓と聞ゆなり。父の涙は火の雨となりて其身に降りかゝり、母の涙は氷となりて其身を閉づる歎こそ、子故の闇の呵責なれ。斯る罪科のある故に、佐比の河原に迷來て、長き苦患を受くるとよ。河原の中に流あり。娑婆にて嘆く父母の、一念屆きて影うつれば、のう懐しの父母や、飢を救ひてたび給へと、乳房慕うて這寄れば、影は忽ち消失せ




賽之河原圖
親の罪を子におわせて

死を致すとも、かた身に殘す腹の子は、平產を致す樣、何卒御守下されかしと、活人に向ひし如く、いふも苦しき息の下、父の戒名、春譽夢幻居士、母の戒名、秋譽泡沫信女、頓證菩提南無阿彌陀佛あみだ佛と、息もたゆげに唱へつゝ、熱に焦げたる舌の根の、こはる病の責念佛、我子の爲の枕鉦に、知らぬ回向ぞ哀なる。香晒は隔の紙門に身を寄せて是を聞き、我身にかへて子を思ふ、夫の心いたはしく、其いふ所都て皆義理にせまりし事なれば、皮肉も放れ骨も碎くる心地して、親のためとはいひながら、あれ程までに思す子を、爭か脫すに忍ぶべきと心を變じて見る時は、親は忽ち石子詰、これも又堪難く、彼方をや救ふべき、此方をや助くべきと、親を思ひ子を思ひて、暫し心くらみけるが、否々子は再び得らるべし。親は再び得べからず。いかに思ひ飜しても、飮まねばならぬ此藥と、覺悟極めし折しもあれ、折戸の外に站みし、門說經の修行者が、生死長夜にたとへたる、長柄の傘を打かたけ、佛の敎經文を、俗に聞する說經の、簓の竹のサヽ菩薩、節も唱歌も殊勝にて、いとゞ哀を添へにけり。

歸命頂禮世の中の、定め難きは無常なり。親に先達つ有樣に、諸事の哀を止めたり。一つや二つや三つや四つ、十より內の幼子が、母の乳房を放れては、佐比の河原に集りて、晝の三時の間には、大石運びて塚につく。夜の三時の間には、小石を拾ひて塔を積む。一重

露知らず、聞人なしと思ふにぞ、獨言にいひけるは、香晒は最早餘程行きつらん。彼が居ぬ間に父母に、一言お詫を申さばやとて、よろめきつゝ立上り、窓の障子を押開けて、筧の水に手を清め、𤺺皮籠の裏より父母の位牌を出して上座に据ゑ、且親人の好の道、切て一服茶を立てて、供養せばやと思ひつゝ、遺留物の茶箱を取出し火桶に香を薫せて、土瓶を假の阿彌陀堂、地獄の釜の蓋取りて、佛果を願ふ樂茶椀、救ひ給へと炮碌の、はひおくれても紫の、雲にたぐゆる服紗、客は空しき位牌にて、亭主は脆き病人の、これを餘波と思ふから、手先も震ふ侘茶の湯、親子の緣の薄茶とも、知らで備ふる一服は、手向の水と冷ぬべし。さて恭しく手を支へ、父母の靈魂聞給へ、某若氣の誤にて、御主人の掟を背き、親の家名を絕せし事、不忠とも不孝とも、申上ぐべき詞なし。父母はこれを惡しとも思すまじきが、天罰は免れ難く、斯く業病に苦み、今日翌日も知れざれば、頓て草葉の蔭にて御目に懸り、冥途に於て聊か御恩を送るべし。又御祕藏の茶入を此度賣代なせし事、不孝の上の不孝なれども、舅の命を救ふ爲、餘儀なき事に候へば、偏に御免下されかし。妻の腹に一子を設け候へば、某は相果つるとも、妻に遺言申置き、幼き者を生立てて、某になりかはらせ、御跡を弔す樣に致させなん。孫の口から一遍の手向の念佛を、千萬卷の經陀羅尼とも思し召し、冥途で御受下されよ。假令某は不孝の罰で、狂

兼て用意のかひもなし。催生藥も先の世を、急がす爲には貯へず。産毛も剃らで其儘に、瓦の壺を棺にて、埋むべしとは思ひきや。土に蒲團も著せられず、石に添乳もならざれば、黑む乳房の一滴を手向の水とおもへかし。燒野の雉子夜の鶴、子故に迷ふ世の人の、疱瘡痲疹で子を先立て、心亂るゝ者もあれど、それは暫も子の顏を、見ての上の歎なり。これは我子の顏も見ず、若さきの世で遇見るとも、盡未來際我子とは、知る事ならぬ因果さよと、我を忘るゝ獨言、恩愛切なる悲に、五臟六腑も惱亂して、乳綱も切るゝ心地せしが、深き歎の通じてや、胎内の子の頻に動きければ、自己腹を撫摩り、あな可愛や、親子の緣のあればこそ、此身にやどり來しものを、月日の光を見せもせで、暗より暗に迷はす事、情なしとも邪見とも、いふべき詞はなきぞかし。五月目から人の形となり、八月になりては五體全く調ふ由、身を動すも理ぞ。胎内にて動子は、生れて達者な者と聞く。おことも定めて健に生立つべきに不便やな、只皮一重に隔てられ、顏見る事のならざれば、成るべきならば此腹を、割ちてなりとも顏見たや。死ぬる覺悟の我身は死れず、千代萬代も活きよと思ふ、おことは活すに活されず。假令月足らずにて育たずとも、生るゝ事はならざるか。此の世のかた身に産聲を、切めて聞かせて呉よかしと、いひつゝ腹を撫下し、夫に歎を聞せじと、袖喰締る忍び泣、哀といふも愚なり。彦惣は斯る嘆を

に出來る。折しも彼方の篁を押分けて、岩芝顔を指出し、手招するにぞ香晒は、夫と心得立寄れば、袂より彼菌を取出して渡し、是を煎じて疾く飲給へ。頓て神崎より金持ちて來るべし。必ず遅々し給ふなといひて歸りけり。香晒は是を夫に知らせじと、埋火を簀子の端に持出で、藥鐺に苔井の水を汲入れ、菌を入れて火の上に載せ、團扇を把りて煽ぎつゝ、心の裏に思ひけるは、廣き世界に妾程、因果の惡しきは又あらじ。心がらとはいひながら、一人の親は獄屋にあり。偶設けし子を失ひ、命に懸けて連添ひし、夫に別れ自は、浮川竹に身を沈め、肌を穢す苦しさは、何樣にあるべきぞ。親の血筋大切と、宣ひし子なれども、是非なく失ふ可愛さよ。左孕は男の子と、聞く嬉しさに指折りて、月の滿るを待侘びて、足を屈めて夜も臥し、高き所へ手をあげぬも、安産を願へばこそ。おろしてしまふ子と知らば、何毒立のいるべきぞ。妾が著たる振袖の、小裂集めて縫立てし、つぎ〳〵の產衣も、經帷子にすべきとて、守縫はつけざるなり。子安地藏の鉦の緒を、借りて締めたる腹帶も、迷路につなぐ緤絆となり、胞衣を納むる土器も、碎けて土にかへすとは、思ひまうけぬ事ぞかし。此身獨で育つるも、母と乳母の二人まへ、背に負つゝ寢さす時、慰むる爲にもと、覺えて置きし子護歌、あの山越ゆるは死出の旅、里に歸らぬ水子塚、鳩の車や鼗鼓、未來の爲には調へず。襁褓ひよ〳〵紗の頭巾、小豆枕や涎掛、

左なくとも此所に長居はならずといふにぞ、然らば御身は今宵の中に物を運び、箇樣々々の所にありて待給へ。妾は明日事を仕課せて彼所に行き、共に何方へも逃去くべしと互に示し合せ、岩芝は神崎を指して出行く。黒平は近き家の馬を盗來り、著替の衣服の類、錢目ある物を撰び荷物に造りて馬に付け、彼金袋を首に掛け、馬の口綱を取りて出行きけり。偖も香晒は其夜書置を書了り、程なく夜も明けぬるにぞ、只管心急はしく、鏡だになき貧しさに、盥の水に顔寫して、髮取上ぐる梳に、身を賣物と思ふから、花を餝るぞ哀なる。時に彦惣眠を醒して起上り、香晒々々と呼ぶにぞ、一聲應へて彼所に行き、藥を飲せ、粥を進めなどして近く居寄り、背を摩り腰を撫で、暗に思ひ運しけるは、此瘦では本復は覺束なし。權の中の生別と思ふさへ、斯計り悲しきに、若しこれが死別となるならば、いかにあるべきと胸逼り、心の裏の暇乞と、思ひて權介抱し、覺えず時を移しけるか、彦惣いふ樣は、我に構はず、片時も早く彼所に行き、金取りて來るべし。金見ぬ中は落付かずといふにぞ、子をおろして身を賣ると、知らぬ夫の痛しやと、思ひ遣る程猶悲しく、己と引るゝ後髮、放兼てぞ居たりける。彦惣は氣を焦ち、疾々行けと急がせば詮方なく、恙なく在せといふを心にいはせ、行くふりをして立上り、廻る因果の糸車に、書置を結び付け、愛別離苦は筆にさへ、書盡されぬ反故張の、暗き障子を立切りて、母屋の方

にぞ、鼠鳴して嬉み、偶袋に目をつけ打返し熟看て、偖はと心附きつゝ夫に對ひ、此袋は妾が見覺ある物なり。これは山蛭の洞九郎が山稼に、晝飯の器を入るゝ袋なるに、此金はいかにして得給ふぞと尋ぬれば、黒平曰く、此度の旅行は甚だ不仕合にて、手を空しうして歸らんとせしが、初夜の程平野郷にて、箇樣々々の女を見附け、懐重げに見えし故、後を尾けて奪取りしは此金なり。彼女洞九郎が袋を持ちしは訝しき事なりといへば、岩芝手を打振りて、聲を高くし給ふな。其女は洞九郎が實の娘香晒といふ者なり。御身旅行の跡の事なるが、男を連れて故郷の當地に歸り、夫婦共に洞九郎が家に居るなり。此金は箇樣々々の事にて、洞九郎が罪を贖はん爲、所持の物を賣りて求めたる金の由、之を奪れし故に、己が身を賣りて、再び五十兩の金を調へんと、先程妾に其媒を頼みぬ。彼は類稀なる美女なれば、身の代百兩を得ん事は最安ければ、彼を百兩に賣り、半を彼に遣し、半は妾之を取るべく思ひ、今已に神崎へ行かばやと、立出つる所なり。闇紛といへども、彼女御身を見知るまじきにあらざれば、迚も此所に住むことはなるべからず。此に居らざるからは、彼が身の代百兩を殘らず中取して、夫婦共に何方へも逃退くに如じ。僅の家具は此儘捨置き、錢目ある物は今宵の中に外へ運び給へと云ふ。黒平云く、夫こそ能思案なれ。我旅商人と云成し、旅に出でて盗する事、仄に知る者ある由なれば、

なん。其方は嘸な草臥れつらん、疾々休候へといひて枕に就き、程なくすや〳〵睡入りけり。香晒は胸の裏所せきまで思ひ續けて睡られず、唯灯火に向合ひて居たりけるが、小夜も漸く更渡り、四更の鐘も遠里の、擣衣の音に打交る、事の子細を書置に、涙をまぜて研る墨の、音も夫に聞せじと、忍べばきしむ雁の聲、明日は宿をかゆる身と、思へば秋の長き夜も、短き管の筆の帽、破れても末に逢はでやはと、思ひ歎に沈みつゝ、筧の水の哽せかへり、露の玉巻國栖紙に、裏書端書しげく薄く、亂れ書にぞしたりける。

善惡因果序品（後談）

偖も岩芝は其夜香晒が身賣の媒せん爲、攝州神崎に行くとて身支度し、門口まで出でける折しも、夫胸毛の黒平といふ者、旅より歸來ぬれば、最嬉しみ、今宵など歸り給はんとは思ひ寄らずといひつゝ伴ひて裏に入り、互につもる物語し、偖岩芝聲を噺めて、仕合いかにありつるやと尋ぬれば、黒平微笑み、此度の仕合望外に出でたり。これを見よといひて懐より金袋を取出して見すれば、岩芝これを取り、掌に載せて重を試み、こは餘程の金なり。昨夜の灯花今朝の喜鵲、福應空しからざりしよといひて限りなく喜び、紙灯を挑げて金を算へ見れば、五十兩ありける

知らざれども、妾が前の夫は醫師にてありし故、此事を委しく聞き、彼菌も能見覺えぬ。稀には手の及ぶ所にもあれば、妾明朝彼山に行き、取來りて進らすべし。是を煎じて飲給ふぞならば、いかにも媒致し申さん。獸肉さへ食はねば少しも身に過なければ、必ず氣遣ひ給ふ事なかれ。幸神崎に妾が親しき妓家あれば、今宵の中に彼所へ行き、明日金持ちて妾が許迄來る樣に云極めて來べきなり。御身の容儀にて五十兩の身の代は最安かるべしといふに、香晒は胸ひし〳〵と塞りて悲しけれど、斯許り迫りし危急なれば詮術なく、然らば能に賴侍るなり。身代は五十兩、年季とやらんは三年に極めて給ね。證文は後にて父に書かすべし。此事を夫にしらせ候ては、病の障りとなるべければ、夫には權沙汰して給はるな。何事も密にしてたべといへば、岩芝は打點頭き、心得候とひいて承引ひけるにぞ、香晒は別を告げて立出で、轟く胸を押鎭め、何氣なき顏して家に歸りける。彥惣は待侘びたる體にて、いかにやいかに金持ちて歸りしかと、急がはしく尋ぬれば、且安堵してたべ。いかにも事故なく金は調ひ候が、夜に入りぬれば途中の程氣遣しく、金は彼所に預置き、明日取りに行くべき契約して歸りぬといふ。彥惣之を聞き、そは能心附きしぞ。何樣女の身にて、往來稀なる夜道を、金携へて歸るは覺束なし。明日は疾く行きて取歸り、片時も早く舅の命を救ふべし。夫聞きては我も今夜は安堵して睡り

も石を捨て、此身を賣ると夫には、明白には云難し。妾が心一つにて、謀るに如じと決定し、石を殘らず取棄て、打萎れつゝ此所を立去りぬ。偖彼岩芝が家に往きていひけるは、云々の事にて父の命を救ふ爲め、妾が身を賣りて、急に五十兩といふ金を、調へばやと思ひはべれど、折惡く懐胎なれば、當分此身を質入して金を借り、安產して後阿曽比となり度候が、御身此媒してたびなんやといふ。岩芝是を聞き、身を賣るにさある自由は成難し。殊に產は女の命定と常言にもいへば、懐胎の女を質に取りて金貸すべき妓家のあるべきかは。若胎内の子を墮給はば媒して、いかにも金調へて進すべしといへば、香晒は力を落し、いかに父の危急を救へばとて、たま〱宿せし腹の子を失はんは情なやと、又も思案に暮れたりけるが、子を厭ひて親を失ふは道にあらずと覺悟を極め、然するには如何にしてよからめと問ひぬれば、岩芝いふ樣夫に心を定め給はば、最安き仕方あり。此二上嶽の岩穴に一種の菌あり、四季ともに生ずるなり。子を孕む獸誤りて是を嘗むる時は立地に子をながす。鹿は愚なるものにてこれを知らずして食ふ。此邊の山に鹿の稀なるは此故なり。人もこれを煎じて飲めば十二時過ぎて驗あり。何程月は滿つるとも子を脱す事奇妙にて、母の身には少しも過なし。只これを飲みて七日の間獸肉を食ふを忌むのみ。若獸肉を食合すれば血を吐きて死するなり。山稼する者さへこれを

懐の金を奪ひ空中を飛ぶが如くに逃去きぬ。香晒は氣絶して權し倒れて居たりけるが、梢の雫滴りて口に入り、漸息を吹返して起上り、懐を探り見て、こは〳〵いかにと仰天し、跡追行かんと思へども、何方と當もなき上に、氣も挫け足もなへぎて走る事さへ叶はねば、同じ處に立ちつ居つ、いかなる宿世の悪報にて、八重に重なる難儀の上に、またも難儀を重ぬるぞや。義理で固めし金なるに、情なの盗人や。二つなき寶を出し、父の命を救へとて賜りし夫に對し、金を途中で奪れしと、何面目にいはるべき。とても家には歸られず、死ぬが切ての分説と、迫る心の亂れ髪、拂ふ袂に拾籠む、罪の重の小石原。流も早き平野川、南無阿彌陀佛と合掌し、已に斯うよと見えけるが、否待暫しと坐をしめて、胸に手を置き熟々と、思ひ轉して見たりけるが、否々我今こゝで死ぬ時は、父の命も救はれず、夫の病を看病るべき者もなく、此身一つを失ふは、四人の命を失ふなり。假令操は破るゝとも、此身を阿曾比屋に質入して金を調へ、父の命を救ひ、子を産みて後、阿曾比となりて其金を償はば、四人の命の助かる道理、妾ばかりの命ならば、八つ裂になるとても、厭ふ心はなけれどもと、獨言いひつゝ、袂の石を取て捨て、死ぬさへ死なれぬ因果さよと、いひては又も石を捨て、思ひ思うて連添し、夫に別れ子を置きて、君傾城になり下り、肌を穢す苦は、死ぬにも勝る思ひなれど、外にすべき樣もなしと、いひては又

猶豫ある様に願ひ給はれと頼置きて、直に天王寺村に急ぐべしといへば、香晒は夫の誠心を、嬉しみはうれしみながら、我父の悪事に依りて、さばかり祕藏の此茶入を、空しく人手に渡しては、冥途に在す舅御に、分說なしと思ひつゝ、權心躊躇ひけるが、彦惣は其けはひを見て態と焦立ち、何狼狽へて隙入るゝぞ。纔に迫る親の命、見殺にする心か。疾々行けと叱られて、實もと心を決しつゝ、金入るゝ物だになければ、父が山稼に晝飯の器を入るゝ、布袋を取りて懷にし、茶入と書簡を包にして携へ、然らば妾は行く程に、必ず端居して風に當り給ふな。藥も其處に溫めてあれば、手自飲候へと云置きて、裙を高くかいどりて、急がはしく出行きぬ。斯くて香晒は村長の家に立寄りて、能其事を頼置き、只管心急るれども、歩なれざる足といひ、臨月近き腹を抱へて行くなれば、自ら路はかどらず、夢路を辿る心地にて、漸く天王寺村に到り、彼商人の家を尋ねて茶入を出し、書簡を見せて、夫の敎の如くにいひけるに、果して五十兩の金調ひければ、限りなく喜び、金を彼袋に入れて懷に納め、歸路に臨みて、平野の鄉を過ぐる時、日は全く暮れにけり。時に雨雲覆ひて、夕月夜の陰暗く、鶉鳴きたつ草原の掛稻を押分けてつと顯れたる髭漢、大脇差を横たへて拔足しつゝ、後つけて來るとは知らず、香晒は蜘手に分る畦道を、片時も早くと急ぎけるに、彼男時分よしとや思ひけん、近附寄りて香晒を撲的踢倒し、

いふにぞ、香晒いひけるは、御身の貯給ひし金も、殘少なになりたる上に、病に臥給ふより萬の費多くなり、今は殘らず用ひ盡して、少しの物にさへ事缺く程の事なるに、いかにしてか數多の金を調へんと思すぞといひて訝りければ、彦惣いふ樣は、しか思ふはうべなり。其金に替る物は是にありとて、皮籠の裏より箱に入りたる一つの茶入を取出し、未だ其方に委しき事を語らざりしが、此茶入は主君祕藏の御物にて、藥のかゝりたる形月に似たる故に、更科肩衝と號給ひ、袋は望月の御家に傳はる、望月廣東といふ名物の裂にて縫せ給ひ、替袋に木蘭裂を用ひ給ふは、園原山の古歌に基き給ふとなん。然ば類稀なる名器なるを、亡父に給り亡父も又、殊の外祕藏せし故に、亡跡の遺留物と思ひ、信濃を立去る時も身を放さず、我死後にも子に讓り、素性正しき證にもと思ひぬれば、何程貧しき目を見るとも、代なすべうは思はねども、金あれば助るといふ舅の命、寶を惜みて救はざるは道にあらねば、之を賣りて金調ふべしと思ふなり。幸攝州天王寺村に、茶器を扱ふ商人あり。我信濃に在りし時、相知れる者なれば、此茶入に我自筆の書簡を添へて遣せば、氣づかはず五十兩に買取るは必定なり。我は病中なれば詮術なし。其方之を携去き、金に替へて來よかしとて、遽しく書簡を認め花押を据ゑて渡し、彼商人に逢ひて云々いふべしと委細いひ敎へ、且村長の許に立寄り、金調ふる暫しの間、父の事

性、難儀のなかに降りかゝる、涙の種となりにけり。偖翌日村長來り、香晒にいひけるは、昨夜此處の洞九郎囚れ行きたる子細、定めて御身等は知るまじきが、奈良の法師衆、歸路に某が許に立寄られ、洞九郎が婿娘抔もある由なれど、彼等には管なければ、唯洞九郎が罪の樣を告げ知らせよと云附けて歸られたり。其罪の子細といふは、洞九郎此邊の山に狩するといひなし、折々奈良に立越え、夜に紛れて若草山に入り、春日山の落鹿を取る事數多し。始の程は何者の仕業とも知れず、近鄉の獵夫等に疑懸りしにより、獵人仲間に訴人ありて、洞九郎が仕業に極り、古法の如くに行ふとの事なり。奈良の鹿は春日の使者なれば、誤つて殺してさへ、土の中に埋められて、石子詰の刑に行はるゝといふ事は、三歲の童も能く知る事なり。況や數多殺して是を賣代なせしといへば、上なき大罪に非ずや。去ながら若五十兩の金を以て其罪を贖へば、命助る古例もあれど、斯る貧家にて其金を調ふべき謂なければ、迚も助らぬ命と斷念め、せめて亡跡の訪弔懇にしめされ。あな氣の毒やあな不便やといひて、涙押へて歸りけるが、香晒はこれを聞くと等しく、わつと叫びて倒伏し正體なくぞなりにける。彥惣も病床にこれを聞き、唯呆れて居たりけるが、漸膝行出でて香晒を呼醒し、今村長の物語るを聞けば、五十兩の金あれば、命助る例もある由、我其金を調へて、舅の命を救はんと思へば、さばかり悲む事勿れと

香晒は仰天し、斯る貧家に盗人の入るべき謂はなし、何者ぞと物陰より恐る〳〵見てければ、破れたる袈裟にて頭を包み、腹巻の上に取りかけたる法衣の袖を巻揚げ、大太刀を前低に佩きこらし、長刀を搔込みたるもあり、堂杖を突きたるもありて、奈良法師とぞ見えたりける。身に覺のあればにや、流石不敵の洞九郎も、是を見るよりわな〳〵振ひて逃げんとせしを、法師原取つて引据ゑ、聲荒かに詈りけるは、山蛭の洞九郎といふは汝よな。隱惡を犯せし事は、汝が心に知りぬべければ、今改めていふに及ばず、搦め去きて古法の如くに行ふぞ、覺悟せよといひて、高手小手に縛めければ、香晒は走り寄つて父に取りつき、何科あつて此樣に、繩目にはあひ給ふ。など分説はしたまはぬぞ。免れ難き事ならば、妾を代りに遣給へと、泣聲にていひければ、法師原は情氣もなく、女の管る事にあらず、妨げすなと云つて突きやれば、背後にありし方灯と、倶に彼所へ合破とこけ、燈火消ゆる此方には、法師原洞九郎を、宙につりてぞ歸りける。松の嵐も靜りて、跡は闇夜となりけるが、彦惣は病人ながら、一腰を携へて、何事やらんと膝行出で、探り廻りて香晒に衝當り、こは誰ぞ香晒か。今の騷は何事ぞと、問れて香晒起上り、奈良法師と思しきが、父を縛め連行きしと、いふに彦惣は打驚き、且此方へと手を取りて、片家に戻れば此は灯火も明にて、闇と月夜を隔てたる、親は罪人子は孝女、黒白違ふ人の

夫の膝に顔伏せて、こぼす涙は霰降る、雲の通路風さえて、乙女のかざし玉の緒の、切れて亂る如くなり。已に二更の時も過ぎ、嵐にゆるぐ荒屋も、骨は丈夫な洞九郎、夜山しまうて立歸り、獵犬を柱に繋ぎ、弓箭投げやり脛巾草鞋を解棄てて、苔井の水に足洗ぎ、だみたる聲して娘々と呼びければ、香晒は片家より灯火とりて走り出で、方灯に移して、今宵は常よりも戻りの早く候ひしといへば、今夜は山風騷しく、鹿も猪も驚き走りて獲物なく、手を空しうして歸りしぞ。婿殿の氣分はいかに、物食ひしか藥怠るな。能看病りて進ぜよなど、頼もしげにいへど、心の裏には彦惣め疾死ねかし。小栗の餓鬼病見る如く、病勞れたればよも生きはせまじ。死ぬとも桶一つ費すに及ばず、薦に包みて埋めばよし。娘も程なう子を産むらん。産子をば捨てしまひ、彼を拵へ欺きて、妾にや遣すべき、遊女にや賣るべき。何にもあれ、金あたゝまるは遠からじと、欲に眼はくれ竹の、簀子の上に寢そべりて、娘を尻目に見やりつゝ、胸工して居たりけり。香晒はさある惡意を露知らず、嘸な草臥れ給ひつらん。酒燗めて參らせんか、腰摩りはべらんかなど云ひて孝心深く眞に、詞優しう待遇しけるが、洞九郎は氣は強けれど年だけに、勞出でてや臂枕、鼻をひゞかす高鼾、伏猪の床に異ならず。斯る折しも表の方に、人聲足音騷しく、柴の折戸を踏崩し、松明を打振りて四五人一度に押入りぬ。犬は頻に吠えかゝる。

不義して設けし子としらば、嘸な其身の恥ならん。不忠不孝の者の子と、必ず〳〵知らせなよ。親の血脈と思ふから、只大切なは其子なり。とても本復なし難き、我を厭ひて身を破るな。倶に全きを求めんとすれば、二つながら失ふといふ事のあるぞかし。看病も能き程にし、夜も眠りて身を大事にかけよ。若此言を背くならば、草葉の陰にて恨むべし。長く病苦をせんよりは、疾々冥途に赴きて、亡父母に廻逢ひ、身の誤を詫申さん。生者必滅の世の習ひ、死ぬといふ悲あれば、生るゝといふ喜もあるぞとよ。然りながら過去の修因、今生の現果、拙なかりける我哉と、いふ中にも胸の苦痛の甚だしく、熱氣の往來繁くして、せきくる涙潸然と、枕の上に落ちかゝり、痰咳とともに哽入りければ、香晒は現心もなく、藥を與へ抱きかゝへ、漸々咳を撫鎭め、不忠不孝の身とせしも、原を糺せば妾ゆゑ、思ひ初めしが惡緣と、今更悔むかひなければ、天の祟のあるならば、妾を罰して夫の病を本復させて給はれと、心の中に念じつゝ、病は氣から起るといへば、心を弱く持給ふな。味なきをもつとめて聞し召し候へ。さあらば自ら藥の驗も見え侍らん、自ら力を附給ひて、快氣ある樣にしてたべよ。恙なく安産をしたりとも、女の身一つにて、爭養育なるべきぞや。縱令手に手を取合ひて、乞食非人になるとても、夫婦一所に世を經なば、厭ふ心はなきぞかし。何樂に我ばかり、後に存命あるべきぞと、いひつゝ

のも、夫と共に暮せばこそと思ひつゝ、落つる涙を病人に、見せじと包む袖の露、消懸りたる燈火を、搔立つ様に思へども、油盡きたる肉合の、影さへ細き燈心に、風を當てじと立廻す、破れ屛風の骨組も、弱氣に見ゆる紙衾、裙におくさへ初霜の、野山の錦引きかへて、襤褸させてふ蟋蟀、瘦せたる骸を撫摩り、あるかなきかの埋火に、暖め兼ねし草褥、貧と病の八重葎、繁れる宿の侘しさを、傍で見る目は病むよりも、遙に勝る辛苦なり。彦惣は香晒が萬の事を苦に病む上に、終日終夜睡もせず、心盡しの看病に、自ら心氣勞れ、我よりもなほ瘦細りたる體を見て、胸塞りぬれば、重き頭を上げ、苦氣に息吐きていひけるは、我々夫婦斯る難儀に遭ふ事は、皆是主君の御目を掠め、親の家名を絶したる、不忠不孝の報にて、天罰の然らしむる所と思へば、先非を悔るより外はなし。我病斯く日々に重り行けば、快氣の程も覺束なし。其方の胎内左孕といへば、必定男子なるべきなり。親の血筋外になし。切て其子を安産し、いかにもして養育し、縱令武士にはならずとも、然るべき者となし、先祖の年忌親の命日、我亡あともとはせて呉れよ。他人の千僧供養よりも、血筋の者の手向るは、一遍の念佛、心ばかりの香花も、遙に勝りて孝養になるぞかし。懷胎の身をもちて、晝夜の看病に心氣を損ひ、もし胎内の子を過ち、親の血筋を絶つならば、不孝のうへの不孝なり。その腹の子出生し、成長の後々に、

事は稀にて、唯此女のみ獨住の樣にして居けるが、折々洞九郎が家に往來ひて、彥惣香晒等とも親しく言ひかはす樣になりぬれば、香晒は此女に賤の手業を習ひ、琴調べたる手に機織れば、梭を投ぐる間も安からず、憂き月日を文車の、綱もしんくの糸車、近き山に登りては、つま木に花の草結び、遠き海に通ひては、磯邊に拾ふ貝合、薫籠に似たる竹籠も、芝刈入るゝ侘しさに、風も薫らぬ針目衣、姿も業もやつしつゝ、唯思ふ人と連添ふのみを樂として日を運びぬ。洞九郎は豫て心に工みあれば、粟の代鹽の代、此費彼費など、種々の事に託し、いろ〳〵の僞を構へて、貯の金を貪りけるにぞ、今は纔になり、此末はいかにして世を過すべうなど思ふ、萬の苦勞の積りけるにや。彥惣病の床に就き、つや〳〵ものも進まず、身上瘦衰へ日に異に重りて、いつ怠り果つべうも見えざりければ、香晒は大に愁ひ、終日終夜枕上に附添ひて看病し、良藥を求め神佛を祈り、樣々に心を盡しぬれども、其かひもなければ、只管嘆き悲みぬ。殊に藥の價加持祈禱の布施物、彼是と日々の費多くなり、貯の金も殘りなく用ひ盡しぬれば、詮術なく僅に殘りたる著がへの小袖まで賣代なし、暮行く秋の肌寒に、鳴弱りたる竈馬の、竈に近き哀さも、我身の上と香晒は思ひくづほれつゝ、妾懷胎の身にて、既に八月に滿ち、臨月も程近きに、夫の病若本復なくば、我身ばかりか孤兒も行末いかになるべきぞ。斯る貧苦を忍ぶ

惣を追出し、能き婚取るかさもなくば、富家の妾阿會比などにもして、數多の金にせばやと思ひけるが、彦惣が携へたる旅荷物重げに見えて、貯の金ある樣子なれば、且彼金のある中は此に置き、用ひ盡させて後追出す共遲からじ。娘も懷胎の樣子なれば、其内には身二つになるべしと思ひて、俄に片家の蜘網を拂ひ、簀子を繕ひなどして二人を住はせ、萬の事を頼もしげに待遇しけるにぞ、二人の者はさる惡意ありとは夢にだもしらず、心許して止りぬ。彦惣は聊貯の金あるを以て、日々の費に換へけれども、坐して食へば山も崩れ、居ながら飲めば海も乾くの理なれば、貯盡きなばいかにすべき。何にもあれ營をせばやと思へど、山里の住居なれば、日來學び得たるうち上りたる藝どもは、一つも用に立たず。差當りてすべき業も無ければ、筆のすさみに奈良團扇の繪を書き、人傳に遣りて僅の活計とす。香晒は色ある衣も所がら人目立つを厭ひて、布の衣に著替へ、面を照すに塵ばむ盆を鏡とし、髮取揚ぐるに苔井の水を油として、聊も粧を施さゞれども、生得たる風流の容は、爭か紅粉を調弄るに預るべき。姿の色香は失せもせず、人の眼を奪ひけり。野を一つ隔てて住む賤女に岩芝といふ者あり。年は四十歳許にて、遠く盛りを過ぎぬれども、素よりの姿最美しく、山家の生立とは見えず、言語立擧動都人の果と見えて、昔ゆかしく思はれける。夫あれども旅商人にて常に旅行し、家に居る

度は言はねばならぬ事と思ひ、我誤の概略を語り、身の置所なさに御怒も顧みず、彦惣殿を伴ひて參りしと、述る詞も梔紅葉、顔に散していひければ、洞九郎打笑ひ、若人にはなき例にもあらず。彦惣殿とやら疾々爰へ呼入れよとあるに、香晒立出でて彦惣を伴ひ、父に引合すれば、彦惣恥らひつゝ一囘の挨拶終り、兎角我々が身の上能に賴み候といへば、洞九郎打點頭き、氣遣しめさるな。斯くなる上は婿舅の間なれば、爭か麁略に扱ふべき。見らるゝ通りの貧しき暮し、壁の崩を繕はぬは、月を灯火にかふる爲、唯澤山なは筧の水と借錢のみ。夫いとふ心なくば、何時迄も匿ひ申さん。斯く年は闌けたれども、身は未だ衰へず。春夏はねらひ射、秋冬は笛待、落しくゝり、押上り、犬山などいひて、晝夜の山稼に、鹿落し熊押などいふ惡所を働き、險阻の石群を駈廻りても、手足が丈夫なれば、若者等に劣りたる事なく、穴熊の一番鎗、手負猪の向射なんど、我眞似する者一鄕にある事なし。之見給へとて偏袒ぎ、未肉合も落ちぬぞやといひつゝ、黑き腕を押撫でて見せ、畢竟我酒に錢を失へばこそ貧しき目を見るなれ、此弓箭さへあれば、御身等二人見事養うて見せ申さんと、矜りがにいひけるにぞ、彦惣も香晒も最賴しく思ひて、權且此に身を托みぬ。洞九郎は日來香晒を一生不通にくれたる事を悔居たるに、思ひかけず古鄕に歸り、姿の美麗に生立ちたるを見て、心中密に喜び、且二人共に留め置き、彦

事よと、不覺に悲しき心もしらで、人目稀なる山里の、根笹にすだくあばれ蚊の、女の膚の珍しげに、袷越さへ面憎く、長き袂に打拂ひて、暫し佇み居たりしが、且彦惣を折戸の口に待せ置きて、我ばかり裏に入り、父上懷しやといへば、洞九郎老眼を擦摩でて打視り、不審む樣にて言はざれば、妾は香晒にて候といふに、洞九郎打驚き、何娘とかといひつゝ立向ひ、さても美麗生立ちけるな。餘りに姿の變りたれば、我子ながらも見忘れしぞ。率々といひつゝ箒取りて塵打拂ひ、佳文席打廣げて此へといひて据置き、なほ熟々と打視り、其方は幼き時より淸らにて、鴟が鷹生みしと里人にもいはれつるが、斯許り美しう生立つべしとは思ひ寄らず。女は氏なうても玉の輿に乘るとかいへば、末頼もしき娘ぞといひて、あからめもせず見居たりけり。香晒は四邊を返り見つゝ、母樣は何處にぞ。恙なく在しつるかと尋ぬれば、母事は三年前身まかりぬといふを聞きて打驚き、日來病勝にて在しつれば、いかに在すやらんと思ひし事は度々なれど、宮仕の身といひ遠路といひ、音信もせざりしぞや。知らぬ事とて產の恩海山うけし母樣の、精進だにせぬ不孝さよといひて泣きしをれぬ。時に洞九郎一生不通にして養女に遣したる其方、望月の館に仕へて居るとは風の便に聞きつるが、思ひかけず古鄕へ來しは何故ぞと問ひけるに、香晒は面ぶせにて、明白にも言ひがたく、襟に顏差入れて暫 答もせざりしが、迚も一

の、且消え且結びて久しく留る事なしといへるぞ宜なりける。香晒は十歳の時、古郷を離れ、僅に九年を過ぎぬれども、今爰に來て見れば、人も住家も變れるが多く、常に遊處とせし、山守の家もなくなりて叢となり、麻畠にてありし處は却りて人の家居となる。若菜摘みたる野も落窪みて沼となり、螢追ひたる澤も水あせて岡となれり。唯昔に變らぬは、辻堂の石地藏谷川の水音のみなり。折しも夕日傾きて、彩色雲の旅衣、水に映りて映けば、笠に戴く樹の蔭も、没行く秋の蟬しぐれ、宿に迷ふ群雀も、我身の上と思はれて、妻こふ雉も戀故に、身をやつすかと哀なり。香晒は己が生れし家の邊は流石忘れねば、此野の末の一つ家にて侍りとて、彦惣と手を引合ひて案內し、野分の風に脛も現にして、路芝の露を踏分けつゝ行くに、雷に裂れし松の目印あれば、こゝぞと近附きて見るに、家は軒端傾きて朽葉積り、壁の骨顯れて打よろぼひ、蔦葛這纏ひ葎生繁り、荒れたき儘に荒れて、昔見し形はなけれど、鹿の皮猪の皮などのなましきを、窓の邊に掛渡して日に晒し、獵犬を繫ぎ置きつれば、今に狩をし給ふにこそと思ひつゝ、下葉色づく萩垣の間より見れば、父洞九郞、頭に霜を戴き、額に波を湛へ、襤褸を身に纏ひ、蒲壁手をかけ、嵩萱の脛巾を結ひ、節巻の弓猿の皮の鞘に、鹿矢數多指したるを傍に置き、柴折りくべたる爐火の許に趺踞つゝ、陶酒飮みてぞ居たりける。扨も纔の程に年寄れし

るべき所もなければ、前に渡なく、後に途を失ひたる心地し、足なき蟹の如く、走るべくも走られず、浮雲の迷ひに迷ひて、思煩ひけるが香晒いふ樣は、妾が實の親、大和國にあれば、權く且彼國に往給ひて、身のをさまりを計り給へといふにぞ、さあらばとて途中にて行裝を調へ、大和を志して、はるけき旅路に赴きぬ。香晒は大和の山家にて生れけれども、幼時都人の養女となりて、望月の館に宮仕しつれば、和歌の道糸竹の業など、みやびたる事にのみかゝづらひて、襲衣の重きすら身上に堪へざる手弱女なる上に、懷胎の身にしあれば、殊更進退自由ならず、穿きも馴れざる草鞋を踏みて、名におへる岐蘇の險路を辿るなれば、脚破れ血淋りて、道邊の草を紅に染め、彼所に跌き此所に倒れて、風に散る初花に等しく、嵐にいたむ女郎花に異ならず。彦惣此體を見て、斯くては何れの日か志す所に到るべき。自ら氣を勵ませよなどいひつゝ手を携へて扶行く。山駕籠雇ひて乘せなどすれども、兎角道はかどらず。數多の日數を經て、辛じて漸大和國に行著きぬ。香晒が實の親は山蛭の洞九郎といひて、大和國葛下郡二上嶽の麓の荒屋に住み、年六十に餘れども、獵戸の業をして、乏しき煙を立てけるが、生得貪欲深き者にて、利の爲には恩愛も知らず、情氣もなく、唯人に就きて災する事多かりければ、里人惡みて、山蛭といふ諢名をぞ負せける。實にや世の中にある人と住家とは、委に浮ぶ海漚

事千里を走るの理にて、一人知り二人知りて一家中の噂となり、日來彦惣を嫉む者多かりければ、陰言にいひけるは、我輩が身の上に、若彦惣が如き惡しき擧動あらば、忽罪せらるべきが、彼は相公の心に適ひ、小祿より取りあげて召仕ひ給ふ愛臣なれば、よろづの事を緩にしおき給ふ。彼が密通をよも知し召さゞる事はあらじ。依怙の事にあらずやなど、人の聞けがしにいひけるにぞ、自ら顯廉の耳に入り、やをれ彦惣め、憎き奴、日來情をかくる恩義も顧みず、家の掟を破る條、希代の不忠者哉とて、大に怒り給ひ、夫人に告げて香晒が事を糺し、二人ともに罪すべく思はれけるが、夫人これを聞きて、彼等を深く憐み給ひ、折よく祖父の年忌に當りけるを幸とし、相公に聞えて二人の命を乞受給ひけるに、顯廉も一度は怒り給へども、實は彼等を不便に思す心なきにあらず、罪せんとあるも畢竟掟を破るまじき爲なれば、祖父追福の爲に託し、夫人の乞給ふに應じて一命を助け、兩人ともに阿呆拂にぞし給ひける。彦惣香晒二人の者は、今更身の誤を悔思ひけれども、歸るべき事にあらず。生きまじき命生きたるは、主君御夫婦の深き御情にこそと、館の方を伏拜みて、袖絞りつゝ立去りけるが、彦惣が族は皆同家中の者なれば、一夜も留る事能はず。香晒は原養女にて、養親夫婦身まかりて家絶えぬれば、是も詮術なし。日來親しかりしも、弱目を救ふ者はなき習にて、頼む木蔭も雨洩りて、立寄

る　此彦惣元來才賢く、萬の事に辨あり、弓箭の藝に携る暇、茶道を學びて其道を究め、詩歌書畫の業にまで心を寄せつゝ、なべてならず、優しく情深く、殊更類なき美男にてありければ、娘持ちたる者は彼が如き婿取りてこそと思ふ者多かりけり。又顯廉の夫人に仕ふる侍女に、香晒といふ少女あり、此年十九歳に到りけるが、姿最美しく、翠の山に月の出づるが如く、籬の内に梅の綻びたるに似て、心の色も猶深かりければ、心を通はせざるはなかりけり。然るに香晒いつの程にか彦惣を思ひ初めて、密に艶書を送り、わりなき志を告げて種々に掻口說けれども、彦惣は家の掟を顧みて承引かず、文だに手に取らざりけるが、香晒は只管戀慕ひ、知倶麻の河泊の細石、千々に碎くる思ひ寢の、寢醒の床の現にも、其面影の遮りて、伏屋に生ふる帚木の、有りとは見れど逢はれねば、相初川は名のみにて、宿世結ぶの神もなく、浦見の山のうらみ侘びて、袖の涙は園原や、木蘚にみがく白露の、玉章の數も積りければ、彦惣も流石情に弱る心にや、谷の梢を蜘手にて、散らぬ花踏む棧の、危き事も忘れつゝ、保屋の薄に招かれて、會地關の嚴しきも、閒をうかゞふ諏訪湖、氷の上の通路も、度重りて打解けぬれば、岐蘇の麻衣あさくのみ、染めてやむべきかはと思ふ心やゝ出來て、水洩さじとぞ契りける。斯くて香晒懐胎の身となりけるにぞ、二人ともに事の顯れんを恐れて、いかにすべきと心を痛めけるが、惡

拳の六道錢、唯一打が南無地藏、地獄の引導授けてやらんとほざきつゝ、襟上攫んで地に投附け、早足を飛して踏倒し、なほこりもせず取りつくを、弱腰取りて飜し、續いてかゝるを錫杖にて向脛なぎて打倒し、朝露持ちし諸草の、花を微塵に踏散して、しばしの間挑みしが、思ひかけざる働に、こは叶はじと乞食共、鷹に追るゝ鶉の如く、叢間に高這して、何所ともなく逃失せけり。偖修行者は後も見ず、徐に鉦を鳴しつゝ、塒を出づる旅烏、東をさして歩行きぬ。

○修行者霧の裏に妙音を聞きて、極樂國に到るかと疑ふ疾風霧を拂ひて、忽地獄の變相を見、妙音は乃ち罵詈號泣の聲と變ず。地獄天堂わづかに霧一重をへだつるのみ。修行者は一切衆生、疾風は本來空、霧は迷悟の堺にたとふ。此一段是佛鬼一如の理にもとづきて作れり。

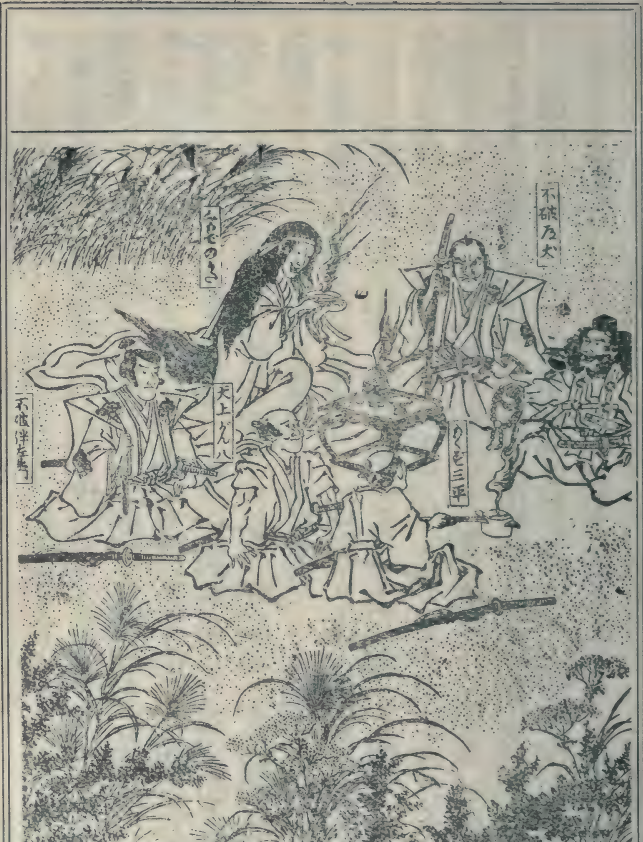
夫は偖おき爰に又、信濃國の主護職に、望月左衛門顯廉と聞えしは、管領由利太夫勝基の心に適ひければ、自ら室町御所の御氣色も人に勝れてときめきぬ。其家士に詫麻彥太夫といふは、小祿を賜はる者なれども、曾て茶道をたしみ、其業に達しけるにより、顯廉の茶の湯の相手となりて、側近く仕へけり。其子に彥惣といふ者あり。丫角の比より召出されて、小扈從を勤めけるが、十七の年父彥太夫、病によりて身まかり、母も續きて亡人の數に入り愁傷深かりけるが、其後元服し家祿を增給り、近仕の者にくはへられて仕へ、此年已に二十一歲にぞ到りけ

伴左衛門なめり。名古屋山三郎といへるも、聞傳へたる名なりと思ひつゝ、四邊を見れば、千草の中處々炎に焦れたる跡あり。さては現前に亡者の會するを見、呵責の有樣を見たるなり。此所を六道といふは、娑婆と冥途の境にて、亡者の往來する故と云傳ふるも虚言にあらずと、獨言いひて現化不思議を恐歎し、夜已に明けければ、紙帳雨衣を取收め、笈を脊負ひ錫杖をつき、鉦打鳴しつゝ立去らんとしつるに、草深き裏より、野臥の乞食二人現れ出で、去先に立塞りて、物ありげなるお修行者、盆の功德に施しめせと呼はりぬ。曾根松はこれを耳にも聞入れず、道をかへて彼方に行くに、爰にも又乞食二人現れて、同じ事いひて支へたり。曾根松は左右の道を塞がれて、詮術なく立止り、朝の雲夕の霧、一所不住の身の上なれば、施すべき物の貯なし。疾々道を開きて通せといふに、乞食等口々に、我輩が見こんだる其懷、豈手を空しく止めんや。汝手自施さずば、手ごみにすぞと叫はりつゝ、四人等しく身に被ひたる薦を手早く打捨てて右左に立並ぶ。曾根松は事ともせず、ほくそ笑して居たりけるが、身の程知らぬ乞食共、懷目懸けてさし入るゝ、腕首捉へて捻返し、弓手に懸るを足下に蹈みて、颯然と打笑ひ、我釋門に志を運び、慈悲善根を旨とすれども、盜人に與ふる錢財を持たず。蔣草席の新盬、經帷子だに身につけぬ、餓鬼道の衆生等、此は名におふ鳥部山、左ばかり手の裏望なら、握

に、火の車を押させて虚空より馳下り、毒蛇、惡猫、無常鳥、拔目鳥を放ちかくれば、衆皆逃去らんとするを、獄卒等鐵の楉を上げて打倒す。毒蛇は頸筋に纏ひ附きて咽を締め、惡猫は腹を食裂きて臟腑を食ひ、無常烏は血を吐き火焔となして身を焦し、拔目鳥は嘴を鳴して眼を啄む。是によりて蜘手方を始として、道犬伴左衞門其餘の者等總て、あな苦しや堪難やと一同に噓噴び、拳を握り足を縮めて悶苦む體、火に入る夏の蟲の如くにて、見る目もあてられず。管絃の妙なる調にかはりたる、罵詈號泣の聲の恐しさ、聞くに身の毛も彌立ちぬ。或は鮮血に染りて紅に變じ、或は燒爛れて黑きに變じ、算木を亂せる樣に倒れて皆死入りぬ。斯くていかにするぞと見るに、獄卒共立寄り、活々と唱へてよび醒し、頓て蘇息りて舊の形になりたるを、情氣もなく襟首抓みて、殘らず火の車に乘せ、虚空をさして馳歸る。猫蛇の類も共に行くと見えしが、再び又一陣の疾風颯とおろし來て、館造を吹散し、かき消す樣に失せて、忽舊の野原となり、高灯籠の火さへ消えて、凄涼寂寞として、唯蟲の音のみぞ殘りける。修行者曾根松なみ〳〵の者ならば、魂も浮れ、骨髓も碎けぬる心地もすべきに、元來したゝかなる者なれば、此始終を殘らず見果し、餘りの怪しさに、是皆夢中の忘想か、幻の間の怪異なるかと、其境だに辨へざりしが、彼人々の叫交せし姓名を、幻に覺えたる中に、伴左衞門といひしは不破

に暇貰ひて此所に會するなれば、切て汝等と共に物食ひ酒呑みて、片時の飢渴を助くべし。其用意疾くせよと仰せければ、蟹藏三平承り候といひて次の間に立ち、一人は長柄の銚子土器を携へ、一人は脚打の廣折敷に、蓮の強飯を堆く盛りて捧げ出で、蜘手方の目通りに据ゑて、蟹藏酌に立ちぬ。蜘手方土器取上げて差出し給へば、膝行寄りてたぶ〱とつぎくだす。飢渴に堪へざる蜘手方、疾く飲まばやと土器を、口の邊に寄すると等しく、酒青き色の炎となりて閃々と燃上り、面を焦しけるにぞ、あなやと叫び、土器を礙と投棄て悶絶し、仰樣に倒れたり。蟹藏が持ちたる長柄の酒も、一時に炎となりけるにぞ、堪兼て琵琶の上に取落すに、炎轉手撥面に燃附きて、半月の月の光も、三惡道の烟の裏に隱れけり。太鼓の火燄も目前に焦熱地獄を見る如く、笙の簧も拔散りて拔舌地獄はこれなめりと思はる。道犬伴左衛門等驚き、蜘手方を扶起さばやと立寄りけるに、猗蓮の飯も烈々たる猛火となりて燃上り、兩人の身を焦しけるにぞ、仰反りて之を避くる折しも、虛空に雷の如き音轟々と鳴りどよむ。悉皆之を聞くと等しく面色青ざめ、すは〱修羅の鼓の響くなり。閻王の迎ひ來るべし。又呵責に遭苦む事かと言ひつゝ、周章惑ひて立ちけるに、忽一叢の黑雲覆ひかゝり、地獄變相の圖にて見知りたる、奪魂鬼、奪精鬼、縛魄鬼といふ三の鬼、戟を把り、劍を持ち、黑繩を手繰り、牛頭馬頭の阿防羅刹

聞き、いしくも申されたり。小人は弟伴作が胸間に分入りて、山三郎が妻八重垣を失ひ、或は小蛇となりて彼が一子小山三に災すべしといふ。道犬ほくそづき、何樣其手段よかるべし。小人は嘉門に深き恨あれば、彼が妻子共を盡く亡すべし。蜘手の御方にはいかに思すやらんと伺へは、蜘手の方笑つぼに入り、脇息を押遣りていひけるは、我は豫て惡しと思ふ、繼子桂之助、銀杏前、月若等に著きて恨を報い、遂には館を叢となして、想を晴さばやと思ふなりと云ふに、何も口を等うして、夫然るべう候と申して、已に評議一決し、蜘手の方再び言ふ樣は、我娑婆にありし時は、汝等が面を見ざる日もなかりしが、今地獄中にありては、箇々在所を異にし、主從の緣盡て相見る事だに能はず。しかのみならず時々所を更へて呵責せられ、修羅道にありては夜三度晝三度の修羅の戰に、斬りつ斬られつ身を徹し骨を碎き、流るゝ血紅の波漲りて盾を流す。女は自ら戰はずと雖も、兵具自ら來りて其身を責め害をなす。畜生道にありては、頭は人にてありながら、身は牛馬となり、磐石を負されて火途劍山に追登さる。餓鬼道にありては、飢渇く事常に頻りなれば、其身瘦せかれて哀に力なく、傜傛として長閑なる春の風にも倒れつべし。たまく＼清き流を臨みて走り向ひ、手に掬びて呑まんとすれば、忽ち火焰となりて身を焦す。いろく＼の苦み算ふべからず。汝等もさこそあるべけれ。たまく＼閻魔王


不破乃太
犬上ぐん八
不破伴左衛門



る者等を見るに、先に進みたるは、面體たゞ者と見えず、眼大にして光を放ち、身材高く肥太り、斬髪縮れて獅子の頭に等しく、頬髭空様に反りて、鎌を逆に懸けたる如くなるが、兜巾篠懸に紅紗衣を著し、最多角念珠を袖くゝみに持ち、中啓の扇を把りてのさ〳〵と歩來る。後に續きたる四人の者、孰れも面のかゝり惡氣なる輩にて、皆袴はきて出來り、遙下に座を連ね、等しく頭を下げて禮をなす。蜘手の方是等の者を見遣りていひけるは、今盂蘭盆の時を幸に、我汝等と共に、閻魔王に權の暇を乞受けて、此所に會合する事別義にあらず、我輩隱謀顯れて宿望を遂げず、刃に懸りて非業に死し、地獄に落ちて無量無限の苦を受け、片時も身を安んずる事能はず。とても苦患を免るゝ時のあるべしとも思はねば、娑婆に殘れる者共に、災を下して冥途に誘ひ、共に呵責を受けしめて宿恨を晴さばやと思ふなれば、存ずる所ある者は憚らず申せといふに、修驗者進み出て曰く、小人熟慮り候に、管領濱名入道由理之太夫勝基と、豫ての鉾楯によりて、遠からず合戰起るべし。又勝基の天壽已に盡き、病を生じて身まかるべき兆あり。小人其虛を窺ひて、梅津嘉門景春が一命を奪候はん。蟹藏、三平、泥助、雁八等四人の輩は、小人につきて共に災を下し候へ。小人娑婆にありし時、妖鼠の術を行ひつれば、或は妖鼠に化して、名古屋山三郎にも災すべしと、鼻をふきいからしつゝ云ふ。伴左衛門これを

耀き渡り、地より一時に涌出でたるかとあやまたる。正面の上座に朽木形の几帳を立て、唐錦の裀を設けて、年のころほひ五十ばかりと思しく、執心深げなる面ざしの上臈、丈なる黒髪を亂し、髮紐を結びたれ、白綾の小袖に梔子の濃腰卷したるが、脇息を傍に置き琵琶を鼓居たり。左の方に、總髮の頭に素雪を戴き、しわみたる額に老の浪を湛へ、面野狐の如く眼皂雕に似たる老人、雲に稻妻の衣紋附けたる禮服を著して、笙を吹居たり。右の方を少し下りて、立髮光澤かに髻茶筅に結ひ、相貌凶悪にして膽太げなる若者、是も雲に稻妻の衣紋附けたる禮服を著し、見事に彩りたる火焰太鼓を敲居たり。都て衣服の時にあらざるも又怪むべし。暫しありて彼の上臈琵琶を取措き、右左を返り見ていひけるは、いかに道犬伴左衛門笙も太鼓も止めよ止めよ。今盂蘭盆の時にあひ、適娑婆に來りつれば、露ばかりも憂を晴さばやと、生前に翫びたる管絃を催すと雖も、中々にありし昔を思出して、恨の種を増しけるぞや。偖頼豪院、笹野蟠藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等はいかにといふ。老人笙を置き手をつき頭を下げて、彼等も前程より御次まで參り、御召を待ちて控へ居り候といふに、さあらば疾々呼出せといふ。茶筅髻の若者、畏み候といひつゝ立ちて、行廊の方に向ひ、蜘手の方の御召なるぞ、箇々此方へ參るべしと呼はりければ、承はり候と口を等うして答へつゝ、行廊の杉戸をさと開きて、出來

且念佛して居たりけるが、月の影玲瓏としていたらぬ隈もなく　萩、桔梗、刈萱、女郎花、尾花、葛花の類の草ども、今を盛りに咲亂れて露重げなる風情なるに、いろ〳〵に鳴きつくす蟲の音の細やかなるが、念佛の聲鉦の音の響き合ひて、いと物淋しくすゞろに哀を催しぬ。風につれて聞ゆる野寺の鐘を數ふるに、夜も已に更け、燒火も消果てぬれば、いざ一睡せばやと油紙帳を垂れて夜露をしのぎ、雨衣を敷物とし、木の根を枕とし、身を横たへて睡に就き、前後も覺えず熟睡しけるが、やゝ時移りて睡を醒し、耳をそばだてて聞けば、蟲の音かと疑ふばかりいと幽に管絃の調ぞ聞えける。修行者是を聞き、あな怪いかな。斯る荒野といひ夜深きに、妙なる調の聞ゆるはなぞや。狐狸野猫の戲るゝにかと思ひつゝ、頓て紙帳をかゝげ頭を差出して四邊を見るに、宵の程にかはりて夜霧深く立籠め、月も暗くなりて面前さへ見え分かず、猶管絃の音は霧の裏にありて、今は近々と聞えければ、益怪み、耳を傾けて聞居るに、誠に是、極樂國の微風、寶行樹、寶羅網を吹動して、此微妙音を出すかと疑はれ、曼陀羅華も雨來べく思はれけり。時に一陣の疾風颯と落し來て、霧を吹拂ひけるに、月も再び輝き、結構美麗を盡したる館造、忽然と現れ出でぬ。其樣いかなれば、翠簾を垂れ蔀をくだし、欄干階級杉戶折戶、櫛形の穴書院のかゝり、總て庸常ならず。彩色の繪障子金地の屛風、月の光に照りあひて

不住に諸國を廻りて、山城國愛宕郡六道といふ所に到りけるが、日暮れ野遠うして留るべき宿なければ、此に野宿せばやと、木陰に寄りて休ひぬ。抑此六道といふは、鳥部野の無常所にして、諸々の亡者の爲に開くを以て六道といふ。桓武天皇平安城を開き給ひし時、人跡あれば死送の地なくんば有るべからずとて、此野を諸人の葬所と定め給ひし事、遷都記に載せたり。其掟此所にて引導諷經して、鳥部野に送りしなり。小野篁地獄に往來せしといふも此所となん。然れば亡人のしるしの石數多立並びて、苔蒸したるもあり新しきもあり。無常遷流して送らざる日もなければ、末の露もとの雫、おくれ先だつ煙常に絶ゆる事なし。

名留無貌松丘下　骨化爲灰草澤中

と連ねたるも、斯る所をやいひけめ。適あるものは曝れたる骨、草深うして露滋く、極めて悒鬱荒野にて、いと凌兢所なり。送りて歸る人も遂には死出の山路の友なりと悲み、煙を分けて出づる月影を、鷲の高根の末かと疑ひしも、都て是此野の哀をいひけるなり。去程に修行者曾根松は、古き松の下の苔の露を拂ひて笈を下し、折しも盂蘭盆の時なりければ、心ばかりの靈迎ひ、冥途を照す迎火と、木の葉を集め焚火して、草葉の露を其儘に、盂向の水と思ひつゝ、笈佛に向ひて鉦打鳴し、有緣無緣の諸精靈、成等正覺頓證菩提、南無阿彌陀佛あみだ佛と、權

稻妻表紙後編 本朝醉菩提

東武 山東京傳譯

卷之一

跋羅駄閣尊者 善惡因果序品第一

如是我聞佛門廣大なり。其一端を見て、得たりとして妄想すべからず。若如來常に在して、滅し給はざるを見ば、便憍恣を起して、厭怠を懷き、難遭の想、恭敬の心を生ずる事能はざらん。此故に雙林の下にして、假に常住不滅の月の光を隱し給ふ。又慳貪の衆生は、面前に奇妙を見るに非ざれば、道に赴くの心を起さず。かるが故に佛菩薩、時々娑婆世界に垂跡して、種々法を說き、或は神通を闡明して、濁世の愚庸を點醒し給ふ。是亦所謂遊戲三昧なりとかや。一休禪師の遊戲の如きは、乃是衆生濟度の方便と知られたり。爰に人皇百三代後花園院の御宇、寛正の頃、日本國中の靈場に、六十六部の妙典をさむる、有髮の修行者に、飾磨の曾根松といふ者ありけり。曾劍難の相あるにより、其難を免れん爲め、未だ若年なれども佛道に志し、一所

むにあまる袖の雨、もんは三つの傘に、ねぐら貸さうよ濡燕。
右なには人團好つくれり。咲く藤の花房ながき某ふしはかせをくだせり。

る、「稲妻のはじまり見たり不破の關」といへる、荷翠の句にもとづきて、團十郎自己の物ごのみなる由。しかりて後伴左衛門に扮するには、必ず衣裳に雲稲妻をつくる事になりぬ。團十郎前には〓如此の紋をつけたるが、伴左衛門の狂言の後、稲妻の一つを轉じて〓如此に更めける由。然ば則三升の花號は〓如此稲妻の形雷紋なり。一説に草履打の事は、元祿の末年花井才三郎といふ戯子と、不破某が事より起れりといふ。名古屋山三郎に扮する衣裳には、昔より定りたる花紋なし。僕稲妻表紙前編著述の刻、稲妻の花紋俳諧の句にもとづきぬれば、山三郎の衣裳も俳諧の句にもとづきてこそと思寄せて、「傘にねぐら貸さうよ濡燕」といへる晉子の句意をとりて、出像の花紋に、春雨に燕の飛交ふさまを畫かしむ。これによりて、這春浪速の芝居兩座ともに、山三郎の衣裳に濡燕を繍しつる由。雲に稲妻雨に燕よき一對にしてしかも濡るるといふ詞、小生に似合しかるべし。稲妻表紙の傳奇につきて、浪華びとぬれつばめといふ小曲をつくりて専うたふ。其文左に記せる如し。

いもとせの、契りたがへぬ燕は、人の軒端に世帯をまうけ、やゝをば産んで、西よ東とゑばみを求め、さもうれしげに其日をおくる。われら二人はいつしかに、不破の關屋の關の戸に、せきとめられて稲妻や、ありとは見えてそれぞとも、あけていはれぬ胸のうち、つゝ

不破名古屋傳奇考

貞享二年の印本に、菱川師宣の筆の繪草紙二册あり。名古屋山三郎繪盡と號す。詞書ありて、往古山城國小幡の里に住む、名古屋山三郎といふ者、父三郎左衞門正春の仇、同國伏見の里に住む、不破伴左衞門といふ者を討ちたる事、北野のほとりに住む、梅津嘉門、並に遊君高間の葛城等が事をしるせり。いとおぼろげにて實記ともおぼえず。又英一蝶の筆に、名古屋山三郎仇討の繪卷物を世につたふると雖も、詞書なければ殊に詳ならず。僕案ずるに延寶天和のころ、土佐掾が淨瑠璃節に作りてかたりたるが、自然兒女の耳に殘りて、漸世に傳へしとおぼゆめり。山三郎の僕に鹿藏猿次郎といふ者ありしといふは、貞享の印本舞曲扇林といふ草紙に記せる說なり。又名古屋三郎左衞門、所赴の娼家の奴僕に、猿といふ者ありと雍州府志に記せり。延寶八年江戸市村芝居に於て、遊女論といふ狂言に、原祖市川團十郎、始めて不破伴左衞門に扮作す。時に三十歳なり。山三郎に扮する者、村山四郎次、葛城に扮する者、伊藤小太夫なり。其狂言大におこなはれて、其一年のうちに、同狂言を同戲子にて三度まで興行しけるとぞ。其刻伴左衞門に扮する衣裳に、始めて雲稻妻の形を摺りぬ。是をだまきといふ俳書に載せ

がへり。これもあながちに後編をつくるゆゑなり。

○一笠菴の序に、此書を禪師の遺經とするは、風流好事の所爲なり。每卷譯の字をしるすは、其意にならふ而已。其諸をいぶかることなかれ。

○原書醉菩提傳の編者明人桃花庵、一に醒齋と號す。予が號を醒々齋といふ、暗に號を合せり。此書を編するにおいて、一因果あるにあらずや。

文化五年戊辰夏六月　江戸　醒醒齋京傳識

稻妻表紙後編 本朝醉菩提全傳

例引

○一休禪師任情遊戲を以て本來の面目とす。宋代の濟顚大師の行狀に相似たり。そのゆゑに此書を本朝醉菩提といへり。

○前編著述の刻、後編の徑路をまうけおかず。今也書肆の懇望やむことをえず、俄に後編をつくれば、前後の編を合し閱る時、人の年齡事の時日等、齟齬する事すくなからず。看官これをあやしむことなかれ。

○此編の時代應仁より起れり。其頃一休禪師すでに七十餘歳なり。此には三十より五十ばかりの年齡とす。實錄にあつれば大にた

戊辰二月望。過醒醒齋。與家兄同賞庭梅。寓出新詞之篇。命一句。勘錄拙韻。瑕玉册。梓后如何大方白眼。因請書笠翁凰求鳳卷末之作。聊答其命。

倩誰潛挽世風偸。　旋作新詞付小優。　欲拾枯禪談悟學。
先粧晉客演風流。　由邪引入周行路。　借筏權爲浪蕩舟。
莫道人詞無小補。　也將弱管助皇猷。

文化戊辰季春　家弟　山東京山題

舍其糟而歠其醇者。是寔爲可憐愍矣。聞佛弟子殊慨後生闡提如醒者。以爲墮落之敎。使迷惑衆生。遂失機緣。故開遺敎易入之徑。作醉菩提經若干品。一切衆生。迷惑煩惱。一旦蒙活佛開示。悉皆醒悟。所謂煩惱卽菩提。不其然乎。醒醒導師。生于數百年後。特奉行活佛之敎。建立法幢。開張道場。翻譯此經。演說勸化。固欲使衆生遍蒙活佛之鴻惠也。嗟受持此經。而知改過移善。乃活佛之慈悲。則導師之慈悲已。余不勝隨喜。書以告十方道衆云。謹序。

文化五年戊辰六月穀旦

弟子　勃　窣　校字

摩訶狂雲醉菩提經序

荏土有髮沙門竺寶蓮述

活佛出世。住紫埜阿蘭若中。其名曰摩訶狂雲。此是阿羅漢投胎。自飜觔斗。下世於娑婆穢土。回阿耨多羅三藐三菩提心。現許多神通。禪機活潑。遊戲周旋。任情玩世。極意佯狂。不知何因縁而來於此娑婆。俾狐禪闍提。忿滋駭於其蹟。而疑於其心。極樂世界。淸淨無垢。天樂聒耳。醍醐甘口。乃至迦老爲師。聖衆爲友。事事如意。事事圓滿。是不可欽而孰可欽乎。甚矣。慈悲平等之於佛心。寧暫且辭彼可欽。而不忍坐視衆生酖淪。不惜軀命。混同濁惡。種種方便。種種說法。而狐禪闍提。不記不省。槩以謂黠僧瞞人。每每如此。況乎迷惑衆生。其孰能畧其蹟。而認其心。

高く聞えぬ。佐々良三八郎は抜群の忠臣なれば、桂之助おもく祿を與へんと思されけるが、今は桑門の身なればとて祿を受けざれば、せんすべなく、唯數百金を與へけるに、身に應ぜざる賜なりとて、再三辭しけれども、强ひて賜りければ、その金を以て長谷部雲六が妹八重垣をあがなひ出して家に養置きぬ。これはその誠心を感じての事とぞ。さて山三郎は葛城が志をあはれみ、神林が許に金あまた送りて追福をいとなませ、一生妻を娶らじと誓ひける由を、三八郎打聞きて、のちなきは不孝の第一なりとすゝめ、彼八重垣をおくりて妾となさしむ。ほどなく男子をまうけ、後にこれを名古屋小山三と稱ず。此小山三出雲の神子阿國といふ舞姫を妻として、歌舞妓躍狂言といふ事を始めたるゆゑよしは、後編に詳なり。發兌の時を待得て見るべし。不破名護屋の文字に、自然不レ破レ名護レ屋といふ訓あるも、此稗史におきていみじき吉兆ならずや。

昔話稲妻表紙 終


摸擬其一蝶所畫名古屋山三絵巻物之圖



此一圖

藏猿二郎が忠義の子細を語りけるにぞ、貞國打聞きて轉感嘆に堪へざりけり。時に梅津景春いひけるは、惡人亡び忠臣孝子あらはるれば、當家益繁昌し子孫長久うたがひなし。時刻うつれば某はや罷歸るべしといひて立上り、從者に命じて道犬ならびに賴豪院を、檻車に乘せて舁出さしむれば、貞國國知をはじめとして、皆一同に景春をおくり出でて、恭しく禮をおこなふ。景春つひにわかれを告げて乘物に打乘り、行列うたせて歸りけり。さるほどに官領の館において、再び又道犬を糺明あり。一味の輩を盡く捕へて賴豪院と共に誅戮し給ひ、道犬は殊に大罪の者なればおもき刑をくはへ給ふ。さて名古屋山三郎、并に佐々良三八郎夫婦、娘、鹿藏、猿二郎等まで召されて、その忠義孝行貞節を御賞美あり。それ〴〵に若干の賞金をたまはりければ、皆々感涙をおとして歸りぬ。さて判官貞國薙髮して桂之助に家をゆづり、平郡の別館にうつり住み、名古屋山三郎を執權とし、父三郎左衛門が祿に、道犬が祿をくはへて與へければ、昔に十倍して富める身となり、鹿藏猿二郎に祿をわかちとらしめて忠義を賞しければ、兩人面目を施して喜びぬ。扨又浮世又平は、百蟹の卷物を一覽して畫道の奧妙をきはめ、師匠戶佐正見の勘氣をゆるされ、戶佐又平重起と名告り、梅津嘉門の吹擧によりて、義政公の繪所となり、妹阿龍は曾て兄に學びて自然と畫道の妙をきはめたれば、世におりう繪と稱じてその名

に一味すべき結構なる事あきらけし。今已に勝基公と濱名と確執におよび、世の中わけめの時節なれば、濱名に與したる道犬わたくしの計にしがたし、官領の館にひきて、今出川相公の命をうけて誅戮を加ふべし。いかに山三郎先刻某同伴して、東の殿に控へさせ置きつる、桂之助夫婦を是へいざなひ來るべしといふにぞ、山三郎かしこみ候とて、行廊のかたに行き、いざこなたへと呼れば、かねて用意やしたりけん、佐々木桂之助國知、折烏帽子に大紋の直垂を著し、右鞘巻をおびて出來る。つゞきて銀杏前、纐纈の小袖に摺箔の袿衣をかけ、とめ木のかをり馥郁として蓮歩をうつす。次に月若此時に十三歳、髪を生立て總角にむすび、小素襖に烏帽子かけて相從ふ。はるか下りて佐々良三八郎、剃髪の姿となり僧衣を著し、妻礒菜、娘楓を具して出來り、かの百蟹の巻物を恭しくさゝげて貞國に呈し、おの〳〵座をさだめければ、梅津嘉門景春威儀をつくろひ、いかに國知ぬし、今志をあらためられたるにより、家相續の儀を命ぜられて、御教書をたまはりぬ。いざ受取り候へとて相渡せば、桂之助押頂き、館の御慈悲官領の御仁心、世にありがたく候といひて納むれば、判官貞國をはじめとして皆一同に喜ぶ事限りなし。さて桂之助父にむかひ、佐々良三八郎夫婦の忠義、兄弟の兒等が孝心を物語りければ、名古屋山三郎は、不破伴左衛門等五人の者を打ちて父の仇をむくいたる始末、ならびに鹿

が、母の惡意も畢竟は、某を世にたてんと思はれしより事おこれば、某とても同罪なり。分說は斯くのとほりと言ひつゝ、母が自害の懷劍をひろひとり、已に腹に突立てんとしたるを、梅津景春おしとゞめ、和殿はかねて實義ある事聞及びぬ。あたら若者に武士道をすてさするは惜むべき事なれども、惡意の母につながるゝ緣なればせんすべなし。自殺をとゞまり剃髮染衣に姿をかへ、母の菩提を弔はれよ。某先祖梅津豐前左衛門清景より傳來の、大幢國師の法語一卷あり。某今は官領につかへて軍務に管る身なれば、禪法を修すべき暇なし。かの法語を和殿に附與すべければ、今より禪學をはげみ敎外別傳の妙をきはめ、直指人心の奥をさだめて、のちのちは名僧知識と名をあげて、今の汚名をすゝがれよと言ひければ、花形丸感佩しやう〳〵自殺をとゞまりて、髻弗と押切りぬ。花形丸剃髮して法名を胸月といひ、のち〳〵一休禪師の弟子となりて、つひに大悟有德の知識となり、

　西てらす月のひかりをその儘に因果がつひのすみかなりけり

といふ歌を詠じて、世に因果禪師と稱せられけるとかや。さて景春蜘手の方の屍をとりのけさせ、貞國にいひけるは、道犬が惡意の源は濱名入道にこびへつらひ、入道の權威を以て御身を押籠め、一旦花形丸の世となし、つひには父子共にうしなひて、おのれ家をうばひ、濱名入道

はかのもの彼者を捕へ、悪人どもの奸計を逐一に糺明せしが、此場に於ていはさねば證據にならず。山三郎それはからへと命じければ、山三郎立寄り、刀の鐺をもつて頼豪院がいましめの縄を、しめあげく〳〵、疾く〳〵白狀仕れといへば、頼豪院面をしわめ、蜘手の方道犬が頼によりて月若を呪咀したるより、詐筆の願書を以て銀杏前母子を罪におとしたる本末を、こまかに白狀しければ、判官貞國はじめてこれを聞き、只あきれて居たりけるが、たちまち怒氣天にさかのぼり、道犬が髻つかみてねぢたふし、我多病なるを以て家事を汝にゆだねたるに、思慮淺くして汝等に欺かれたる口惜しさよ。肉醤になすともあきたるべからず。たとへ我をば欺くとも、いかでか青天を欺くべきやとて、大小をとりあげ、庭上に蹴おとしければ、山三郎飛びかゝりて押附け、高手小手にぞくゝりける。蜘手の方此體を見て、積悪の罪のがれがたしとや思ひけん、懐劍拔くより早く喉吭につきたてて、うつぶしにぞ伏したりける。思ふに年來の隱悪かく一時にあらはるゝも、總て是れ皇天の罰し給ふ所なり。豈おそれざらんや。時に花形丸蜘手の方の死體にとりつき、さばかり悪しき御志あらんとは、露ばかりも思ひはべらず。親の悪意を子の身としていさめ申さぬ不孝の罪、御許くだされかし。あさましき御身の果やとて、悲歎の涙にむせびける

兩人ゆくへ知れ申さず候といひければ、蜘手の方いかにもさあり。彼等兩人妾と花形丸を呪咀したる事は、官領職にはいまだ知食さゞるならん。貞國殿くはしく聞えあげ候へと、かたほに笑みていひければ、景春居丈高になりて兩人をはたとにらみ、世俗の常言に、盗人猛々しといふは正に汝等が事ならん。道犬蜘手に惡意をすゝめ、花形丸の代になさんと、兩人はかりて月若を呪咀し、そのうへ奸計を以て銀杏前月若を罪におとし、貞國殿の命といつはり、月若の首を打せんとし、銀杏前を岩倉谷に引出して首打たんとせしこと、皆汝等が仕業ならずや。桂之助放埒の根本も、汝兒子伴左衛門にいひつけてすゝめたるに疑なし。たゞし分說ありやといへば、膽ふとき道犬少しもひるまず空笑し、當時官領職の軍師と尊敬せられ給ふ景春公の御詞とも覺侍らず。銀杏前母子蜘手の方を呪咀したるには、自筆の願書、たしかなる證據あり。某等が奸計と申すには何等の證據ありや。おそれながら承り度候といひければ、蜘手の方もその尾につき、妾が惡意などとは思はぬ濡衣きる事よと、つぶやきてぞ居たりける。時に景春つと起ちて椽先に出で、先刻申しつけおきたる繩つきを、疾く／＼これへ引出せと呼りければ、庭ずゑに梅津が從者大勢ひかへたる背後より、名古屋山三郎禮服を著し、修驗者賴豪院を高手小手にくゝりあげ、鹿藏猿二郎兩人に繩をとらせて庭上にひきすゑたり。膽ふとき蜘手の方強惡

かふ。梅津嘉門、金紋紗の道服に、白精好の長袴を曳き、海老鞘巻をおび、中啓の扇を把り、威儀堂々として入來り、案内につきて廣座敷に打通り、設の席に居なほりければ、判官恭しく禮をおこなひ、長路の所御苦勞のいたりに候と相のぶれば、梅津景春一回の挨拶をはり、此度官領の名代として某まかりこしたるは別儀にあらず。先だちて次男月若丸家督の願を出されつるが、其儀につき御疑のすぢありて、某に行きむかひ糺明せよとの厳命なり。先内室蜘手の方、花形丸、執權不破道犬をこれへ呼出されよと云ふにぞ、貞國かしこみ候とて、斯くと言ひつがせければ、ほどなく蜘手の方禮服をつけ、花形丸諸共に出來り、遙に下りて禮をなす。不破道犬も禮服にて、椽がはに平伏すれば、梅津景春まづ貞國にいひけるは、先だちて子息桂之助在京の刻、放佚無慙の不行跡、御館義政公の御聞に達し、官領濱名入道を以て内命あり。已に勘當の身となりしが、今に至りて深く先非を悔い、御館に對し奉り、一功をたてたるにより勘當をゆるし、家をゆづりて御身は隱居あるべしとの内命なり。桂之助勘當許免のうへは、銀杏前月若をも共にゆるして呼びむかへ候べしと相のぶれば、貞國いまだ答もせざるに道犬るざり出で、おそれおほくは候へども、銀杏前月若は現在母の蜘手を呪咀したる罪人に候へば、たとへ桂之助は御許あるとも、かの母子兩人を御許ありては、御政道たちがたく候はん。殊更かれら

敷をめり〳〵と押破りて躍出でたるは何人ぞや。是則ち別人にあらず、不破伴左衛門重勝なり。伴左衛門聲たかく、かくあらんと思ひし故、今朝いまだ闇きを幸、汝があとをつけ來りて床の下にかくれ、始終の事をくはしく聞きぬ、草履打の宿根といひ妹のかたき返打なるぞ觀念せよといひつゝ斬附くれば、山三郎刀を拔きて丁と受けとめ、おのれと來りて灯火に飛入る夏の虫、これ天の賜なりと呼りて十餘合戰ひけるが、伴左衛門運命盡きたる時にやあらん、簀の子に足を踏貫きて、よろめく所を山三郎、はやく足を飛せて合破と蹴たふし、乘懸りて刀をとりなほし、首を弗と掻斬りたるは、心地よくぞ見えたりける。かゝる折しも猿二郎廓の事をすまして、恙なく鹿藏をともなひて立歸り、此體を見て兩人ともに天を拜し地を拜して、喜泣に泣きけるは、げにたのもしき者共なり。

二十　積善の餘慶

扨も大和國佐々木の館には、家督さだめの事につき、官領由理之助勝基公の名代として、梅津嘉門景春今日著駕の由、さきだちて沙汰ありければ、判官貞國みづから下知して廣座敷を掃除させ、禮服を著して相待ちけるに、ほどなく來駕ときこえしかば、みづから玄關に出でて相む

持行けよ。しかる時は復讐にまぎれなきこと明ならんといふにぞ、猿二郎おしいたゞきて直に彼處へいそぎ行く。嘉門また山三郎にむかひ、某はからず一個の證人を捕へて、佐々木の館の騒動の根本は、執權不破道犬が逆心より出でて、繼母蜘手の方に惡意を薦めて、實子花形丸を家督とし、後々は母子ともにうしなひて、おのれ家をうばひとり、濱名入道に味方せんたくみなる事あきらけし。不日に某勝基公の名代として彼館に立越え、道犬を糺明して惡意をあらはし、ふたゝび桂之助殿を世に出し申さばやと思ふなりと、心底のこらず語りければ、山三郎三拜してぞ喜びける。嘉門已に立上り、忍の他行なれば閒暇とりがたし。かさねてゆる〳〵見ゆべしといひつゝ、門口に出でて咳すれば、遙あなたに控へたる供まはり、忍乗物を舁き來る。山三郎門送して禮をおこなへば、嘉門會釋して乗物に乗りうつり、別を告げて出行きぬ。かくて山三郎は嘉門が教誨によりてやう〳〵心ひらけ、葛城が首をとり、手水盤の水を汲みとり、血しほをあらひ、泣く〳〵首を佛壇にすゑて、香をたき水を手向け、鉦打鳴して、南無幽靈頓證佛果菩提、南無阿彌陀佛あみだ佛と唱へて居たりけるに、思ひかけざる床の下より、明晃々たる劒のきつさき危く膝骬を擦りてぞ閃き出でぬ。山三郎仡と見て、手早く手向の水をとりて劒にそゝぎ、刀をとり身をそばめてうかゞひ居たるに、床の下には仕すましたりとや思ひけん、板

忍び命あらん限はたとへ千萬里を走りても、たづね出して仇をむくゆるが孝道のいたりなり。今自殺せしなどは疎忽の至ならずやといへば、山三郎其理に服し面目なき體なりけり。嘉門かさねて言ひけるは、桂之助殿は我爲に主筋なり。そのいはれは一席に語りがたし。そのゆゑに銀杏前殿、先年大和の國岩倉谷にて御首打れ給はんとしつるを、某忍姿に打扮ちて彼處にいたり、我家につたはる火術の具を以て太刀取を打殺し、奥方を奪取り、今已に金剛山のかくれ家に母もろとも恙なくおはすなり。桂之助殿も同居し給ふ。佐々良三八郎が忠義によりて月若殿も恙なく、御夫婦御親子再會の時を得給ひぬ。くはしき事は猿二郎よく知りたれば、後にゆるゆる聞候へ。されば一分の心を安んじ、只此上は復讐の事のみに心をゆだね候へかし。某勝基公に聞えあげて、伴左衛門たとへ萬里の外に走るともたづね出し、立合の仇打を御許あるやうに計ふべし。これ三郎左衛門殿の洪恩をせめて和殿にむくはん爲なりといへば、山三郎大に安堵の思をなして喜ぶ事かぎりなし。時に猿二郎おづ〱嘉門が前に這出でて申しけるは、さきほど途中にてうけたまはれば、兄鹿藏人質となりて、五條坂に捕れ居るよし、氣づかはしく候。いかゞ計ひ然るべうやとうかゞへば、嘉門その儀はすこしも氣遣ふべからずとて、懐中硯を取出して、一通の證書を書き、花押をすゑて猿二郎にあたへ、汝此一通を彼地の郡司の宅に

たてんとしたる折しも、外の方よりやれはやまるな。しばし〳〵と聲かけて入來る人を見るに、是別人にあらず、則ち是れ梅津嘉門景春なり。あとに從ひしは鹿藏が弟猿二郎にぞありける。山三郎あまりに思ひかけざれば訝りつゝ、ひとまづ刀を鞘に收めて出迎へば、嘉門上座に打通りていはく、猿二郎が案内にて此隱家へまかり越しは別事にあらず。某しばらく河内の國金剛山に世を避け、仕官の望を絶つといへども、官領勝基公の懇望もだしがたく、去冬君臣の契約をなし、上京して今已に勝基公の館にあり。軍師をもちゆる禮儀あつければ、いにしへの貧しさに引かへて、何不足なき身となりぬ。夫につけて語るべきは、先年某が母病になやみし時、御親父三郎左衞門殿藥代の金子をめぐみて、母の命を救ひくだされし洪恩心に銘じ、せめて露ばかりも其報せんものと思ひしかひなく、三郎左衞門殿闇打にあひ給ひ、和殿もゆくへ知れずと聞きて、本意なくも打過ぎしが、これなる猿二郎が語るによりて、此所にかくれ住るゝ由承り、對面して某が思ふ旨を告げばやと忍出立にてまうで來つるが、途中にて人の語るを聞けば、和殿五條坂の堤にて古傍輩四人の者を打ち、人違にて葛城とやらんいふ阿曾比を手にかけられたる由、今腹きらんとせられしは、察する所人違の誤を恥ぢての事とおぼゆ。若さもあらば大なる心得違と思ふなり。そのゆゑ如何となれば、およそ君父の仇をむくはんずる者、幾度も恥を

るが、良ありて葛城が首を取上てつら〳〵見れば、鐵漿をおとして白齒となり、みどりの髪を切斷ちて、笑めるがごとき顔なり、山三郎落涙して思へらく、昔袈裟御前髻を切り、夫の身にかはりて遠藤武者盛遠に殺されしは、母と夫の命をすくはん爲なり。此葛城は兄の命をたすけん爲に、身代となりて我手にかゝりたる心底、袈裟御前にもをさ〳〵劣るべからず。その志は不便なりといへども、晉の豫讓が衣を刺したる例とは事かはれば、彼が願のごとく、伴左衞門を助けおきては、我孝の道たちがたし。さりながら伴左衞門昨夜の事を聞き、遠國に逃走らんは必定なり。畢竟我心せきたる儘に、名告かけて返答を待たず、打あやまりしは一生の疎忽なり。父の仇をむくふべき者の所爲にあらず。世の人にわらはれんことの口惜しさよ。父の靈魂夢中に告給ひし時、いひなづけの女は敵の妹といふことを告げくださるべき理なるに、左もなかりしはよく〳〵免れがたき惡緣ならん。先年生駒山の麓にて奥方をうばはれし時、死なねばならぬ一命を、これまで生きながらへしも、御主人方の御行方をたづね、父の仇をむくはん爲ばかりなるに、今において奥方の御存亡もさだかならず、父の仇も打得ざる事、不忠とやいはん不孝とやいはん、我身ながら愛想盡きぬ。とても武運に盡きたる身なれば、腹かきさばきて冥途にいたり、せめて親人に分說せんと心を決し、血刀をとりなほして、ほと〳〵腹につき

量くだされかし。とても生ながらへがたき身の上と覺悟をきはめ、御身の許へは今宵伴左衛門等を打給へと通じおき、伴左衛門殿かの四人の者と共にかへらんと申すを、用ありとて別座敷にとゞめ置き、家内の者には伴左衛門殿深く醉ひたる由を告げて、妾が閨房まで駕籠をかき入れさせ、妾伴左衛門殿の姿に打扮ちて駕籠に乘出でしは、御身の手にかゝりて死なん爲ぞかし。のぞみの如く御手にかゝり侍るならば、伴左衛門を打ちしと思されて、かねての恨をはらし給ひ、何とぞ兄の命を御助けくだされかし。これのみ今生の願なり。敵の妹と聞給はばさぞ後悔し給はんが、せめて來世の夫婦と思されて、をり〳〵一遍の御回向ねがひ侍るぞかし。伴左衛門殿已に妾が身の代をつぐのひたれば、妾死するともある じ道順の損とならず。御身手にかけ給ふとも、原いひなづけの妻なれば、科となるべき事もなし。書きのこし度こと多かれども、仕損ぜまじと胸とゞろきて筆もたゝず、涙に墨も散りはべれば、くさ〴〵申殘し候。

と、こまやかに記しつけて、奥のかたに、

壁に生ふるいつまで草のいつまでもつきぬ恨を思ひきりてよ

といふ辭世の歌を書きつけぬ。山三郎讀みをはりて十分におどろき、しばし思案にくれたりけ

りてぞ居たりける。いそがはしく開き見れば、是れ乃ち書置の文なり。その文にいはく、妾こと此度不思議に殿にめぐりあひ、御父の仇なる伴左衛門等を手引して、打せ申さんとうけがひけるに、前の日伴左衛門妾がもとに來りて申さるゝは、今迄は知らざりしが、頃日偶聞けば、汝は和州子守町の浪人高間条右衛門が娘、幼名を岩橋といひつる者の由、しかとさあるや。いよ〳〵それに違はずば、正しく我別腹の妹にて妾腹なり。その妾ゆゑありて懐胎のうちに条右衛門がもとに嫁し行き、彼方にて汝を產みつるよし、かねて父道犬の物語にて聞きぬ。其後はたえておとづれも聞かざりしが、此曲中に身を賣りしとは夢にだも知らざりき。此儘おきては父の恥我恥なれば、父に此事を告げて金子を調じ、とみにあがなひ出しつかはすべしとて歸られ、已に昨夜若干の金子を以て、我身をあがなひ給はりぬ。伴左衛門の申さるゝ所、いちく〳〵我身におぼえあれば、別腹の兄なること疑なし。さて伴左衛門窃に申さるゝは、このごろ名古屋山三郎といふ者、をり〳〵汝が許に通ひ來るよし、彼には我深き遺恨あれば汝手引して打せくれよとのたのみなり。これを聞きて胸ふさがり、兄のたのみをうけがへば、夫を殺す大罪なり。御身につきて兄を打するも又大罪なり。敵同士に縁つながりしは、いかなる宿世の因果ぞと、我身一つのかなしさを御推

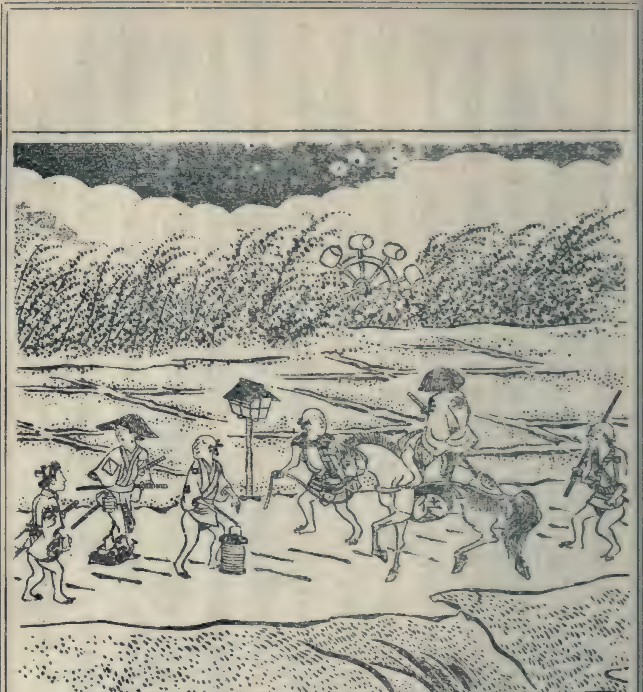
棒をおつとりて、大勢四方をとりかこみ、狼藉者を打たふして、はやく繩をかけよと犇きぬ。山三郎聲高く、これは狼藉者にあらず、大和の國佐々木判官の家臣、名古屋山三郎正春といふ者、父の仇を打ちたるなり。必ずあやしむべからずと言へども、曲中者ども、しかいふは此場をのがれん爲のいつはりならんといひて聞入れず。已に大勢棒を打振りて、敵たはんとしたる所に、鹿藏大勢をおしわけて山三郎が前にちかづき、相公は大事の御身なれば、彼等にかまひ給はず、疾く〳〵御歸り候へかし。あとは某がよきに取計ひ候べしとて大勢にむかひ、汝等うたがはしく思ふも理なれば、某人質となりて此處にとゞまるべし。此御方をば道をひらきて通し申すべしといふにぞ、曲中の者どもやう〳〵得心して圍をひらきければ、山三郎夜の明けはてぬ間にと、いそぎて小幡にかへりけり。扨も山三郎は年來の宿志を遂げ、勇みすゝみて小幡の里にかへりけるが、此時已に夜は明けはてぬ。さて伴左衛門が首を父の位牌に手向けばやと思ひ、汝ゆゑに幾年月又なき苦勞せしことよと言ひつゝ、編笠のうちより首を取出して見れば、こはいかに伴左衛門にはあらずして、葛城が首なれば、こは夢か現かといひて、只あきれたるばかりなり。さきには大勢に取圍まれて心せはしき火急の時なれば、心づかざりしが、えりに殘りし手首を見れば、何にかあらん握り添へたる物あり。手首をもぎはなして見れば、一通の書を握




五條坂の堤にて名護屋山三郎復讐五人斬の図
康ぞう
山三郎

仇人なりといへども、本人を打たざるうちは安堵ならず。つゞきて來べき筈なるにと訝りつゝ、稍しばらく待つといへども、人影も見えざれば、胸いとさわぎ、此所一方口なれば、外に歸るべき道もなきに、こは心得ぬ事ならずや。我は出口まで行きて見べければ、汝はこゝにありて心をつけよといひ捨てて、出口の方へ走りゆく。時にむかふの方より、一乗の駕籠をかゝげて馳來りけるが、駕籠舁ども山三郎が刀の光のきらめくを見て仰天し、駕籠を地上に打捨てて、飛ぶがごとくに逃去りぬ。山三郎駕籠の中うたがはしく思ひつゝ、刀のきつさきにて垂を上げて中を見れば、雲に稲妻の衣裳著たる侍、編笠を著たる儘にて駕籠のうちにありければ、心に喜び、いかに伴左衞門我は是山三郎なり。汝を打ちて亡父の宿恨をはらさんと、これまで心を盡せしかひありて、今日唯今出會する事、盲龜の浮木にあひ、優曇華の花咲く時を得たるに異ならず。疾く〳〵出でて勝負を決せよと呼れば、伴左衞門一言をこたへず、何うろたへけん刀も抜かず、駕籠の中よりよろめき出でて、山三郎が胸ぐらに取附きけるにぞ、山三郎刀をあげて腕を斬放せば、手首は胸に殘り、呀と一聲さけびて倒るゝ所を、首宙に打落し、いそがはしく首をとりあぐる折しも、曲中の方に人聲おびたゞしく聞えければ、若首を奪れてはかなふまじと、手早く編笠に包みてたづさふる間もあらせず、曲中の者ども提灯をともし連れ、手に手に

といふ。ほどなく同じ打扮の侍一人すゝみ來る。山三郎ちか〲と立向ひ、いかに伴左衞門これは山三郎なるぞ。父を打れし恨の刃、思ひ知れといひつゝ斬附くれば、編笠をかなぐり捨て、刀を拔きてきりむすび、丁々しとゝ戰ひけるが、運の盡にや堤の端に足をふみながし、うつ伏にたふるゝ所を、山三郎一聲さけびて斬りけるが、たちまち首堤の下にまろび落ちぬ。鹿藏つづきて飛下り、かの首をとりあげ見て、此首片耳なければ藻屑の三平に疑なく候といふ。山三郎其者もまた伴左衞門にてはなかりしかと、本意なげにいひつゝ、刀の血しほを拭ひ、一息つくいとまもなく、又來かゝる侍もおなじ如くの打扮なり。身材恰好此度は正しく伴左衞門と思ひつ、前の如くに名告かくれば、彼侍心得たりといひながら、刀の柄に手をかくる所を、山三郎をどりかゝりて腰車に斬りけるが、直にたふれもせず、二三十歩あゆみ行く。鹿藏は彼者逃去くと心得て、あとを追ひて行きけるに、彼者前に斬られし者の死骸につまづき、二つになりてぞ倒れける。山三郎が刀は父のかたみの左文字の名作、斬人は劍法手練の早業、斯くあるも理と鹿藏心に感じけるが、山三郎心せき、伴左衞門かいかに〲と問へば、鹿藏屍をあらため見て、此者は笹野蟹藏にて候といへば、山三郎いひけるは、その者はまさしく伴左衞門と思ひしに、それも又彼にてはなかりしか。四人の者どもも伴左衞門をたすけて、父を打ちたる




名古屋山三郎
五條坂の堤
山三郎

ふ聲も已に絶え、小田の蛙の聲のみ高くきこえて、寺々の鐘五更の時を告げわたり、月は山の端におちかゝりければ、すは時刻いたれりと、山三郎目釘をしめし鍔元をくつろげ、まくり手して待ちけるに、ほどなくかの雲に稲妻の衣裳を著たる侍一人、編笠の下に覆面して、板金剛を踏鳴しつゝ、あゆみ來る。待ちまうけたる山三郎、堤のうへに飛上り、めづらしや不破伴左衛門、かくいふは名古屋山三郎なり。父のかたき覺悟せよと呼りつゝ、氷なす刀を抜きはなせば、かの侍高々とあざみ笑ひて編笠をぬぎすて、此方より尋ねもとむる山三郎、此處であひしは天の與へ、返打なるぞ觀念せよといひて拔合せ、二太刀三太刀戰ひけるが、山三郎がするどき太刀を受損じ、左袈裟に斬下げられて、地上に撲地たふれたり。山三郎鹿藏をかへりみて、彼奴が面をよく見よといふにぞ、鹿藏立寄り髻をつかみて引きおこし、月影にすかし見て、此者は土子泥助にて候といふ。山三郎うなづく間もなく、又同じ如くに打扮ちたる侍一人のさばりかへりて歩み來る。山三郎むかふに立塞り、汝は不破伴左衛門なるべし。これは山三郎父の仇を報ふなりといひつゝ斬附くれば、此侍も笠とり捨てて刀を抜き、受けつながしつ七八合戰ひけるが、泥にすべりてよろめく所を、山三郎飛びかゝりて胴斬に、陸離ずんと斬りはなし、腮を以て下知すれば、鹿藏いそがはしく走り寄り、月の光に面を見て、此者は犬上雁八にて候

讀むに、今夜伴左衛門等五人の者一等に茨木がもとに來るよし聞出しぬ。朝は未明にかへるよし聞きぬれば、堤にかへりを待受けて討取給へ、かならず此時を過し給ふべからずと事みじかに記したり。山三郎これを讀みをはり、天地を拜しをどりあがりて喜びけるが、鹿藏も勇みたち、何とぞ主君の敵なれば、助太刀を御許くだされかしと願へば、もつともなる望なれども、敵大勢なるに臆して助太刀を用ひしなんど、世の人口にかゝらんも口惜しければ、汝を伴はん事かなふべからずと言へば、鹿藏涙をながし、しかる上はせめて彼所まで御供をゆるし給はれかし。御息つきの水にてもまゐらせ度候といへば、そは勝手次第なるべしといふにぞ、鹿藏喜び、食事を調じてすゝめなどし、何くれと支度して時刻のいたるを待つ。山三郎はわざと曲中に通ふたはれ男の體に打扮ち、父のかたみの左文字の刀をおび、その夜の二更の頃より五條坂の長堤にいたり、朧月夜を幸に、鹿藏もろとも麥畠のうちに身をかくして、時のいたるを待ちにけり。此時は是いづれの時ぞや、寛正五年三月下旬とかや。折しも春雨の晴間にて道あしけれども、常から往來しげき堤なれば、しばらくも人たえず、おくりむかひの提灯星の如くにつらなり、駕籠走するかけ聲は歸雁の音かとあやまたる。偖夜の更くるにしたがひて、人の往來も漸々にたえ、辻行灯のともし火もかすかにて、鮓めせ〳〵按摩とらせ給はずやと呼

雁八等四人の者をかくまひ置きて、父が大望をとぐる時節を待ち、紀伊の國藤白山の奥に大なる居宅を造り、野伏浪人どもをあまた召抱へて、すはといはば、父と共に濱名入道に味方すべき結構専なり。然りといへども名古屋山三郎世にあるうちは寢覺安からず。元來かれに草履打の遺恨あればこそ、かれが親をも誤りて打ちたれ。如何にもしてかれを返打にせばやと思ひけれども、その行方知れざれば、せんすべなく打過ぎけるが、頃日京都に居住するよし偶聞出して、かの四人の者をしたがへて俄に上京し、伏見の里に寓居して、人の見知りたる一樣の裝束して五條坂に往來し、山三郎をつり出して返打にせばやと計りけるが、前の日犬上雁八彼地にて、三本傘の紋つけたる侍に出會ひ、諠譁に事よせて試みつるに、まさしく彼が僕鹿藏と見つれば、山三郎當國のうちに居住し、果して我等が計におちて、我々をつけねらふに疑なし。遂にはつり寄せて返打にせばやと商議して、いよ〳〵曲中に入込みけるが、彼等元來好色の輩なれば、伴左衞門は茨木が許の遠山といふ阿曾比になれそめ、その餘の者等もそれぞれになじみを得て、後には山三郎を打たん計はわきになり、一向遊興にのみひまを費しぬ。誠に是れ愚なるふるまひなり。扨山三郎は專彼等を打つべき便宜を待ちけるに、一日鹿藏かの地よりあわたゞしく歸り來りて、葛城が書を差出しければ、山三郎いそがはしくこれを

の誠心うたがふ所なければ、一度彼の地に御越ありて葛城殿をたのみ給ひ、かれらが計のうらをかき　内外より相圖をさだめ、五人一等に打取給はん良計こそあらまほしけれ。君父の讐には共に天を戴かずと申せば、眼前の敵を見て時を失ひ給はんこと、ゆめ〳〵あるべからず。復讐の爲花街にいたり給ふこと、いかでか恥給はんやと諫めければ、山三郎げにもさなりと思ひ、其夜鹿藏を具ししのびやかにして五條坂にいたり、神林が許をたづねて葛城に對面しければ、葛城が喜いふべうもあらず。山三郎は露ばかりもあだめきたる詞はなく、終夜只復讐の計を談じて、朝まだきに別れかへりぬ。これより後葛城がもとより、金銀衣服をおくりて山三郎をみつぎ、心の誠をはこびければ、山三郎はたぐひ稀なる女かなと感歎に堪へざりけり。葛城は伴左衛門が面を見知らず、いづれをいづれと辨たねば、山三郎毎夜鹿藏を彼地につかはして、五人の者を打取るべき便宜をぞ待ちける。鹿藏は深き笠に顔かくし袈裟衣を著し、物乞の道心坊に打扮ちて、しのび行きけるとぞ。しかりと雖も五人の者かはる〴〵往來して、五人一同に來ることなく、もとより其跡をつけゆくと雖も、いつも歸路をちがへて歸れば住所もさだかならず、只心せかるゝばかりなり。其はさておき是にまた不破伴左衛門重勝は、浪々の身といへども、密々父道犬方より扶助しければ一點の不足なく、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上

昔話稻妻表紙　卷之五下册

十九　刀劍の稻妻

その時鹿藏は、たゞちに小幡の里にかへりて、山三郎に其日の子細をつぶさに語り、葛城が誠心を告げ、あまりにいとほしく存ずれば、せめて一度は彼地に御越ありて、御對面あるべしとすゝめければ、山三郎いひけるは、五條坂に葛城といふ名妓ありとは、かねてほのかに聞きつるが、其者高間粂右衞門の娘岩橋にてあらんとは、夢にだも思はざりき。かの者は親々の得心にて、某といひなづけの女なりといへども、今花街におちくだり、ながれの身となりたる女に對面せんは、武士の名をけがすに似たり。彼が志は不便なりといへども、對面は叶ふべからずといへば、鹿藏いひけるは、憚ながらそは違へり。葛城殿の物語を聞けば、頃日雲に稻妻の衣裳を著たる侍五人、かはる〴〵彼地に往來するよし、そのうち一人は必ず伴左衞門にて、外は藻屑の三平等四人の者にうたがひなし。これはかねて御推量のごとく、相公をつり出して返打にせん謀計にきはまれり。先だちて御父君夢中に告給ひしは、此事にて候はん。殊更葛城殿

門といふ事、聞くは今がはじめなり。さきほどの侍のごとき、深編笠に顔かくし、雲に稲妻の衣服著たる侍五人、一様に打扮ちて。頃日かはるぐ此曲中に往來す。そのうち一人はまことの伴左衞門なるべしといへば、鹿藏これを聞き、五人の者一人は伴左衞門にて、殘る四人は、藻屑三平、笹野蟹藏、土子泥助、犬上雁八といふ者に疑なし。皆助太刀して三郎左衞門殿を打ちたる者どもなり。正是天の與なりと喜び、壁に耳あり垣にぬひめありといへば、此所にて長物語は惡しからん、かさねて又相見え申さんといひて立上れば、葛城袖にすがり、今いひし事くれぐれ頼むとありければ、鹿藏うなづき、又編笠に顔かくして出行けば、葛城は神林が家にかへりぬ。


山三郎


山城の国
小幡の里
山三郎
貧家の光景

謀計と思ひしゆゑ、某持傳へたる一腰を代なし、主人の紋附人の見知りたる衣服をこしらへて、斯くたはれ男のさまに打扮ち、山三郎殿と見せて、今日しも此處へ來りけるに、折よくかの侍にゆきあひ、わざと鞘當して諠譁を仕かけ試みつるに、かれ始終もの言はず、深編笠にて面はしかと見えざれども、身のはたらき恰好果して伴左衛門にあらず、小指の無きを見れば、伴左衛門が腹心の傍輩、犬上雁八といふ者に疑なしと語れば、葛城は涙をながし、山三郎殿は妾七歳の時、親々のゆるしを受けて、いひなづけしつる夫なれば、うき川竹の身となりても、片時も忘るゝ暇はなく、せめては一目相見んことを願ひけれども、籠に飼はるゝ鳥の身なれば、せんすべなく、むなしく月日をおくりけるが、そののち聞けは父上を打れ給ひて、その身もゆくへ知れずなり給ひしと聞きし故、殊更かなしく、何とぞ一度めぐりあふ便もがなと、神佛に祈りて、あけくれ只其事のみを願ひぬ。今日しもはからず御身にあひしは、いまだ緣の盡きざる所なりといひて、或は悲み或は喜び、その身親の貧苦を見るに忍びず、みづから此曲中に身を賣りたる、はじめ終をこまかに語り、かゝる賤き身となりて、顔台するも面伏なれども、妾が心の實をよく／＼告聞えて、せめて一目あひ見る事をかなへて給はれかしと、涙ながらに搔口說きければ、鹿藏もその志の實を感じて、共に袖をしぼりぬ。葛城又いひけるは、敵は伴左衛

はあらず、疎忽の段は御許あれ。妾は大和の國佐々木の家臣、名古屋三郎左衛門殿の子息山三郎殿とて、をさなき時いひなづけの殿なる故、たづね侍るなりとて、本意なげに見えければ、かの侍眉をしわめ、しか宣ふ御身は、和州子守町の浪人、高間久米右衛門殿の息女にて、幼名を岩橋とはいはずやと言へば、葛城おどろき、いかにして御身はさばかり妾が出身をよく知り給ふやといぶかるにぞ、かの侍掌をはたと打ち、誠に不思議の出會なり。今は何をかつゝみ候べき。某は御身のたづね給ふ、佐々木の家臣、名古屋山三郎左衛門正春殿の僕、鹿藏と申す者なり。かねて山三郎どの幼年の時、いひなづけの女子ありしと聞きしは、御身にてありけるか。某かゝる打扮にて、今日しも此曲中へ來りしは、大にいはれある事なり。先年主君三郎左衛門殿、佐々木の御家の執權、不破道犬が兒子伴左衛門が爲に闇打にあひ給ひ、その夜御館の騒動によりて、山三郎殿浪々の身となり給ひ、敵伴左衛門がゆくへを尋ねんため、所々方々をめぐり、旅路に月日をおくり給ひしが、近頃當國小幡の里にかくれ住給ひ、某もその所に仕へ申す也。しかるに頃日人の噂を聞けば、伴左衛門雲に稲妻の模樣つけたる衣服を著して、此曲中へ往來する由、かれ敵とねらはるゝ身を以て、人の見知りたる衣服を著て、しかも人立おほき所を徘徊するは心得ず。うたがふらくは假人にて、山三郎殿をつり出して、かへり打にすべき


づらき


京五條坂の
曲中において
鞘當喧嘩
の圖

かくれなき、神林道順が許の、葛城といふ遊女、籬のうちより此體を見て、いそがはしく裾かいとりて出來り、いとあやふげなる劍の下をくゞりて、兩人のへだてとなり、鶯の囀出でたるが如き聲していひけるは、御二方ともに由緒ありげなる御方と見え侍るに、所をもきらひ給はず、刃傷におよび給ふは、思召違にやあらん。いかなる宿恨のあるかは知らざれども、此諠譁は妾に給はりて、雙方ともに御刀を收めたびなんやと、笑顔つくりて止めけり。兩人は葛城が理ある詞にや恥ぢけん、思ふ旨やありけん、ひとしく打頷きつゝ、刀を鞘にをさめて、衣服の塵を打拂ひ、雲に稻妻の侍は出口の方へわかれ行く。三本傘の侍も退かんとしたるを、葛城袖をとりて暫とゞめ、かしこの編笠茶屋に將て行きて、あるじの女にしばし此處かしてよといへば、所がらとて物馴れたる女なれば、ゆる〳〵物語し給へといひて出行きぬ。あとにて別に人もなければ、葛城かの侍にむかひ、卒爾なりと雖も、問申し度事のはんべり。妾は葛城と申す阿曾比なるが、御身三本傘の紋つけ給ふからは、若名古屋山三郎殿にはあらずやといふ。かの侍打聞きて、さては聞及びたる葛城どのなるか。おことは山三郎に何の所緣ありて尋ぬるや。推量のごとく某は山三郎なりとて編笠をとれば、葛城顏をつれ〴〵と打まもり、幼時わかれたれども、面はしかと見覺えぬ。姓名はおなじ御方なれども、御身は妾がたづぬる人に

ず、恰も蝦蟇の井に落ち入るがごとく、飛蛾の灯に集るに似たり。あまたの人の集へるうちに、一きは目立ちたる打扮の侍あり。春雨に燕子の飛交ふさまを摺りて、三本傘の鹿子紋つけたる小袖を著し、白柄の大小を摑差に差しこらし、洲の與三などや製しけん、手をこめたる蒔繪の一つ印籠をおび、深編笠をまぶかに著て、絡かけずの緒をつけたる、板金剛を履きならしつつ、東をのぞみて進み行く。又西の方より、羽織小袖も一樣に、村だつ雲に稲妻の、閃々たる形を摺せたるに、針線入れたる袖べりかけて、一つまへに著なし、はつぱの鮫函の大小を關の木に帯び、目せき笠の下に懐紙の覆面かけ、肩を首より高くさし張りて、六方かゞりに手を打ふりつゝ、大路せましと歩み來る侍あり。已に兩人行きちがひける時、三本傘の紋つけたるこなたの侍、過りてかなたの侍の刀の鞘に鞘をはつしと打當てけるが、雲に稲妻の侍、こなたの鐺をしかと握り、臂をおし張りて怒れる體なり。こなたは其の手を拂ひのけて行かんとすれば、かなたはまた猿臂を伸して引とゞむ。互に口には一言をいはずといへども、つひに刀を拔放して、丁々しとゝ打合ひければ、群集の諸人これを見て、すは諠譁よとさわぎ立ち、東西に散亂して、ひろき大路に只兩人、受けつながしつ、斬りむすぶといへども、兩人の猛き勢におそれて、誰ひとりこれを止むる者なかりけり。時に此曲中第一の名妓とよばれて、その名世に

にすがり、せめて今しばし待給はれかしといふかと思へば夢さめて、旅店の寝所に只獨、惘然として居たりけるが、五更の鐘におどろきて、やう／＼夢なることを曉し、悲歎に袖をしぼりけり。斯くて山三郎父の告にまかせ、いそぎ京都に立越えて、小幡の里にあやしげなる家をもとめ、鹿藏もろとも住みけるが、ひさしく旅中にありて、少々のたくはへも、皆もちひ盡し、素も生業なき身なれば、持合せたる衣服のたぐひも、おほかたに賣盡して、日々の費にかへなし、至極貧しきくらしなれども、鹿藏忠義の心ふかき者なれば、毎日煎じ物を賣りに出でて、身體の瘦細るをも厭はず、やう／＼かそけき煙をぞ立てける。

○案ずるに煎じ物賣、古事にや、文明の比の職人盡のうちに見ゆ。又能狂言にせんじ物賣といふあり、藥を煎じて擔賣する者とぞ。

十八　花柳の鞘當

其頃都五條坂に妓樓あり。原此所は、平家の侍大將惡七兵衛景清が妾阿古屋が住みし處とぞ。其なごりにや、あまたの阿曾比ありて、秦樓の柳絮常に浪子の心を牽き、楚館の蕣華、能富翁の產を蕩す。されば賢となく愚となく、貴となく賤となく、此妖境に迷來る者ひきもきら

亡者にや。頬髭生ひしげりていと荒々しき男のいまだ肉脱もせず、なま〳〵しく見ゆるは、昨日今日の亡者ならん。白髪を亂せる姥の亡者、庭火の影にはらばひたる幼子の顏をさしのぞき見て、潸々と泣くは、孫に心の殘りつるか。鼻ひらみ口ゆがみて、いと醜き男の亡者、迎火たく女をつれ〴〵と顧みて、うらめしげに立ちたるは、後の夫をむかへたる恨とおぼし。斯くさまざまの亡者、蜂のごとくに群り、蟻のごとくに集來れども、家々の男女の目には、少しも見えざる樣子なれば、山三郎おのれも命をはりて、亡者の數に入りけるかと、一度はおどろき、蜉蝣の一期朝露の命、泡沫無常老少不定の世のならひ、皆かくのごとし、と一度は歎きてたゝずみける所に、背後の方に、山三郎々々々とよぶ聲、蟲の鳴く音に異ならず。山三郎身をひるがへしてこれを見れば、正しく亡父三郎左衞門なれば、打驚きつゝ平伏して禮をなし、世を去給ふ親人に、又あふ事の不思議さよといへば、三郎左衞門いひけるは、汝我仇をむくはんと身を苦め、思ひを盡すを、苫の下にて不便に思ひ、これまで容をあらはせしぞ。汝伴左衞門をもとめんとならば、他をもとむるは無益なり。はやく京都に立越え、汝が幼年の時いひなづけしつる女をたづねて相見えなば、おのづから伴左衞門にめぐりあふべし。此事を告げん爲にまうで來つるぞ。親子は一世の契なれば、再びまみゆる事を得がたしと言ひすてて、去らんとする袖

○雍州府志曰、梅津清景の塔梅津邑にあり。清景は藤原惟隆十八世の孫也。代々院の北面たり。禪法に歸し、剃髮して是心と號す云々。案ずるに一說是球、いづれか是なるを知らず。此考は卷之一第四回の下に記すべきを、誤りてもらしぬれば、此に記せり。彼處と照し見るべし。

夫はさておき爰に又、名護屋山三郎元春は、一つには桂之助銀杏前月若等三人の行方をたづねて、その安否をとひ、二つには父の仇不破伴左衞門をたづねて宿意を遂げばやと、心は二つ身は一つ、ちゞに心をくだきつゝ、僕鹿藏を具して、處々方々を尋歩き、しばらく旅中に月日をおくりけるが、一夜旅店のうちに不思議の夢を見たり。その夢如何となれば、比しも盂蘭盆の時にて、父の亡靈をまつらばやと、香華灯燭をもとめん爲、街に出でけるに、民家一等に靈棚をまうけ、庭火を焚きて、亡靈を迎ふる念佛の聲念珠の音街に滿ち、あまたの亡者ども集來て、おのが樣々かなたこなたの家々に入る爲體、誠に哀のありさまなり。亡者の姿さまぐ\〵にて、額に波をたゝへたる翁もあれば、腰に弓を張りたる姥もあり。若男の幼子の手をひくもあり。若女の乳ぶさはなれぬ嬰子を、懷にしたるもあり。雨露に曝れたる骨のみつゞき、男とも女ともわから兼ねたるが、影もひときは薄く見えて、踉々蹌々とあゆみ來るは、幾年ふりし

人馳集り、枚をふくませたる馬を引出して、御歸館と呼はれば、嘉門をどりあがりて感嘆し、これ古韓信が用ひたる、虚無の謀計伏兵ならずして其理すみやかなりと稱美の折しも、以前の手負熊、いかりくるひて此處へ走り來るを、荒武者どもかけへだて、手槍をとりて已に突殺さんとしつるを、勝基見給ひ、やれ待てしばしと聲かけてとゞめ給ひ、夫六韜を考ふるに、文王太公望を得たる時、卜して非熊といへり。我今已に當世の呂尙を得て、いかにぞ熊を欲せんや、無益の殺生好むべからず。疾く〳〵放ちやれと仰せければ、荒武者ども呀とこたへて放ちけり。勝基桂之助にむかひ、和殿は今しばし世をしのび、歸國の時節を待たれよかし。老母はしばらく此家に在れ、かさねて迎の乘物を以てよびとるべし。嘉門は今すぐに伴行かん。幸雪も降りやみぬと宣ひて、馬ひき寄せて乘給へば、嘉門は馬の左にしたがひ、大勢の荒武者ども、列をたゞして前後をかこみ、つもれる雪を踏分けつゝ、麓を斥していそぎ行く。老母は嘉門がいさましき門出を見送りて、すゞろに喜ぶといへども、桂之助のみすぼらしげなる姿を見れば胸ふさがり、喜び悲み打まぜて、しばしは詞もなかりけるが、桂之助にむかひ、ひそかに君に會せまゐらする御方あり。いざ此方へとて、奥深くはなれたる一間のうちに誘ひけり。これ何人に會はするや知らず。のちの〳〵の巻を讀得て知らん。

かねて御館御懇望の祕書を勝基に渡し、稽首俯伏して共にこれを願ひけり。勝基打聞給ひ、やがて歸國をとり持つべしと宣へば、三人ひとしく喜ぶこと限りなし。扨嘉門勝基にむかひ、先年彗星あらはれたる刻、星のいろ蒼に黄をおびたるを見て、牝鷄晨して婦女權を奪ひ、大亂の起るべききざしと考へたる事を語りければ、勝基掌を打ちてその先見を感じ、義政公の北の臺香樹院殿は、若君を濱名入道に相托して世に立てんとし、今出川殿は勝基を執權として、武將たらんことを計られ、天下二つにわかれて、已に大亂の起るべき時節なる事を物語りければ、嘉門又先年濱名が招きに應ぜずして、岩坂猪之八等數人を打とり、たゞちに此山にあとを隱したる事をかたりて、互に權兵學の事を論じ、嘉門當山に住み常に千早の城趾を見て、楠氏の奧妙を感ずる事などを物語りけるが、嘉門かさねて言ひけるは、さりながら官領職の御身にて、此山中に唯ひとり往來し給ひ、若濱名方の者ども聞知り、多勢を以て取圍まば、いかゞし給ふやらん。君子は危きに近寄らずといへり。軍慮のほど承り度候と、詰問へば、勝基莞爾と打笑ひ、さる時の備こゝにありといひつゝ懷を探り、號笛を取出して吹立給へば、忽鎧腹卷に擘手鬜楯をきびしくかためて、簑笠をうち著たる荒武者ども、こゝの木蔭かしこの岩蔭よりあらはれ出でて、數十

咲き匂ふ梅津の川の花ざかりうつる鏡のかげも曇らず

といふ歌をしるせり。桂之助眉をしわめて、此手蹟は見覺ありといへば、老母小膝をすゝめ、そは爲家卿の詠歌にして、夫木集に入りたる歌なるが、そのかみ祖父君、佐々木盛貞公御在京の折から、妾が夫梅津兵衛北野の社人にてありし時、御連歌のついでに、御筆を染めてたまはりし短册なり。その短册の箱を以て打擲仕りしは、すなはち祖父君の御拳をくだされ、君がこれまでの御不行跡を戒め給ふ同然なり。然るに君御怒のけはひも見え給はず、妾が打擲を堪へしのび給ふ爲體、深く先非を悔給ひ、武道つれ〴〵草を得て、御勘氣御詫の種となし給はん、御心底現れておんいとほしく、胸さくるばかり悲しきを見せ申すまじと、涙をかくせし老が心を、御推量くだされかし。子よりも孫の可愛きは、世の人の心ぞかし。平人の御身ならば、祖母よ孫よと名告あひ、娘がかたみと愛み、片時も傍をはなすまじきに、君臣とへだたれば、言ひたきことの數なきも、心に思ふのみぞかしと言ひて、悲歎に袖をひたしけり。良ありて涙をぬぐひ、いかに嘉門、此上は彼祕書を、惜まず君に奉れと言ふにぞ、嘉門こゝろえ候とて、彼書を取出して桂之助に與へけり。老母又勝基にむかひ、御覽のごとく桂之助殿、今はむかしの志をあらため給ふなれば、御館の御前しかるべう、とりなし偏に願奉るといへば、桂之助

勝基公と察し奉れども、幾度も御心をためし見て、短慮疎忽の大將か、又寛仁大度の大將か、はばかりながら御心底をうかゞひし上、かねては主どりさせざる心なりしが、我子ながら一方の大將にして、不足なき嘉門を、一生深山の埋木、谷の巣守と朽果てさせんより、母がすゝめて御奉公いたさせんと存じつき、度々心にもあらぬ不禮のことを申せしに、よくも御堪忍あそばせしぞ。心のうちにはいかばかりか勿體なく、只感涙をおしかくして、居候ひぬといひて、老の涙ぞまことなる。老母又桂之助にむかひ、さきほど途中にて御目にかゝりし時より、唯人ならずと思ひしに、さきほど勝基公に御物語を、物蔭にて承れば、果して君にておはしけり。いまだ一度も御目見いたさねば、妾を御見知あるまじく、妾も又御顔を見知らねども、今は何をかつゝみ候べき。君は元來妾腹にて、その御實母は妾が娘、嘉門が爲には姉にて、君を產奉りてすぐに身まかり候ひぬ。先奥方は賢女にておはせし故、少しも嫉のいろなく、奥方の御正腹と御披露ありしが、平人の身にて申さば、君は妾が爲には孫なれども、腹は卽ちかりものなれば、妾が爲にも正しく主君なるを、かりそめにも奴僕とよび、打擲せしは大罪なれども、これにはすこしく緣故あり、此包を御覽くだされかしと差出す。桂之助は始めて實母の母なる事を知りて打驚き、頓に包をひらき見れば、短册入に一ひらの短册あり。とりあげ見れば、

嶢敷打扮ぞといぶかりけるに、嘉門門外に出で、勝基をいざなひ入れて上座にすゑ、桂之助の手をとりてその次に居らしめ、老母諸共はるかにくだり平伏して、恭しく禮をおこなひ、まづ勝基にむかひて言ひけるは、某がごとき不肖の身を、かばかり御懇望給はる事、冥加にあまる仕合なり。頃日某が他行のあとに、兩度まで御駕を枉げられ候由、母の物語にうけたまはれども、勝基公とは思ひもより侍らず。某いさゝか虚名を知られ、これまで諸國の諸侯より、召抱へんと使者の來往しげしといへども、その大將の心、いづれも皆高祿さへあたふれば、奉公するとのみ思はれて、軍師をもちゆる禮義を知らず。只權威を以て招くゆゑ、返答もわづらはしく、當代諸侯おほしといへども、主君とたのむ人なしと、世をせまく見くだして居たりしに、驚入りたる公のおんふるまひ、官領職のおもき御身を以て、唯一人の從者をも具せられず、かゝる雪中の寒氣をしのび、露ほども權威のいろなく、某一人を御招あらんとて、さばかり御心をくだき給はる事、無勿體なども申すべからず。此上は御招にしたがひ、麾下に屬するそのしるしに、兵具を帶して御目見仕ると、敬ふかく相のべけり。勝基大に喜び給ひ、我蜀の劉備におよばずといへども、三度草廬をかへり見るは、軍師をもとむる禮なれば、いかでか苦辛をいとふべき。先もつて早速の許容、よろこびに堪へずと宣へば、老母つゝしみていひけるは、妾は始より

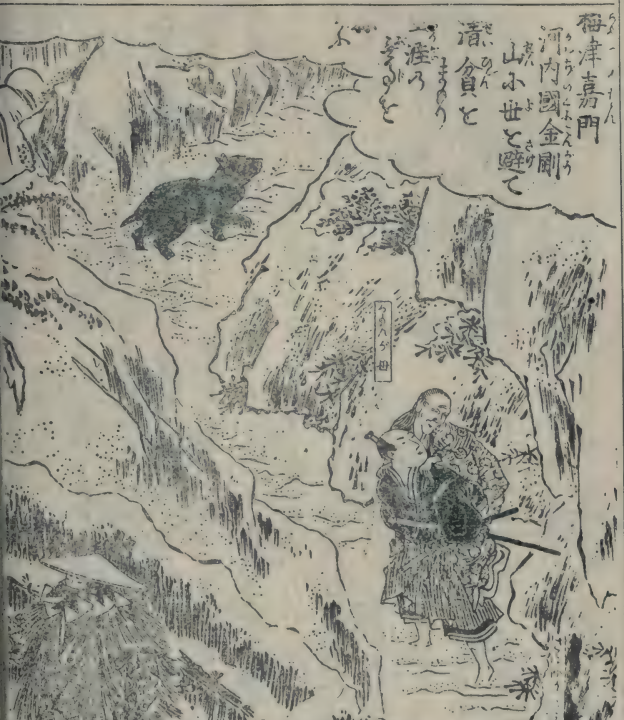
なしと宣ふにぞ、桂之助げに理と其身の科を後悔し、此上は嘉門親子に、勝基殿と打あけ言ひて味方につけ、せめての功になすべしと、心のうちに思ひつゝ、打しをれて内に入り、おづ〳〵老母の前にひざまづく。老母見るより、彼馬鹿者はいまだ歸らずや。理いうてなど歸さぬぞ。汝は案外なる不調法ものかな。さばかりいひがひなくて、此家に足をとゞめ、嘉門を師とたのみ、兵法の道すぢをわきまへんこと、いかでかかなふべきぞ。およそ奴僕を召仕ふには、そのはじめによく戒めざれば、不奉公するものぞといひて、一つの服紗包をとりて、さん〴〵に打擲すといへども、桂之助露ばかりも怒るいろなく、某が宿願成就するまでは、いかなる憂目にあふとも、此家を出づる心にあらず。お氣にかなはぬ事ありて、たとへ打殺さるゝともせんすべなし。此上のお情には、かの雪中の侍に、嘉門殿を御引合せくだされ、事の子細を御聞給はれかしと、簀子のうへに額をつけ、涙ながらにねがふ形勢、誠に哀の姿にて、思ひ入りてぞ見えたりける。かゝる折しも納戸のへだてをさと開きて立出づる骨柄、白糸縅に銀の鏢緘したる腹卷の上に、萌黄錦の陣羽織を著し、青鈍の大口はき、黄金作の丸鞘の太刀を佩き、文曲武曲の二星を畫きたる、軍扇を把りて立出でたる爲體、志氣堂々威風凜々として、誠に一個の英雄と見えたり。桂之助仰天し、何人ぞと顧るに、是乃ち別人にあらず、梅津嘉門景春なり。こは嘵

嘉門の歸宅のほど、何の時とはかられねば、若日も暮れなば難儀のうへの難儀ならん。疾く歸られよ、いざ〳〵といひつゝ手をとりて、ひきたてんとせしが、顏を見て仰天し、貴君は由理之助勝基公にはあらずや。此御姿は何故ぞと打驚きつゝ、恭しく禮を行ひ、官領職の御身を以て、一人の從者をも召具せられず、かろ〴〵しき御容體、いぶかしさよと相のぶる。勝基はこの人を、桂之助國知とは見つれども、一言の答なく、唯拳を握り齒をかみしめて、寒氣に堪へざる樣子なり。桂之助こゝろづき、某御館義政公をさしていふの御氣色を損じ、濱名入道殿の御内意によりて、父の勘氣をうけし身なれば、御詞をたまはらぬも理なり。かゝる大雪をいとひ給はず、自此家にいたり給ふを察し思ふに、嘉門を軍師に召抱給はん結構と存ずるなり。某今日しも此山中にいたり、心を盡して嘉門に近づき候も、別意にあらず、曾て御館嘉門が編みたる、武道徒然草といふ書を、御懇望ありといへども、彼ふかく祕して他見をゆるさず。若嚴命を以て召上らるゝ時は、かの書を燒きて、身をかくさんこと必定なりとて、これまでその御沙汰もあらざりき。某偶此事を思ひいだし、なにとぞ嘉門に誠心を見せ、かの書を得て御館にたてまつり、それを微功となして、父の勘氣赦免の御内意を願奉らん爲なりと語れば、勝基尻目にかけ、其身放佚無慙にして、御館の御不興をかうぶり、父の勘氣をうけたる者に、かはすべき詞

周に太公望をもちひたるも、大將たる人、賢を尊び敬ふ志の厚きがゆゑなり。總て國家を治むるの要、賢臣にあり、賢臣を得るに禮讓をあつくせざれば出でて仕へず。祿を施し金帛を以て招くとも、賢士を尊ぶ志なき人には仕ふる事なしとかや。扨その時嘉門母のそばちかく寄り、かの雪中の旅人は何者に候やらん、見るも氣の毒の形勢なり。御心にかなはざる者ならば、理をのべて御歸しなされずや。某出でて追ひかへし申さんやといへば、否々そちはかまふべからず。彼侍そちが留守に兩度まで來りて、さま〴〵のたのみ事、我心にかなはねば、うけがふべき樣もなく歸しつるが、又今日も來りてそちに會ひたき望なれども、仕官さする心なければ、兎角人にあはさぬに如くべからずと、かねて思ひて、他行といつはり歸さんとするに、然らば歸宅を待たんとて、あのごとく寒氣に苦むたはけ者。此方の心も察せず長居するうつけ人、いよいよ其方を遇はすべきにあらず。彼若者に命じて追歸すに如かじといひて、若者をちかづけ、俄に詞をかへていひけるは、汝さきほど奴僕とも思へといひつる詞によりて、申しつくる事あり。かの雪中の侍を汝が辯舌を以て追ひかへせ。如何にいふとも嘉門は他出せしといひて、是非とも歸せといひつくれば、若者うけ給はり、某御奉公の手柄はじめに、御手にあまる馬鹿者を、追歸して見せ申さんといひて、外の方に立出で、やよ〳〵旅人御身いつまで待るゝとも、あるじ

と打叩き、誰ぞ頼み申したし。こゝあけて給はれと、いふ聲聞きて老母立出で、何人ぞと思ひしに、御身は頃日兩度まで來られし侍よな。今日しも嘉門家に居らず、御用の間にはあひ申すまじ。たとへ御頼のすぢを、嘉門に申し聞かせたりとも、此方におもふ旨も候へば、とてもうけがひ申すまじ。いたづらに足をつひやし給ふな、疾く〳〵御歸り候へかし。かさねて御出無益也といひすて、戸を撲地たてゝ裏に入る。嘉門これを聞き、何者なれば斯くあらけなく母人はあしらひ給ふやと訝り、再び又窓のひまより窺見るに、かの武士雪中に坐をしめ、情なきぞ御老母。嘉門殿家におはさずば、此處にて歸宅を待申さん。よろしくとりなし頼侍るといひて、歸るけはひは見えざりけり。折しも雪はつよく降り、紛々揚々として、恰も柳絮の舞ふが如く、鵝毛の飛ぶに似たり。さらぬだに寒氣きびしき谷蔭なるに、朔風はげしく吹下せば、見る〳〵かの侍の簑の毛に垂氷さがりて、鈴のやうにから〳〵と鳴り、身はなかば雪中にうづもれて、吹雪は面につぶてを打つが如くなるを、笠にふせぎ眞袖にはらひ、齒をくひしめて寒氣を堪へしのぶ爲體、誠に餘儀なく見えて、今にも凍死ぬべき形勢なり。嘉門此體を見て益いぶかり、さても堪忍づよき人かな。覆面にて面はしかと見えざれども、卑しからざる侍の、かゝる嚴寒をいとはぬ體。いかさま何ぞ思ひつめたる事あらんと、舌を卷きてぞ居たりける。湯に伊尹を得、


梅津嘉門


梅津嘉門
河内國金剛山ふ世と避て
清貧をまもり
一涯乃
送りを
かもんが母

も拜見し度思ひしが、容易に人にあふ事をゆるし給はざるよし、よき門路もがなと思ひ候に、今日しも思ひかけず相見えしは、誠に是師とたのむべき時節到來、天のみちびき給ふ處なるべし。向後御家の奴僕とも思されて、薪水の業を命ぜられ、兵術の進退軍伍の勝敗、御指南たのみ侍るなりと、低頭謙譲して思ひ入りたるけしきにぞ見えぬ。嘉門感歎していはく、いまだ若輩の身を以て、武道の心がけ深き殊勝さよ、いかでか疎意に存ずべき。何にもあれ、且某が宅に御越あれ。人は如何にいひはやすかは知らざれども、某が得たる業は、林に入りて薪をこり谷にくだりて水を汲むのみ、他の事はさらに知らず。殊更武道つれ〴〵草とやらん書を編みたるなどは、あともなき虚言なり。軍師などとはをこがましやといひて笑ひつゝ、三人打連れて谷蔭の庵にかへりぬ。かくて嘉門家に歸り、老母に衣服を著せかへ濡衣をあぶりかわかし、しひ柴焚きてあてなどし、様々にいたはる體を、かの若者打見て、平日の孝行を思ひやりぬ。嘉門茶を煮て若者にすゝめ、四方山のものがたりして、しばらく時をうつしけるに、折しも外の方に咳の聲しければ、人跡たえたる此隱家に、何者の來つるやと訝るうちに、案内を乞へば、もののの隙よりうかゞひ見るに、これ一人の武士なり。簑笠打著て、笠の下に覆面したれば、面はさだかならねども、遠國の旅人とおぼしき打扮なり。雪深く降り埋みたる柴の戸を、ほと〴〵

心おちつき、御迎の爲これ迄參り候と云ふにぞ、老母若者の背よりおりたち、途中にて荒熊に出會ひ、ほと〳〵一命を失ふべきを、此御方の情にて危急をまぬかれ、しかのみならず、これまで負給はりしと語れば、嘉門若者にむかひ、母をいたはり給はる御芳志、謝し盡しがたしと相のぶる。時に若者雪中に身を伏して禮をおこなひ、卒爾ながら御身は、梅津の嘉門殿にはあらずやといふ。嘉門答へて、某かゝる深山に住み、鹿猿と臥戸を共にする身なれば、名を知る人もあるまじきに、いかにして我姓名を知り給ふや、訝しさよといひければ、若者益かしらをさげ、たとへ泥中に尾を曳給ふとも、先生の雷名を誰か知らざる者あらんや。かしこの山寺にてこれなる御老母は、先生の母人なる由をうけ給はり、强ひてこれまで送り來しも、先生にまみえん事をこひねがふが故なり。某は武士の浪人なるが、何とぞ軍略智謀の人傑にしたがひ、兵學の餘緒なりともうかゞひ知り、再び家をおこさんものと思ひ立ち、師とたのむべき人品を聞きつくろふに、此山の谷蔭に世を避けて住む、梅津の嘉門といふ人、生得頓智聰明にして、軍學に眼をさらし、石黃孫呉が奥儀をきはめ、武略衆に秀で給ふ由、その才名かくれなく、曾て兼好法師の草紙にならひ、武道徒然草といふ、兵法の奥儀を記せし書を、編給ふよし承りて、わざ〳〵當國にうつり住み、いかにもして相見え、兵學の御指南にあづかり、かの奥儀の書を

して臥龍先生の跡を追ひ、禪味を甘じて大幢國師の道をしたひ、名利に屈せぬ志、はるかにたふとくぞ見えぬ。一日老母山寺にまうでけるが、比しも嚴冬の時節なれば、歸路にのぞみて雪降り出し、見る／＼滿地玉をしけるがごとく、通ひなれたる道筋も、深く雪にかくれたれば、おのづから道に迷ひ、殊更峠越の吹雪、肌にしみて寒ければ、行きなやみて杖をとゞめ、しばし佇み居たる折しも、獵師に追出されたる穴熊にや、雪を蹴立てて馳來り、ほと／＼老母に飛びかゝらんとしたる處に、一人の若者木蔭より走り出で、立へだたりて熊の肩さきを一刀きりつけたれば、熊は怒りて狂ひけるが、つひに足をふみながして、谷底に倒になりて陥りぬ。かの若者は腰をかゞめて老母にむかひ、年老給ふ御身にて、雪中の歩行見るにしのびがたし。いづくにもあれ御住家まで、負行きまゐらせんといふにぞ、老母うれしげに、いづくの御方かは知らざれども、今の危難をすくひ給はるのみならず、情深き御志謝しはべる詞なしといへば、さばかりあつき詞ををさむるにゆゑなし。いざ疾く／＼とて、背を抑向けて老母を負ひ、住家の方を問ひつゝ走行きけり。さて嘉門はひとり家にありて、母の歸のおそきを案じ、殊更俄の大雪なれば、途中さぞ侘しからんと心ならず、簑笠打著ていほりを出で、母の歸路を斥していそぎけるが、むかふの方より老母、若男に負はれ來り、嘉門を見て喜びければ、嘉門もやう／＼

くおはしませといひつゝ門送し、互に涙をそゝぎて別れ、纔に一町ばかり行きけるに、昨日やとひし駈神す、野ぶせりの乞丐どもを語ひ來りて道をふさぎ、このごろ官領濱名殿よりきびしくたづね給ふ。佐々木桂之助とやらん、いづくへ落行くぞ。われ昨日又平が家にやとはれ、家内の様子いぶかしと思ひしゆゑ、今爰に來りてうかゞふに、果してあやしき者どもなり。搦捕りて賞銀にあづかるぞ、疾く〳〵手をつかねよとぞ呼りける。南無右衛門追散して通らんと、錫杖をとりのべける處に、思ひかけざる物蔭より、猿二郎棒をとりて走り出で、かの奴原を散散に追散し、これより志賀の山越して御立退あれかし。人の知らざる間道を御供つかまつらんとて、つひに四人打連れていそぎ行きぬ。さて雲六が屍は、又平其夜ちかき山にかき行きて烟となし、あとねんごろに弔ひけるとぞ。

十七　雪溪の非態

爰に又梅津の嘉門は母と共に世を避けて、和州河州のさかひ、金剛山水越峠の谷蔭に、いぶせき庵をいとなみ、當山は藥草おほく、殊に金山にして金剛砂を出すゆゑ、これらをとりて日々の費にかへ、みづから薪をこり水をくみ、あけくれ老母に孝行を盡し、いとまには書籍を友と

一間を立出で、我々三人もおなじ夢を見たりといひて、一同によろこびけり。時に楓父の前に手をつき、妾こと姿をかへて藤波殿文彌等の、菩提をとひたく候へば、剃髪をゆるして尼となし給はれかしといふ。南無右衛門いはく、いな〳〵汝剃髪無用なり。我今より剃髪して、佐渡島坊と名告り、我異名を汝にゆづり、若殿を世に出しまゐらせし後は、專修の念佛者となり、彼蟹滿寺ちかごろ破損したる由聞けば、これを修理して亡人々の冥福の種とすべし。汝六字南無右衛門といふ名を繼げば、道心せしも同然なり。汝又これより文彌が師とたのみたる澤角檢校にしたがひ、近ごろ世におこなはるゝ淨瑠璃節を學び、因果の道理を唱歌につくり、糺河原に於てこれを語り、普く諸人を勸進して、我志願の助力せよといひをはり、髻弗とおしきりて、藤波が位牌に手向けければ、皆々その誠心を感じけり。六字南無右衛門といふ女太夫、淨瑠璃芝居の始祖なりと云傳ふるは、此楓が事なりとぞ。南無右衛門又桂之助にむかひて頭をさげ、これより河内の國におん越ありて、若君に御對面あれかし、奥方の御行方はなほ亦たづね候べし。いざ夜のあけぬ間に疾く〳〵ともよほせば、桂之助いそがはしく身仕度して、又平にむかひ、我時運を得て世に出でなば、かならず報をすべきぞと言ひてわかれを告げ、編笠ふかく傾けて立出づれば、南無右衛門修行者の姿その儘に、楓を具して相從ふ。又平夫婦阿龍もともに、恙な

日たすけられたる數多の蟹こゝに集り、大蛇の遍身を螫殺して女をすくひ、大蟹は去り小蟹はそこに死す。よりて其所に蟹および蛇のからをうづめ、寺を建てて普門山蟹滿寺と號す。或はまた紙幡寺ともいふよし、元亨釋書卷之廿八に見えたり。息女の事よく此事に似たり。思ふに彼は陰德陽報の理を示し、これは名畫の奇特によりて孝女をすくふ、共に是佛の慈悲衆生濟度の方便也。あれ壁におしたる我拙筆の繪を見給へ、地水火風の四つの緒の、斷れてはかなき琵琶法師も、忠孝全き竹杖にて、煩惱の犬を打ち畜生道をまぬかれて、天堂に生るゝかたち、子息文彌どのの姿繪とも見給へかし。綠青の髮すぢ胡粉の肌、無常の風に塗笠も、骨のみ殘る手弱女が、肩にかたげし一枝は、紫雲たなびく藤の花、これ妹藤波が成佛の姿なり。積惡の角を折り鬼なす心をひるがへして、墨の衣に鉦打つさまは、是乃長谷部雲六が邪念を滅せし姿ならずや。喜怒哀樂にいろどりて、諸のかたちをなし、善となり惡となり、正となり邪となり、恩となり仇となるも、三世因果の報と思へば、互の恨もつき弓の、矢猛心をやはらげて、唯彼等が菩提をとむらふに如かじ。某さきほどの夢に、藤波姿をあらはし、敵三八郎どの親子のいみじき忠孝を感ずれば、今は恨も盡きはてて、安養淨土に生れ候といひて、身より光明を放ちて去ると見たれば、成佛得脫うたがひなし、といふ折しも、桂之助小枝阿龍と共に、睡をさまして


楓孝道
あつきふより夢中
名画乃奇特を得て
妖蛇乃難義を
まぬかる


藤波成仏得脱を

けるは、奇なるかな妙なるかな、巨勢の金岡は、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、官大納言に至る。嘗て御府に藏めたまふ金岡が畫ける馬、毎夜萩の戸のほとりに出でて、萩の花を食ひしと、古今著聞集に見えたり。また仁和寺の御室に金岡が畫馬あり、近き田のほとりに出でて、稻の苗を食ひしといふ。また河內の國金田村牛頭天王の社頭の、金岡が筆の繪馬、ぬけ出でしといふたぐひの說は、かねて聞きつたふるといへども、目前かゝる奇特を見る不思議さよ。抑此百蟹の圖は金岡殊に精神をこめ、螃蟹の繪に妙を得たる、唐代の名畫、韓滉といふ者、玄宗皇帝の勅によりて畫きたる、百蟹の圖にならひて畫きたるとは聞きつるが、見るは今がはじめなり。神彩飛動誠に生けるが如し、奇特あるもうべなり。某これを見て畫道の奧儀をきはめたりといひつゝ歡びて卷物をおしいたゞき、再び又いひけるは、これにつきて思ひいだせる物語あり。昔山城國相良郡に（元亨釋書 久世郡）綺田村に一個の美女あり、嘗て佛道を信ず。一時里人あまたの蟹を捉へ煮てくらはんとす。かの女是を見てあはれみ、美食にかへて蟹を盡く池に放つ。又その父一時野に出でて、蛇の蟇を呑むを見てあはれみ、若蟇をはなちやらば我娘を汝にあたへんといふ。蛇これを聞入れたるさまにて蟇を吐きて去らしむ。其夜衣冠の若人來りて、約のごとく女を與へよといひて一室にいり、忽大蛇と變じて女の身をまとふ。時に前の

日のくはしき物語をかたり聞せければ、楓打聞きて、因果輪轉の理、善惡つひに報ある事を曉して、嘆息しけり。かくて又平夫婦食事を調じて、南無右衞門父子に與へ、一間のうちに導きてやすませけり。南無右衞門父子は、たえて久しき出會なれば、さまぐの物語に思はず時をうつし、やうく睡につきけるに、やゝありて楓が聲として、あなやくとをめき叫びければ、南無右衞門驚き睡を醒して見れば、楓が腹に卷つきたる小蛇、懐より飛出づると見えしが、忽丈一丈ばかりの大蛇と變じ、楓が身を幾重ともなく纏ひぬ。あな悲しや、こはそも如何にすべきとあわて惑ひけるに、枕上に置きたる笈のうちより、あまたの蟹這出でて、大蛇にとりつき、螯を以て肉をはさみ、血は泉のごとく流れて、暫時に大蛇を殺しをはんぬ。蟹はたゞちに元の笈のうちに這入ると見えしは、すなはち夢なりけり。南無右衞門夢さめて、身うちに汗をながし、楓をゆり動しければ、楓も睡をさまして起上りけるにぞ、衣服をくつろげて腹を見るに、これまで片時もはなれざる妖蛇、何處へ行きしやらん失せてあとだになし。南無右衞門さては正夢にてありしかと思ひつゝ、笈のうちより彼卷物を取出してひらき見れば、畫中の蟹の螯に盡く鮮血つきてぞありける。此時已に四更のころなりしが、又平も楓がをめきたる聲を聞きつけて起出來り、南無右衞門が夢中の事を聞き、灯火をかゝげて彼卷物を熟覽し、掌を打ちていひ

もなく、見物芝居の主、楓を伴ひ、こゝぞ〳〵といひつゝ裏にいり、南無右衛門にむかひていひけるは、御身今日しも此宿をよぎり給ひしを、僕が見つけて告げしゆゑ、楓をあはせ申さんため、旅宿をたづね參りしといへば、楓は父にとりすがり、かはりたる此お姿、母上も恙なくおはすかとて、あとは涙に詞なし。南無右衛門は折よき幸と歡び、たがひに何くれと語合ひて後、芝居主にむかひ、ゆゑありて思ひかけず金とゝのひつるが、元金百兩を以て、娘を戻したまはらずやと言へば、芝居主速にうけがひ、楓事京大坂は勿論、伊勢尾張のあたりまで將て行き、おほくの金を德つきたれば、卽座に百兩渡し給はば、いかにも暇をつかはすべしといふにぞ、南無右衛門ます〳〵歡び、かの金をとり出して渡しければ、芝居主數をあらためて取納め、こは思ひよらざる楓が仕合よとて、金の受取、いとまのしるしを證文にかきしるし、印信をすゑて與へ、楓をわたして、又かさねて見ゆべしといひて出去きぬ。時に三井の晩鐘つげわたり、勢田のあたりに夕日の影ぞかたぶきける。

十六　名畫の奇特

扨も其時南無右衛門．主君桂之助にねがひて娘楓に目見をさせ、又平夫婦阿龍等にも引合せ、今

某死しても、こゝろよく眼をふさぎ申すまじとて、涙を流してねがひけり。桂之助始終を聞き、悪にもつよく善にもつよき彼がねがひ、末期の望なれば聞きとゞけつかはすべしと、おもき仰に南無右衛門、やう〳〵これを諾ひけり。雲六はうれしげに打笑ひ、今は此世にのぞみなし、死出の旅路をいそがばや。相公の御前をけがす罪は、御免し給はれかしとて、腹十文字にかきやぶり、咽吭を掻斬りて、うつぶしに伏してぞ死したりける。時に南無右衛門、彼鳥をとりあげていはく、此鳥雁に似たりといへども、よく〳〵見れば漢名蒼鵁といふ鳥なり。よく高飛雁に似て蒼白也、目相見て孕み、吐きて子を生むといへり。夏子益が奇疾方に、蒼鵁の肉に人血を和して、瘂を治する方ありと、ある名醫に聞きたる事あり。吃奢にも又験あるまじきにあらず、思ひかけずかゝる奇鳥を得たるも、又一奇事なれば、試に用ひ給はずやといふにぞ、又平やがて彼鳥の肉をさきとりて火にあぶり、雲六が鮮血をそゝぎて食しけるに、頓に咽すゞやかになり。生れつきたる吃奢、忽常の人のものいふ如くになりて、これもまた天の與ならめといふ聲様も、いとあきらかなれば、小枝阿龍等こは不思議々々といひて歡びあひぬ。誠に奇異の事なりけり。かゝる折しも外の方に人の足音ひゞきければ、又平小枝阿龍に目くはしして、桂之助を一間にかくし、雲六が屍を蒲團にくるみて床の下に押入れ、血しほを拭ふひま

み、天罰を與へ給ふに疑なし。今に至りてやう〳〵と思ひあたり候とて、財布をとりあげ、此百兩の金は先年奪ひし二十兩に利を加へて、又平殿に返すあひだ、合力うけし三八郎殿へ此儘返し給ひて、御息女楓どのの身をあがなひ返し給はれかし。さもあらば我身の罪の一分を減じ、いさゝか來世をたすかる便とも相なるべし。いはれを聞かねばよそごとに思ひしが、此度石山寺の門前にて、諸人に見する蛇娘は、楓どのに疑なし。聞きとゞけてよ御兩人といひて、掌を合せて拜み、涙を瀧の如くながしければ、又平かの財布をとりて南無右衛門が前におき、雲六慚邪懺罪して實心にひるがへりし上は、不便にも存ずれば、彼が望のごとく此金にて、息女をあがなひ候へかしといへば、南無右衛門頭を右左に振動し、いな〳〵八重垣とやらん、さばかり實ある者を、うき川竹のながれに沈め、長く辛苦を受けしめんは、忍びがたき事ならずや。娘楓はみづから覺悟のうへにて、親の爲に辱を受くるなればせんすべなし。此金を返して八重垣を、取戻しつかはすべしといひて、諾はざれば、雲六苦しげに息をつき、いな〳〵その金にて御息女の身をあがなひ給はらば、却りて妹が實心のかひもあるべし。殊更その金御身の膝のあたりに落ちたるよし、畢竟天より忠臣孝子を賞じ給ひて、與へ給ふに疑なし。若海川にもおちいりなば、妹が志は水の泡となり候べし。ひとへに御聞屆け給はれかし。若さもあらずば

はれて暇たまはり、かく浪々の身となりぬ、格別の科にもあらねば、今にも彼巻物をうけもどして差上ぐれば、歸參の叶ふは必定なれども、本金に利金をくはへて、かれこれ百兩ばかりの金なれば、なか〳〵調ひがたく、今先非を悔ゆると雖もかひなしといひて、空泣して見せければ、妹これを實とし、しからば妾が身を賣りて金をとゝのへ、その巻物をうけもどして、歸參を願給へといふにぞ、某心に計なりしと歡び、うまくいつはりて情なくも、妹を當所の伏柴の里に將て行き、百兩に身を賣りて、今日しもその身の代をうけとり、天へものぼる心地して、かへる路の傍に、一羽の雁首をなげて落居たり。飛ぶけはひはなく見ゆれども、拔足しつゝ拾取りて見るに、箭の疵瘢のあともなし。扨はこしぢにかへる雁金の、行倒かと推量し、何にまれ福のいたり時、晩の寢酒の肴とし、ひさ〴〵飢ゑたる瘦腹を肥さんものと、心のうちに歡び、はや榮耀心いでて、提げて行くも煩しと、金財布の紐のあまりを、雁の足に結附け、肩の尖にふりかたげて、懷手して歸りしが、何とかしけん、かの雁途中にて蘇生り、くゝりつけたる財布と共に、虛空を斥して飛去りけるあひだ、翼なき身を悲みて、後をしたひて此處まで追來りしが、落つべき所もあるべきに、此におちて君を始め奉り、おの〳〵方に出會し、某が舊惡のあらはるゝは、正是兄の爲に身を賣るほどの、實ある妹の身の代をむさぼりし、某が非道をにく

知り、積惡の報の覿面にめぐり來ることを曉しぬ。某が懺悔物語を、一回御聞きくだされかし。そのかみ某在京のうち、五條坂の曲中に通ひて、過分の金銀をつひやし、身分たち難きにより、偶惡念おこりて、百蟹の巻物を盗取り、御館を出奔して、北山をすぎ、杉坂に至りけるに、折しも風雨つよかりければ、しばし木蔭に晴間を待居たるに、それなる婦人來かゝり給ひ、懐中おもげに見えける故、又惡念おこり、婦人を地上に蹋倒して、二十兩の金をうばひ、仕合よしと欣びて、その所を逃去り、其後彼巻物を、金五十兩に賣りけるが、一所不住に迷歩く間に、かの金を殘なくつかひ盡し、つひに零落してかゝる身となりぬ。某は金を奪ひて死に至らしめんとし、三八郎殿は金を與へて、死を救給ひつるよし。今思へば、善惡の差誠に壤霄をへだつるが如し、豈賞罰の報なからんや。扨某ちかごろ當國にいたりて、草津の驛に住家をもとめ、幸石山寺の觀音開帳ありて賑しければ、かの門前に出で、鼓を打くせ舞々の謠をうたひて物を乞ひけるに、前の日思ひかけず、幼年の時わかれたる、八重垣といふ妹にあひ、住家に伴歸りて、何くれと過去りし事どもを語りけるに、妹某が斯く浪人したる縁故を問ひける故、又惡念おこり、僞りて言ひけるは、我前の年在京の刻、偶五條坂に通ひ、過分の金銀をつひやし、その債をつぐのはん爲、若殿よりあづかりたる繪巻物を質入しつるが、つひに其事あら

れをもとめて汚名をすゝがばやと思ひけれども、價百兩といふ大金なれば力およばず。しかるに娘楓此事を聞きて深く悲み、みづから身を見物芝居に賣りて、百兩の金をとゝのへ、彼卷物を買戻し、諸人に面をさらし、丹波の國の蛇娘と、世に恥をあらはす憂身の上となりぬ。これ皆汝がなせし業にあらずや。唯今はからず出會せしは天の與へ、我宿恨をはらすべき時の到れるなり。たとへ生皮を剝ぎ臊子にきざむとも、飽くべからずといひつゝ、簀子の上に鼻の尖をすりつけ〳〵して、責みければ、雲六は一言だに返答すべき詞なく、只ゆるし給へ〳〵と打詫びけり。時に又平が妻小枝さきほどより、雲六が顏をつれ〴〵とまもりつめて居つるが、大におどろき、先年杉坂にて、妾が懷中の金二十兩を奪取り、逃去りたる盗人は、すなはち此者にて、たしかに見覺ありといへば、又平聞きて、扨はしかありけるか、恩人と仇人と、しかも同月同日に、はからず出會せしは、正に是天のみちびき給ふ處にして、善惡つひに報ある事を示し給ふ所ならん。いかに雲六とやらん能く聞けとて、小枝金をうばはれ言譯なく、首縊りて死なんとせしを、三八郎が情にて、金子を合力され、危き一命をたすかりたる事の始終を、つぶさに語りければ、雲六頭を垂れて聞き居たるが、やがて一刀を拔いて腹にぐさと突立て、いと苦しげに息をつきていひけるは、あな恐しや勿體なや、今やう〳〵天の賞罰あきらかなる事を

昔話稲妻表紙　巻之五上冊

十五　孤雁の禍福

當時、南無右衛門又平等一同に、彼金の出所いかゞと、いぶかり思ひける所に、一人の男、汗もしとゞに息もつきあへず、飛ぶがごとくに馳來り、案内も乞はず内に入り、たしかに爰に落ちたるがといひつゝ、あたりを見廻し、南無右衛門が手に持ちたる財布を見つけ、そは我失うたる金なり、此方へ返すべしといひつゝ、財布に手をかくるを、南無右衛門かへり見て、汝は長谷部雲六ならずやといへば、此男仰天し能く／＼見れば、佐々良三八郎にて、かしこに若殿桂之助もおはしければ、ます／＼驚き、財布もとらで逃出すを、南無右衛門猿臂を伸べ、えりくび摑みて引戻し、膝の下に押敷きていひけるは、汝六年以前しかも今月今夜、百蟹の巻物を盗み、逃去りたる事おぼえあるべし。我其夜若殿御放埓の根を斷たんと、藤波を殺し、思ふ旨ありて、一旦館を立退きしが、同夜の事なれば、某にも御疑かゝり、汝といひ合せて彼巻物を盗みしならんと、共に盗賊の汚名をかうぶりぬ。其後かの巻物を賣らんといふ者あるゆゑ、こ

犬が謀計館の騷動をほのかに聞けば、父上の御身のうへ氣遣しく、時節を待ち、御勘氣のゆるしを受けてたちかへり、家を治めんと思ふから、をちこちを忍びて、むなしく月日をおくりつるが、此家のあるじ又平、藤波ゆゑに零落せしを憐み、深くいたはりてかくまひ置きぬ。名古屋山三郎不破伴左衛門がために父を打れたる事も、彼が僕猿二郎といふものにあひてくはしく聞きぬといひければ、南無右衛門頭をさげ、御氣遣あそばされな。某命あらんかぎりは道犬が悪意を糺し、再び世にいだし參すべしと申すにぞ、桂之助末頼しくぞ思ひける。かゝる折しも空中より、一羽の雁、片田に落つる雁ならで椽先に撲地おち、南無右衛門が膝に上り、再び飛ばんと羽たゝきすれども、飛ぶことあたはず。よく〳〵見れば、足に財布を結ひつけたるが、足枷となりて飛ぶことならざるなり。南無右衛門いぶかりつゝ、財布を解きて見れば、うちにおよそ百兩ばかりの小判金あり。扨は此金の重に堪へずして落ちたるか、朱賓が雁は臆に金錢を貫き、蘇武が雁は脚に帛書を繫ぎたる例はあれども、かゝる大金を雁の足に結附けたるは、何のゆゑぞと、一同にいぶかり思ひぬ。此金の出所を知らんと要せば、且下回を讀得て知るべし。

なしと、詞すゞしくいひければ、又平返答の詞はなく、つと立ちて刀をすらりと拔放ち、南無右衛門が携へたる編笠をずばと斬りて、佛壇に手向け、いかに藤波汝が敵佐々良三八郎が首を、斯くの如くなしたれば、速に恨をはらして佛果を得よ。南無阿彌陀佛阿彌陀佛と唱へ、扨南無右衛門にむかひ、晉の豫讓が例にならひ、今已に妹が仇をむくいたれば、もはや恨は少しもなし。此上は妻小枝が命を救給はりし、大恩を報ずるのみなり。その恩を報ずべき仕方は斯くと、へだての紙門を押開けば、一間のうちに聲ありて、某さきほどより此處にありて、委細のゆゑを聞きつるぞといひつゝ、立出づる人は、乃是別人にあらず、佐々木桂之助國知なり。南無右衛門椽の端まで退きて平伏すれば、桂之助いひけるは、我佞者の爲にすゝめられて行を亂し、汝等が諫言を用ひず、今思へば藤波が非業の死は、畢竟我手をくだして殺せしも同然なり。我眼ありながら、誠の忠臣を見ることあたはず、百蟹の卷物を奪ひしも、汝が仕業と思ひしは、大なる誤なり。今汝が物語を聞けば、楓が孝行により、卷物をもとめ出し、文彌が忠義によりて、月若も恙なきとや。たぐひ稀なる者どもが、不便なる身の果と、思へば悲歎にせまるぞかし。我不行跡によりて、父の勘氣をかうぶり、かく漂泊の身となりて、今後悔すといへども、更にかひなし。生きながらへて恥をのこさんより、自殺せめと思ひしことは、たびく\なれども、道

かでか思ひ候べき、誠に不思議の出會なりとて、其後丹波の國にうつり住み、六字南無右衛門と改名したる所以、百蟹の卷物を奪ひたるは、長谷部雲六一人の所爲なる事、藤波の怨靈兄弟の子供につき、姉楓は蛇に見こまれ、弟栗太郎は盲目となり、文彌と改名したる事、文彌忠孝全くして、若君の身代となりし事、楓孝心深く、父の汚名をすゝがんと、見物芝居に身を賣りて、金をとゝのへ、彼卷物を買ひとりたる事、月若に妻礒菜をつけて、河内の國某の寺にしのばせ置き、おのれは廻國の修行者に身を扮して、かの卷物をたづさへ、桂之助銀杏前二方の行方をたづねに出でて、今日しも不思議にこゝにやどり、さき程位牌の法名を見て、似たる事と思ひしまで、こまやかに語りけるにぞ、又平夫婦阿龍も、はじめて其實を知り、たぐひまれなる忠臣やと、轉感嘆にたへざりけり。南無右衛門かさねていはく、御身等に出會し、恨の刃にかかりて死し、冥途にいたりて藤波どのに言譯せんことは、かねて望む所なれども、主君御夫婦御親子の先途を見とゞけ、再び世に出しまるらす迄は、死難き命なれば、しばしの間某が命を、某にあづけ置きたまはれかし。彼宿願を果せしうへは、首さしのべて御身等に打るべし。常言にも大丈夫の一言は、駟馬も走らすといへり。若し此詞に露ばかりも詐あらば、立地に天地神明の御罰をかうぶるべし。恩は恩仇は仇なり。少しの恩を以て覺悟の命をたすかるべき所存

心底善か悪か、分明ならず。妹が仇を報はんとすれば、恩を知らざる者となり、恩を思ひて打たされば、妹が冥途の恨はれず。かの恩と此仇といづれか重くいづれか輕き、とくと思案仕り、恩を以て仇に代ゆるか、仇を以て恩に報ふか、心を決し候べしと、吃響りつゝ言ひて、刀を鞘にをさむれば、南無右衛門いひけるは、しか思すは理なり。某藤波どのを殺せしは、全く非義非道にあらず、くはしき物語を聞きてたべよ。若殿桂之助殿在京の刻、藤波どのゝ艶色に迷ひ、不破伴左衛門がたぐひの、佞臣等にすゝめられて、放佚無慙の不行跡漸々につのり、名古屋山三郎ト某、しばしば諫をたてまつると雖も、露ばかりも用ひ給はず。若室町御所の御耳に入れば、御家にもかゝはる事なれば、せんすべなく、越の范蠡西施を呉湖にはなちたる例にならひ、科なきを殺すは不便とは思ひしかど、お家にはかへがたしと思ひなほして、藤波どのを殺し、すでにその場にて腹切らんと、刀に手は掛けたれども、執權不破道犬が心底、いぶかしき處あれば、權一命をたもち、彼が惡意を見現せしうへにて、藤波どのの緣者をたづね、恨の刃にかゝりて相果てんと、妻子を具して、その夜館を立退きけるが、杉坂にて、ふと此婦人の首縊らんとせられしを見つけ、いづく如何なる人かは知らざれども、せめて此婦人をすくひ、藤波どのの冥福の便ともなしてんと、あながちに死をとゞめぬ。藤波どのの兄なる御身の妻女とは、い

給はざれば、いかなる御方とも知らず、たづね申すべき便もなければ、空しくこれまで打過ぎ候といへば、南無右衛門さては其時の婦人にて候か。思ひかけざる再會に、恙なき體を見て、喜に堪へずといふ。又平は此時やう〳〵心おちつきぬれば、もの言ふ事も常のごとく、南無右衛門にむかひ、詞をあらためて言ひけるは、某かねて妻に金子をたまはり、危き一命を救ひくだされし恩人を慕ひつるに、御身にてあらんとは夢にも思はざりき。某往日都北山に住みしころ、殊外困窮し、過去りし母親を養育の爲せんすべなく、先祖より傳來の、巨勢の金岡が畫きたる、陸奥武隈の松の繪を質入せしが、妹藤波その事を聞きて氣の毒に思ひ、受戻せとて、金二十兩合力しくれける故、その夜妻に命じて繪をうけもどしに遣しける途中にて、盗人に金子を奪取られ、妹の手前面目なしとて、杉坂にて縊死なんとせしを、御身詞を盡し理をのべて、二十兩の金をめぐみ賜り、一命を救ひくだされ、殊に後日に恩をきまじとて、姓名を告給はず、此方の名をも聞給はざるよし、その夜妻たゞちに彼繪をうけもどし、家に歸りて、具にものがたり候ゆゑ、世にはさばかり慈悲深き人もあるものかと、感歎し、今に至るまで、夫婦折ふし其事を語出して、感じ思ふ事たえ侍らず。御身さばかり慈悲深き人にてありながら、何とて妹藤波を殺し、百蟹の卷物を奪取るたぐひの、非道をおこなひ給ひしや。こゝに於て思へば、御身の

妹が祥月命日にめぐりあひしは、因果のめぐる車の輪、妹がみちびく所なるべし。猶豫せよとは卑怯なり。覿面の悪報妹の敵、のがれぬ所ぞ、はやく勝負を決せよと書終り、ふたゝび刀をとりなほして、只一打ときりつくれば、南無右衛門しか思すはむべなれども、某が物語る子細を一通聞きてよとて、なほ受けつ流しつあしらひけり。かゝる折しも又平が妻小枝、餅をもとめて立歸り、何事やらんと暫時門にたゝずみて、内の様子をうかゞひけるが、又平殿はやまり給ふなと、いそがはしく聲かけて、走り入り、夫の手にすがりて押止め、かねて御身にものがたり、いつぞはめぐりあひて大恩を報はんと、日來心に忘れざる恩人は、則ち此御方にておはすなりといふにぞ、又平大におどろき、扨はしかと然あるかとて、手をとゞめてぞ坐し居たる。南無右衛門いぶかしく、小枝が顔をつら〳〵見れば、いかさま見覺ある女なり。小枝は南無右衛門が前に恭しく手をつき、さても思ひかけず再び御目にかゝる嬉しさよ。妾ことは六年以前、思へばしかも今月今夜、京北山の杉坂にて、首縊りて死なんとせしを、金二十兩たまはり、危き一命を救ひくだされし其女にて、則ちこれなる又平が妻小枝と申すものにて候。その時の大恩、骨に鏤り心に銘じて、片時も忘れず、ひとへに命の父母と存じ、何卒再び御目にかゝり、露ばかりも洪恩を報じ侍らんと思へども、その時は只御顔を見覺えたるのみにて、姓名をあかし

して、逃去りたるは覺あらん。折しも風雨はげしくて、庭木の花も風前の、灯火ときえたる姉の敵、覺悟せよと呼はれば、さきほどより屛風のかげに、樣子をうかゞふ浮世又平、刀を拔いてをどり出で、ものをもいはず斬りつくれば、修行者手早く、あたりにありあふ机をとりて丁と受くれば、皿に溶きたる青黄赤白の繪の具、四方にさつと飛散りて、秋の花野に異ならず。又斬附くるを受止めて、いかにも某が實の姓名は佐々良三八郎、今の名は六字南無右衞門と申す。藤波といふ女を殺せし事おぼえあり。さりながら委細のゆゑを語るうち、しばらく待給はれといふを、又平耳にも聞入れず、頭をふりつゝ勢込みてぞ切りつけぬ。南無右衞門錫杖をとりて、受けつながしつ立廻り、子細をいはねば、せき給ふも理なり。しばし〳〵と止めけり。又平は吃なるうへに、心せけば、もの言ふことあたはず、唯口に指さして氣をいらつを、傍より阿龍見かねて、丹を溶きたる皿と筆をとりて與ふれば、又平これをとり、机の上にもの書くを、南無右衞門讀下せぜ、汝六年以前、長谷部雲六とやらんいふ者といひ合せ、佐々木の家寶百蟹の繪卷物を奪取り、しかのみならず、藤波を害して逃去りたる大罪人、いかでか免るゝ道あらん。某は則ち是れ藤波が兄、湯淺又平といふ者なり。汝を打つて妹が冥途の宿恨をはらしやらんと、日來心がけたれども、弗に行方知れざれば、むなしく月日を送りつるに、今月今日

熊野詣の幽靈の倒に歩むことなど、物語るを聞きつゝ、時をうつしけるが、やゝありて又平佛壇の御燈たて、麁抹の齋を調ずるあひだ、こゝにて御回向下されかしといひて奥に入りぬ。修行者は佛壇に向ひて鉦打鳴し、南無幽靈頓證佛果菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、一心不亂に唱へけるが、偶佛壇のうちを見れば、白木の位牌に刃譽妙劍信女長祿二年戊寅三月五日と記しあり。修行者これを見て思ひけるは、かの法名のうちに刃劍の二字あるを見れば、これも刃にかゝりて亡し女ならめ。それがし六年以前藤波を殺せしも、同年同月同日なり。廣き世界といひながらよく似たることもあるものかな。いかなれば長祿二年の今月今日は、女の刃にかゝる日ぞ。此女子もいかなる因果にて、劍難に死せしぞと、藤波が事思ひ合せて涙をおとしつゝ、しばらく回向して居たりけるに、又平が妹阿龍朽木塗盆に日野椀すゑて持出で、麁抹の齋をめし給へといひつゝ、修行者の顔をつら〳〵打まもり、そなたは佐々良三八郎にあらずやといひて、おぼえず手に持ちたる物を、地上にはたと取落す。修行者いぶかり、さいふそなたは何人ぞ、見忘れたりといへば、阿龍泣聲にて、見忘れしとはよくも言はるゝ事よ。妾はそなたに殺されたる、藤波が妹龍といふものなり。その時妾は十三歳、京都佐々木の旅館、お寝間に通ふ廊架にて、手燭の光に顔見合せ、たしかに見とゞけたる三八郎、刀の鉦打に手燭をはしと打落

者必滅と觀ずれば、矢早瀬の船も人の身の、會者定離とぞ思はるゝ。石山の月三井の鐘、生死長夜の夢の世を、悟れる人か外の方に、鉦の音念佛の聲、いとも殊勝にきこえけり。又平これを聞きつけて、庭に下立つ折しも、軒端に通ふ松の風柴の折戸をひらきければ、外の方を見遣るに、笈をせおひ錫杖をつきて、廻國の修行者とおぼしきが、まどほに圍ふ竹垣の葎のうちに佇みぬ。又平ちかづきていはく、今日しも同胞の亡靈をまつるべき志のあるに、修行者のおはせしこそ幸なれ。かゝる荒屋には侍れども、今宵は我家に一宿し、終夜囘向して給はれかし。味なくは思されんが、所がらの志賀大根蜩大豆、麁抹の齋を供養せん。おながちにとゞめ申すといひければ、修行者打聞きて、そは忝し。いまだ時も八つに過ぎずとおぼゆれば、石部の報謝宿までもと思ひつるが、朝の雲夕の霧一所不住の身のうへなれば、急ぐべき旅にあらず。殊に亡人の志とあればもだしがたし。しからば御報謝にあづからんといふにぞ、又平いざ〳〵とて迎入れ、苔井の水に足そゝがせ、八幡圓座を敷設けて、何くれともてなせば、修行者喜び、憂世をはなれし閑居の體、おくゆかしく候といへば、又平は圍爐裏に不灰木うち焚きつゝ、尾羽打からせし浪人の侘住居、お宿申すもはづかしさよといひて、信樂燒の天目に、茶の香ちうすき手煎じを、心ばかりのもてなしにて、四方山の話さま〴〵にかはりて、立山の地獄ばなし、

に、たま〳〵少しの福を得て、思ひあうたる殿に愛でられ、その身の出世と喜ぶ間もなく、不慮の枉死をなしたれば、心の殘るも理也。せめて敵をたづね出し、仇をむくいて修羅の宿恨をはらさすべければ、疾く〳〵佛果を得て惡趣を免れよとて、念珠すりならし、南無阿彌陀佛あみだ佛と、唱ふる聲も吃響れば、いとゞ哀ぞまさりける。巫又いひけるは、その仰こそ我身には、讀經にまさる功德なれ。此上のお情には、仇をむくいてたび給へ。情なきはこれまで手向けたまはりし飯菜も、みさき烏に妨げられ、妾が許にとゞかねば、飢にたへざる餓鬼の飯、炎となりて消失せぬ。ねがはくはみさき烏をよけてたべ、くれ〴〵賴み侍るぞかし。あな名殘惜し語りたきこと言ひたきこと、數なくありて盡きねども、黄泉の使しげければ、はや暇申すぞと、いひをはりて巫は目をひらき、痺を撫でて居たりけり。又平米錢をとりて與へ、その勞を謝しければ、巫はこれを受納め、わかれを告げて罷出でぬ。扨小枝は、今宵の佛に供ぜんと高木へ餅買に立出れば、阿龍は淚をおしぬぐひ、此間に香を盛りて、手向けばやと奥に入り、又平獨こゝにのこり、手をこまぬきてぞ居たりける。頃しも彌生のはじめにて、堅田におつる雁金も、こしぢに歸る時なるに、比良の高嶺の雪颪、餘寒をまして肌さむく、瀬田にかたぶく日のかげも、西方淨土と思ふから、辛崎の松風も、常樂我淨と聞ゆめり。粟津の嵐を世の中の、生

はりしぞ。主君とは申しながら、おそれおほくも心には、枕ぞひとも思ひしから、烏帽子寶を産侍りて、唐の鏡とかしづかれ、御身等にも安堵させ、たのしき暮をさせ申さんと、思ひし事も左縄、ゆひがひもなき妾が身のうへ、露ばかりも罪なくて、邪見の刃に身をほふられ、つきぬ恨の惡念が、此身を焦す炎となり、晴れぬ思の冥道に、今に迷うて居候と、いとも哀にいひければ、小枝泣聲にて、うかまぬも理ぞ、冥途の苦患さぞかしと、思ひはかればはかるほど、胸ふさがり、心も消る思ひぞかしといひて打歎けば、阿龍はうしろに打伏て、涙にむせぶばかり也。巫かさねていひけるは、地獄のうちの恐しさを聞きてたべ。妾がごとく刃にかゝりて死したる者は、刀山地獄とて、垂氷を倒に植ゑたるごとき劍の山を、牛頭馬頭の鬼どもが、くろがねの笞をあげて追ひたつるに、罪人はせんすべなく、泣叫びつゝ馳上り、馳下りて苦しむ也。妾も日々にその苦をうくるぞかし。あるは火の車に乘せられて、黑闇道を行く時もあり、あるは血の池にひたりて、火の雨に身を焦す時もあり。紅蓮大紅蓮の氷にとぢられ、叫喚大叫喚の炎にやかれ、品かはりたる地獄の樣、なかく詞にのべがたし。さる責の苦しきうちにも、唯忘れがたきは殿の御事、なつかしく思ひはべるは、御身等御夫婦妹ぞかしといひければ、又平は目をすりあかめ、聞けば聞くほど不便なり。まづしき我を見つぐとて、千辛萬苦のそのうち

扨ある年くるといへども、三八郎出奔の後、弗に行方知れざれば、むなしく月日をおくりぬ。扨ある年の春藤波が祥月命日にあたれる日、妻小枝妹阿龍等がすゝめにより、縣神子をやとひ、藤波が口をよせて、冥途のおとづれを聞きぬ。さて降巫上坐に居なほりて、目上の人にや目下にや、生口か死口かとたづぬれば、小枝すゝみいで、目下の者にて死口なりと答へつゝ、樒の葉にて水むけすれば、巫はさゝやかなる弓をとりいだし、弦を打鳴して、且神保をぞ唱へける。

夫つゝしみ敬ひて申し奉る。上は梵天帝釋四大天王、下は閻魔法王、五道冥官、天の神、地の神、家の内には井の神、竈の神、伊勢の國には、天照皇大神宮、外宮には四十末社、内宮には八十末社、雨の宮風の宮、月讀日讀の御神、當國の靈社には、坂本山王大權現、膽吹神社、多賀明神、竹生島辨財天、筑摩明神、田村の社、日本六十餘州、すべての神の政所、出雲の國の大社、神の數は九萬八千七社の御神、佛の數は一萬三千四箇の靈場、冥道をおどろかし此に降し奉る、おそれありや。此時に萬のことを殘なく、敎へてたべや梓の神、うからやからの諸精靈、弓と箭のつがひの親、一郎どのより三郎どの、人もかはれ水もかはれ、かはらぬものは五尺の弓、一打うてば寺々の、佛壇にひゞくめり。

梓の弓にひかれ〳〵て、藤波が亡靈こゝまでまうで來つるぞや。なつかしやよく水手向けて給

十四　仇家の恩人

爰に又湯淺又平といふは、戸佐正見といふ名畫人の弟子にて、その身も畫道に秀でたりといへども、ゆゑありて師の勘當をうけ、其後正見も小栗と筆のあらそひによりて、勅勘の身となりぬ。又平は漸々に零落しければ、妹藤波白拍子となりて、兄をみつぎけるが、これも不慮に殺害され、ますく困窮しければ、せんすべなく夫婦もろとも、もとの住家を去りて、近江の國にうつり、大津走井のほとりに住み、繪をかきて往來の旅人にこれを鬻ぐ。妹が菩提の爲にもと思ふ心より、多分佛像を畫きぬ。十三佛地藏菩薩のたぐひなり。其比は民百姓の家に木佛は稀にて、おほくは此又平が佛繪をもとめて、持佛の本尊にしけるとかや。佛繪のみにあらず、浮世の人物さまぐの戯繪をも畫きけるゆゑ、浮世又平大津又平ともいへり。かれ又生れつきて吃簪にてありければ、吃簪の又平ともいへり。その繪を大津繪とも追分繪ともいひて、時の人童などの愛づる事おほかりしとぞ。又平が妻の名を小枝といひ、藤波が次の妹阿龍も、今は兄又平に養はれ此處にありて、ひとつに住みぬ。藤波は前年佐々良三八郎が爲に罪なくして殺されたれば、又平何とぞ三八郎を一太刀恨みて、妹が修羅の宿恨をはらし遣さんと、日來心か

れば、黐に黏きたる蠅のごとく、倒れしまゝに起も得ず、手をすり足をすりて口々に、ゆるし給へと打わびつゝ、辛うじて起上りけるが、疵持足の膏薬に、引戻さるゝ心地して、こけつまろびつ逃行きけり。猿二郎は太刀をすてて打笑ひ、さても臆病なる奴原かな。因果娘の蛇どもが、思ひもかけず用立ちしは、禍の三年めともいひつべしと、ひとりごちて、蛇どもをもとの笊籬に打入れ、一間のうちより桂之助をともなひ出で、彼等を殺し候ては、かへりて後日のさまたげに候へば、わざと刃引太刀を用ひて威し候。つら〳〵思ひ侍るに、不破道犬君を失ひ奉らんとはかりて、官領の命といつはり、君の御心におぼえなき事を申したてて、捕手をむけたるに疑なし。大切の御身なれば、かならずしも輕々しく出歩き給ふべからず。かれら一度見覺えたる此家に忍ばせ申すは危ければ、今宵のうち別所に御座をうつし奉らん。いざさせ給へと催して、つひに兩人いでゆきけり。

○徒然草に、めなもみといふ草、蛇にさゝれたるによき由を記すといへども、いまだ試みず。蛇に嚙まれたるには、串柿の肉を粘飯の如く練りてつくるに如くものなし。度々試みつるに、一度もしるしなき事なし。よくきざみ煎じて飲みもすべし、蛇毒を解す也。本文蛇の話につきて、偶思出せるまゝ、筆の序に記し置きつ。

て高名にせよ者共と呼はりけるが、やがて障子のすきまより、鮮血こゞりて流れ出でぬ。捕手の者われさきに首とりて賞銀にあづからんと、遲速をあらそひ、障子を打倒して内を見れば、こはいかに桂之助にはあらずして、正面の胡床のうへに、人の長ほどにつくり、五臟六腑を彩りたる神農の胴人形、右に茶匙を持ち、左に藥草をとりたるを据置きぬ。障子のひまより血わたと見えしは、赤膏藥にぞありける。彼者共これを見て、只あきれて酒に醉ひたる心地しけるが、さては欺かれたるか口惜しさよ。さるにても今の聲は桂之助にまぎれなし。彼處にかくれたるに疑なしとて、奥の一間を目がけて走り入らんと犇き、誤りて傍にありける笊籬を蹈倒しけるが、たちまち數多の蛇のたり出でて、かれらが手脚に纏附きけるにぞ、打驚きてさわぎたち、又誤りて膏藥鍋をふみかへしければ、膏藥足の裏に粘附きてはなれず。蛇の手枷、膏藥の足枷これを除かんとすれば、かれにまつはれ、ほと〳〵進退を失ひて、只騷動するのみなりけり。時分よしと猿二郎たすき引結ひ、裳裾かゝげて身輕に打扮ち、明晃々たる大太刀を拔持ちて、一間のうちより躍出で、めつた斬に斬りたつれば、皆々大に狼狽し、一人として敵する者はなかりけり。かの大太刀はもと居合の刃引太刀なれば、斬りつけられたる痕、蚯蚓のごとく腫れあがるのみにて、一命に恙はなしと雖も、しば〳〵魂を奪はれて、心ます〳〵臆したる者共な


外料
口中
請合入歯
赤がうやく
佐々木桂之助


辻談義坊の
五郎実ハ
名古屋山三が
家来猿二郎
佐々木桂之助の
危難を
すくふ
菩薩建立

體の圖などを書き、此等をも掲出したるは、外療の藥をひさぐ家なりけり。猿二郎指さして、彼處はやつがれが旅宿にて候。幸あるじは京上して家にをらず、只聾の老僕あるのみ。誰はゞかる者も候はずとて、桂之助をいざなひて彼家にいたり、裏に入りて明障子をもとの如く引きたて、聲をなさずして居たりけり。此時已に日は暮れ果てて、夕月夜の光あきらかなりけるが、果して捕手の者ども人數を增し來りて、此家をとりかこみ聲たかやかに呼はりいひけるは、さきほど此家にかくれたる虛無僧は、佐々木桂之助國知にうたがひなし。いかに國知、汝官領職濱名殿の內意により、勘當うけたる事を遺恨に思ひ、ひそかに野伏浪人どもを語ひ、濱名殿に敵せんと計るよし、注進の者ありて聞召され、搦捕りて來るべしと嚴命をかうぶりて、我輩馳向ひつるなり。のがれぬ所ぞ、疾くこゝに出來りて縛をうけよ。さきほど手向せし奴めも、汝に一味の者ならん。かの奴めも疾く〳〵こゝへ出せ。首ひきぬきて思ひしらせんずるぞと、口には猛くのゝしれども、猿二郎がさきほどの手並におそれて、內にすゝみ入らんずる者は獨もなく、只噪しきのみなりけり。時に明障子に人影うつり、桂之助の聲として、いかに汝等しづまりて我いふ事を聞け。我恥をしのびて今日まで生存へ、一所不住にさまよひつるが、とても武運に盡きたる身なれば、此所におきて潔く、腹かきやぶりて相果つるぞかし。いざ首をとり

につきて、やつがれが住家におち來り、一つには君の御行方をたづねて安否を問ひ奉り、二つには伴左衞門をたづね出して父の仇をむくはんと、我々に命じて所々方々をたづねしめ、此比は山三郎鹿藏を具して西國に旅立侍りぬ。やつがれは露の五郎兵衞と名を更へ、辻談義にことよせて、京大坂は申すにおよばず、所々人立おほき處にいたりて、專尋ね侍りぬ。しかるに唯今君にめぐり遇ひ奉るは、我々主從が一念とゞきし所なり。世にある御時ならば某等がごとき賤しき身は、御姿を拜み奉ることだも能ふまじきに、面前拜謁つかまつる勿體なさよといひて、實心面にあらはれければ、虛無僧打領き、さる誠心を聞くうへは何をかつゝむべき。汝が推量にたがはず我は桂之助也。汝が面は見知らずといへども、山三郎が僕に、鹿藏猿二郎とて兩人ありとは、かねてより聞及びぬと宣ひければ、猿二郎こは冥加なる御詞、ありがたきまでに覺え侍り。不破道犬が惡意、奥方若君の御身の上につきては、さま〲申上ぐべき事あれども途中にては聞えがたし。かの捕手の奴原人數を增して再びこゝに來らんは必定なれば、疾く〱御身をかくし給ふべし。もし彼奴原來り候はば、しか〱はからひ候べしとて耳につけて囁きぬ。さて遙むかひの方に家あり、あかり障子に一子相傳名方赤膏藥と、筆太に書きつけたるを門口にたて、外の方にあまたの藥名を記したる招牌をかけならべ、もろ〱の奇病のさま解

俄に寂莫たる折しも、一人の虚無僧尺八の笛をとり、瀧おとしを吹きすまして此處にあゆみ來る。その後につきて腹巻に擘手臑楯つけたる捕手の人數、拔足しつゝ忍寄り、時分よしとや思ひけん、前後左右をとりかこみ、一言の詞もなく、手に〳〵十手を打ふりて、搦捕らんとかゝりけるが、虚無僧尺八を以てあしらひ、しばし打合ひける所に、思ひかけざる背後の方の假屋の内より、耳許にいさゝか鬢の髪のこし、頭なごりなく剃りすてていとをかしげなる男、一根の棒をとりて跳出で、捕手の人數をめつた打に打倒しけるにぞ、彼輩敵する事あたはず、散散になりて逃去りぬ。時に彼男棒をからりと投捨てて平伏し、土に額をすりつけて恭しくいひけるは、某察し奉るに、君は佐々木の若殿桂之助國知公にうたがひなし。實をおんあかし給はれかしと相述る。虚無僧頭を打振り、こは思ひかけざる事を聞くものかな。某は一所不住の修行者にて、もとより卑賤の者なり。必ずしも人違し給ふなといふ。かの者かさねていはく、世をしのぶ御身なれば、容易に實をあかし給はぬも理なり。先やつがれが身のうへを前に告聞え奉らん。そもやつがれは御家士名古屋山三郎が僕鹿藏と申す者の弟猿二郎と申す者にて候。もとは兄とともに山三郎に仕侍りしが、やつがれはゆゑありて仕を辭し、古郷河内の國にかへりて暮せしうち、名古屋三郎左衛門は不破伴左衛門が爲に闇打にあひ、山三郎は平群の館の騷動

しのトなり。さて妾が薄命を聞きてたべ。養家の父母此春わづか一月の間に、つゞきて身まかり給ひ、妾ひとりあとにのこりしが、養父の弟にて妾がためには伯父なる人、養父の遺財を奪取らんたくみにて、情なくも妾をおひ出しぬれば、せんすべなく、此上は兄上にあひて、身の上をたのみ申すより外なしと思ひ、かく巡禮に姿を扮して物乞ひつゝ、辛うじて大和の國にいたりけるが、御身在京の節、かしこにて、俄に浪々の身となり給ひ、行方知れずと聞きつるゆゑ、ほとんど力おち、縊れてや死なん、淵川に身を沈めやすべきと、兎ざま角ざまに思ひめぐらしけるが、せめて諸國の靈場をめぐりて、養父母の菩提の爲、我身來世をたすかる縁にもせばやと思ひつき、社家に育ちて佛につかふるは心違へるやうにはあれど、神佛もと同體とも聞けば、くるしからじと心を決し、遠近を巡拜して、今日しも此御寺に詣でしが、思ひかけず兄上に遇ひ奉りしは、全く菩薩のみちびき給ふに疑なし。御身は又何ゆゑ俄に浪人し給ひ、かばかり零落はし給ひつるぞと、問ひかへせば、雲六答へて、我身の上の物語は一席に盡されず。殊更こゝは路の傍といひ人立多き所なれば、くはしき事を語りがたし。且我住家へ伴ふべしとていそがはしく鼓しきものなど取收め、女をつれて家にかへりぬ。雲六が心底善か惡か計り知るべからず。かくて日も西山に傾きければ、參詣の諸人足を早めておのがさま〴〵歸路をいそぎ、

月にはつらき小倉山その名はかくれざりけり

と、くせ舞々のうたひをうたひ物を乞ふさまなり。往來あまたの人のうちより、年のころほひ十六七とおぼしく、容貌すぐれて美しき娘、田舍染とは見ゆれど、紅の濃染の梅の小枝に、春霞立田の山の鶯といふ文字を、縹に染出したる、木綿の振袖著て、もすそかゝげ、襌衣かけ、手覆脛巾草鞋を穿き、菅の小笠をたづさへて、巡禮の道者と見えたる女、かの浪人の傍にちかづき、扨もしほらしき鼓の音ぞといひつゝしばし佇みぬ。かの浪人編笠越に、此女をつら〲見て、扨もいぶかしさよ。おことは稚き時、出雲の國大社の社家に、養子につかはしたる、八重垣にはあらずやといふ。かの女これを聞き、打驚きたるさまにて、しばし答もせず、只打まもりて居る。浪人再びいひけるは、かく零落して昔日にかはる姿なれば、いぶかるも理なりとて、聲をひそめ、某はおことが兄長谷部雲六なるはといふにぞ、女は益おどろきたる體なりけり。かくて雲六女を物蔭にいざなひ、笠ぬぎていひけるは、世を忍ぶ身なれば、人目おほき所にては面をあらはしがたし。おことは何故かゝる姿となり、具せる人もなく若き女の身にて、唯ひとり、此邊には來りしぞと、問はれて女、さては兄上にておはしけるものをとて、涙さしぐみ、さきほど彼所の算おきに卜うて貰ひしに、今日たづぬる人に遇はめぞといひしは、まことに見通

をおし立て赤き針のやうなる舌を吐出し、目をぼち〳〵として蠢くさま、見るにさへ身の毛そばだつばかりなり。見物の諸人何の遠慮もなく、かれが顔をちか〴〵とうちまもり、世に稀なる娘なるに、かく妖蛇に見こまれしは惜むべき事にあらずや。かゝるあさましき身とだになりにたるを、晴がましう人集めて見することよ。かの女いかに侘しとや思ふらん。あな不便のことやといへば、傍の人のいへるは、否々彼が親めは、さだめて非義非道を行ひつる悪人ならめ。そのゆゑに親の因果の子にむくいて、斯うあさましき身とはなりつらめ。さる悪しき者の、うみつけつる子なれば、かれも又姿こそ美しけれ、志はさぞゆがみつらめ、世の人のよき戒ぞ。かう人々に面さらさしむるは、却りて彼等が罪科の消失する便なり。憐むべきにあらず、人々よく見てやりねなど、口々にいふを聞きつゝ、人々に顔まもらるゝ楓が苦しさ、如何許ならんはかり思ふべし。抑石山寺は石光山と號し、天平勝寶六年の草創なり。聖武天皇の朝、僧正良辨、如意輪觀自在丈六の尊像を安置す、一千有餘年を經たる靈場なり。後は連峯峩々として、岩間、笠取、醍醐につらなり、前は勢田川のながれ淼々として、湖水につゞく。げに此地の月を賞じて、近江八景の一勝とせるもうべなり。扨此御寺の門前に、ひとりの浪人、深編笠に面をかくし、小鼓を打ちつゝ、


近江國石山寺觀音開帳あるより參詣群集を
卜筮
吉凶
禍福
辻談義


因果娘

小女の身うちに蛇の纏附きたるさまを繪にかきたる、招牌を掲げ出したるあり。肩脱ぎたる男戸口に立ち、扇をひらきて往來の人をさし招きつゝ、聲たかやかに呼ひいへるは、これ此招牌を見給へ。そも此女子こそ、丹波の國なる奥山に住む獵師の子なれ。殺生の罪科親の因果の子にむくい侍りて、かく蛇に見こまれ身内にまつはりて離去らず、容は世にすぐれて美しう生れつきながら、人がましき交ならぬ身とはなりにけり。十が一つ罪障消滅の便ともなれかしとて、あまねく人々に見せ奉るなり。都におきては四條の川原、浪華津にては道頓堀、伊勢の國にゐて行きては、白子なる觀音堂のほとりにて見せ奉りぬ。物の報のおそろしさは斯くぞあなる。前代未聞又類あらじ。家裏によき話柄ぞ、招牌に露許もいつはりあらば錢とり候まじ。見給ひて後おこし給へと、聲かるゝ許のゝしれば、見物の諸人蟻のごとくに集ひ蜂のごとくに群りて、假屋のうちに入り、こち押しあち押し、犇きあひてこれを見る。此女子はすなはちこれ、六字南無右衛門の娘楓なり。憐むべし楓は、心にもあらで、眉をゐがき脣をそめ、頭に花簪をさしかざし、色元結をむすび、髪の結様も今樣にとりあげて、阿曾比めきたる容につくり、床几めきたる物のうへに、紅の毛氈しきて尻かけたる姿、嬋娟たる牡丹花の咲出でたる如くにて、あたりも輝くばかり美しけれど、腹、手首、咽くびなどに、蛇どもいくつとなく纏附き、鎌首

弓の射場まうけて、いとなみとする者あり。或は長劍を撫して藥を賣り、今樣をうたひて錢を乞ひ、聞きもつたへぬ片輪者、見もおよばぬ鳥獸など、奇とあやしきものを見する所、幻戲、籠脱、刀玉、緣竿のたぐひ、奇妙の術を施す所など、所せきまで立並び、笛吹く音、鼓打つ聲、四方に響きてかまびすく、諸人の耳目をおどろかしむ。此大路のうちに、薦簾かけ假家をつくりて、紙もてはれる招牌に、辻談義露の五郎兵衞尉と墨黑に書きつけて、戸口にかけたるあり。彼がいふこと聞くとて人あまた集ひ居たり。講師たかき床の上にのぼり、書案のうへに柝木の偏を置き、先しはぶきを前にたてて、聽聞衆にむかひ、夫つら〳〵阿彌陀經を考ふるに、如來は五劫の間思惟し給ひ、上は一人より下は婆々嬶々にいたるまで、殘なく救ひとらめとの御誓願は、おの〳〵や我等まで、ありがたく尊き事にあらずや。かるがゆゑに彌陀如來は、寢給ふことはさておきて、あぐみ居給ふことだになく、十萬里彼方の西方より、此方の方に伸上り給ひて、衆生の地獄をつくるを見給ひては、あなや〳〵と悲み思さるゝよし。それよりは持國多聞などいへる一騎當千の四天王に命ぜられ、衆生胸裏の地獄をつぶす御分別はなきかと、聲をかしううちあげて言ひつゝ、彼柝木をとりて書案を撲地打鳴しければ、芝居一度に鳴動し、且笑ひ且感ずる聲しばらくは止まざりけり。其隣も同じすぢなる小屋つくりて、外の方に美しき

見えたる處に、はるか向の茂林のうちより、噇的一聲ひゞきわたりて、たちまち鐵丸飛來り、眼平が胸板を打貫きければ、血を吐きながら倒にひるがへり、ふすぼりかへりて死してげり。奴僕等は魂天外に飛去りつゝ、頭をおさへて逃去りぬ。しばしありて林の中より、忍頭巾に面を包み、黑き裝束したる者、手に火術の具を携へて、悠々と步出で、驚き臥したる銀杏前を引起し、小脇に挾みて、何處ともなく走行きけり。是善人か惡人か、はた敵か味方か、何人といふ事を知らず。此者の姓名を知らんと要せは、卷之五の下册、第十九囘を、讀得て知るべし。

十三　靈場の熱閙

その比近江の國、石山寺の觀音菩薩、結緣のため開帳ありけるが、名におへる靈場なれば、これに詣で來る人、士女老少群集し、綿々絡繹として往來しばらくも絕えず。誠に是行川の流のとゞまらざるに似たり。商人どもかゝる賑に乘じて、過分の福を得んと、俄に假屋をつくり、草津鞭、守山鍬、高宮布、長濱糸、大津針、高島硯、武佐墨、水口笠、辻村の鍋のたぐひ、玄恵法印が庭の訓にもらせる物まで、おのがさま〴〵持運びて、山の如く積上ぐれば、買人は雲のごとくに集りぬ。或は酒賣家あり、餠菓賣軒あり、憩所をつくりて、茶をひさぐ者あり、小

昇入れさせ、夢現にて打伏したる、銀杏前を、情なくも荒繩にて高手小手にくゝしあげて、乘物に押入れ、しもべに昇せつき添ひて庭傳に出で、岩倉谷にいそぎ行きぬ。銀杏前は此頃のつかれにて、乘物のうちに熟睡し、身のあやふさも露知らず、屠所の歩のほどもなく、岩倉谷に行きつき眼平下知して、とある處に乘物をすゑさせ、戸をあけて銀杏前を引出す。銀杏前は此時にいたりて、やう〳〵すこし睡さめ、目をひらきて、先我身をかへりみれば、いましめの繩目あり。四方を仰ぎて見渡せば、月の光はあきらかなれども、いづく如何なる所を知らず、松吹く風は梢をならし、谷の水音耳にひゞきて、ものすさまじく聞ゆれば、こはまだ夢のうちなるかと、更に疑はれざりけり。眼平むかひ合ひていひけるは、いかに銀杏前どの、此所は名におへる岩倉谷といふ所也。大殿の嚴命によりて、唯今御首を打つなり、念佛申したく思さば、疾く疾く申されよと、情なげにぞ申しける。銀杏前これを聞き、さては我身も今かぎりなるか。捕へられたる其時より、覺悟のうへの命なれば、驚くべきにあらざれども、今般のきはに唯一目、月若を見ざるのみ、此世の心のこりぞかしとて、潸々とぞ歎かるゝ。たとへ鐵もて鑄なしたる人、土もてつくりたる的なりとも、少は哀をもよほすべきに、物のあはれを辨へざる、夷心の眼平なれば、なげきを耳にも聞入れず、氷なす刀を拔き、左の方よりふみこみて、已に斬よと

しも、取次の者はせまゐり、黒星眼平只今歸國つかまつり御次にひかへ、御召を待ち候と聞ゆれば、道犬打聞き、それ急ぎこれへ呼べといふにぞ、かしこみ候とて退きぬ。ほどなく眼平まかり出で、椽側に頭を下げていひけるは、月若殿の行方をたづね、御首打ちてまゐれとの仰により、所々方々をたづねもとめ候うち、注進の者ありて、丹波の國穴太の里に住む、六字南無右衞門と申す者、かくまひ置くよし聞出し候ゆゑ、いそぎ行きむかひ候所に、彼者いかゞしてか打手のむかふ事を知り、若君をつれて脫去り、ゆくへ知れずなり候。南無右衞門と申すは別人ならず、佐々良三八郎がことに候と、假首をうけとりし、おのが越度はおしかくし、まことしやかに相のぶる。蜘手方これを聞き、そは殘念なり。しかる上は、銀杏前を責むるも無益なり。彼は疾に殺すべき筈なれども、畢竟月若の在所をいはさんばかりに、今日までも生置きぬ。もし大殿の心かはりて、助命などあらば、後日のさまたげなり。疾く〳〵かれを殺すべし。月若三八郎が行方は、なほ嚴しくたづぬべし。道犬そちはいかゞ思ふやらんと宣へば、道犬うなづき、某も左こそ存候へ。さるからは片時も猶豫はよろしからず。幸日も暮れなんとすれば、今宵のうちに御首打ち候べし。いかに眼平、汝銀杏前どのを乘物に乘せ、夜にまぎれて岩倉谷に舁行き、密に御首打ちて來るべしと命じければ、眼平腹心の奴僕を呼びつぎ、庭先に乘物を

くやすみなき責にあひ、夜とも晝とも思ほえず、夢か現か寝てか醒めてか、わかたざる心地すれば、如何許いとほしと思ふ我子にても、在所さへ知るならば、現のうちに言はでやは、いかでかつゝみ隠さるべき。推量してよ道犬と、宣ひつゝも又ねぶれば、又太鼓を打ちて目をさまさす。ねぶれば打ち打てば醒め、水責火責にあふよりも、はるかにまさる責苦なり。傍より蜘手方、小膝をすゝめて近く寄り、未だわづかに三日三夜の責なれば、まこと現にはならぬと思し。ながき責をうけんより、つひ一言白狀せよ。此上にもいはずば、骨をひしぎ肉を裂きても、いはさでやはあるべき。いで言へいで答へよとて、角なき夜叉の樣なして、くらひつくべき形勢なり。銀杏前顔をあげ、いかほどに宣ふとも、知らぬ事はせんすべなし。只此上は片時もはやく、殺し給ふが情ぞとて、さめ〴〵と泣給ふ。紺青の髪すぢも、こぼるゝ儘にとりあげず、顔さし入るゝ襟もとに、つたふ涙の白玉は、夷の國の胸裝を、目前見る心地して、哀などいふもおろか也。蜘手方聲あらゝげ、あなしぶとき女めかな、とても本性にては白狀せまじ。いつまでも手をゆるめず、責つからして現のうちにいはすべし。道犬太鼓打て〳〵と下知するにぞ、道犬かしこみ候とて、耳のはたに差附けて、鼕々と打鳴せば、銀杏前の身にとりては、修羅の太皷にことならず。一百三十六地獄、品かはりたる呵責にも、たぐひ稀なる責苦なり。かゝる折

十二　修羅の太鼓

さても銀杏前は、山三郎に扶けられて、生駒山の麓までおちのびしが、辻堂にて追手の者に捕へられ、不破道犬が手にわたりて、蜘手方の深殿、奥まりたる一間のうちに押籠められて、日の影だに見ることあたはず。月若の身のうへ苦になる上に、朝夕の食事だに、ろく〳〵に與へざれば、心氣日々におとろへ、身體夜々にやせほそりて、命も危く見え給ふ。しかのみならず、道犬蜘手方と密談して、大殿判官の命といつはり、銀杏前を引出して、兩人かはる〴〵、晝夜絕間なく寤現責にして、月若のゆくへ白狀せよと責めにけり。無慙やな銀杏前は、三日三夜の寤現責につかれ果て、覺えずねぶれば、道犬耳のはたに太皷をならして、睡をさまさせ、暫時のうちも睡らさず、夢幻の世の中に、夢も見せぬぞ哀なる。道犬眼をいからし、いかに銀杏前どの、月若どのの行方、知らぬ事はよもあらじ。疾く〳〵白狀しめされよ。大殿の嚴命なれば、とても免れぬ處ぞと責め問へば、銀杏前瞼おもげに目をひらきて、苦しげに息をつき、斯

奥に入り、月若の手をたづさへて立出づれば、若君は目を泣腫し、夫婦の忠節過分なり。便なき文彌が身の果やと、なげき宣ふ一言が、世にある時の千石より、夫婦が身にはありがたく、南無右衛門巻物を懐中し、軀を入れたる葛籠を背負ひ、若君の御手をとれば、妻の礒菜は琵琶をいだき、地水火風の四つの緒の、斷れし我子のかたみぞと、轉手撥面半月の、月の光をたよりにて、播磨の方へぞおちゆきける。

○斯くて、南無右衛門夫婦、若君を扶けて、播磨より河内にいたり、所縁の寺にたよりて、文彌が軀を烟となし、かたみの琵琶を施物として、佛事をいとなみ、若君に礒菜をつけて、かの寺に忍ばせおき、その身は彼巻物をたづさへ、桂之助銀杏前の、行方をたづねに、出でけるとぞ。

門が目にのみ見えしが、眼平忽眼くらみ、いかにも月若殿の御首に相違なし。よく打ちつるぞと賞美して、首桶をとりをさめ、從者をちかづけ、遠巻の人數を、疾く〳〵ひかすべしと下知をなし、ふたゝび南無右衞門にむかひ、若君の首打ちたる上は、汝においてかまひなし。舊惡の罪あれども、此度の功により、大殿の御前、よきに執成しつかはすべしといひ捨て、人數を引連れ立歸る。南無右衞門ため息を吻とつきて、遠巻の人數を引けば、もはや氣づかふ事なし。若君をおとし參らす、支度せばやと思ひつゝ、立上る折しも、妻礒菜息もつきあへず馳歸り、樣子はいかにと尋ぬれば、文彌が一念頭にとゞまり、陰氣を吐きて、眼平が眼をくらませ、十分に欺きしと聞きて、礒菜は心おちつき、かの巻物をとり出してわたせば、南無右衞門ひらき見て、お家の重寶に、まぎれなしとて巻收め、これさへあれば某か、汚れたる名をそゝぎ、末代までも淸かるべし。これといふも楓が孝心ふかきゆゑぞ。娘はもはや旅立ちしか。あな不便や、さぞ悲しからん。今思へば、かれを楓となづけしも、かへでは蝦手の略訓にて、小蛇の祟る前表ならん。文彌が初名を栗太郎と名附けしも、丹波の國の爺打栗、爺に打るゝ因縁か。只此上は文彌めが、菩提を弔ふが肝要なり。眼平一度假首をとり行きしが、今にそれとあらはれて、ふたゝびこゝに寄來らんは必定なり。片時もはやく若君を、おとし申すにしかじといひて

ば、かれが忠死も水の泡と、おもひきり〳〵、蹌く足をふみしめつゝ、若我成佛十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無阿彌陀佛と、聲もろともに、はつしと斬れば、無慙やな、首は前にまろびおち、軀は後にたふれたり。礒菜楓は太刀音と、共にさけびて打伏しぬ。折しも遠寺の鐘の聲、はや三更の時なれば、猶豫ならずと立寄りて、かの金をとりをさめ、手早く軀を葛籠にかくし、泣伏す妻を引起し、泣いて居る處にあらず、此金持ちて裏道より、かの卷物を買取り來れ。娘は今宵生別、しばしも名殘ををしむべしとて、鮮血したゝる首たづさへ、兩人を引きたてつゝ、へだての紙門をたてきりて、その後音もなかりけり。約束の時刻ぞと、黑星眼平手の者をゐて來り、やよ〳〵南無右衞門、若君の首打ちしか、いかに〳〵と呼はれば、一間のうちより南無右衞門、首桶をたづさへて、打しをれつゝ歩出で、嚴命もだしがたく、いたはしながら御首打候ひぬ。いざ御點檢とさしいだせば、眼平いはく、某月若殿をよく見知りたる事は、かねて知りたる汝なれば、よも假首はわたすまじ。もし又すこしも僞らば、忽汝が身の上なりと、にらみつゝ、首桶を引寄せて、已に蓋をとらんとす。南無右衞門は若假首と見あらはさば、斬死すべき覺悟にて、袖の下に刀を拔きかけ、固唾をのみて控へしは、げに危くぞ見えたりける。眼平蓋をとりのけて、これはと驚く體なりしが、文彌が首の口中より、陰氣を吐くと、南無右衞

と、今般のきはまで孝心の、ふかき詞を聽くになほ、南無右衛門胸ふさがり、主君の御先途見とゞけて後は、藤波が緣者をたづね、恨みの刃にかゝりて死すべき、かねての覺悟なれば、思へば蜉蝣の一期にて、翌をも知らぬこの身なるに、夫とは少も知らずして、長生せよとは、いとほしのいひごとよと、心には思ひながら、口にはえ言はず、過去の修因今生の現果、つたなかりける我かなとのみ言ひて、とかく涙にむせびけり。礒菜楓兩人は、文彌が左右にとりつきて、これが三世のわかれかと、聲もをしまず泣きければ、文彌はふたりが身うちを探り、せめての事にたゞ一目、御顏を見て死たきことぞ。盲目となりしは何の因果と、又今更に搔口說きて、血を吐くばかり泣きけるが、折しも空に時鳥、一聲なきて過ぐるにぞ、死出のたをさの道しるべ、ながく苦痛をせんよりは、少もはやく父上の、御手にかゝるにしくなしと、西にむかひて合掌し、しばらく念佛を唱へつゝ、いざ〳〵と催促し、首さしのべて待ちければ、南無右衛門子にはげまされて身を起し、刀を拔きそばめ、やがて後に立ちまはりけるが、前に斬りしは怒の刀、今の刀は恩愛の、切なる思ひの劍なれば、手も抖き脚も軟ぎて、いづくに劍を打つべしとも覺えず。今聞きつる琵琶の唱歌、熊谷の次郎は敵でさへ、敦盛を打かねつるものを、現在我子を斬るおもひ、いかでか堪忍ぶべきと、前後不覺の體なりしが、時刻うつりて仕損じな


かゝる其音
いとあはれなり
ぶんや


文弥年とおひ実ハ
月若の身代かゝん
覚悟と本心とゞう
して先出のおにとやげ
なりとて平家と

方の軍兵雲霞の如くみち〳〵て、よも脱しまゐらせ候はじ。哀おなじうは直實が手にかけ奉りて、後の御孝養をも仕り候はんと申しければ、只何樣にも疾々首をとれとぞ宣ひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしともおぼえず。目もくれ心も消果てて、前後不覺におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、泣く〳〵首をぞ搔いてける。

とうたふ聲さへ、次第によわり、ほと〳〵絕えん琵琶の緒に、かゝる血しほの疵口より、さと流るれば、あな苦しや、最早うたふ事かなひがたし。これまでぞとて、琵琶をおき、此世からさへ一條の、杖をたよりの暗穴道、死出の旅路は殊更に、黑闇地獄に迷行き、無目の餓鬼と生れ出で、呵責をうけんは必定なり。それを不便とおぼすなら、末期の水をさかしまに、逆緣ながらお手づから、香花を手向けたまはれかし。我身のための功德には、他人の千僧供養より、はるかにまさり候べし。さらぬだに、親子は一世のちぎりと聞くに、盲目のかなしさは、父上母上、千萬年のお齡すぎて、冥途へおはす事ありとも、お顏を見る事かなはじと、思へばこれが三世のわかれ、又あふ事はあらじと思へば、いとゞ悲しく名殘惜し。父上はどこに御坐すぞと、いひつゝ這寄りて、南無右衞門にとりすがり、身上を探りつ、撫まはしつ、御苦勞をなさるゝ故か、いかう窶が見えはべる。必ずわづらひ給ふなよ。とかく御身恙なく、壽長くおはしませ

て、平家をぞ語りける。

さるほどに、一の谷の軍やぶれしかば、武藏の國の住人熊谷の次郎直實、平家の公達たすけ船に乘らんとて、汀のかたへおち行き給ふらん、あつぱれよき大將軍に組まばやと思ひ、ほそ道にかゝつて、汀のかたへ歩まする所に、こゝに練貫に鶴縫うたる直垂に萠黃薰の鎧著て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、黃金作の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢おひ、重籐の弓もち、連錢驄なる馬に、金覆輪の鞍おいて乘つたりける者一騎、沖なる船を目にかけ海へさつと打入れ、五六段ばかりぞ泳がせける。

とうたふ唱歌も聲くもり、彈く手もふるへてたしかならねど、さすが日來の手練といひ、此世のなごりと思ふから、苦しき息をはげませつゝ、三重の甲をあげ、初重の乙に收めて、うたひ濟したりければ、大絃は嘈々として急雨のごとく、小絃は切々として私語のごとく、昭君馬上にしらべ、樂天客舟に聞きつるにも、はるかに優りて哀なり。南無右衞門耳をそばだてて聞居たるが、恩愛切なる歎のうへに、かゝる悲しき調を聞けば、皮肉もはなるゝ心地して、怺へかねてぞ泣伏しける。礒菜楓も諸共に、涙にむせぶばかりなり。文彌はなほも聲ふり立て、熊谷涙をはらく〵と流いて、あれ御覽候へ。いかにもして助參らせんとは存候へども、味

の因果が子に報い、忠義の用にたゝざる事よと、殘念に思ひしが、おことをはじめ兄弟の子供等、頼まれなる心底かな。持つべきものは子なるぞやといひて、涙と血と相和して、瀧のごとくに流しけり。文彌は母の介抱にて、やう〳〵と起きなほり、おとなしやかに手をつきていひけるは、渇しても盜泉の水は飮まずとやらん聞くものを、母上の仰とはいひながら、盜まぬ金を盜みしと、親をいつはる詞の罪、御許しくだされかし。果報つたなくて、生れもつかぬ盲目となりぬれば、せめて藝道をはげみ、父母老後の心を安め、片輪な奴に御不便をくはへ給ひ、御養育くだされし、大恩をむくはんものと、それ樂に四年このかた、精神をこらせしが、此度若君に一命をたてまつり、姉上も身を賣給へば、此末はさぞ心細く思されん。生わかれ死わかれと兄弟二道にわかれども、死は一旦にして爲し安く、生きて諸人に面をさらし、父の汚名をすすがんと思召す、姉上の心底は、又なしがたき孝行也。此年來學び得し、琵琶の一手を父上に、聞せ申さで死するのは、心殘に候へば、かく手を負ひて覺束なくは侍れども、一曲つかうまつり候べし。冥途の旅の置土產、ながき遺念と思されて、おん聞きくだされかし。母人樣その琵琶こゝへといふにぞ、礒菜泣く〳〵琵琶とりいだして與ふれば、わづかに年は十一歲の盲兒が、縹木綿の肩上に、血潮したゝる疵口の、痛さをこらへて琵琶かきならし、いと苦しげに聲立て

手の人數かため居るよし聞きはべれば、とても脱るゝ道はなし。きり首となり瞼をふさがば、盲目目明の差別もあらじ。たとへ眼平若君の御顔を見知るとも、忠義の一心を以てあざむかば、やはか仕損じ候まじ。大丈夫の御身をさへ、恩愛にひかされて、覺束なしと思ふものを、愚痴な女の心といひ、朝夕はなれず手しほにかけて、これまでに育てあげたるいとし子を、すゝめて殺さす胸の中、御推量くだされかし。しかのみならず、娘楓しばしの別といひながら、世の中の親の情は、我子の片輪を何處迄も、隱してやるが常なるに、諸人に顔をさらさせて、丹波の國の因果娘と、のち〴〵までも恥を殘さす不便さよ。妾が身せめて十年齡若くば、此身を賣りても、娘に憂目は見せまじものをと、口說きたて〴〵、兄弟ふたりの手をとりつゝ、夫に後をとらせじと、堪忍びつるため涙、瞼の堤を押しきりて、溢れおつるぞ理なる。南無右衛門始終を聞き、うたがひ晴るれば百倍悲しく、鐵石のごとき心にも、肝に烙鐵さゝるゝ思ひ、五臟六腑惱亂し、しばし詞もいでざりしが、やゝありて言ひけるは、文彌事若君と同年といひ、剃髮の姿といひ、顔容も似たる故、御身代と思ひつきては見しかども、何いふも盲目にて用にたゝずと、一圖に思ひて、死首の瞼をふさぎ、盲目目明のへだてなき所には、露ばかりも心づかざりし。楓も容はすぐれたれども、片輪なれば身賣もならず。嗚呼二人の子どもは持ちながら、親

て居り候。不審はなさせ給ひそとよ。文彌が持ちし彼金は、妾が身の代にちがひなく候と、泣く泣く語るにぞ、南無右衞門一つの不審は晴れたれども、それを文彌が口づから、盗みしとはなゝいひしと、血刀を投捨て問ひかくる。礒菜かはりていひけるは、若君の御急難を聞くとひとしく、文彌を御身代と思ひつきしが、忠義に凝たる御身なれども、さすが親子の愛著にて、もし心もおくれ給はんかと、文彌にいひふくめ、父上の氣質塵ばかりも、ゆがめる事をきらひ給へば、此金を盗みしといひ惡口せば、怒に乘じて恩愛の紲をたち、手打し給はんは必定也。しかじか計ふべしと、心づよくも云聞けたれば、すみやかに聞きとゞけ、某宿世の因果にて、盲目となりつれば、すは主君の御大事といふとも、戰場の働なりがたく、武士の子と生れたるかひなしと、日來くちをしく思ひつるに、若君の御身代となるは、戰場の打死も同然、願うてもなき幸也。さりながらたとへ計にもあれ、親にむかひて惡口し、盗せしなどは勿體なくて申しがたし。こればかりは許し給へといひける故、そは最のことなれども、さなくては父上の、愛念を絶つことあたはず。何事も皆忠義の爲ぞとて、やう〱得心させつるに、けなげにも能く計ひしぞ。譽めつかはされ下さるべし。さきほど物蔭にて、御身の樣子をうかゞひしに、若君を伴ひてのがれ出で、かなはぬ時は切死と、覺悟の體に見えたれども、村の口々山道まで、捕

申さんと、思へど外に仕方もなし。幸京都五條坂の傾城屋、篠村八幡の門前に、旅宿して居ると聞き、密にまゐりて、此身を百兩に買ひくれよと頼みしかば、すみやかに肯ひしが、妖蛇の因縁を、聞くとその儘破談におよぶ。金がほしいと思ふ心一圖に、我身の片輪に心つかざりし事よと、みづから恥ぢ思ひつゝ、すご〳〵歸らんとしつるに、捨つる神あれば助くる神もありといふ、常言のごとく、今ひとりの年かさなる傾城屋が申すには、これまで蛇つかひの女さまざまありしが、實の因果にてさる事あるは珍しく、殊更生れつきもよければ、糺川原にて見物にせば、あそびにするより却りて利得おほからん。もし見物になる心あらば、五年をかぎり百兩に抱ゆべしと申すにより、見物はおろか、たとへ生皮をはがれ、生膽を取らるゝとも、百兩の金をとゝのへ、父上の汚名をさへすゝげば、露ばかりも厭ふべからず。殊更面はさらすとも、うき川竹の流をくみ、身をけがすには優ならめ。諸人に恥をさらしなば、却りて罪障の、消失せなん縁ともならんかと、心を決し、それにきはめて戻りしが、父上には言出しかねて居つるに、今日思はずも母樣の、おんかへりを幸とし、妾が心底をうちあけ、さきほど裏口より伴ひ出で て、かしこに行き、母樣の手形をするゐて證書を渡し、百兩の金をうけとり、今夜のうちに都へ旅立つはずに約して、かへりし折から、捕手の騒動若君の御急難、母樣と物陰にて、唯あきれ




南無右衛門
怒りふたへぞ
一子文弥と
手打よ
きりつくる
ぶんや

に手にかくるが、親の慈悲ぞといひつゝ、礒菜を押退けつきのけて、なほ切りつけんと立廻る。礒菜は夫の手にすがり、其身をしづに引戻し、息をつく〳〵あの金は、盗物には候はず、まことは娘楓が身の代にて候といへども、南無右衛門合點せず。妖蛇に見こまれ片輪な娘を、何故に大金出して抱ゆべき、汝も共にいつはるかとて、にらみつくれば、礒菜奥の方に打向ひ、やよやよ娘こゝへ來て、父上におことが心底物語れ。はやく〳〵と呼はれば、娘楓一聲答へて駈出でしが、文彌がきられし體を見て、咽せかへりてぞ倒れける。礒菜文彌を抱かゝへ、苦しうあらんが父上に、本心を語るうち、こらへてくれよといたはりつゝ、楓に向ひ、悲しきはうべなれども、委細のわけを父上に、疾く〳〵告げよと、いはれてやう〳〵顔をあげ、南無右衛門にうちむかひ、御不審は理なり。前の日父上御物語に、かねて尋ぬる百蟹の卷物、思ひかけず京下の商人持參せしが、その商人を捕へ、出所をたゞさば、盗人の在所も知れ、卷物も手に入る道理と思へども、かなしさは日蔭の身、あらはに事をたゞしがたし。さりとて價は百兩といふ大金なれば、とても我手に入りがたし。我手に入らねば、末代盗賊の汚名をすゝぐ事あたはず。金づくにてこれまでみがきし武士道をすて、先祖の名までをけがすこと、思へば〳〵無念なり、口惜しさよとて男泣に泣き給ひしが、骨身にしみていたはしく、何とぞ金調へてあげ

み、あつき涙をおとしつゝ、斯樣にきびしく戒めなば、もしくは心もなほらんかと、親の慈悲こそせつなけれ。文彌はやがて起上り、あざみ笑ひていひけるは、貧乏者の子とうまれ、正直にかまへては、とても出世はなりがたし。此金にて官をとれば、一生は安樂なり。さばかり呵給ひそと、聞けば聞くほど惡ければ、齒をかみならして聲を荒らげ、大膽不敵の今のことば、さらさら子とは思はれず、天魔波旬の所行なり。親子の恩愛これまでなり、七生までの勘當ぞ。疾く何方へも出で行けとて、足をあげて踢とばせば、文彌は財布を懷中し、勘當うくれば、親でなし子にあらねば、長居は無益とつぶやきつゝ、あたりを探りて出でんとす。南無右衞門怒にしのびず、走りよりて、又踢倒せば、起きあがりて又惡口す。惡口すればなほ踢たふし踢たふせば、益惡口やまず。南無右衞門いよ〳〵怒り、頭肚の用捨なく、踏つけ〳〵踏倒せば、文彌は片息になりながら、なほも惡口とゞまらざれば、南無右衞門怒氣天にさかのぼり、刀をすらりと拔く手も見せず、肩尖四五寸きりこめば、呀と一聲たまぎりて、うつぶしに倒れたり。たたみかけて切らんとせしが、恩愛千筋の葛籠の緒、足にまとひて背後の方へ、引戾さるゝ心地するを、思ひきりて又振上ぐる劍の下に、妻礒菜はしり出で、やれしばし待ち給へ。いふことありと止むれば、南無右衞門いや止むるな。なか〳〵に生置きて、罪つくらせんよりは、一思

を取出して、手探にかぞへ居たるが、紙門のあく音におどろき、手早く背後にかくしたり。南無右衛門目早く見つけて、訝りつゝいひけるは、いかに文彌、見れば餘程の金を持ちたるが、如何なるゆゑにてその金持ちしぞ。こゝへ出して見せよといふ。文彌いはく、これは師匠より預りたる金なれば、親人なりとも見せがたしといふにぞ、南無右衛門、師匠なりとも、幼年の汝に、大金あづけ置くべき謂なし。如何なるゆゑにてあづかりしと、問れて文彌口ごもり、いやこれは途中にて拾ひし金なり。預りしにはあらずと、詞のあとさき揃はねば、南無右衛門ますますあやしみ、途中にて拾ひしものを、隱しおくは道にあらず。いづくにて拾ひつるぞ、實正いへと問詰められてせんすべなく、誠は此金あづかりも拾ひもせず。道中の旅店に、宿り合せし旅人の金を、盗みとりつるにて候と、聞いて南無右衛門あきれはて、項つかみて引倒し、何といふぞ。そはまことか眞實か。元來汝孝子にて、さある非道を行ふべき性質にあらずと、今の今まで思ひしが、在京のわづかの間に、さばかり心のかはるものか。これよく聞けよ。あきらかなる所には王法あり、くらき所には神靈あり。五戒のうち、最も偸盗をおもしとす。たとへ塵一すぢにても盗をなして、豈よく罰を免れんや。けがらはしき心底や、あさましき所存やとて、左の手に項首を持ちかへ、右の拳をふりあげて、頭をのぞみ、つゞけ打に打倒し、且怒り且悲

せめければ、さすがの南無右衛門も、ほと〳〵當惑の體なりしが、魂すゑていひけるは、さばかり事の、あらはるゝ上はせんすべなし。いたはしながら若君の、御首打ちて渡し申さん。さりながら、せめて御最期の念佛をすゝめ申すその間、しばしの御猶豫くだされかしといへば、眼平うなづき、得心のうへは、しばしの間は待ちくれん。しからば今宵三更の、時打つ鐘を號として、首うけとりに向はんずれば、必ず詞たがふべからず。且それまでは、村長方に待ち居らん、首桶それへ受取るべしとて相渡し、人數を引具し歸りけり。跡にはひとり南無右衛門、手をこまぬき頭をたれて、しばし思案にくれけるが、良ありて言ひけるは、卷物の價百兩といふ大金なれば、とても調ふべき手段はなけれど、一寸のびれば尋のびるといふ、常言もあれば、もしよき思案もあらんかと、今日翌といひのべしが、其よりもなほ危急なるは、若君の御身なり。今宵にせまる二つの難儀、臥龍楠氏の智謀ありとも、のがるゝ道調ふ術はあるべからず。藤波が所縁の者に打れんと、かねて思ひし命なれども、かゝる際には是非もなし。若君を負まゐらせ、脱るゝだけは脱れ見て、若かなはざる其時は、御腹をすゝめ申し、斬死するより外はなしとひとりごち、心のうちにうなづきて、舊葛籠のうちより、一腰を取出し、行灯提げて、奥の一間に立ち入らんと、破れ紙門をさと開くれば、盲兒の文彌、財布のうちより、あまたの小判

の日見せ申しつる、金岡が百蟹の繪巻物、外に望人出來しゆゑ、唯今價をお渡しなければ、望の方へやらねばならず、いかゞ思すやらんといふ。南無右衞門打聞きて、そはあまり火急なり。せめて三日待ち給はれかしといへば、商人頭を打振り、某も旅がけの事なれば、三日などは待たれ申さず。しからば今夜、三更の時まで待ち申さん。其期が過ぐれば、たゞちに彼方へ賣つかはし候ぞとて、詞をつがひて立歸る。ほどなく外の方に人聲して、足音ひゞきければ、何事ならめといぶかる間もなく、村長に案内させて、捕手の輩組子ども、どや〳〵と入來る。組子の頭黒星眼平といふ者、首桶を小脇にたづさへ、聲あらゝかにいひけるは、汝佐々良三八郎、今の名は六字南無右衞門とやらんいふよし、月若どのをかくまひ置く事、注進の者ありて、大殿の御耳にいり、首打ちて參れとの嚴命なり。汝自打ちて渡すべきや、某直に打つべきや。返答いかにと呼はりぬ。南無右衞門胸とゞろくと雖も、さあらぬ體をなし、若君をかくまひ申せしなんどとは、何者が申しけるや、夢にも知らざる事なりと、そら嘯きていひければ、眼平から〳〵と打笑ひ、汝かくまひ置く事明白なり。强ひてあらがはば、此あばら家を踏破りて、家さがしせん。もし又尋常に首打ちて渡さば、その功により、汝が舊惡はゆるすべし。返答により、汝も共にからめとりて、藤波を殺し、巻物を奪ひたる、舊惡をたゞすべしと、絆をかけて

をつき、父上御安體の様子をうかゞひ、喜びに堪侍らずと、おとなしやかに相述ぶる。楓はことし十六歳、姿ます〱美麗にて、手織木綿の振袖も、綾羅にまがふ風情なるが、母のそばに近く寄り、長々の御在京、さぞ御苦勞をなされんと、あけくれ氣遣ひくらせしが、恙なき體を見て、やう〱心安りしといひければ、いな〱我苦勞よりおことが事、妖蛇も今に去らぬよし、其身を以て父上に、孝行盡す辛勞を、さぞかしと推量し、わかれて居ても片時も、わする事はなかりしぞや。縫物髪もよく仕覺えつるよし、父上の消息にて疾く聞きぬとて、うしろむかせ、髪のかゝりをつら〱見まはし、さても美しう能くできしぞ。此きるものも、おことが縫ひしか、あつぱれの手際ぞ。廣き都のうちにすら、おことが如き娘はまれと、思へばいとど妖蛇の事、おもひいだして不便なりと、何につけても子を思ふ、親の心ぞやるせなき。良ありて南無右衛門、佐々木の館の騒動、柏木が忠死の子細、若君をかくまひ置く事の、始末を語り聞せければ、礒菜おどろき、不慮の御難儀、いたはしさよとて泣きければ、南無右衛門、いかほどいうてもかへらぬ事。そちも文彌も、久しぶりにて若君に、おん目見え仕れとて、楓をつけて奥の一間にいざなはせ、くろ木の念珠つまぐりて、例の念佛を唱へつゝ、はるかに時刻をうつしけり。日あしも漸々かたぶく比、京下りの古書畫の商人、いそがはしげに走り來て、前

なりとて、已に縄をかけんとしたる油斷を見すまし、南無右衞門つと立上りて一人を蹈倒し、若君を奪返じて背後にかこひ、仁王立に立ちたるは、心地よき形勢なり。追人の人數これを見て、欺かれたる口惜しさよ、それ打捕れと呼はりつゝ、刀尖そろへて斬りかけたり。南無右衞門手ばやく息杖に仕込みたる、刀を拔いて相むかひ、すきまもなく斬りたつれば、追人の大勢敵しがたく、春雨に打るゝ胡蝶の如く、身をすぼめてぞ逃去りぬ。南無右衞門今は心安しと、若君の前にひざまづき、人目をいとひ候へば、此邊を立退く間、暫時のほど、御氣づまりにはおはさんが、此中に御身を忍びくださるべしとて、月若を荷物のうちに抱入れ、柏木が屍は、あたり近き流に沈めて水葬し、又も追人の來ぬ間にと、足をはやめて走去り、丹波を斥して歸りぬ。

十一　斷絃の琵琶

さても六字南無右衞門は、若君を救ひて我家に歸り、一間のうちに潛せおき、娘楓とともに、朝夕心を用ひてかしづき、權月日をおくりけるが、一日若君にしばし氣晴させ申さんと、楓に申しつけて誘すれば、傾しや月若は、世にうつくしき生れなるに、妖鼠の爲に髮の毛をくひ盡され、剃髮の姿となり、頭に似合はぬ振袖の、綾の小袖の模樣さへ、ゆたのたゆたの捨小舟、薄

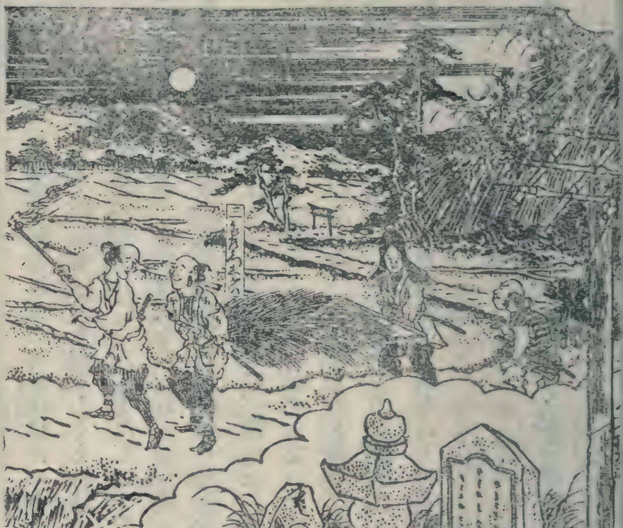
を殺して、立退かれし事、實は若殿放埒の根を斷たんと、忠義の爲にせられしよし、御内方磯菜どのよりの消息にて、始めて知り、かねて姫君若君にも、御身の誠心をきこえあげて、折もあらば歸參をと思ひしかひなく、此度の大變なり。さりながら、こゝにて御身に遇ひたるは、いまだ若君の御運盡きざる所也。妾此深手にては、とてもかなはぬ命なれば、何とぞ御身若君をかくまひ申し、再世にいだしまゐらせ給はれかしと、泣々物語るうちも、いと苦しげ也。南無右衞門委細を聞きて十分に驚き、して若君はいづくに御坐すぞと、問れて柏木あたりを見まはし、月若のおはさぬを見て仰天し、がつくりとおち入りて、所の名さへ柏木の、森の雫と消失せぬ。かゝる折しも、茂林のうちより、追手の人數、若君の口に猿轡をかけ、小脇に掻挾みて走り出で、やよ／＼佐々良三八郎、汝長谷部雲六といひ合せ、百蟹の卷物を奪ひ、藤波を害して逃去りたる大罪人、こゝにて見つけたるは天の與へなり。若君を奪ひたるうへに、汝を捕ふれば、兩の手に美食を握るが如し。疾く／＼手をつかねて、縛を受けよ。若手むかひなどせば、忽若君を刺殺すぞ。返答いかにと呼はれば、南無右衞門いそがはしく、地上にひざまづき、此所にて御身等の目にかゝりしは、某が運命の盡なり。いかでか手向いたすべき。いざ疾く繩をかけられよといひつゝ、手をつかぬれば、追人の人數口々に、さすがの三八郎、覺悟の體殊勝

をもとめ後れて、夜に入り額田部村を過ぎて、柏木の森の邊をうち通りけるに、木蔭に人のうめく聲、いと苦しげに聞えければ、いぶかりつゝ立寄り、提灯をさしつけて見るに、由縁ありげなる女の、むら鹿子の小袖の裾を高くかゝげ、襷ひきゆひ、けゞしく打扮ちたるが、黑髮を振亂し、數所痛手を負ひ、鮮血したゝり流れて、總身朱に染り、うつぶしに伏して、息も絶え絶え也。傍にある長刀を見れば、銀の蛭卷して、梨地に、倚懸目結の紋をちらしに蒔きぬ。これ佐々木家の紋なれば、益いぶかり、女を抱き起して顏を見れば、こはいかに、月若の乳母柏木なり。南無右衛門大に驚き、たくはへの氣つけ藥など與へて、さま〴〵に介抱りければ、やうやう目を開き、御身は佐々良三八郎どのにはあらずやといふ。南無右衛門いはく、おん身いかなる事にて、かく痛手をおひ、此所には倒れ居給ふぞ、そのゆゑ委しく語り候へといふ。柏木苦しき息をつき、今宵御館の騒動しか〴〵の事にて、姫君若君のおん命危きにより、姫君は名古屋山三郎守護しておち行き、妾は若君を扶申して立退きつるに、途中にて追人の大勢にとりかこまれ、ほと〳〵若君を奪ひとられんとしつる故、命かぎりに戰ひ、やう〳〵追人を斬散して、若君の御身恙なく、此までは落延びつるが、心は矢猛にはやれども、あまたの深手に歩行かなはず、こゝに倒れて夢中になり、おん身の介抱にあづかりしも知らず。おん身先年藤波

りて、孫堅を扶けしめしと聞く。汝はそれにも優りしぞといひければ、鹿藏も落淚し、畜類すら主人の恩を思ひて、かくのごとく愁悲むに、人と生れていかでか洪恩を思はざらんや。伴左衛門等、たとへ天に道ありて登り、地に門ありて入るとも、某が一念の誠を以て尋出し、御本懐を遂げさせ申すべしとて、かの馬の平頸をなでまはし、人と畜類のへだてはあれども、我も汝も傍輩にて、主君の恩をかうぶりしは同然なるに、我は汝には劣りしぞ。飢ゑはせぬか、飢ゑたらんとて、あたりの草をとりて與へ、水飼ひなどしていたはりけり。山三郎幸の父が片身の火打袋を取出し、火を點じて明松とし、前に立ちて生駒山にさしかゝり、名におへる暗々峠の難所も、かねて案内を知りたれば、口綱をとり馬をみちびきて、河内の國へいそぎ行きぬ。

十　夢幻の落葉

それはさておき爰にまた、六字南無右衛門は、佐々木の館の事氣遣しく、旅商人に身を扮し、一荷の荷物をかたげ、人目をはゞかり、笠ふかぐゝと面をおほひて、大和の國に至りけるが、宿




名古屋山三郎
銀杏前を扶て
館を立のき
姫が追人に
つゞれて腹を
きらんとするを
ありべ麻兎
とゞめて
三郎に未つげ
闇打に
あひし
ことを
告
しらすと
名古屋山三郎

子息なれば、此屍は當國佐々木殿の御内に、三郎左衞門といふ人なり。これなるは則その姓等にむかひ、此死骸は此方へ渡すべし。少も汝等が越度になる事にあらずといひければは、百姓ども死骸の衣服の紋所と、山三郎が衣服の紋所と、おなじ三本傘なるを見て、さては相違あるまじと安心し、郡司の前へ持出でんより、こゝにて事をすまさんは、我々が仕合なりと納得し、死骸を渡して立歸りぬ。かくて山三郎、歎きてかへらぬ事なれば、鹿藏にあたりの流水を汲取せて屍を淸め、後日改葬するまでは、權くこゝに隱すべしと、辻堂の板敷をとりのけて、床の下を深く掘り、屍を埋みてもとの如くなし置き、香爐の灰を捨てて水を手向け、本尊の石佛にむかひ、南無寶珠地藏菩薩、惡趣の苦患を救給へと念じつゝ、なほも淚はとゞまらず。此時三郎左衞門がおびたる刀は、重代の左文字の刀、二千五百貫の折紙つきたる名作なりしが、せめての片身と取收め、懷中物提物ともに、鹿藏に持しめければ、鹿藏いひけるは、弟猿二郎事、仕を辭して後、河内の國に住み候へば、一旦彼地におん越あるべしといふ處へ、三郎左衞門が乘馬一散に馳來り、山三郎が前に頭をたれて、淚を流しければ、山三郎その爲體を見て胸ふさがり、汝親人の祕藏ほどあり、我居所をしたひ來て、愁傷の體、人にもまさりし擧動なりとて、鬣をかき撫でつゝいひけるは、昔吳の孫堅董卓と戰ひて利を失ひ、馬より落ちて草中に臥す。

涙ながらに物語りければ、山三郎大に驚き、且怒り且悲み、涙瀧の如くはふり落ちて、しばし詞もいでざりけり。良ありていひけるは、今日はいかなる惡日ぞ、御館の騒動といひ、姫君を奪ひとられ、しかのみならず、伴左衞門某を打たんとて、誤りて親人を打ちたる事、思へば某が手を下して、親人を打ちたるも同然なり。死ぬも死なれぬ今夜の仕儀也。一つには姫君をとりもどして奸臣等を亡し、若君をもり立てて御家督とし、二つには伴左衞門等五人の者を打ちとりて、父の靈前に手向け、冥途の恨をはらさせ申さでは、忠孝の道全からず。今は二つも三つもほしき命なるぞや。さるにても親人の亡骸をもとめ、せめて假の葬せん。彼所へ案内せよ鹿藏とて、すでに立出でんとしたる所に、此邊の百姓等とおぼしく、明松を前にたて、戸板の上に屍をのせ、蓑打掛けてかゝげつゝ、見ればよしありげなる武士方と見ゆるが、むごたらしう殺されたる事よ。衣服大小懐中物提物など、その儘にあれば、盗人の仕業とも覺えず。片時もはやく郡司に申しきこえて、我々があやまりにならぬ樣、急げ／＼と口々にいひて來りぬ。山三郎立寄り、此方に思ひあたる事あれば、その死骸見せくれよといひつゝ、蓑をとりて見れば、むざんや三郎左衞門、身體寸々にきざまれ、脇腹より五臟六腑みだれ出でて、鮮血戸板にながれけり。山三郎ひと目見るより、悲歎の涙にむせかへり、地上に嗑とたふれ伏す。鹿藏百

昔話稲妻表紙　巻之三

九　辻堂の危難

かくて山三郎は、銀杏前をせおひ、生駒山を越えて、河内の國に落行かんと、東の麓、竹林寺ちかき邊まで、逃來りけるに、追人ども明松をふりてらして、近々と追著きければ、姫君にあやまちあらんことを恐れ、傍の辻堂のうちにおろし置きて引返し、追人の大勢に向合ひて、權戰ひけるが、追人ども山三郎が猛勢におそれ、秋の木の葉の散るごとく、四方に亂れて逃去りぬ。山三郎今は心安しと、辻堂にかへりて見れば、こはいかに銀杏前はおはさず。月の光によく見れば、堂上の塵のなかに、足のあとあり。扨は追人どもの計にて、我戰ふひまに、姫君を奪去きつるに疑なし。姫君を奪はれて、なに面目にながらふべきと心を決し、刀をとりなほして、ほと〳〵腹につきたてんとしたる折しも、僕の鹿藏、總身朱に染りながら走來り、此體を見ていそがはしく押止め、大息つきて、不破伴左衞門、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等四人の者をかたらひ、草履打の宿恨により、人違にて、三郎左衞門を打ちたる子細を、

かねて庭中に埋めおきけると聞きつ。次の巻を讀書かしめ、一味のものをして、生駒山の麓の辻堂において、危難にあふこと、山三郎姫を背負ひておち行き、得て知るべし。

が歸り候まで、しばらく猶豫くださるべしといはせも果てず、いな〳〵嚴命なれば片時も待つこと相ならず。若違背に及ばば、某奥へ踏込みて御首打つべし、返答いかにといふ。山三郎然るうへは是非に及ばず。某命あらんかぎりは、御二方を渡すこと、まかりならずといひつゝ、はや身支度して、すはといはば斬死すべき勢なり。眼平あざみ笑ひ、大殿のおほせを背く不忠者、先彼を打取れと下知すれば、大勢一度に亂入し、山三郎をとりかこみ、火花をちらして戰ひけり。こなたは多勢、山三郎はたゞ一人といへども、忠義するどき太刀先に斬りまくられ、しどろに崩れて大庭までさつと退く。其ひまに山三郎、奥の殿に馳まゐり、姫君若君にむかひ、父が吉左右承はるまでは、一旦館を御立退あれかしといふにぞ、月若の乳母柏木といふ者、女ながらもかひ〴〵しき者にて、妾は若君をあづかりて落行くべし。山三どのは姫君を守護して、御立退あれかしとて、いそがはしく身支度し、若君を背負ひ、長刀を小脇にかいこみて、後門より落行きぬ。山三郎は姫君を負ひまゐらせ、續いて脱れ出でんとしたるが、はや後門にも打手の兵立廻りて支へたれば、山三郎しやもの〳〵しと呼はりつゝ、多勢の中をきりひらきて、生駒山の方へぞ落ちゆきける。

道犬が奸計の子細をたづぬるに、僞筆の達人をたのみ、銀杏前の手蹟を見せて、僞願書を

ねて見知りの下部なれば、生置きては後日のさまたげなりと、一同に取巻きて、切先揃へて切りつくる。勢猛き鹿藏も、雙拳四手に敵しがたく、ほと〲危く見えたる所に、三郎左衛門が乗馬、一聲いばえて荒出し、五人の者を蹈みたふし踢たふしければ、五人の者は大に狼狽へ、はたらきかねてぞ見えたりける。鹿藏大童になり、命を限りに刀をまはし、四面八方をきりたつる。五人の者一方は荒馬に踢散され、一方は鹿藏が死物狂に切りたてられ、つひに敵すること能はず、いちあし出して逃出せば、鹿藏主人の敵のがさじやらじと呼はりつゝ、韋駄天走に追行きけり。かゝる折しもむかうの方より、黒星眼平、四五十人の荒男どもを引具し、高提灯を前にたてて、行列をつらね、あたりを拂ひて足ばやに進み來る。鹿藏これを屹と見て、正是上館の打手ならん、立歸りて注進すべきか、彼等を追ひて仇を報はんかと、心は二つ身は一つ、ゆきては思案し、もどりては躊躇し、同じ所をいく度か、行きつ戻りつひまどりぬ。黒星眼平は時刻をうつさず、平群の下館に馳向ひ、これは大殿の嚴命をかうぶり、銀杏前どの月若どの、親子の御首をたまはらん爲向うたり。名古屋父子はいづくにあるぞ、早く御二方をわたすべしと、聲たからかに呼はりければ、すは一大事と第中大に騒動し、名古屋山三郎走出で、○其儀先刻當館に告ぐる者あるにより、父三郎左衛門御助命を願はんため、先刻上館へまかり越し候へば、父

老いたれ、名乘合の勝負ならば、汝等ごときの鼠輩ども、數十人來るとも物の數とは思はねども、暗打にせらるゝとは、武運につきたる身のはてよ。死ぬる命は惜しからねど、唯心殘りは、御二方の安否を聞かで相果つる悲しさよといひつゝ、よろぼひ廻るを伴左衞門すかし見て、合破と蹴倒し、山三郎と思ひの外、運の盡きたるおいぼれめ。山三にあらぬは殘念なれど、汝を打ちしも又此方に、幸とすることあり。閒話いはず疾く死ねかしと惡さげに罵りつゝ、めつた切に切りければ、三平、泥助、雁八等も、三郎左衞門が苦痛の聲をしるべに立寄りて、寸々に斬りつけ、鱠のやうにぞなしたりける。折しも寺々の鐘打交ぜて、諸行無常と告渡り、小田の蛙の鳴きたちて、いとゞ哀をそへにけり。僕鹿藏は先程より、笹野蟹藏と渡り合ひ、深田の中に蹈込みて、たがひに呼吸の息を心あてに戰ひ、雙方薄手を負ひけるが、鹿藏三郎左衞門と伴左衞門がいひあふ詞を遥に聞きつけ、扨は彼奴遺恨により、人たがへして、はや御主人を手にかけしかと仰天し、蟹藏を捨てて、主人の聲する方へ探り行かんとするを、三平雁八さはさせじと立塞り、兩人ひとしく切りかけたり。鹿藏これを丁と受けとめ、又も行かんとしたる時、雨雲はれて一輪の明月皎々とかゞやき出で、木の間をもりて光あきらかなりければ、鹿藏五人の顏を見るに、伴左衞門をはじめ四人の者、皆見知りたるものどもなり。五人の者も鹿藏は、か

宵にせまる大事をかゝへたる身なれば、好みて戰ふ心なく、早く此場を脱ればやと氣はせけども、四人の者に圍まれてせんすべなく、窺ひすまして斬附くる刀、三平が片耳をそぎ、二の太刀に雁八が小指を斬落しければ、兩人心臆してはたらくこと能はず。さて泥助がさぐり寄つたる刀の鋩、三郎左衞門が刀に丁と打合せ、たがひにこゝぞと思ひつゝ、丁々はつしと打合うたり。伴左衞門その太刀音を心あてに、拔足して背後より、勢こみて切つくる刀、あやまたず、三郎左衞門が肩尖、七八寸切りこみぬ。痛手に屈せぬ強氣といへども、さすが老人なればたじたじと踉く所を、伴左衞門たゝみかけて左の脇腹を深く切込みければ、三郎左衞門こらへず一聲呀とさけびて、尻居に嚾とたふれたり。伴左衞門探りより、髻攫みてねぢふせ、これは伴左衞門重勝なり。いかに山三郎、汝君命とはいひながら、先年我を辱めたる恨、骨髓にとほりて忘れがたし。今其仇を報ゆるぞとて、懷中より物に包みし草履のかたしを取出し、これはこれ先年汝我を辱めたる上草履なり。膽玉にこたへよといひつゝ、連打に打ちけるにぞ、三郎左衞門苦しげに息をつき、汝等は辻切か盜賊かと思ひつるに、扨は伴左衞門にてありけるか、我はこれ三郎左衞門なるはといふ聲聞きて、扨は人違せしかと、伴左衞門等一同におどろきけり。三郎左衞門刀にすがりて立上り、兒子に仇をむくふにもせよ、だまし打とは比興な奴。我年こそ

上雁八等四人の者を語ひ、夜々平群の館の近邊を徘徊して、山三郎をつけねらひけるが、此夜も此邊に忍び來りてうかゞひぬ。此夜は宵闇といひ、空かきくもりて星も見えず、あやめもわかぬ暗夜にてありけるが、三郎左衛門鹿藏に提灯持せ、馬を飛せて急ぎ來るを、伴左衛門等五人の者、三本傘の紋つきたる提灯を見て、山三郎にうたがひなしと思ひ、物蔭より一同にをどり出で、まづ提灯をはつしと斬落せば、鹿藏飛すさり、一腰に手をかけて、何者なるやとすかし見る。三郎左衛門は馬をとゞめ、こは辻斬の曲者か、盗賊の所爲かといひつゝ、肩衣はねのけ、一刀を抜きながら、馬より飛下るひまもあらせず、伴左衛門が斬附くる白刃の稲妻、目前に閃きければ、老功頓智の三郎左衛門、馬のかげに身を避くるにぞ、伴左衛門が刀、いたづらに鐙にはつしと斬附けて、火花ぱつと飛散つたり、暗夜といひ木立しげき所なれば、一寸先も見わからず。藻屑三平、土子泥助、馬の脚音を心あてに、前後より斬附くるに、目的ちがひ、思はず兩人同士打に丁ど打合す劍の下を、くゞりぬけて三郎左衛門、はらひぎりに斬る刀、犬上雁八が鼻のさきに光りければ、胸ひやりとしてのけぞりけり。伴左衛門心中に、此時を過さばいつか恨を晴さんと思ひつゝ、息を凝してうかゞへば、三平泥助雁八等も、あたりを探りて立廻り、或は互に同士打して薄手をおひ、或は木立に斬りつけて氣をいらつ。三郎左衛門は、今

かりける次第なり。此事はやく下館に聞えければ、名古屋父子大に驚き、三郎左衛門山三郎にむかひ、これ正しく不破道犬が奸計にて、姫君に濡衣をおはせ、御母子を失はんと計りし に疑なし。打手のむかはぬさき、某急ぎ上館にいたり、一命にかへても申しひらきして、御命を救ひまゐらせんとて、いそがはしく禮服を著かへ、椽先に馬をひかせてひらりと打乘り、供人のそろふ間もおそしと心せき、鹿藏といふ下部に提灯もたせ、走出でんとしたるに、三郎左衛門が刀鞘走りければ、山三郎氣にかゝり、轡づらにとりつきつゝ、親人御如在はあるまじきが、道犬は奸智おほき者なれば、必ず彼が計におち、共に罪を得給ふな。一言の詞も心をつけて宣へといへば、三郎左衛門打點頭き、それ合點なり、かならず氣遣ふ事なかれ。かゝる内亂のときは、御側近き者等にも油斷ならねば、唯御二方をよく守護すべしといひ捨てて、一鞭あて、飛ぶが如くに走りゆく。山三郎身をそばだてて、かげ見ゆるまで見送りけるが、折しも塒にもどる夕烏、いと悲しげに鳴くを聞き、かく烏なきの悪しきは、御二方の御身のうへか、親人の身のうへか、いづれにもあれ、あな氣遣しと吐息して、胸を痛むるばかりなり。これぞ一世の別とは、後にぞ思ひ知られける。爰に又不破伴左衛門重勝は、先年君命とはいひながら、名古屋山三郎に、草履をもつて面を打れしを、深く遺恨に思ひ、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬

ぐりして、妾親子を呪咀殺さんとは計候ならん。美麗顔して心は鬼よりもなほおそろしく候。こひねがはくは、妾親子に早く暇をたまはり、尼法師ともなし給はれかし。我々かくてあらば、つひには彼等が生靈にとり殺され候はめ。などてさばかり妾親子を忌みきらふぞ、情なき銀杏前やといひて、涙を瀧の如く流しぬ。此時花形丸は年已に十六歳、いまだ丁角にてありけるが、母の惡性には露ほども似ず、志正しき生れなり。素母の非望を知らず、此日の子細を聞きて大に歎息し、かゝる凶事の出來ること、皆これ某が誤なり。檀弓篇に、昆弟の子は猶己が子の如しといへり。某月若に對して、鄧伯道がごとき志なき故なりとて、深く悲みけり。判官貞國蜘手の方の恨の詞、花形丸が理おほき詞を聞きて、銀杏前母子を益にくみ、親を呪咀する大罪人、片時もたすけ置きがたしとて、黒星眼平といふものを召出し、銀杏前月若兩人の首打つて來れと命じければ、蜘手の方道犬と顔見合せ、しすましたりと思ひながら、これをとゞめけれども、貞國聞入れず。花形丸は殊更に、詞をつくして止むれども、火性短氣の貞國、少しも宥免なかりければ、もとより道犬一味の黒星眼平、迷惑顔にて其座を退き、君命といへども、母子の首うたんといはば、名古屋父子、たやすくは渡すまじ。然る時は彼等ともに打とらんと思ひつゝ、四五十人の荒男等を引具して、平群の館へいそぎ行く。嗚呼銀杏前親子の身のうへ、危

疑ながら、近仕の士に命じ給へば、近仕の士かしこに至り、土中を掘らしむるに、果して一合の白木の箱を得て携へ來り、貞國にたてまつる。貞國これをひらき見るに、内に大小二つの藁人形ありて、透間もなく釘を打ちたり。貞國大に驚きて、賴豪院が詞を奇なりとし、これ呪咀にうたがひなけれど、別に一物もなければ、何人の所爲なるや、分別しがたしといはれけるに、賴豪院膝をすゝめ、凡呪咀の法には、願書なくてはかなひがたし、其箱これへといひて箱を取上げ、つらく〳〵見て、やがて扇の尻をもつて、箱の底をつきぬきけるに、かさね底にして其中より一通の願書出でたり。貞國これをとりひらき見れば、蜘手の方花形丸、兩人を呪咀するの願文にて。銀杏前月若兩人願主の名あり。しかも銀杏前の自筆をもつて書きたれば、疑ふべうもあらず。貞國忽ち怒氣心頭におこり、面色變じて、暫くものもいはざりけるが、先賴豪院に、呪咀をはらひのぞく修法を賴みけるにより、蜘手の方の病床に壇をかざりて、災禳の法を修し、かの藁人形は釘をぬき、護摩の火中に投じて、燒捨てたり。かくて蜘手の方、やう〳〵快氣の體をなし、貞國に向ひていひけるは、妾ことかねて銀杏前母子を、實の娘實の孫といつくしみ、何とぞ桂之助の勘當をゆるし給ふか、さらずば、月若を家督にし給ふやうにと、それのみ宿願なるに、彼等はかへりて妾を繼母と忌みきらひ、若花形丸家督にならん事もやと、さき

て妙計なりと喜び、いつはりて重病の體をなし、物狂しき様をなしければ、判官貞國大におどろき、道犬を召して醫療のことを相談あるに、道犬申しけるは、奥方の御容體をうかゞふに、徒事ならず。まさしく邪祟の所爲とおぼえ候へば、たとひ耆婆扁鵲が神方なりとも、藥の力をもつてすくひ申すことは叶ふべからず。近曾京都より下りし、賴豪院といふ修驗者、安部の晴明が金烏玉兎の神書を家傳して、卜筮に妙を得たるものに候へば、彼を召してうらなはせ、おん聞あれかし。幸只今某宅に參り居候と申す。貞國これを聞き、それいそぎて召し呼べと仰せければ、道犬かしこみ候とて、やがて私宅にいひつかはしけり。賴豪院は額の疵やうやく癒え、再道犬が奸計に與しけるが、召に應じて、貞國の目どほりに罷出でぬ。身の丈たかく眼中光り、斬髮ちゞれて螺髮のごとく、兜巾篠懸に、紅紗の衣を著し、最多角の念珠を袖くゝみに持ち、中啓の扇を把り、あたりもまばゆき金張附の廣座敷に、おめず臆せず坐したる體、誠にいかなる惡魔をも、降伏すべき骨柄なり。貞國まづ初見の挨拶終り、奥方の病體を告げて卜筮を乞はれけるに、賴豪院恭しく卦を敷下し、考を施していはく、奥方の御病氣、全く呪咀する者ありて、苦め申すに疑なし。今四五日を過ぎなば、御命危かるべし。若し疑しくおぼし給はば、御寢所の庭中、艮の隅の土中三尺を掘せ見たまはば、分明なるべしといふ。貞國半信半

れば、忽ち暴風ふきおこり、庭の樹木の葉をちらし、池水を巻あげ、寢殿大に震動し、瓦落瓦落と鳴りどよみて、今も崩るゝかと思はれけり。時に若君の聲として、あなや〱とをめき給へば、大勢の聲として泣悲みてかまびすし。聞くにたへざる山三郎、那裡も氣づかひ、這裡も去られず、ふたゝび刀を打ふりて斬らんとせしが、頼豪院口より數十の鼠を吐き、その鼠山三郎に飛かゝり、五體すくみて働かれず。あな口惜し殘念といひつゝ、又斬りつくれば忽に、頼豪院が形消失せて、唯雲霧のとぢ塞りたる如くにて、あやめもわかぬ庭上に、只ひとり山三郎、拳をにぎり齒をかみならし、空虚をにらみて立つたりけり。頼豪院は危く身をのがれたりといへども、山三郎が忠義一圖に精神をこめたる手裏劍の疵治せずして、呪咀の法忽ちに破れければ、おのづから若君の病日を追ひて愈り、危き命をたもちけり。

八　暗夜の駿馬

扨も蜘手の方は、頼豪院の修法破れ、月若快氣のよしを聞きて、大に力をおとし、此上はいかなる計をもつてか、彼等を失ふべきと、道犬を召して密談ありけるに、奸智おほき道犬、少しも屈せず、再又一計を生じ、蜘手の方の耳につきて囁けば、蜘手の方とくと聞き、これきはめ




名古屋山三郎
若君の寝殿に
宿侍し狐鼠を
手裏剣を打ま
俄に暴風起て
寝殿
鳴動を
なごや山三
なごや三郎左衛門

山三郎にむかひていひけるは、我曾て酉陽雜爼を見るに、人夜臥にゆゑなうして髻を失ふ者鼠の妖なり。又鼠人および牛馬に著くことありて晝夜避れず、如何ともする事なしといへり。若君の御容體をうかゞふに、彼書に記す所の、尋常の妖鼠とおなじからず。疑ふらくは呪咀する者ありて、障礙をなすとおぼゆるなり。汝心をつけて恠異の出所を見現すべしといひければ、山三郎某も左こそ思ひ候なれとて、これより別して心をもちひ、寢殿の四方に眼をくばりて守護しけり。さて一夜丑三つのころ、銀杏前をはじめ、御手醫者、乳母、侍女等もおぼえず眠を生じたるに、不思議や丈抜群の大鼠、行廊の方より歩み來る。形は常の鼠にかはらずと雖も、其おほきさは犬の如く、すさまじき形勢なり。おなあやしやと山三郎、刀を携へ頬杖つき、瞬もせず見ゐたるに、かの鼠いきほひこみて、若君の病床近く飛來る。山三郎いそがはしく立上り刀を抜き、待ちまうけて丁ど切るに、妖鼠はやく身ををどらして劍を避け、明障子を蹴やぶりて、庭上に走り出で築墻のうへに飛のぼる。山三郎追かけ出で、手ばやく小柄を抜取りて、はつしと打てばあやまたず、鼠の額にずばとたち、鮮血たら〳〵と流れけるが、忽一道の烟のごとき妖氣立昇り、頼豪院が姿髣髴とあらはれたり。山三郎さてこそ恠しき曲者と思ひつゝ、をどり上りて頬額二つと斬りつくる。頼豪院閃と身を避け、平形金珠をおしもみて、呪文を唱ふ

を見ぬき、これ我大望をとぐるよき便なりとおもひ、一時蜘手の方に近づき、好意深き體にいひなして探りこゝろ見るに、果して月若母子を失ひ、花形丸を家督にしたき望なれば、道犬しかるうへは何事も某にまかせ給へ。よきに計ひまるらせんと承引ひけるにぞ、蜘手の方なのめならず喜びぬ。かくて道犬蜘手の方と密談し、先月若を呪咀すべきにきはめ、其比よく呪咀の法を學び得たる、賴豪院といふ修驗者をひそかに招き、謝物をおほく與へて賴みけるに、貪欲深き者なれば、速にうけがひ、密室にとぢこもりて修法にぞかゝりける。さるほどに平群の下館には、銀杏前月若母子兩人移住み、名古屋父子これを守護してありけるが、月若はことし已に十一歲にぞいたりける。しかるに月若偶病を生じて打臥し、寢食安からず、次第に瘦衰へ、良醫をえらび靈藥を與ふるといへども、更にしるしなく、偶眠れば魘れおびゆること度々なり。殊更怪むべきは、深夜にいたれば看病の男女おぼえず眠を生じ、鼠おほく出て病床を飛びめぐる。後には晝も出て人をもおそれず、次第々々に充滿し、月若の髮の毛をくらひ、肉をもくひやぶり、頭に毒瘡を發して痛堪へがたく、心氣日をおひて衰へけり。母銀杏前歎悲むことおほかたならず、神社佛閣に立願し、名僧知識の加持祈禱を乞ふといへども、妖鼠しりぞかず、益怪きことのみ多かりけり。名古屋父子は晝夜病床をはなれず看病りけるが、三郎左衛門


佐々木桂之助の若君月若妖鼠の所為ふよく奇病をわづらふ


いてふ乃前

かくて又しばらく月日をおくりけるが、栗太郎盲目のことなれば、一生を過す世わたりの種には、琵琶を學ばせ、琵琶法師となさば、のち〳〵は高官にもすゝみ、貴人のそば近く召さるゝ事もあるまじきにあらず。せめては生涯安穩の計をなし遣すべしと思ひつき、頭を剃らしめて名を文彌とかへ、礒菜をつけて京にのぼせ、其比音曲を以て名高く聞えし、澤角撿校のもとに、傳をもとめて母子ともに奉公させ、專ら琵琶を學せけり。

七　呪咀の毒鼠

扨も大和の國佐々木の館におきては、判官貞國、子息桂之助を勘當して後、銀杏前月若母子を、平群の下館に移せ、名古屋三郎左衞門、同山三郎父子を守役として附置かれぬ。扨桂之助の繼母蜘手の方といふは、志毒惡にして、かねて桂之助夫婦をにくみ、いかにもして桂之助を失ひ、實子花形丸を、家督にせまほしと思ひ居けるが、思ひよらず桂之助勘當の身となりたれば、心中ひそかに喜び、もし又月若家督にならんこともやと思へば、何とぞして彼等母子を失はんとたくみぬ。然りといへども彼等には、忠臣名古屋父子つきそひ居て、片時も心をゆるさねば、如何にともせんかたなく打過ぎけるが、不破道犬奸智ふかければ、蜘手の方の心底惡意あること

妖蛇に見ひなく、姿美麗に生れつき、たとひ女御更衣に立つるとも、恥しからぬ容儀なるに、こまれて、人の交ならぬ身となり、栗太郎は生つきもきよらに、心ばへもすぐれて賢くありながら、思もよらず、盲目となるうたてさよ。殊更兄弟ともに孝道ふかき者なるに、など斯く薄命にはありけるぞや。いかなる宿世の因果にて、かく災のかさなる事ぞとて、悲歎の涙にむせびければ、兄弟の子ども周章てふためき、左右よりとりつきて、背を撫でさすり、共に涙を落しつゝ介抱するに、いとゞ悲しさまさりけり。南無右衛門目をしばたゝき、我つらく〳〵思ふに、藤波が怨念子ども等をなやまし、我等夫婦におもひをさせて、宿恨を報ゆるにうたがひなし。かれ一點の罪なくして殺されたれば、深く恨むも理なり。三代相恩の主君のためにせしことなれば、たとひ子ども等を取殺さるゝとも悔ゆべきにあらず。礒菜歎くな、我は少しも悲しからずと、歎きを胸におしかくしていへば、兄弟の子ども等口をそろへ、父上の宣ふ所うべなり。忠義の爲にしたまひし其報と聞けば、たとひ我々が身はいかほどの憂目を見るとも、露ばかりもいとふべきにあらず。母人よ、深く歎きたまひて、又も病をひきいだし給はるなと、年に似合はぬ理發の詞、孝心ふかき健氣さに、大丈夫の南無右衛門も、胸ひしと押塞り、覺えずこぼるゝ涙を拳をもつておしぬぐひ、歎を見せぬ武士形氣の心のうち、思遣られてなほ哀なり。

たる石の上におき、斧の脊をもつて首を微塵に打碎きけるが、血しほさつと飛散りて、傍に居たる栗太郎が、面上にかゝるとひとしく、呀とさけびて倒れたり。南無右衛門蛇を捨て抱き起せば、栗太郎が兩眼に、蛇の血しみとほりたる樣子にて、痛堪へがたしとて叫喚びぬ。礒菜もいそぎ惑ひて介抱するに、暫時ありてやう〳〵泣止みけるが、兩眼ひらく事あたはず、見る見る瞼高くはれあがりぬ。南無右衛門は死したる蛇を携へ行き、遠所に捨ててかへりけるが、いまだ歸らざるさきに、蛇又來りて巻附くこともとの如し。南無右衛門氣をいらちて、此度は燒殺さばやと火中に投じけるが しばしありて火中を飛出で、また巻つきぬ。かく樣々にして取捨てんとすれども、蛇の執念いと深くして、しばしも離れず、後には詮方盡きて、其儘になしおきけるが、唯腹に巻つきたるのみにて、別に害をなす事なく、楓も始のほどは我身ながら恐しくおもひけるが、後々は蛇に馴親みて、前生の因果とあきらめ、かへつて愛念深くなり、朝夕我食物をわかち與へ養ひけり。蛇もよくなれて、食事の時にいたれば、懷より鎌首を出してものうち食ひぬ。扨栗太郎は蛇血の毒氣兩眼に入りて眼疾となり、さま〴〵療するといへども治しがたく、つひに生れもつかぬ盲目とぞなりにける。礒菜左に楓をすゑ、右に栗太郎をすゑ、二人をつら〳〵顧みつゝいふやう、便なき子どもが形勢や、情なの神佛や。楓は世にたぐ

かくて後は南無右衛門が家内、無事に打過ぎけるが、一日南無右衛門たがやしに出でけるに、草むらの裏より、丈三尺ばかりの蛇出でて蟇をくはへ、ほと〳〵呑まんとす。南無右衛門これを見て、蟇をたすけまほしく、いかに蛇よ、汝我爲にその蟇をゆるせかし。さあらば我娘を汝に與ふべきぞといひけるに、蛇此語を聞入れたる體にて、蟇を放ち去らしめ、もとの草深き所にかくれ入りぬ。さて農業をはりて家にかへりけるに、其日の夜半の比、娘楓俄に發熱して苦み、聲たかくうめきければ、兩親驚きて目をさまし、いそがはしく抱起して見れば、恠哉小蛇楓が腹にまきつき、鎌首を立て、舌を吐きてうごめく樣、おそろしなども愚なり。磯菜これを見て身の毛いよだち、泣聲になりて早く取捨やりてよといふ。南無右衛門いはく、我晝ほど蛇蟇を呑むを見てたすけまほしく、若蟇を放ちやらば我娘を與ふべしといひけるが、此蛇我戲を實として來れるに疑なし。戲言はすまじきことなり。凡蛇は婬心ふかきものと聞きしが、眼前にかゝる奇恠を見る不思議さよと、いひつゝ蛇をひきはなち、箕のうちに入れて携へ去き、大江山の谷底に捨ててかへりけるに、其つぐの夜、再び楓發熱して苦み、いつの間にかまた蛇來りて、腹に卷附く事前のごとし。南無右衛門益怪み、此上は殺し捨つべしと思ひ、蛇は首に魂あり、よく首を碎かざれば生かへるものと兼て聞きければ、かの蛇をとりはなちて、平み

る雨滴を見よ。とく〳〵と落つるつぼを違へずといへり。されば我父母の老後を安穏ならしめば、我も又老後安穏なること疑なし。

○又世範といふ書に、およそ人の子としては、身ををはるまで少も父母の心にそむかず、孝道を盡すべきなり。父母身まかりて後も、其靈に對して、存生に言ひ置れたることを背くべからず。いかほど孝道をつくすとも、己が幼少の時、父母の愛念撫育の恩をば報ずることなりがたし。世間の孝道をつくすこと能はざるもの、他人の小兒を育てあぐる其情愛の厚きを見て、父母の苦勞を思はば自悟るべしといへり。古より孝を盡して天の惠をかうぶり、あるひは立身出世して高祿の人となり、或は運をひらき、千金を得富貴の身となりたる例、擧げてかぞふべからず。又不孝にして天の罰をかうぶり、病苦貧苦をうけ、惡獸毒蟲に害せられ、雷にうたれなどして、非命に死したる例も又すくなからず。されば幼時より、孝道は人倫第一の道にて決定の役儀といふ、道理をよく〳〵辨へて、少しも父母の仰をそむかず、朝夕恭敬おこたらず、一生安穏ならしむるやうに心がくべき事ぞかし。

六　因果の小蛇

その度にもだえ苦み、ほと〳〵命も危く見えぬ。此時娘楓は十三歳、栗太郎は八歳なれども、兄弟ともに年に似ず、すぐれてかしこき生れにて、殊更世間にまれなる孝子なれば、母の病をふかく悲み、兄弟枕方あとべに附添ひて、しばしも病床をはなれず、かはる〴〵揉み摩りなどし、心を盡してぞ看病りける。かゝる病人ありながら、一日も活計をせざれば、烟を立てかぬる身なれば、せんすべなく、南無右衛門は病人を兄弟の子どもにあづけ置き、其身は耕に出でて、わづかに日雇のあたひを得て、其日をおくる心の苦しさ、いかばかりならん量想ふべし。夜にいたれば南無右衛門家にありて看病すれば、兄弟の子ども等、このうへは佛神の力をたのみ奉るより外なしといひあはせ、二人手をひきあひ、毎夜穴太寺の觀音にはだしまゐりして、南無大悲觀音菩薩、我々が一命をとり給ひ、何とぞ母の病苦を救給へと祈念し、三七日が間詣でけるに、佛も孝子の誠心を感じ給ひけるにや、滿願の夜より、母の病漸くおこたり、一月許の中に全快し、氣力却りて前よりも尙盛になりぬ。誠に是れ孝行の功德大なる故なりかし。

○孝子の物語のついでに記して、世の童子に示すことあり。明心寶鑑といふ書に、我親に孝行なれば、子も又我に孝行をなすものなり。おのれ既に不孝なれば、子も又なんぞ孝行ならん。われ孝順なれば、又孝順の子を持つなり。此事疑しく思はば、簷より點々滴々と落

の目じるしある家には、我は勿論ともがらの者をも立寄すまじ。はやいとま申すなりといひをはり、栗太郎悶絶してたふるゝと見えしが、老女の姿けぶりの如く現れ、外の方へ走り出でて消失せぬ。礒菜栗太郎を抱き起せば、不思議や疱瘡俄にかせおちて痕だになく、氣力常の如くなりけるにぞ、夫婦奇異の思ひをなし、とみに笹湯をかけ、赤飯を調じて、神送し、なのめならず喜びけり。抑疱瘡の日數は、三日發熱、三日出痘、三日起脹、三日貫膿、三日收靨、これ常數なるに、栗太郎が疱瘡かく俄にかせおちたるは、全くかの神のたすけにて、南無右衛門が好意深かりしむくいなりと、此事を傳へ聞く人みな感じあへりとぞ。さて栗太郎がもがさ、平癒して喜ぶ間もなく、再び又一つの災ぞいできにける。礒菜ある夜灯をたて、鏡にむかひて髪をとりあげつるに、鏡のうちに藤波が顔あり〳〵とうつりて、恐しきさまなれば、あなやといひて背後をかへり見れば、毬の如き心火窓をこえて飛さり、家の棟のあたりにて、から〳〵と笑ふ聲す。礒菜はたまらず仰様にたふれて、其儘絶入りぬ。南無右衛門あわてふためき抱き起して、醒藥など與へけるにぞ、やう〳〵蘇生りけるが、これより心氣日々によわりて、物もすゝまず、色あをざめて痩衰へ、日に異におもりていつ怠り果つべうも見えず。南無右衛門まづしき中にも、良藥をもとめて與ふると雖も、とかく藤波がいかれる顔目先にさへぎり、その度

に見えずといへば、益愁ひぬ。疱瘡の神の機嫌あしきにや、栗太郎足ずりして泣きさけび、小豆枕をなげうち、人形の腕ひきぬきなどして荒出し、さま〴〵にこしらへ慰むれど泣止まず。殆どもてあましたる折しも、南無右衛門一月ぶりにて家にかへる。礒菜喜び出迎へて、まづ栗太郎が事を語るにぞ、南無右衛門氣づかひ、いそがはしく破屏風をひきあけて、樣子を見るに、今まで泣叫びて、もてあましたる栗太郎、南無右衛門を見て禮正しく座をつくり、手をつきていひけるは、こは思ひかけざる事かな。此家はおん身の宅にて、此小兒はおん身の子息にて候か。これは前の月木津川の渡場にて、危難を救ひたまはりし老女にて侍り。我實は疱瘡の神なるが、我輩犬をおそるゝ事人に過ぎたり。我しばらく京都にありて、痘瘡を病ましめたるが、四五日さき當國にかへり、おん身の家とも知らず、こゝに宿し、此小兒につきて疱瘡を病ましめぬ。元來此兒難症にて、今一兩日を過ぐれば落命すべき所なるに、危急の節おん身歸宅したまひしは、畢竟此兒の命つよき處なり。前の日の厚意を報ゆるは此時なり。我とみに立去るべし。我去れば疱瘡速にかせおちて平癒すべきなり。此末とてもおん身の族の家には立ち寄らすまじ。しるしなくては此度のごとく誤つことあるべし。おん身の姓名はいかにと問ふにぞ、南無右衛門その實名を告ぐれば、しからば鮑貝のうちに、さゝら三八宿と書附けて簷にかけおき給へ。そ


なむ右衛門
うへた


南無右衛門
一子栗太郎
疱瘡をやむ
いそみ

かる難義を見かねて、南無右衛門走りつき、犬どもを打ちちらして老女を見るに、深くおそれたるにや、地にたふれ伏して息もたゆげなれば、介抱して様々いたはりけるに、やゝ正氣になり、いづくのおん方かは知らざれども、かゝる難義を救ひ給はるかたじけなさよ。此御恩かさねて報い侍らんと、あつく禮をのぶれば、南無右衛門打聞きて、さばかり厚き詞ををさむるに故なし。とてもの事に京の町まで送り行きまゐらすべしとて、相伴ひ、三條の四ッ辻にて、東西に別去りぬ。さて南無右衛門は、一月ばかり京都にとゞまり、百蟹の卷物を尋ねけるが、その留主の間、一子栗太郎此時年八歳なりしが、疱瘡をやみ、母礒菜が辛勞おほかたならず。皰瘡の神の棚をまうけ、赤幣束、狭俵、張子の達磨木兎すら、起臥に心をつけ、茜の頭巾すら針とることを忌みて、隣家の手をかり、紅火燭の朱をうばふ、紫の色は更なり、詞の禁忌火のよしあし、食物のさし合まで、よろづに心をもちひ、湯尾峠の孫杓子、鮓答の呪など、よきといふ事は皆仕つくして、看病りけるが、いとおもき皰瘡にて、熱氣つよく目をひきつけて、今もたえいるかと思ふこと度々なり。ほどなく出痘にいたり、面上總身すきまもなく發瘡しければ、かくては命も危し。時も時折も折とて、夫の留主なるぞ便なき。こはいかにせんと當惑し、今日や明日やと歸りを待侘び、娘楓を日にいく度か、村口に遣してうかゞはすれど、歸るかげだ

りつる由、盗人の立田の山に入りて、おなじかざしの穢れたる名を得ること、豈恥ぢざらんや。渇すれども盗泉の水を飲まず、熱すれども悪木の陰に息まずとこそ聞くものを、いかにもして彼巻物をたづね出し、汚名をすゝがばやと兼ておもひ、一つには奸臣不破道犬が悪意を見あらはして、お家の禍の根をたち、藤波が縁者に出會して、恨の刃にかゝり、死後の名を清くすべしと思ひさだめ、折々面をかくして大和の國にいたり、或は京都にいたりて便宜をうかゞひぬ。

かくてある日、大和より京に赴くとて、木津川の渡船に乗りけるに、船中乗合のうちに、一人の老女あり。紅裏の昔模様のふるびたる小袖に、松皮菱の紋つけたるを著し、さゝやかなる包を三輪ぐみたる腰につけ、細き竹杖にすがりたるが、頭は佐野の白苧を亂せるが如く、身内枯木のやうに痩せがれたれど、人品はさまで賤しからず。紫の小袖著たる女の船中にあるを、深く忌嫌ふさまにて、袖を面におほひて、片隅にひそまり居たり。ほどなく船向の岸につき、南無右衛門衆人と共に岸にのぼり、かの老女と後におくれ前にすゝみて行きけるに、此時紅日西に落ちて、天色已に晩れなんとす。南無右衛門草鞋のひもを結ぶひまに、かの老女は遙に行過ぎたるが、樹木おほひかゝりてほの暗き所を過ぐる時、四五疋の犬出來りて取巻き、頻に吠えてほと〳〵食附かんとす。老女杖をあげて打てども去らず、なほも飛びかゝらん形勢なり。か

五　厄神の報恩

扨も佐々良三八郎は、妻子を具して丹波の國にいたり、大江山の麓、穴太の里にかくれ住みけるが、少々のたくはへも、日々の費につかひすて、別に活計の便もなければ、みづから山畑をたがやし、仕馴れぬ業の辛苦にたへず。妻礒菜は當國の名產なる藺莚を編み、市に鬻ぎてわづかの價をとり、夫婦ともかせぎにして、兩人の兒等を育て、權月日をおくりぬ。しかるに三八郎思へらく、忠義の爲とはいひながら、罪なき藤波を殺せし事、かへす〲も不便なり。後に聞けば、若殿御勘當をうけられ、御行方なくなり給ひつる由、我心づくしも藤波が非業の死もみな水の泡、かひなき事となれり。せめては彼が冥福を得る種にもと、農業の片手にも念珠をはなさず、絶えず念佛を唱へければ、里人異名をつけて、六字南無右衞門と呼びけるを、みづからも世を忍ぶにはよき名なりと思ひて、つひに實名としたりけり。さて又後々聞けば、藤波を殺したる夜、金岡の筆百蟹の圖の繪卷物紛失し、長谷部雲六と計りて、盗取りたりと沙汰あ

したる所に、嘉門軍扇を上げて一あふぎ煽げば、兼て用意の焔硝繩に燈火うつり、綱火となりて五六挺の火術の具、一度に發し、其ひゞき大雷のごとく、數の鐵丸飛出でて、前にすゝみたる組子十餘人打倒され、煙のうちにのたり伏す。老母は長刀の鐏を以て弩を一つき突けば、數十の箭雨の如く飛びかゝりて、組子を殘らず射伏せたり。猪之八は手ばやく疊を盾にして箭玉をのがれ、逃出でんとしたるに、忽板敷磊落とひるがへり、深き落し穴のうちに噇とおちいり、底に植ゑたる劍に身をつらぬかれ、朱に染りて死してけり。嘉門かねて是等の構をなしおきたる所以いかなれば、これまで近國他國の諸侯の請待に應ぜざれば、若おのれが器量をねたみ、不意を襲ふ者あらんを禦がん爲なるが、果して此度不慮の難義をまぬかれたり。さて嘉門老母にむかひ、今宵のことを聞かば濱名入道益怒り、多勢を以て取圍まば脱るゝ手術なかるべし。幸母人兼て山林に身を避けて、生涯無事を計給はん御心あれば、今宵中に此所をのがれ去るにしかじ。母人はいかゞ思すやらんといふ。老母その意に同じ、母子兩人いそがはしく身支度して、雜具は其儘すておき、先祖傳來の兵家の祕書、大幢國師の法語一卷のみを嘉門が懷にし、老母を背負ひて、いづくともなく落行きけり。

門が居宅は鐵壁石門要害堅固の城郭も同然なり。命惜くば頭をおさへて早く逃げかへれと嘲りいふ。猪之八等大に怒り、門をひらかんとするに堅くとざしたり。しやもの〳〵しと力をきはめてぐつと押すに、樞ゆるまりてくつろぐを、えいやつと踏破り、大勢一度にこみ入て、椽の上に飛上り、障子をさつと開けば、一間をへだてて梅津嘉門、萌黄薫の腹巻のうへに、金紗の道服を著し、金作の圓鞘の太刀を佩き、手に文曲武曲の二星を畫きたる軍扇をとりて、床几にかゝりたる形勢、志氣堂々威風凛々として、いかにも一個の英雄と見えたりけり。老母は、古びたれども摺箔の昔模様の袿衣を壺折りて著し、雪をあざむく白髪を垂れ、玉だすきかけてかひ〴〵しく打扮ち、銀の蛭巻したる長刀を小脇にかいはさみて、傍にひかへたる姿、老木の梅にいにしへの薫残りて奥ゆかし。左の方に千金弩と稱じて、一發數十の箭を飛す兵器を据ゑ、右には近頃蠻國より渡り、磐石をも打砕く火術の具、五六挺筒先をそろへて並べたり。勢こみたる組子等飛道具に心おくれ、進みかねたるを見て猪之八聲を勵し、腑甲斐なき者どもかな。わづかに嘉門一人の外はかよわき老女なり。たとへ三面六臂ありとも、いかでか數々の箭玉を放つことあたはんや。見せかけばかりの兵具恐るゝにたらず。はやくよりて搦捕れ、若とり逃さば我々が越度なりと下知するにぞ、組子等げにもさなりと思ひ、我先とあらそひ飛かゝらんと

悪き腐儒者めかな。憂目を見せて後悔させんと、家來岩坂猪之八といふ荒男に、大力の組子二十餘人を撰與へ、彼奴も智謀武術に秀でたる者なれば、若手にあまらば首にして持歸れと命ず。血氣にはやる猪之八かしこみ候と答へ、小具足に身をかため、彼奴たとへ楠が智をたくはへ、義經の早業を得たりとも、瘦浪人の分際何程の事かあらん。黄土小屋を踏潰し、首筋つかみ將て歸らんと廣言吐けば、思慮もなき組子等、勇みすゝみて相從ひ、梅津の里へ急ぎゆく。嗚呼嘉門が身のうへ危かりける次第なり。此時宵闇の夜なりけるが、猪之八等嘉門が家に近づく比、月影あがりて明なり。嘉門は燈下に書を讀む壁人、あかり障子にうつりて確に見ゆ。しで打つ砧の音するは、老母の手業とおぼし。猪之八等は竹林のうちに身を潛め、權便宜をうかゞひ居たるに、嘉門宿鳥の鳴噪ぐを聞きつけ、あな笑止や、我推量にたがはず、命しらずの愚人ども、我家を襲ふとおぼえたり。いで皆殺にしてくれんずと、灯火吹消して其後音もなし。猪之八これを聞き、にくき奴めがいひごとかな。早く搦捕りて手柄にせよ者どもと下知しつゝ、先にすゝみて門外より聲高く、これは官領職の嚴命をかうぶり、嘉門を召捕らんため岩坂猪之八むかうたり。いそぎ門をひらき、尋常に繩にかゝれと呼はれば、障子の中に呵々と笑ふ聲し、汝等が如き鼠輩はおろか、たとへ濱名入道みづから數百騎を以て攻むるとも更におそるゝ所なし。嘉

其色蒼き時は王侯破れて天子兵革に苦み、赤き時は兇賊起りて國人安からず。黄なるときは女色害をなす。白き時は將軍叛いて兵亂大に起る。黑きは水の精にて、洪水河に溢れて五穀登らず。〻あれ見給へ此度の彗星、其色蒼に黄をおびたり。まさしく是牝雞晨して婦女權を奪ひ、天子兵革に苦み給ふ前兆にて候はん。母人はいかゞ思ひ給ふやらんといへば、老母點頭き、我もとくに其心つきぬ。花の都狐狼の伏土とならんこと遠からじ。はやく此所を去り山林にかくれて、兵亂を避くるにしくべからずといひけるが、此後果して應仁の大亂起りぬ。母子兩人の先見誠に是あきらかなりといふべし。此頃由理之助勝基、濱名が子を養ひけるが、勝基は濱名が婿にて親しき上子なきゆゑ、濱名入道兩官領なりしが、勝基實子出來ければ、其養子を憎とす。これより兩家確執となり、濱名勝基を打亡し、おのれひとり權威を擅にせんと欲し、密密野伏浪人どもを召抱へけるが、嘉門が軍略に達したる事を聞及び、召抱へんと使者を以ていひ入れけり。嘉門は兼て入道が行跡を惡み居たるうへに、使者ののぶる所専官領職の權威をふるひ、無禮の詞おほかりければ、嘉門心中に憤り、招に應ぜざるのみか、却りて入道が日來の不道を數へて侮し辱め、嚴しくいひはなちけるにぞ、使者面目を失ひはふ〳〵の體にて立歸り、入道に嘉門がいひつる樣を、あからさまに告聞ゆ。入道聞きもあへず大に憤發し、やをれ

し、領所のうちを附與して禪刹とす。今の大梅山長福寺といふは乃是なり。清景の墓今に此寺にあり。扨此清景の子孫に梅津嘉門といふ者あり。累代此里に住みけるが漸々に零落し、今嘉門が時にいたりて益困窮す。嘉門年いまだ初老にいたらず、聰明衆に秀で膽力人に過ぎ、世に希有の英雄なり。且て六韜三略に眼をさらして、軍略の妙所をきはめ、弓馬鎗刀のたぐひ、武藝の奥儀を曉し、天文地理神機妙算進退懸引の道、其理を得ざるといふ事なし。其故に英名かくれなく、高祿を與へて召抱へんと、懇望の諸侯おほかりけるが、名利に屈するを嫌ひて仕官を望まず、常に松尾山にのぼり、採藥して藥店にひさぎ、細煙をたて清貧をまもりて、いさゝかも奢の心なく、一人の老母に孝行を盡し、姿も斬髮にやつし、いとまには先祖清景大幢國師より傳來の禪味をあまんじ、世に諂はぬ暮し、實に一世の賢士とは知られぬ。母も又賢女にて、今の世やうやく治平といへども、仕へさすべき明君なしと心を決し、嘉門が名利に屈せざるを喜び、てづから布を織りて日々の費にかへ、聊も貧苦を愁ひず暮しぬ。しかるに頃日彗星現るるにより、諸人心安からず吉凶を辨ずる者なかりけるが、一夜嘉門椽先に立出で、かの星をあふぎ見、母を招きていひけるは、抑我朝に彗星あらはれたる事、皇極天皇の御宇、蘇我の入鹿叛亂の時、始て此星現れしより、今に至るまで一度も祥瑞なることなし。凡彗に五つあり。

具をとりをさめ、己が家來をとゞめて守らせ、たゞちに歸國を急ぎけり。

○後々此時の子細を聞くに、是皆道犬が奸計より出でたる事なり。近曾由理之助勝基、濱名入道兩官領確執となり、入道勝基を打亡さん結構專なりけるが、兼て不破道犬濱名入道に内通して媚諂ひ、官領の權威をかりて、奸計を施し、佐々木の家を奪ひ、濱名の味方につかんと約し、兒子伴左衞門其餘蟹藏等にいひふくめて、桂之助に放埒をすゝめ、密々濱名に告げ、内意をいはせて勘當をうけしめ、わざと蟹藏等四人の者を追拂ひて、一家中の心をゆるさせ、伴左衞門とともに他所にかくまひ置き、何不足なく扶助して、おのれが目代とし、内外より事を計らんたくみなり。只己等が一つ心より出でたるは、伴左衞門藤波に戀慕したると、雲六が卷物を盗みて逃去りたると、此二つのみなりとぞ。

四　荒屋　奇計

山城國葛野郡松尾の近きに、梅津の里梅津川といふあり。共に古歌に詠じたる所なり。そのかみ元享の頃、此里に梅津豊前左衞門淸景といふ人ありけり。此所の領主にて、家富榮えたる武士なりけるが、其比月林大幢國師、洛北岩藏の庵室におはすを深く尊信し、法名を是球と稱

おひ給ふべき由なれば、せんすべなく、御勘當との御事なり。大殿御自筆の罪狀御覽あるべしといひて、懷中より一通の狀をとり出してさしおけば、桂之助とりあけて讀みも終らず、胸ひしとつぶれて大に後悔し、只さしうつぶきて言なし。道犬重ねていひけるは、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等四人の者、君の御傍にありながら、御諫もせず却りて放埒をすゝめ申したる條、其罪輕からず、切腹をも仰附けらるべき筈なれども、大殿の御慈悲を以て、後門より追拂へとの嚴命なりと云渡しければ、四人の者はなげ首してぞ弱りける、道犬又曰く、只今御次にて承れば、佐々良三八郎、長谷部雲六といひ合せ、昨夜百蟹の卷物を盜み、御妾藤波とやらんを殺し逃去りたるよし、さある內亂の起るも、總て是君の御行跡よろしからざるが故なり。かの卷物は御家の重寶といひ、いまだ室町御所の御覽も濟ざるよし、若是等のこと此上御聞に達しなば、いかなる御咎あらんもはかりがたし。御痛しくは候へども、とく〳〵御立退き候へかし。後日某身にかへても、御歸參あるやう取計らひ申すべし。只恙なくおはしまして時のいたるを待給へ。かの女の死骸は緣者を召呼びて引渡し候べしといひて、先おのれが家來に命じて四人の者を追拂せければ、桂之助も詮方なく、打しをれつゝ出去きける、心のうち思ひやられて哀なり。斯くて道犬藤波が緣者をよび、死骸並に妹於龍を引渡し、館の財寶雜


桂之助
犬上雁八
りくづ三平


桂之助放佚無慙の
行跡のありしより
勘當をうべきよし
官領職の内意あり
執権不破道犬
上京して其事を
つくへ笹野蟹藏
等四人ゟ
後門より
追拂ふ
不破道犬
土子泥助
さゝの蟹藏

追人をつかはし早く捕へしむべしと命じけるにぞ、四方に手分して追行きけり。かくて翌朝にいたり、追人等立歸り、いづくへ逃去り候やらん、影だに見えずと告げければ、桂之助只あきれたるばかりなり。これさへ不慮の騷動なるに、取次の侍士まかりいで、御國元より、執權不破道犬自身にのぼられ、只今著駕いたされ候と告ぐる。桂之助眉をしわめ、先だつて何の沙汰もなきに、道犬みづから上京せしは、いとも心得ざる事なり。何事やらんと心安からず、待居たるに程なく不破道犬旅裝束の儘にて打通る。其樣いかにとなれば、總髮の頭に素雪をいたゞき、しわみたる額に老の波をたゝへ、高年といへども身軀すくよかにして、奸佞の面野狐の如く、貪欲の眼皂雕に類し、相貌きはめて兇惡なり。笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等、四人の者も、跡につきてまかり出でぬ。桂之助道犬に對面し、先別事をいはず、俄の上京何事やらん氣づかはしと仰せければ、道犬氣の毒顏にいひけるは、火急の上京別義に候はず。ちかごろ君御身持あしく、旅館におはしながら白拍子を召抱へて妾となし給ひ、しかのみならず、虛病をかまへ、佚遊宴樂に日を費し、御所の勤仕をおこたり給ふよし、官領職、濱名入道殿の御聞に達し、擯斥すべきよし御內意あり。若然せずんば、御家にもかゝはり其罪大殿の御身にも

がはしく留め、いなく〳〵其姓名あかし給ふな、某が姓名もいふまじ。素返濟をうくる心にあらず。御身の夫の名を聞き我名を語れば、おのづから恩を著、恩に著するの理にて某が意にあらず。深夜といひ旅人の身、殊に足弱を伴ひ道を急げば、ひまどりがたし。御縁もあらば重ねて相見ゆべしといひすてて、もとの木陰に走り入れば、女は涙を流しつゝ、金を押戴きてとりをさめ、しばらく跡を伏拜み、もと來し道へ急ぎ去きぬ。

三　胸中の機關

さても右近の馬場の館におきては、其夜藤波が妹於龍、姉の死骸を見つけて大に驚き、聲たて呼はりければ、侍宿の武士等馳集り、大に騒動し、いそがはしく主君の前に出でて、しかじかと告聞えければ、桂之助あわてまどひて那裡に到り、藤波が死骸を點檢して、且驚き且悲み、何者の所爲なるやと疑ひ、先於龍を召して事の樣を問ひけるに、佐々良三八郎が殺したるよしを告ぐる折しも、笹野蟹藏いそがはしく馳來り、百蟹の卷物紛失いたし候と申す。桂之助益驚き、館中をこまやかに穿鑿あるに、三八郎家財は捨置き、妻子を携へて逃去り、長谷部雲六も出奔の體なりと申しければ、さては彼等兩人いひ合せて、百蟹の卷物を盗取りたるを、藤波

對して分說なく、面を合せがたければ、縊死なんと覺悟をきはめ候なりと、愁の色を面にあらはして語りければ、三八郎始終を聞き、それなれば死ぬるにおよばず。幸某少々の路銀を携へたれば、其金の數ほど合力いたすべし。これにて質物を受戻し候へとて、金子二十兩出して與へけるが、女これをうけず。誠に御慈悲の深きは骨身にとほりて覺ゆれども、所緣もなき御方より、金子を申受けしと夫に語らば、却りて快く存じ候まじ。さりとて語らざれば夫を欺くに似て、女の道たち侍らず。いづれの道にも死なねばならぬ身の因果、今宵に迫り候といひて、おつる涙瀧のごとし。三八郎其詞を感じて、もつともと點頭き、懐中の金子を財布ながら取出し、かの金をひとつに入れて地上におとし、某誤りて此金をこゝに取落しつるを、おん身はからず拾ひたり。凡道におちたるを拾ひ、其主の出でたるとき其物をわかち與ふるはなき例にあらねば、おん身二十兩の金子をうくるとも恥ならず、某又與ふるとも恩ならずと、理を盡して與へけるにぞ、女感涙とゞまらず、御身のごとき大慈悲の人は、世に又とあるべからず。よも凡人にては候まじ。觀音菩薩權に身を現じて、妾を救給ふならめと言ひ、掌を合せて再三拜み、然るうへは權に此金を借用いたし、後日此身を售りてなりとも、返し參らせん。そも御身はいづくの御方にて、御姓名は何と申し候ぞ。妾が夫の姓名はと、いはんとせしを三八郎、いそ

る便とも爲してんと思ふうち、彼女西にむかひて掌を合せ、念佛數遍となへ、ほど〳〵縊死なんとするを、やれ待てしばしと聲かけて走り出で、背後より抱きとゞむ。女は思ひかけざる事なれば打驚き、ゆゑありて死なねばならぬ者なれば、はなして死なせてよ。折角思ひきりつるものを、二度の思ひさする人よとつぶやきて、又縊れんとするをしかと留め、一命を失はんと思ふ程なれば、定めて迫りたる事ならんが、まづ其緣故を語り候へ。若我力に及ぶ事ならば、力を盡して救ひたく思ふなりといふ。女情深き詞を聞き、何方の御方かは知らざれども、誠に慈悲深き仰なり。さりながら其故を語るとも、とても生ながらへ難き身なれば、此儘に見捨て御通くだされかしといふ。三八郎かさねて云ひけるは、見ず知らずの者なれば、卒爾に語給はぬはうべなれど、世の常言に膝とも談合せよといふ事あり。何にもあれつゝまず語り候へかしと、誠心面に現れければ、女權思案し、左ばかり深き御心を、無下にせんもいかゞなれば、一通語りはべらん。妾は此邊に住む武士の浪人の妻なるが、家貧しきにより、さきだつて先祖傳來の物を、金二十兩に質入したるを、夫の妹なるもの聞及びてこれを愁ひ、二十兩の金子を合力しくれつる故、今宵妾に彼質物を受戾しまゐれと、夫いひつけ侍るにより、金子を懐にして出でたるが、途中にて盜人に出あひ殘らず奪ひとられ侍り。合力したる妹の手前といひ、夫に

し出で、草の縁に影うつるを便に、北山を過ぎ杉坂を上り、あまりに息たゆければ、茂林のうちにいり、夫婦背上より兩人の子をおろして、岩の上に尻かけ濡衣をしぼり、淸水に咽をうるほしなどして、權やすらひ居たる折しも、坂の上より若く美しき女ちらし髮素足にて、ぬかり道をびしよ〳〵と步み來ぬ。よく〳〵見れば何にかあらん烟のやうにて、壁人のごとく、人の形したるもの、女の前に立ち、糸のやうなる手をあげて差招く、招けば女足をはやめて步む。招かざれば女立留り、頭を傾けて物を思ふさまなり。女立とゞまれば、かの恠物、又手をあげてさしまねく。斯くしつゝも女、舊榎の下にいたり、權たゝずみてさめ〴〵と泣居たるが、かの恠物梢をゆびさせば、女あふぎ見てうなづき、尙さめ〴〵と泣く淚、梢の雫とおちかゝる。恠物又榎の枝をゆびさし、物打かくる仕方をすれば、女うなづき前後を顧みつゝ、やがて腰帶を解き、木の枝に打かけたり。三八郎妻と共に、木蔭の暗所にあり。此爲體を見て暗に思ひけるは、彼恠物は世にいふ死神なるべし。首縊榎などいふものありて、前に縊死したる者の亡魂、樹下にとゞまりて、死神となり、人をいざなひて縊しむと、世の語柄には聞きつれども、眼前見るはこれが始なり。我忠義の爲とはいひなから、罪なき藤波を殺せし事、みづから悲み愁ふる事深し。せめて此女をたすけて、藤波が冥福をもとむる種ともなし、怨魂をなだむ

ひ、妻には七歳になる栗太郎といふ男子をおはせ、夫婦しのびやかに後門より逃出でけるが、四方暗々として東西を辨せず。雨はやゝつよく降りて篠をつかぬるが如くなれども、雨衣をだに身につけねば、濡衣足にまとひつきて歩みがたく、素足なれば、道ぬめりて心のみ前に走り、身はあとへ引るゝ心地し、おぼえず背後を顧みれば、怪哉心火ぱつと燃上り、藤波が姿かげろひの如くあらはれて、行くをやらじと引きとゞむ。三八郎此時身中ぞつと冷えとほりけるが、刀を抜いて斬拂ひ、妻の手をとり行く向へ、又ぱつと炎燃えて、藤波が姿すくと立ち、尚もやらじと支へたり。妻子の目には見えねども、三八郎が目前には、まぼろしの如くつきまとはり、此に現はれ彼處に立ちて、斬れど拂へど立去らず。勇氣烈しき三八郎も、身うちしびれ足なへぎて走ること能はず。妻の磯菜もろともに、たぢ〳〵と引きもどされ、髪も亂れもすそも破れ、身體すくみて倒れしが、やう〳〵心を勵して、百歩ばかり逃去く時、烈風颯とおろし來て、大粒の雨つぶてを打つがごとく降りかゝり、一團の心火あとを追ひて飛來り、見る〳〵空中にて二つにわかれ、一つは娘楓が懐に入り、一つは栗太郎が懐に入りぬ。是乃藤波が死靈、兄弟の兒等につき恨を報る一端なり。かくて夫婦こけつまろびつ、たゞ走りに走り、辛じて遙に逃延び、先身體恙なきを喜びけり。此時にいたりて、やう〳〵風雨をさまり雲はれて朧月さ


藤波


佐々木の家士
佐ゝ良三八郎
忠義の為白拍子
藤波を殺す
さゝら三八郎

かねたり。三八郎せめて苦痛をさせじと思ひつゝ、乘りかゝりて吭にとゞめの刀をさしとほす。嗚呼悲哉、嗚呼痛哉、十七歳を一期として、黄泉の鬼となりにけり。斯くて三八郎袖引きちぎりて血刀にまき、肌おしくつろげ、已に腹につきたてんとせしが、俄に思直しけるは、いなく今死すべき命にあらず。人の見とがめぬこそ幸なれ、不破道犬が爲體、お家を亂すべききざしあり、これより直に出奔し、權命をながらへて、よそながら主君の目代となり、彼が惡意を見あらはし、其後此藤波が所緣の者の、恨の刄にかゝりて死なんこそ武士の道なるべしと、心をさだめて死骸にむかひ、忠義の爲とはいひながら、科なきおことを無代に殺せし、不便さよ。やがて此身も刄にかゝり、冥途において分說せんと掌を合せ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、口の裏に廻向して、退き出でんとしたる折しも、藤波が妹の於龍、姉の下りのいつより遲きを案じ、むかひの爲手燭をともして、何の心もなく此所まで來かゝり、三八郎と顏見合せ、此血しほはと驚きて、聲立てければ、三八郎手ばやく刀の鉦打に、手燭をはつしと打落し、吻とため息つきもあへず、又庭づたひに逃出でけるが、深夜といひ夜嵐ますく烈しければ、誰一人これを知る者なかりけり。かくて三八郎我家にかへり、妻礒菜にしかぐの事を語り、いそがはしく身支度して、たくはへの金子を懷にし、おのれは今年十二歳になる楓といふ娘をせお

藤波が跡をつけて、今や斬らん〳〵とつけねらふ。藤波は何の心もなく歩みけるが、此時一命の終るべき宿世の因果にやありけん、風雨ます〳〵つよく爛熳たる庭木の櫻を吹散して、吹雪の如く散りかゝり、手燭を颯と吹消して忽ち眞の闇となる。嗚呼彼が命の危さも、げに風前の灯火なり。藤波進退を失ひて心たゆたひける所に、暗裏に劍の光、電光石火と閃きければ、驚きて逃行かんとするを、三八郎をどりかゝりて斬りつけたるが、暗中なれば目當ちがひて空を斬る。これはと又斬る劍の下をくゞりぬけて、猶逃去かんとしけれども、餘に驚き、身うちわなゝき足なへぎて走ること能はず、夢路に迷ふごとくなり。三八郎は息をこらし、あたりを探りて立廻り、めつた斬に斬りけるにぞ、藤波振袖の袂を斬落され、危く身は避れたれども、目前に劍の閃くたび〳〵胸冷え、魂きえて、黒暗地獄の罪人が、劍樹にのぼるに異らず。三八郎はひまどりて、仕損ぜまじと心せかれ、衣にとめたる蘭麝の薫る方を心當に、窺ひすまして斬りつけたれば、手ごたへして呀と叫ぶ。仕濟したりとたゝみかけて斬るにぞ、憐むべし藤波、たまきはる聲と共に、のけざまになりし、背後なる杉戸はづれ、おしになりて噇と倒る。時に奥深くたてたる、燈火の光もれ來るに乘じて、其形勢を見るに、無慙やな左袈裟に斬下られ、鮮血泉のごとく涌流れて、身うち朱に染り、手足をもがき、齒を噛鳴して苦む體、見る目もあて

悲み、主君の前に出でて諫めけるは、虚病をかまへ給ふのみならず、旅館に妾をめしつかひ給ふ放佚無慙の御行跡、若室町御所に聞えなば、ゆゝしき大事、御家にもかゝはる事に侍り。こひねがはくは藤波に暇をつかはされ、御身持をあらため下さるべしと、何の憚る所もなく、おもふ旨をのべて、しば〳〵諫言せしかども、桂之助耳にも聞入れず、日をおひて惡行つのりければ、三八郎熟おもひけるは、斯くばかり詞を盡し理を糺して諫申すに、御聞入なき上はせんすべなし。これ畢竟藤波が色香に迷ひ給ふゆゑなれば、彼あらん限りは、いかに諫申すとも惡行やむべからず。根をたちて葉をからすの道理なれば、折をうかゞひ藤波を殺し、おのれ腹かきやぶりて死するにしかじ。科なき女を殺すは情なしといへども、御家には代へがたし。越の范蠡、西施を呉湖に放ちたる例もあるものをと、つひに心を決し、よき折もがなと思ひ居たるに、一夜時ならぬ嵐夜の烈しきを幸とし、身輕に打扮ちて奥庭にしのび入り、樹木の茂りたる所にかくれて、藤波が部屋に下るを待居たり、藤波は斯くとは露知らず、子過ぐる比殿の前を退き、ほろ醉の機嫌にて、みづから手燭をてらし、濃紫の小袖の褄とりあげて、長き廊架を歩み來る。三八郎かくと見るより氷なす刀を抜きそばめ、今を盛に咲亂れたる、山吹躑躅、早咲の燕子花を踏散し、やり水の流、そばだちたる庭石を飛越えて、廊架の手すりの下をつたひ、

や引出して後門より追拂へと命ず。やがて奴僕等割竹をとりて庭づたひに出來り、いざ〳〵とて追立てければ、伴左衞門しぶ〳〵立あがりて、しづかに衣服の塵を打拂ひ、山三郎を尻目ににらみて出で行きぬ。これぞ遺恨の起りとは後にぞ思ひ知られける。斯くて後山三郎、しばし諫言を用ひけれども、桂之助露ばかりも聞入れず、佞臣等は山三郎をとほざけんと計り、一向惡しくとりなすにより、桂之助山三郎を召出し、百蟹の巻物御覽濟みなば、此方より別人を以てもどすべし。汝が役目濟みたる上は、いたづらに在京せんも親人のおぼす所いかゞなり。疾く疾く歸國いたすべしとあれば、山三郎心ならずといへども君命もだしがたく、俄に行裝をとゝのへて國元へ罷下りぬ。しかりしより後は、誰憚る者もなく、室町の御所へは重病と披露して出仕をやめ、日夜の酒宴絲竹の調に、春の日も暮れなんことを花にをしみ、秋の夜も短しと月にかこち、更に本性はなかりけり。

二　風前の燈火

爰に又、此旅館をあづかる家士に、佐々良三八郎といふ、忠臣無二の者ありけり。兼て妻子をおびて當館中に住みけるが、山三郎歸國の後は、桂之助の身持益あしく成行きけるを深く


藤波
かごや山三
不破伴左エ門


佐々木桂之助怒て家士名古屋山三郎に命じ上草履をもつて不破伴左エ門が面を打しむ
桂之助

小をもぎとらせ、庭上に引下さしめければ、伴左衛門は一言の分説なく、只打しをれてぞ伏居たる。桂之助山三郎を顧み、汝上草履を以て、伴左衛門が面を打ち、辱を與へよと命ず。山三郎頭をさげ、御憤はうべなれども、さすがに彼は、執權職を仕る道犬が兒子にて候へば、この儘御いとま遣され下されかしと願ふを、聞入れず、いな〳〵彼が如き人畜は、面に糞汁をそそぐとも飽きたらず、疾く〳〵打てよ。たゞし我命を背くかと、いきまきつゝいふ。山三郎おそれいり、仰を背くに候はねども、傍輩の因身武士の情に候へば、辱むるにしのびず、押して願ひ奉るといはせも果てず、いな〳〵何の宥免あらん。汝若打たずんば共に勘當なり。打つべきや打つまじきや、返答せよと、せきにせきて詞詰しければ、山三郎、然るうへは是非に及候はず。いかでか違背仕るべきとて、袴のくゝり引上げ、上草履をとりて庭に下立ち、庭下駄をならして、飛石をつたひ、伴左衛門が傍にちかづき、嚴命なればせんすべなし。かならず恨み給ふなと、耳ちかくいひ聞けて、草履をあげ、面をかけて一打うち、退かんとするを、桂之助椽先に出でて一見し、あな手弱きぞ山三郎、數なく打ちて辱めよと仰せければ、やむことを得ず立戻り、又しと〳〵と連打に打ちけるにぞ、伴左衛門が髻弗ときれ、鬢髮亂れて見るにしのびぬ形勢なり。桂之助呵々と打笑ひ、みな〳〵彼を見よ、心地よき見物にあらずや。は

愛でて、誠心を盡し、鴛鴦の契淺からざりしかば、桂之助おのづから御所の勤仕おろそかになりぬ。されども佞臣等はこれを幸とし、晝夜かたはらを離れず、遊相人となりて、酒宴婬樂にのみ明し暮せば、旨酒珍膳席上に滿ち、郢曲謳歌室中にかまびすしく、恰も妓家娼門の所行に似て、うたてかりける形勢なり。山三郎逗留の間、此爲體を見聞して、只獨胸をいため安き心はせざりけり。しかるに伴左衞門いつの程よりか、藤波に戀慕し、千束の艶書をおくると雖も、藤波は手にも觸れず、盡くこれを戻して、一言の返答たにせず。伴左衞門一向思ひとゞまらず、折をうかゞひ隙を見て、威しつ賺しつかき口說く。藤波はじめは彼が恨み憤らん事をおそれて、心一つにをさめ置きけるが、今はやむことを得ず、桂之助に艶書を見せて、彼が振舞をつぶさに告げぬ。桂之助は短氣の生れなるうへに、心狂しくなりたる時なれば、これを聞くとひとしく奮然として怒氣天にさかのぼり、急ぎ伴左衞門を召出し、かの艶書をくり廣げていひけるは、汝藤波に不義をいひかけ、數通の艶書をおくる條、罪科甚だ重し。後日の見せしめに、我自ら手をくだすなりといひも敢へず、白鞘卷を拔放しければ、次の間にひかへたる山三郎いそがはしく走出で、袖にすがりて押止め、詞を盡して賺めけるにぞ、やう〳〵刀をさめ、然るうへは汝にめでて一命をたすけ、長く勘當すなりとて、かたはらに命じて、伴左衞門が大

とし、亂舞俳優を催し給はば、いみじき觀物にて候はんと、伴左衛門をはじめ、これを勸めけるにぞ、桂之助大に喜び、夫きはめて興あらん、急ぎ催すべしと命じければ、皆々かしこみ候といひて退き、つぐの日彼藤波、竝に囃方を召よせ、山三郎をくはへて亂舞俳優をさせ、美々しく酒宴をまうけて、大に興を催しけり。かくて山三郎藤波かはる〴〵、種々の舞ありて後、酒飮の亂足、西寺の鼠舞、無力蟇、無骨蚯蚓の道行ぶり、福廣聖の袈裟求、妙高尼の襁褓乞などいふ、兩人立合の俳優ありて笑ひを生じ、終にいたりて藤波男舞といふ祕事を舞ひぬ。これは昔後鳥羽院の御宇、通憲入道、讃岐の磯の前司といふ女に、傳へたる舞なり。金の立烏帽子、白水干に紅の大口はき、太刀をおびて立舞ふさま、誠に是、沈魚落雁、羞月閉花の容あり。ひるがへす袖は鸞鳳の舞ふにひとしく、歌うたふ聲は頻伽の囀るが如くなれば、皆人感にたへ、奇妙の舞妓や、と賞嘆の聲しばらくは止まざりけり。此時より桂之助藤波を戀初めて、病はいづくへか去き、只思ひ川の水胸にあふれて戀の淵となり、舞を見るに事よせて、度々召寄せけるが、つひに伴左衛門がはからひとして、藤波を桂之助の妾に召抱へ、館に引きとりて給仕させければ、桂之助望足りて最愛深くめしつかひ、彼が妹に於龍とて、今年十三歳になる少女のありけるを、これをも館にめしよせて、藤波がそばづかひにさせぬ。藤波も桂之助が美男なるに

ひ、近仕の士も列侯の子息のうちより、美男を選びて召つかはれけるが、桂之助兼て美男の聞えあるにより、此選びに入りて京都に召され、右近の馬場の旅館に住み、室町の御所に通ひて勤めけり。此度桂之助に從ひて上京したる家士は、執權不破道犬が一子、不破伴左衛門重勝、長谷部雲六、笹野蟹藏、藻屑三平、土子泥助、犬上雁八等なり。去程に桂之助、妻子は國に殘しおき、其身獨長々在京し、御所勤の氣鬱つもりけるにや、頃日は病がちになりて、折々惱みければ、一時家士等、桂之助が前に集ひ、何がな殿の鬱結を慰むる事もやと評議しけり。さて當家の重寶に、巨勢の金岡が畫きたる、百蟹の圖とて、百種の蟹をかきたる繪卷物あり。室町殿兼て古書畫を好み給ふにより、御聞に達し、御覽あるべき由命ぜられければ、國元より、名古屋三郎左衛門が一子、名古屋山三郎元春、彼卷物を携へてまかり上り、すなはち當館に逗留してありけるが、兼て大殿申樂を好まれける故、山三郎武藝のいとま亂舞を學びて、扇とりて名譽の者なりければ、皆々口を揃へて申しけるは、山三郎上京こそ幸なれ、彼に一さし舞せて御覽候へ。しかし彼が舞御國元にては度々御覽ありし事なれば、相人なくては興あるまじ。頃日時めく白拍手に、藤波と申す女あり、年は十七歳のよし、歌舞吹彈の業に達し、しかも類まれなる美女にて、古の祇王祇女佛などにもをさ〳〵劣らざる者にて候。彼を召して山三が相人

昔話稲妻表紙

江戸　山東京傳編

巻之一

一　遺恨の草履

今は昔人皇百三代、後花園院の御宇、長祿年中、足利義政公の時代、雲州尼子の一族に、大和の國を領す、佐々木判官貞國といふ人ありけり。兄弟二人の男子をもてり。兄は桂之助國知といひて、今年二十五歳なり、弟は花形丸とて十二歳なり。兄は先妻の子、弟は後妻の蜘手の方といふに出生したる子なり。桂之助の伯父に藏人貞親といふ人あり、是則判官貞國の弟なるゆゑに、一萬町の分地を與へ、同國平郡に、別館を造りてすゑ置きけるが、一人の娘をまうけ、先だつて夫婦ともに身まかりけり。その息女容顏美麗なるが、成長の後、桂之助の内室となり、名を銀杏前といふ。夫婦中むつまじく、ほどなく男子誕生あり、其名を月若といひて、今年七歳になりぬ。其比義政公京都室町に、新館を營みて花の御所と號し、兼て花車風流を好み給

右東山八景香盡二曲、はむかし室町に花の御所をいとなまれし頃、京童のうたひし小歌となむ。そののちはるか過て、堺の僧高三隆達といふ者、ふしはかせをあらためかへてうたひしより、なべて隆達ぶしといふとぞ。此草紙の時代に因あるをもて、こゝにしるしつ。

香づくし

六十一種の名香は法隆寺東大寺逍遙みよしの紅塵枯木なか川法華經はなたちばなやつはし園城寺似たり不二のけむりはあやめ欒若鷓鴣斑あを梅楊貴妃とび梅たねがしまみをつくし月龍田もみぢの賀斜月白梅千鳥や法華老梅や重がき花の宴はなの雪名月賀蘭子卓橘はな散里丹霞はながたみ上はかをり須磨あかし十五夜隣家夕時雨たまくら有明雲井くれなゐはつせ寒梅ふた葉早梅霜夜たなばたねざめしのゝめうすくれなゐうすぐものぼり馬とかく伽羅のけぶりといのちの君はとめてもいく夜いくよとめてもとめあかぬ


傾城の賢なるハ此柳かな
其角


荷翠
不破伴ざゑもん
なごや山三
其角

東山八景

見わたせばひがしやまの春のけしきやぎをむばやしに吹くあらしは山市の晴嵐とうたがはれ河原おもてのまさごのいろは江天の暮雪もかくやらむおもしろの花のみやこやぢしゆのさくらにしくはなし賀茂川のながれのすゑにゆく舟は遠浦の歸帆かさえわたる清水寺のかねのこゑ煙寺の晩鐘のひゞきそれしら川のすさきにつばさの散亂すは平沙の落雁ともいひつべしさてれうせむのつきかげは洞庭のあきのこれにはよもまさらじさてまた漁村の夕照はつりたれてあげまきにあそぶものを——

卷之八上

卷之八下

目録

昔話稲妻表紙

巻之一

巻之二

巻之三

巻之四

巻之五上冊

巻之五下冊

工に權をつけしかば、豐國の恣なるを憎々しくは思ひながら、竟に諫むる事能はず、其好みに從ひつゝ、二年ばかり稍印行する事を得たれども、思ふにも似ず册子の世評妙ならず、損する程にあられども、初に畫工作者をもてなしたる諸雜費のいと多かりければ、竟に板元の算帳あはず、云々。

本書の飜刻に當りては、讀者の便宜を圖りて、間〻假名を漢字に改め、假名遣及送假名を統一したる外、一切原本に隨へり。猶本朝醉菩提品目釋義は、原本序の次に揭げたれども、便宜上姑くこれを卷末に附せり。校訂及校正に關しては椿強祐氏を煩はしたる所甚だ多し。

大正二年九月　校訂者　武笠　三

あれと思案して、さりげもなく答へていふ様、花を見まく欲し給はゞ、遠く墨田川に赴くに及ばず、吾取寄せて参らせん、とて大なる枝に花滿ちたる櫻を許多(あまた)買取りて、そを花瓶にも樽等へも活けて、豊國の几邊に置並べ、其活花衰ふれば、取替へ〳〵見せしかば、豊國竟にせん方無くて、日毎に件の出像を畫く程に、伊賀屋は更也京傳折々此假宅に來訪して、打語らひつゝ慰めけり、此等の事は京傳の本意にあらねど、さきに優曇華物語の出像を唐畫師に誂へて後悔せしに、櫻姫全傳の作よりして豊國に畫かして、特に時好に叶ひしかば、是より豊國と親しく交りて、功を讓る事大方ならず。夫に今淨瑠璃をもて譬ふるに、畫工は大夫の如く、作者は三味線彈に似たり。合巻の臭草紙は更也、讀本と雖も、畫工の筆精妙ならざれば賣れ難し、といふにより、豊國も亦自ら許して、其功我にありと思ひしかば、是より合巻の奥半張に、畫工の名を上にして、豊國畫京傳作と署したり。既に斯の如く畫

ら、技に誇りて畫くに遲かり。醉菩提を板するに及びて、伊賀勘屢〻乞へども、豐國事に托して敢て畫かず、まづ板元に説薦めて、羽二重の袷半折二領を製らしめ、これを作者と畫工に贈らしむ。(其半折に京傳と豐國の花號を附けたり)かゝる事は、歌舞妓の當場作者に此例あればと云へり。只此事のみならず、或は酒肉珍菓を贈り、京傳と豐國を伴ひて雜劇を見せ、或は酒樓に登る事屢〻なりき。かくても豐國は猶多く畫かず、催促頻りなるに及びて又板元にいふ樣、已かく家に在りては、雜客も絶えず、且錦畫の板元に責められて、よみ本の插畫は筆を把(原本蝕文)邊裏屋二軒を借りて此處に豐國を請待し、日毎に酒飯を餽りて畫かせけるに、折柄三月の頃なりければ、豐國が又いふ樣、時は今咲匂ふ花の三月なるに、斯く垂籠めてのみありては、氣欝して病を生ぜんとす。いかで墨田川邊に徜徉して保養せまくほし、といひしを、伊賀勘聞て思ふ樣、若一日外に出さば、再び此處に歸るべからず、要こそ

を以て、更に續篇「本朝醉菩提」を出せり。此書につきては、姑く水谷不倒氏の列傳體小説史に謂へる所を借用して足れりとすべし。

此の書は「稲妻表紙」の後篇なり、一休の事を中心として、其が俗傳の逸事を綴合せるものなり。抑一休の俗傳は、支那小説の「醉菩提」を飜案したるものなれば、作者はそをほのめかしたるものにして、鈴木正三が「二人比丘尼」の大意を取りたるもの云々。

尚本書につきて、「物之本江戸作者部類」記す所の一話あり。當時に於ける作者と畫工と出板者との關係を窺ふに足るべき、興味ある物語なれば、附載して讀者の一粲に供ふべし。

本朝醉菩提六卷後篇四卷共に十卷も、亦是伊賀屋の板にて、出像は豐國畫きたり。當時是等の畫工、例として、未だ畫かざる已前に其濡筆を受けなが

りなりしを觀て知るべし。是實に小說の趣向が芝居に仕組まれし嚆矢なりといふ。さて芝居に於ける不破伴左衞門の着附の、雲に稻妻の模樣は、俳優市川才牛が創意にて、彼の「いなづまのはじまり見たり不破の關」の句に據りたるものなるが、京傳本書を綴るに當りて、又此模樣を襲用すると共に、相手方なる名古屋の衣裳の模樣を之に對せしめんとして工夫を費し、終に「傘にねぐら貸さうよ濡燕」の句に據りて、雨に燕の圖案を捻出したり。斯くて浪花の芝居に上場せられし以來、濡燕と雲に稻妻とは、蝶千鳥の曾我兄弟に於けると等しく、不破名古屋の衣裳の模樣として永く動かすべからざるものとなりしは、本文以外に於ける作者の手柄と謂ふべし。

機に投ずるに敏なる「稻妻表紙」の作者は、其の大坂の芝居に上場されし年

緒言

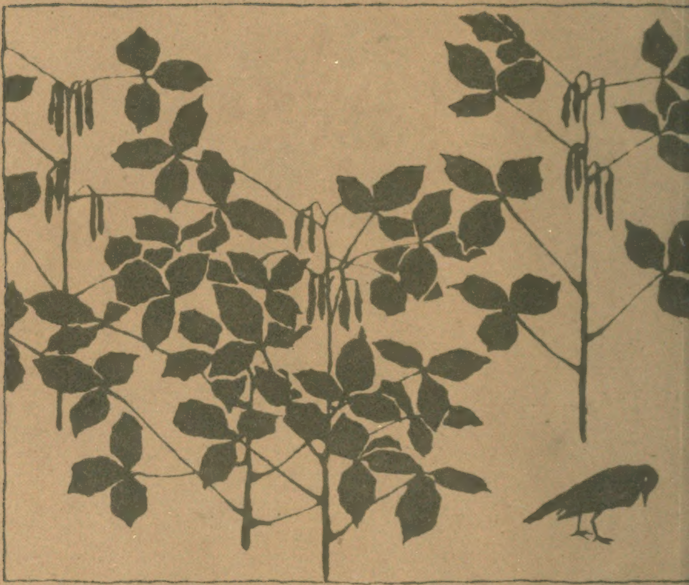
江戸軟文學界の奇才山東京傳、會〻一代の賢宰相白河樂翁侯の大眞面目なる一喝に遇ひて、滑稽洒落の筆を收むるや、此度は手をかへて指を「讀本」に染めしが、時好に投ずる機轉と漸く圓熟の境に入れる文章とを併有せる彼は、「忠臣水滸傳」「安積沼」「櫻姫全傳曙草紙」等を續出して、此方面に於ても、亦忽ち讀者の喝采を博したりき。是に於て更に趣向を芝居の不破名古屋の鞘當に取り、全體を芝居仕立に脚色し、當時全盛の畫工歌川豐國の插畫に花をかざりて、文化三年發販したるもの、之を「昔話稻妻表紙」とす。此書の世に盛にもてはやされたるは、中一年を隔てて文化五年の春、大坂兩座の芝居に於て、此冊子の趣向を其儘狂言に仕組みて上場せしものの頗る大當

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

笞話稲妻表紙　全

本朝酔菩提　全



Santo, Kyoden

Muksahi gatari inazuma hyoshi